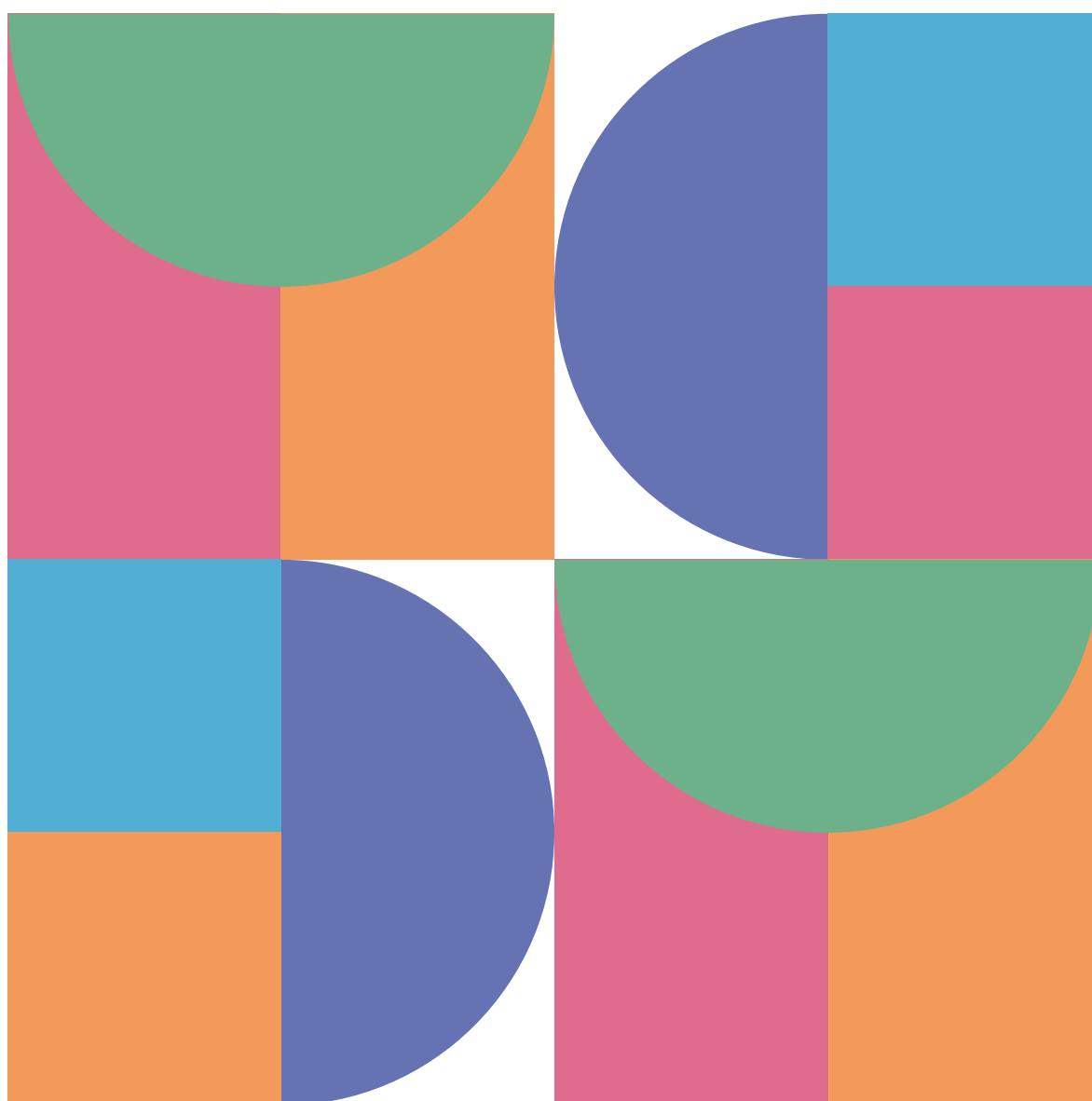


府中市ヤングケアラー実態調査 報告書

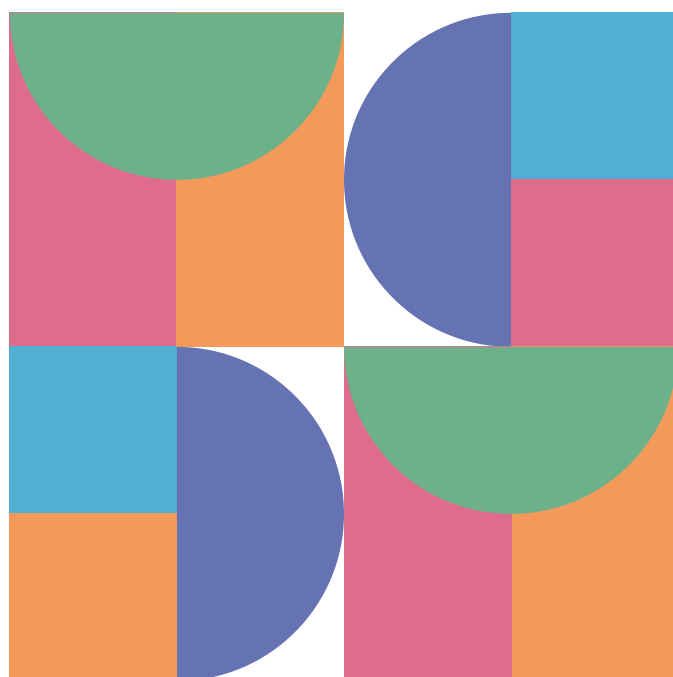


令和6年3月

府中市ヤングケアラープロジェクト

一般社団法人ケアラーワークス・府中市

府中市ヤングケアラー実態調査 報告書



府中市ヤングケアラープロジェクト
一般社団法人ケアラーワークス・府中市

府中市ヤングケアラー実態調査報告書の発行にあたって

府中市は、東京都のほぼ中央に位置し、特急を使えば京王線府中駅まで新宿駅から25分の距離にあります。また、歴史と文化、豊かな自然に生まれ、都市としての魅力や活力にあふれた地域特性があります。人口は259,668人（令和6年3月1日時点）、合計特殊出生率は1.11%（令和4年東京都人口動態統計年報）で年少人口の減少傾向が強まることが想定されています。一方、高齢化率は22.2%（令和4年1月1日時点）で上昇傾向にあります。

このような少子高齢化の進行と人口減少の状況を背景に、高齢者のみの世帯・ひとり親世帯の増加、人間関係や地域のつながりが希薄化するなど地域社会は変化しています。さらに、介護や子育てをしている世帯の生活課題は、孤独・孤立や8050問題、ダブルケアなど複合化・複雑化してきており、従来の福祉制度やサービスを利用するだけでは問題の解決が困難となってきました。

地域共生社会の実現を目指して各法改正を進めている国は、令和3年春、本来大人が担うと想定されている家事や家族のお世話などを日常的に行っている子ども「ヤングケアラー」に注目し、ヤングケアラーの周知啓発、支援施策を推進しています。そして、各自治体や支援機関で、ヤングケアラー支援の取り組みがされるようになりました。

府中市においては、令和5年4月に日本財団と「ヤングケアラーとその家族に対する包括的支援推進自治体モデル事業に関する協定」を締結し、ヤングケアラーを早期に発見して、支援先につなげ、実際に支援を提供するモデルの構築と支援体制の整備に取り組んでいます。一般社団法人ケアラーワークスが運営主体を務め、府中市と協働して、「府中市ヤングケアラープロジェクト」を称して、5つの事業（①実態調査、②相談支援、③研修会の実施、④周知啓発、⑤関係機関との連携）を実施しています。

本書は、府中市で初めてとなる「ヤングケアラー実態調査」を児童・生徒、教員、福祉や介護のサービス事業者等を対象に実施し、その結果をまとめたものです。府中市に関わるすべての方にご覧いただき、ヤングケアラーに関心を持ち、身近にできることを考えていただければ幸いです。

結びに、本実態調査にご尽力いただきました実態調査委員会の皆様をはじめ、アンケート調査を通じて貴重なご意見やご提案をいただきました児童・生徒、教員、福祉や介護のサービス事業者等の皆さまに心より感謝申し上げます。

令和6年3月
一般社団法人ケアラーワークス・府中市



目 次



府中市ヤングケアラー実態調査報告書の発行にあたって	2
第1章 本調査の概要	5
1. 本調査の概要	6
2. 調査の実施	7
3. 集計・分析に関する留意事項	8
第2章 児童・生徒調査	9
1. 調査概要	14
(1) 調査設計	14
(2) 回収状況	15
(3) 調査結果の見方	15
2. 単純集計結果	16
(1) 基本属性	16
(2) 日常生活について	18
(3) 家庭・家族のことについて	23
(4) ヤングケアラーについて	45
3. クロス集計結果	48
(1) 家族のお世話の有無による差	48
(2) ヤングケアラーの自己認識による差	53
4. 自由回答	57
(1) カテゴリ分類について	57
(2) 主な回答例	58
5. まとめ	68
(1) 家族のお世話をしている児童・生徒の把握	68
(2) 学年層ごとの家族のお世話の状況	68
(3) 家族のお世話をすることによる影響	69
(4) 相談相手の状況と支援ニーズ	69
(5) ヤングケアラーの自己認識と認知度	69
第3章 教員調査	71
1. 調査概要	74
(1) 調査設計	74
(2) 回収状況	74
(3) 調査結果の見方	74
2. 調査結果	75
(1) 基本属性	75
(2) ヤングケアラーについて	76

(3) ヤングケアラーと思われる児童・生徒への対応経験	78
(4) ヤングケアラーと思われる児童・生徒の詳細	80
(5) 教員の状況	94
(6) 支援体制について	97
3. まとめ	102
(1) 学校教育現場におけるヤングケアラーへの認識と実態の把握について	102
(2) ヤングケアラーとみられる児童・生徒への対応経験と 気づく経路について	102
(3) ヤングケアラーとみられる児童・生徒の状況と対応の実態	102
(4) ヤングケアラーとみられる児童・生徒を支援していくために 教員が望んでいること	103
第4章 関係機関調査	105
1. 調査概要	108
2. 機関向け調査結果	109
(1) 基本属性	109
(2) ヤングケアラーについて	111
(3) ヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うこと	115
3. 個人向け調査結果	117
(1) 基本属性	117
(2) ヤングケアラーについて	119
(3) ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験	120
(4) ヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うこと	138
4. 子ども・若者支援団体向け調査結果	140
(1) 基本属性	140
(2) ヤングケアラーについて	140
(3) ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験	141
(4) ヤングケアラーへの支援について	141
5. まとめ	143
(1) ヤングケアラーの認識と把握状況について	143
(2) ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験について	143
(3) 関係機関から見た家族のケアをしている子どもの状況と支援の実態	144
(4) 連携体制の状況と関係機関が望むこと	144
第5章 総合考察	145
1. ヤングケアラーと思われる子どもの人数の推定	146
2. ヤングケアラーの理解と気づきの重要性	147
3. 状況に即した生活支援の必要性	147
4. 支援体制基盤の強化について	148
参考資料	151

第1章

本調査の概要

1. 本調査の概要

ヤングケアラーの実態や支援の状況を把握するため、下記のような対象に実態調査を行った。

目的	本調査は、児童・生徒の学校や家庭生活の中での悩みや困りごと等の生活実態、また学校教員および関係機関における、家事や家族の世話などを日常的に行っている子ども(ヤングケアラー)への気づきや対応の実態を明らかにするとともに、支援施策等の検討を行うための基礎資料とする。
調査の種類	<p>①-1 児童・生徒調査(小学生・中学生): 市立小学校・中学校の小学5年生から中学3年生のすべての児童・生徒</p> <p>①-2 児童・生徒調査(高校生世代): 市内に在住するすべての高校生世代 (平成17年4月2日～平成20年4月1日生まれ)</p> <p>② 教員調査: 市立小学校・中学校の全教員</p> <p>③-1 関係機関調査(機関向け): 市内の子どもおよび支援や介護を要する人に関する機関</p> <p>③-2 関係機関調査(個人向け): 市内の子どもおよび支援や介護を要する人に関する機関に所属する個人</p> <p>④ 子ども・若者支援団体調査: 市内の子ども・若者支援団体</p>
調査方法	<p>①-1 児童・生徒調査(小学生・中学生): 各学校を通じて児童・生徒向け、保護者向けの調査依頼文を配布し、児童・生徒本人が学校配布のタブレットからWebアンケートフォームにアクセスし回答</p> <p>①-2 児童・生徒調査(高校生世代): 住民基本台帳から抽出した対象者に郵便で調査依頼文を送付し、高校生世代本人が個人の端末からWebアンケートフォームにアクセスし回答。筆記で回答を希望する対象者のために別途紙媒体を準備</p> <p>② 教員調査: 各学校を通じて教員向けの調査依頼文を配布し、教員本人が個人の端末からWebアンケートフォームにアクセスし回答</p> <p>③-1 関係機関調査(機関向け): 市内の関係機関へ調査依頼文を直接または郵送での配布、およびメール送付し、各機関代表者1名が個人の端末からWebアンケートフォームにアクセスし回答</p> <p>③-2 関係機関調査(個人向け): 市内の関係機関へ調査依頼文を直接または郵送での配布、およびメール送付し、各機関の所属者本人が個人の端末からWebアンケートフォームにアクセスし回答</p> <p>④ 子ども・若者支援団体調査: 市内の子ども・若者支援団体へ調査依頼文を直接または郵送での配布、およびメール送付し、各団体代表者1名が個人の端末からWebアンケートフォームにアクセスし回答</p>

調査項目	<p>①は国が令和2・3年度に行ったヤングケアラー関連調査の調査項目を基本としつつ、実態調査委員会において検討を行い、本市独自項目の追加等を行った。</p> <p>②は新潟県南魚沼市(平成27年度)^{※1}、神奈川県藤沢市(平成28年度)^{※2}、東京都小平市(平成29年度)^{※3}で実施された家族のケアをしている子どもに関する教員の意識調査および、東京都豊島区(令和4年度)^{※4}で実施されたヤングケアラー実態調査の関係機関向け調査を参考としつつ、実態調査委員会において検討を行い、本市独自の項目の追加等を行った。</p> <p>③は東京都豊島区(令和4年度)で実施されたヤングケアラー実態調査の関係機関向け調査を参考としつつ、実態調査委員会において検討を行い、本市独自の項目の追加等を行った。</p> <p>④は東京都豊島区(令和4年度)で実施されたヤングケアラー実態調査の関係機関向け調査を参考としつつ、実態調査委員会において検討を行い、本市独自の項目の追加等を行った。</p>
------	--

※1 ※2 実施主体：一般社団法人日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト

※3 実施主体：白梅学園大学ヤングケアラー調査研究プロジェクト

※4 実施主体：東京都豊島区・豊島区教育委員会

2. 調査の実施

本調査は、学識経験者と委託事業者の助言のもと、実態調査委員会における検討を踏まえ実施した。実態調査委員会は府中市ヤングケアラープロジェクトモデル事業の実施主体(一般社団法人ケアラーワークスおよび府中市子ども家庭部子ども家庭支援課)、および高齢・介護・障害分野担当課より委員が参集し、設置・運営した。実態調査委員会は4回実施した。

【実施主体】一般社団法人ケアラーワークス・府中市

【実態調査に関する事務局】一般社団法人ケアラーワークス

【児童・生徒調査、教員調査、関係機関調査の委託】日本コンサルタントシステム株式会社(JCS)

委託内容：アンケートフォームの作成・回答結果について集計・原因分析など

【府中市ヤングケアラー実態調査委員会】

(敬称略・順不同)

氏名	役職	所属等
伊藤 順子	相談担当主査	子ども家庭部 子ども家庭支援課
濱田 昌也	教育指導担当主幹	市教育委員会 教育部指導室
南學 進	室長補佐	市教育委員会 教育部指導室
長岡 志保	主査	福祉保健部 高齢者支援課
小島 匡弘	介護保険制度担当主査	福祉保健部 介護保険課
大田 晶子	サービス支援担当(精神・発達)主査	福祉保健部 障害者福祉課
田中 悠美子	代表理事・ヤングケアラーコーディネーター	一般社団法人ケアラーワークス

【府中市ヤングケアラー実態調査委員会 事務局】

(敬称略・順不同)

氏名	所属等
島村 真由美	子ども家庭部 子ども家庭支援課
手島 健太	子ども家庭部 子ども家庭支援課
向山 彩音	子ども家庭部 子ども家庭支援課
松崎 実穂	一般社団法人ケアラーワークス
横川 あゆみ	一般社団法人ケアラーワークス

3. 集計・分析に関する留意事項

- 回答結果の割合(%)は有効サンプル数に対し各回答数の割合を小数点第2位で四捨五入しているため、単数回答(複数の選択肢から1つの選択肢を選ぶ)であっても合計が100%にならない場合がある。
- 複数回答(2つ以上の選択肢を選択できる質問)の場合、回答は選択肢ごとの有効回答数に対しそれぞれの割合を示しているため、合計が100%を超える場合がある。
- 図表内の「n=」はその設問についての集計対象件数を示している。母集団のデータの数を示す場合は「N=」と表記する。
- 集計サンプル数が少ない属性項目については1サンプルあたりの重みが大きく比率が変動しやすいため、結果の利用には注意を要する。
- 自由記述による回答の集計・分析にあたっては、個人の特定につながる情報(人名、固有名詞等)をすべて削除したうえで図表の作成および回答例の掲載を行っている。
- 「お世話」とは本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などをすることを示す。

第2章

児童・生徒調査

目次

1. 調査概要	14
(1) 調査設計	14
(2) 回収状況	15
① 全体	15
② 内訳	15
(3) 調査結果の見方	15
2. 単純集計結果	16
(1) 基本属性	16
① 性別	16
② 学年	16
③ 同居家族	17
④ 世帯種別	18
⑤ 健康状態	18
(2) 日常生活について	18
① (ア) 学校への通学状況 (出欠)	18
① (イ) 学校への通学状況 (遅刻や早退)	19
② クラブ活動や部活動・習いごとへの参加状況	19
③ ふだんの学校生活等ではまること	20
④ (ア) 現在悩んだり困っていたりすること	21
④ (イ) 現在悩んだり困っていたりすること「その他」詳細 (自由回答)	22
⑤ 悩みごと等について話を聞いてくれる人の有無 および相談経験の有無	23
(3) 家庭・家族のことについて	23
① お世話をしている家族の有無	23
② (ア) お世話を必要としている家族の続柄	24
② (イ) お世話を必要としている家族の続柄「その他」詳細 (自由回答)	25
③ (ア) お世話を必要としている家族の状況	26
③ (イ) お世話を必要としている家族の状況「その他」詳細 (自由回答)	27
④ (ア) 行っているお世話の内容	28
④ (イ) 行っているお世話の内容「その他」詳細 (自由回答)	29
⑤ 本人以外に家族のお世話をしている人の有無	30

⑥(ア) 本人以外に家族のお世話をしている人の属性	30
⑥(イ) 本人以外に家族のお世話をしている人の属性「その他」詳細 (自由回答)	31
⑦ お世話をはじめた年齢	31
⑧ お世話をしている頻度	31
⑨(ア) 一日あたりのお世화에費やす時間(平日)	32
⑨(イ) 一日あたりのお世화에費やす時間(平日以外の日)	32
⑩(ア) お世話をしているためにできていないこと	33
⑩(イ) お世話をしているためにできていないこと「その他」詳細 (自由回答)	34
⑪ お世話をすると感じている大変さ	34
⑫ お世話を必要としている家族のことや、お世話の悩みを相談した 経験の有無	35
⑬(ア) お世話を必要としている家族のことや、お世話の悩みを 相談した相手	36
⑬(イ) お世話を必要としている家族のことや、お世話の悩みを 相談した相手「その他」詳細(自由回答)	37
⑭(ア) 相談していない理由	38
⑭(イ) 相談していない理由「その他」詳細(自由回答)	39
⑮ 身近でお世話の悩みを聞いてくれる人の有無	39
⑯(ア) 学校やまわりの大人に助けてほしいことや必要としている 支援	40
⑯(イ) 学校やまわりの大人に助けてほしいことや必要としている 支援「その他」詳細(自由回答)	42
⑯(ウ) 学校やまわりの大人に助けてほしいことや必要としている 支援「代わってほしいお世話」詳細(自由回答)	42
⑰(ア) 話や相談をしたい方法	43
⑰(イ) 話や相談をしたい方法「その他」詳細(自由回答)	44
(4) ヤングケアラーについて	45
① ヤングケアラーの自己認識	45
② ヤングケアラーという言葉と内容に対する認知状況	45
③(ア) ヤングケアラーという言葉を知ったきっかけ(認知経路)	46
③(イ) ヤングケアラーという言葉を知ったきっかけ(認知経路) 「その他」詳細(自由回答)	47

3. クロス集計結果	48
(1) 家族のお世話の有無による差	48
① 家族のお世話の有無×健康状態	48
② 家族のお世話の有無×学校への通学状況(出欠)	48
③ 家族のお世話の有無×学校への通学状況(遅刻や早退)	49
④ 家族のお世話の有無×学校生活等であてはまること	50
⑤ 家族のお世話の有無×現在の悩みや困りごと	51
⑥ 家族のお世話の有無×相談相手の有無	52
⑦ 家族のお世話の有無×性別	52
(2) ヤングケアラーの自己認識による差	53
① ヤングケアラーの自己認識×健康状態	53
② ヤングケアラーの自己認識×現在の悩みや困りごと	54
③ ヤングケアラーの自己認識×お世話をするに感じている 大変さ	55
④ ヤングケアラーの自己認識×お世話の有無	56
4. 自由回答	57
(1) カテゴリ分類について	57
(2) 主な回答例	58
① (ア) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること—— 認知度・ 理解度の向上	58
① (イ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること—— 相談に かかわる内容	59
① (ウ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること—— 普及啓発	60
① (エ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること—— 人や制度の 支援	60
① (オ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること—— お金の 支援	61
① (カ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること—— 施設・物品 などの支援	61
① (キ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること—— 気づき・ 声掛け	62
① (ク) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること—— その他	63

② 感想・意見・要望	64
③ アンケートの感想	64
④ お世話をしている子どもの声	65
⑤ 相談・悩み・強い意見	66
⑥ 市や学校への設備や制度への要望	67
5. まとめ	68
(1) 家族のお世話をしている児童・生徒の把握	68
(2) 学年層ごとの家族のお世話の状況	68
(3) 家族のお世話をすることによる影響	69
(4) 相談相手の状況と支援ニーズ	69
(5) ヤングケアラーの自己認識と認知度	69

1. 調査概要

(1) 調査設計

目的	本調査では、市内の児童・生徒を対象としたアンケート調査を実施し、学校や家庭生活の中での悩みや困りごと等の生活実態を明らかにするとともに、ヤングケアラーに関する支援施策等の検討を行うための基礎資料とする。
調査対象者	<p>① 小学生・中学生向け調査 市立小学校・中学校の小学5年生から中学3年生のすべての児童・生徒 10,449人 小学生：4,437人 中学生：6,012人</p> <p>② 高校生世代向け調査 市内に在住するすべての高校生世代（平成17年4月2日～平成20年4月1日生まれ） 6,952人</p>
調査方法	<p>①小学生・中学生向け調査 各学校を通じて児童・生徒向け、保護者向けの調査依頼文を配布し、児童・生徒本人が学校配布のタブレットからWebアンケートフォームにアクセスし回答。</p> <p>② 高校生世代向け調査 住民基本台帳から抽出した対象者に郵便で調査依頼文を送付し、高校生世代本人が個人の端末からWebアンケートフォームにアクセスし回答。筆記で回答を希望する対象者のために別途紙媒体を準備。</p>
調査期間	<p>① 小学生・中学生向け調査 令和5年7月18日（火）～9月1日（金）</p> <p>② 高校生世代向け調査 令和5年8月23日（水）～9月30日（土）</p>
調査項目	国が令和2・3年度に実施したヤングケアラー関連調査の調査項目を基本に、実態調査委員会において本市独自項目の追加等を行い、小学生・中学生用調査票（32問）、高校生世代向け調査票（32問）を作成。なおいずれの調査票においても読み仮名あり・なしのフォーム2種を作成した。
調査実施にあたっての留意事項	本調査は児童・生徒に家族や家庭内の様子についてたずねるものであることから、アンケート依頼文およびアンケート説明動画内で、アンケートへの協力が任意であること、答えたくない設問には答えなくてよいことを伝えた。説明動画では調査の目的や注意点、活用方法を伝え、調査への安心感を持てるよう、またアンケートに対するの共通認識を持ったうえで回答できるよう留意した。

(2) 回収状況

①全体

児童・生徒調査の回収総数は7,860。うち、有効回答数は7,854（45.1%）。

②内訳

調査対象	配布総数 ^{※1}	回収総数 ^{※2}	有効票 ^{※3}		無効票 ^{※4}
			票数	割合	
小学生	4,437	3,182	3,180	71.7%	2
中学生	6,012	3,966	3,962	65.9%	4
高校生世代	6,952	712	712	10.2%	0
合計	17,401	7,860	7,854	45.1%	6

※1 配布総数：小学生・中学生は各学校在籍者数（令和5年5月現在）、高校生世代は実際に郵送可能であった件数（令和5年8月現在）

※2 回収総数：ウェブ回答および紙調査票の回収総数

※3 有効票：回収総数から無効票を除いたもの

※4 無効票（無効回答）：ウェブはログインのみ、未入力で送信されたもの、およびログイン後属性全未回答のもの。紙は白票

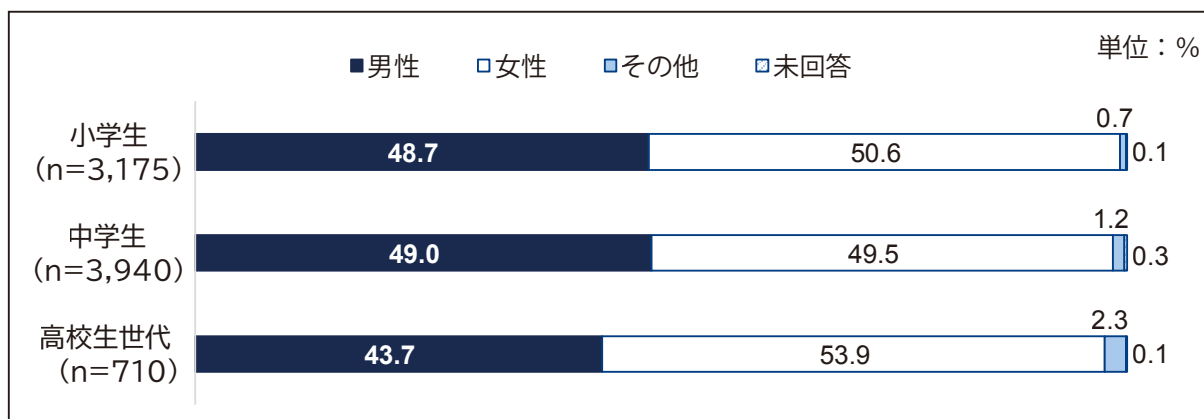
(3) 調査結果の見方

- 回答結果の割合（%）は有効サンプル数に対し各回答数の割合を小数点第2位で四捨五入しているため、単数回答（複数の選択肢から1つの選択肢を選ぶ）であっても合計が100%にならない場合がある。
- 複数回答（2つ以上の選択肢を選択できる質問）の場合、回答は選択肢ごとの有効回答数に対しそれぞれの割合を示しているため、合計が100%を超える場合がある。
- 図表内の「n=」はその設問についての集計対象件数を示している。母集団のデータの数を示す場合は「N=」と表記する。
- 集計サンプル数が少ない属性項目については1サンプルあたりの重みが大きく比率が変動しやすいため、結果の利用には注意を要する。
- 調査フォーム・調査票上で【学年】について「その他」と回答した、または「無回答」であったケース（計29件）については学年を確定できないため単純集計・クロス集計における分析対象からは除外した。
- 自由記述による回答の集計・分析にあたっては、個人の特定につながる情報（人名、固有名詞等）をすべて削除したうえで図表の作成および回答例の掲載を行っている。
- 「お世話」とは本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などをすることを示す。
- 「お世話をしている家族が『いる』」と回答した児童・生徒が必ずしもヤングケアラーに該当するとは限らない。

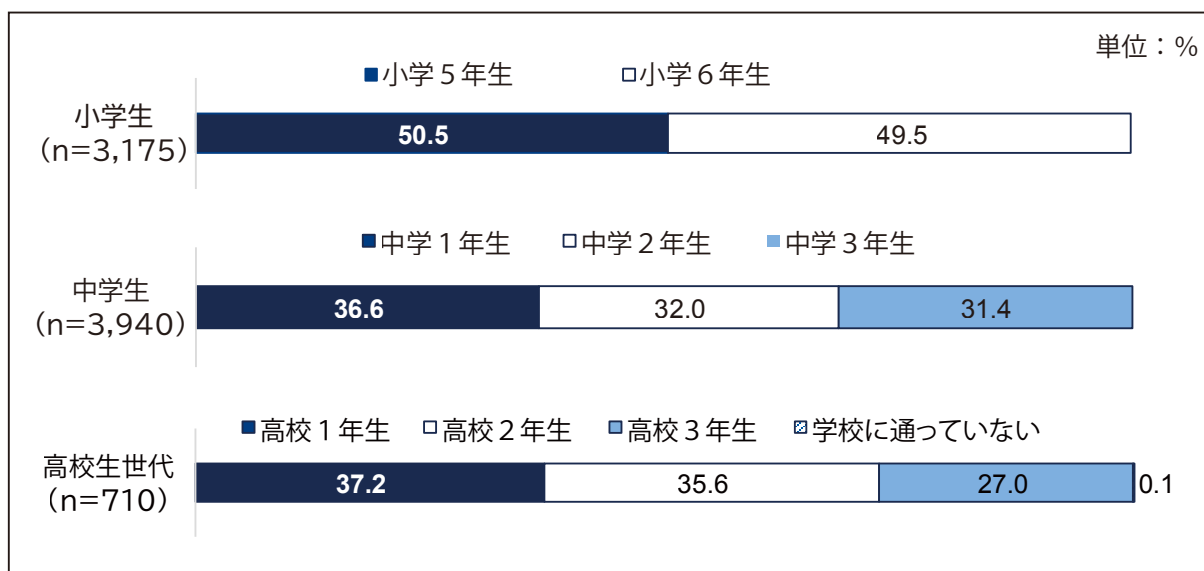
2. 単純集計結果

(1) 基本属性

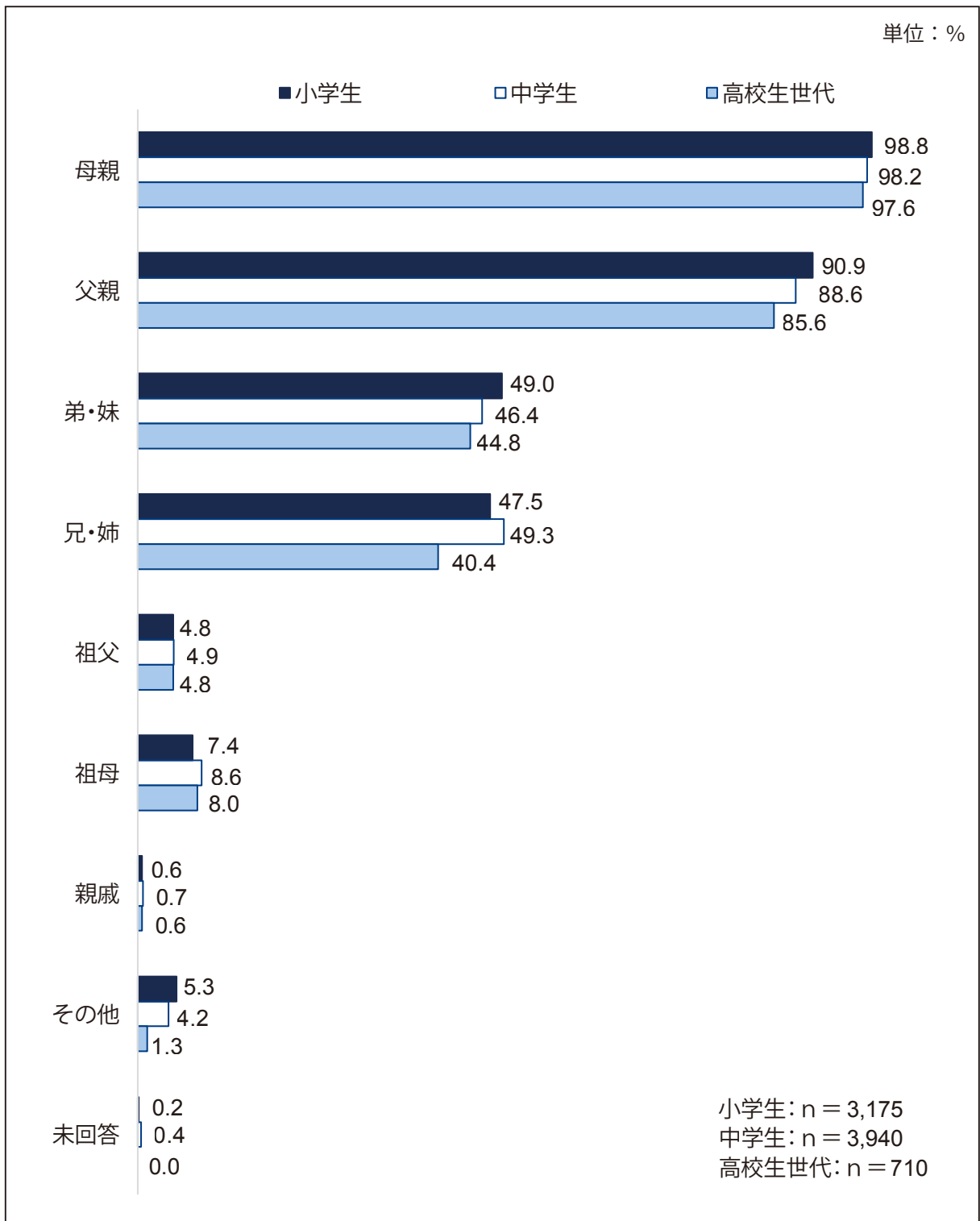
①性別 (問1)



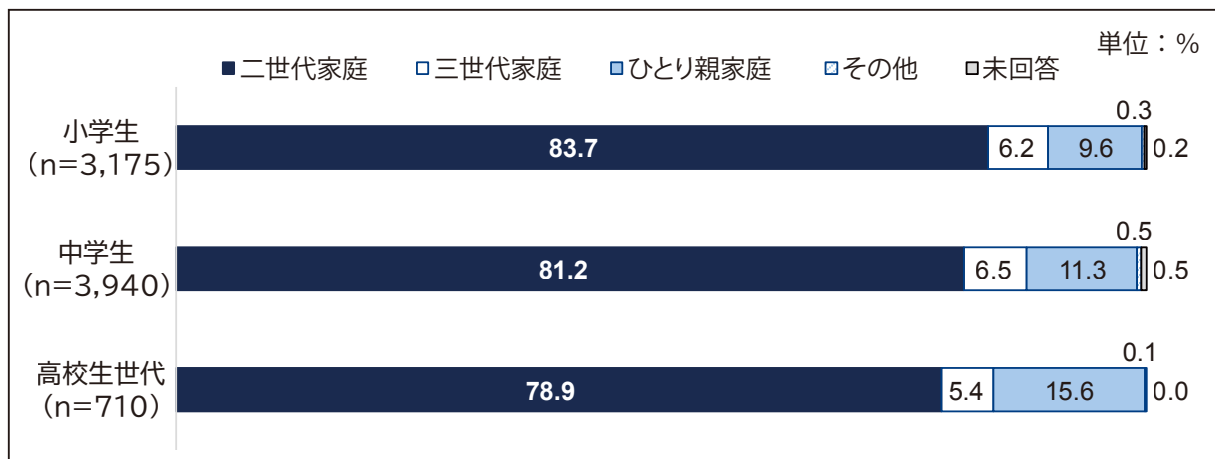
②学年 (問2)



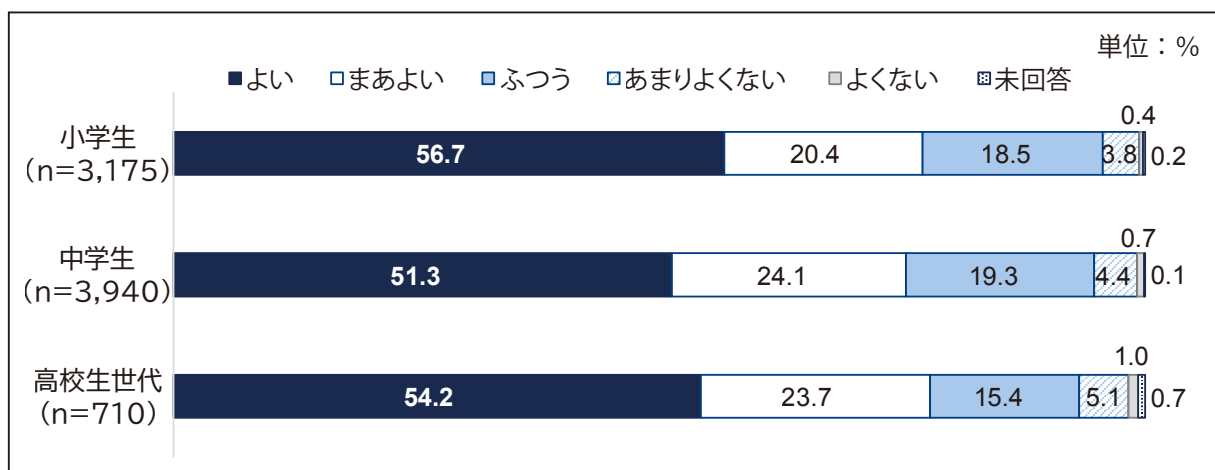
③同居家族（問3）



④世帯種別（問3）



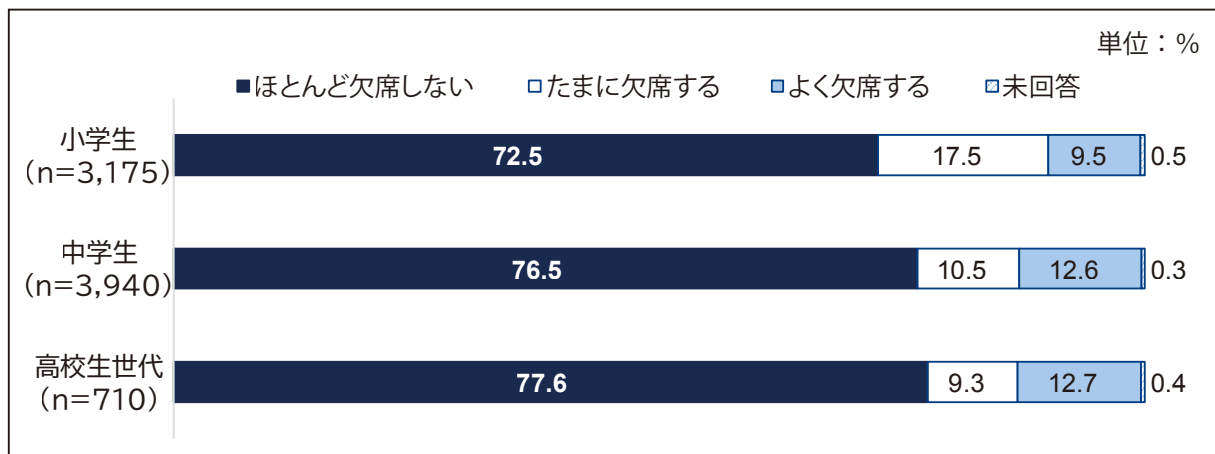
⑤健康状態（問4）



(2) 日常生活について

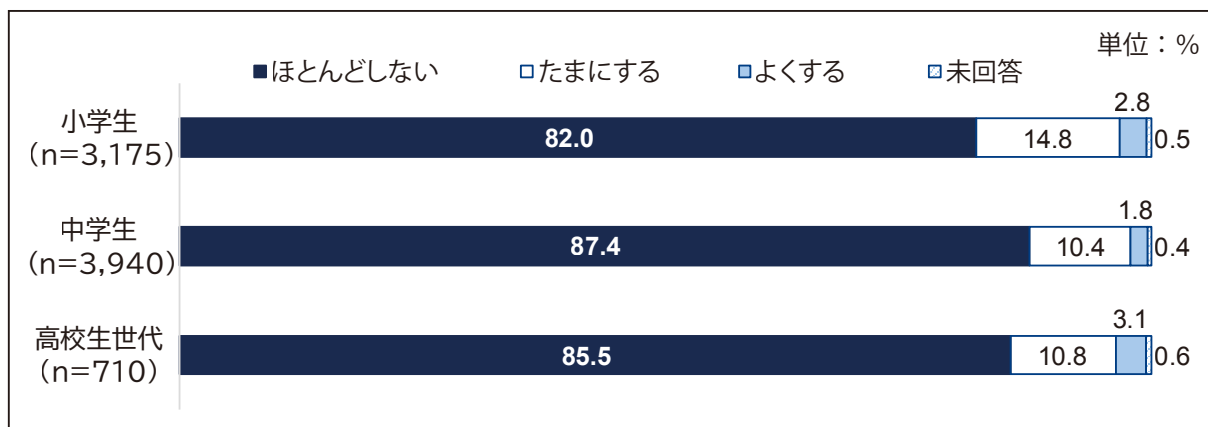
① (ア) 学校への通学状況（出欠）（問5）

学校への通学状況（出欠）については、小学生（72.5%）・中学生（76.5%）・高校生世代（77.6%）とも「ほとんど欠席しない」が最も高くなっている。続いて小学生では「たまに欠席する」（17.5%）、「よく欠席する」（9.5%）の順に高いが、中学生と高校生世代では「よく欠席する」「たまに欠席する」の順となっている。



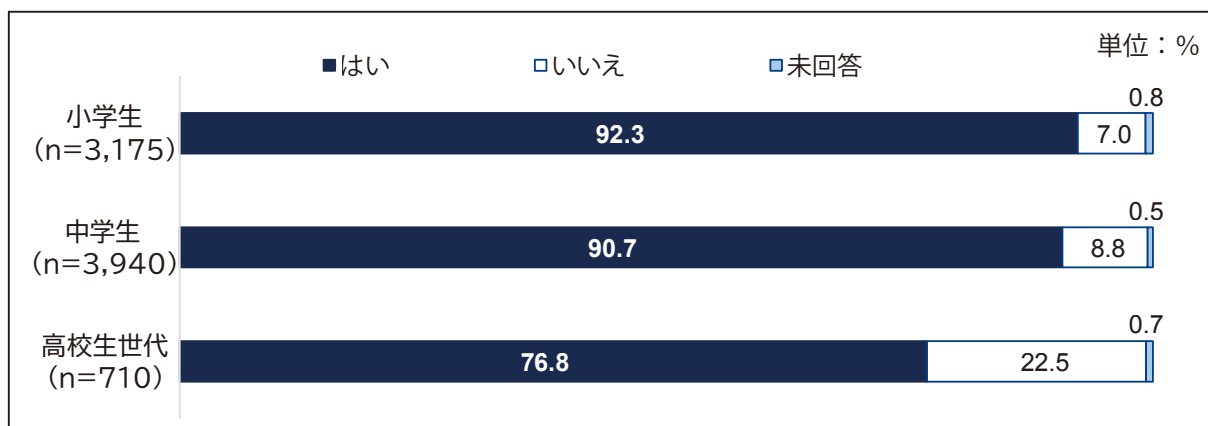
① (イ) 学校への通学状況 (遅刻や早退) (問 6)

学校への通学状況 (遅刻や早退) は、小学生 (82.0%)・中学生 (87.4%)・高校生世代 (85.5%) とも「ほとんどしない」が最も高くなっている。小学生では「たまにする」(14.8%) が中学生・高校生世代と比べ4ポイント以上高くなっている。



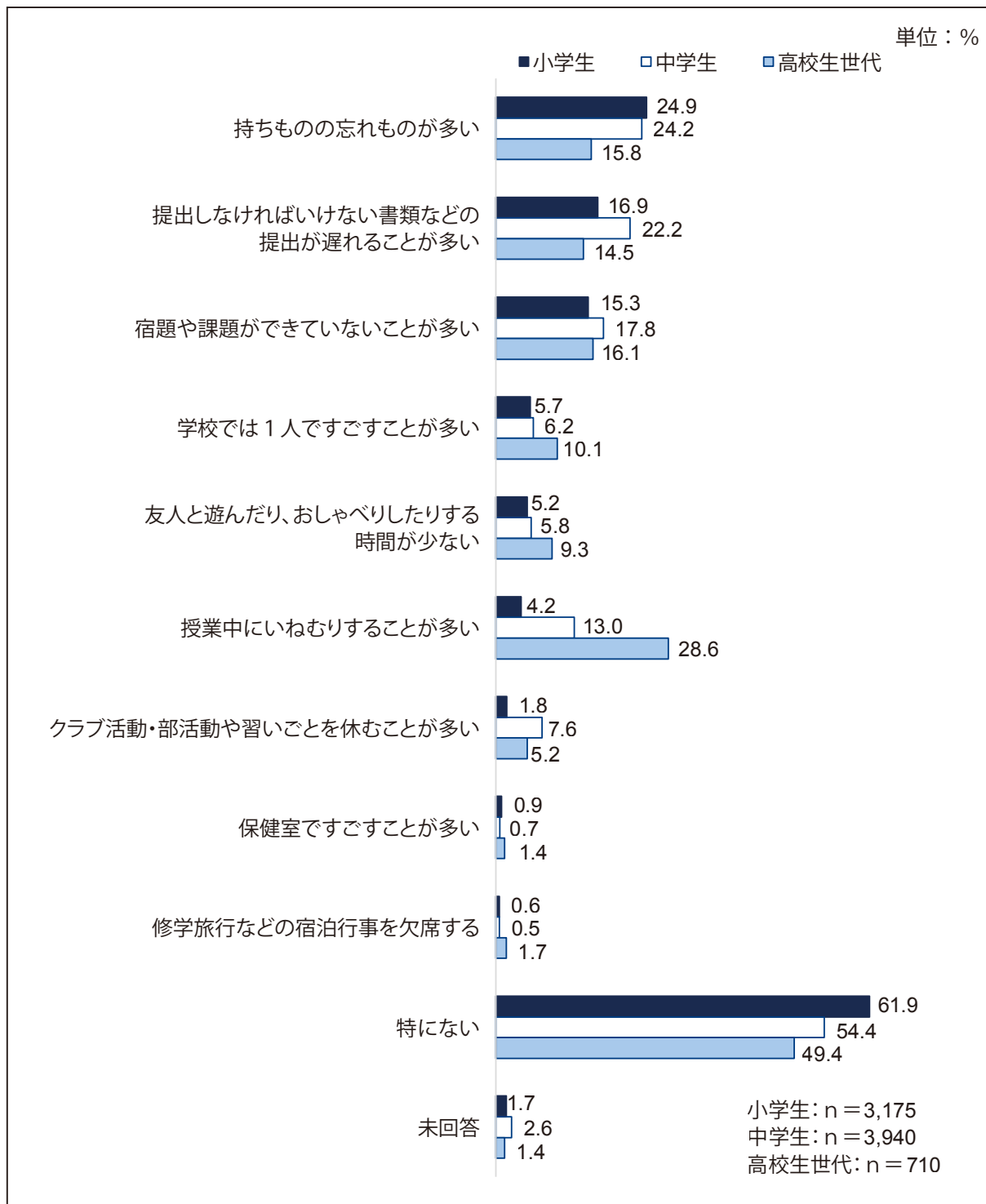
② クラブ活動や部活動・習いごとへの参加状況 (問 7)

クラブ活動や部活動・習いごとへの参加状況は、小学生 (92.3%)・中学生 (90.7%)・高校生世代 (76.8%) とも「はい」が最も高くなっている。なお高校生世代では小中学生に比べ「はい」が10ポイント以上低く、「いいえ」(22.5%) が小中学生に比べ10ポイント以上高くなっている。



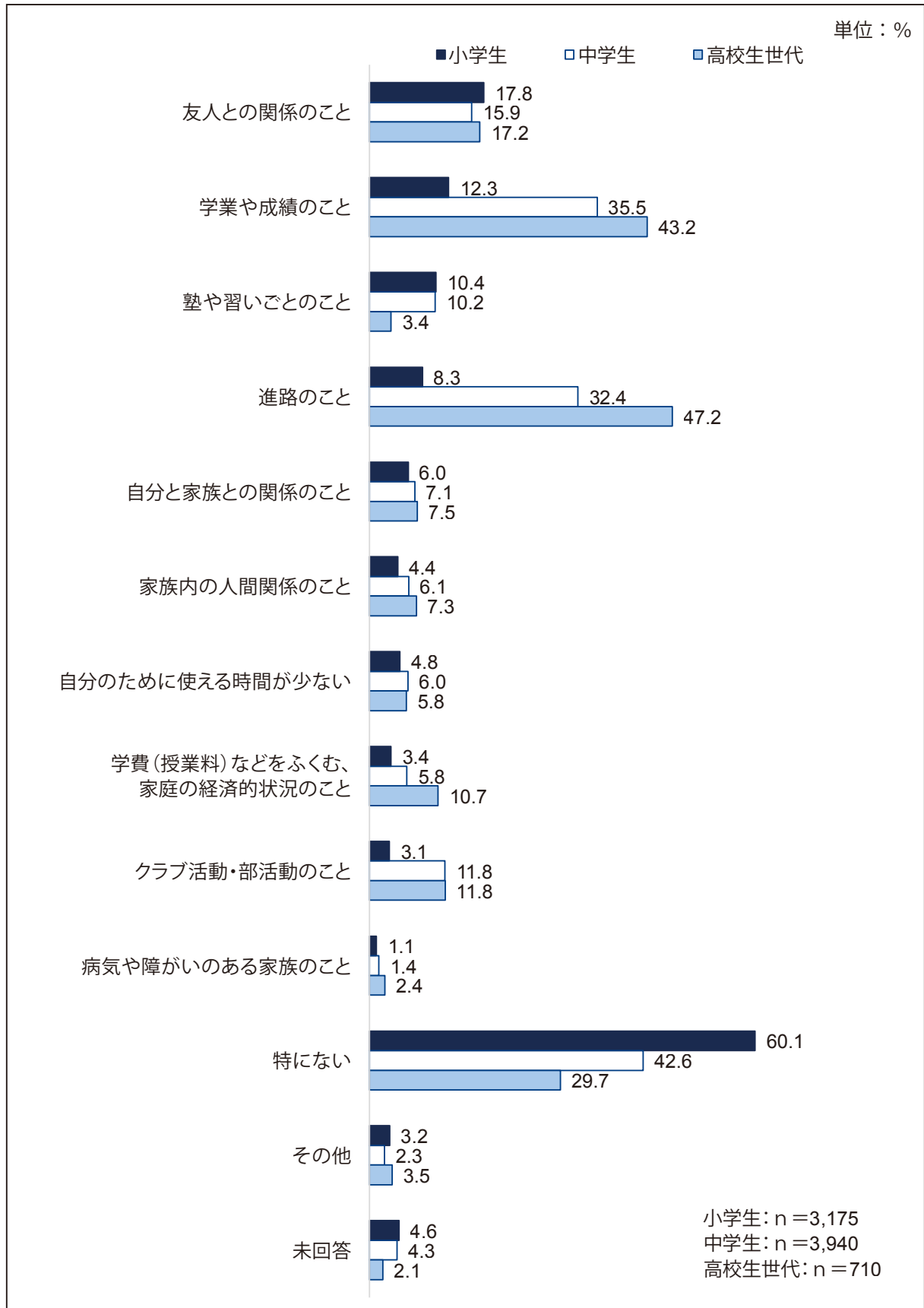
③ふだんの学校生活等であてはまること（問8）

ふだんの学校生活等であてはまることは、小学生（61.9%）・中学生（54.4%）・高校生世代（49.4%）とも「特にない」が最も高い。続いて小中学生では「持ち物の忘れものが多い」（24.9%、24.2%）、「提出しなければいけない書類などの提出が遅れることが多い」（16.9%、22.2%）、「宿題や課題ができていないことが多い」（15.3%、17.8%）となっている。高校生世代では「授業中にいねむりすることが多い」（28.6%）、「宿題や課題ができていないことが多い」（16.1%）、「持ち物の忘れ物が多い」（15.8%）の順となっている。



④ (ア) 現在悩んだり困っていたりすること (問9)

現在悩んだり困っていたりすることは、小中学生では「特にない」が最も高くなっている(60.1%、42.6%) が、高校生世代では「進路のこと」(47.2%) が最も高くなっている。次いで小学生では「友人との関係のこと」(17.8%) が続くが、中学生・高校生世代では「学業や成績のこと」(35.5%、43.2%)、続いて中学生は「進路のこと」(32.4%) が高くなっている。



④ (イ) 現在悩んだり困っていたりすること「その他」詳細(自由回答)(問9)

現在悩んだり困っていたりすることについて「その他」を選択した対象者から218件の自由回答(小学生101件、中学生92件、高校生世代25件)が得られ、その内容を検討し、以下の通りカテゴリ分類を行った。

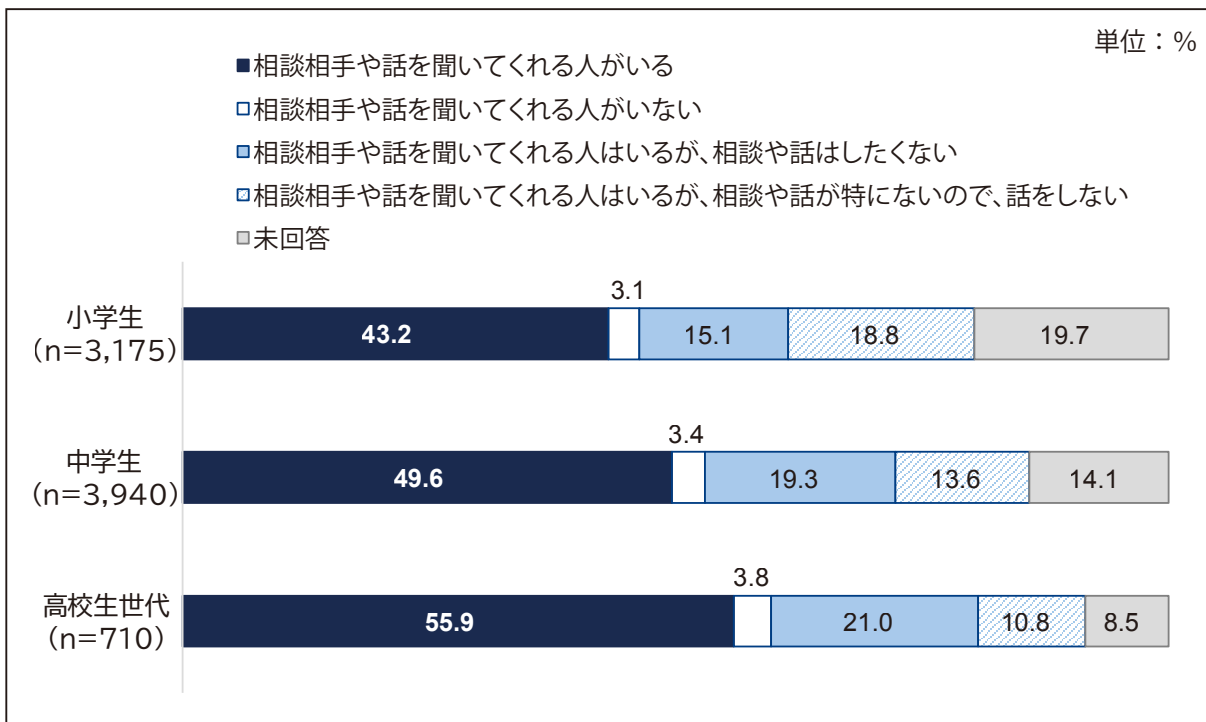
最も件数が多かったカテゴリは「自分の体調、心身の状況(49件)、次に「自分のこと(性格、容姿、存在意義等)」(27件)であった。続いて「先生のこと」(13件)、「学習に関すること」「その他学校でのこと」が同数で12件ずつあった。また「いじめ、嫌がらせ」「対人関係(いじめや嫌がらせ以外で、家族や学校等の状況が不明のもの)」が同数で10件ずつあった。

カテゴリ名	回答件数
自分の体調、心身の状況(病気やケガの名称、「自分の病気」「精神状態」「ストレス」「睡眠不足」等)	49
自分のこと(性格、容姿、存在意義等)※性別、ジェンダー・セクシャリティを除く	27
先生のこと(「担任の先生のこと」「保健室の先生が怖い」等)	13
学習に関すること(学校・塾の課題や宿題、受験・進学に関すること)	12
その他学校でのこと(生徒会、文化祭、委員会活動等のほか「学校が楽しくない」「やることが多い」等 ※学習、先生、クラスメイト、いじめに関するものを除く)	12
いじめ、嫌がらせ	10
対人関係 ※いじめや嫌がらせを除く・学校や家庭等の状況が不明のもの	10
親のこと(親との関係、親の状況)	9
クラスメイト(「クラスメイトとの人間関係」「授業中うるさい」等)	7
家族・親戚との関係や状況	6
友人のこと(「友達作り」「友達との距離感」等)	6
習いごとや趣味に関すること	7
恋愛(「恋の悩み」「好きな人のこと」等)	7
家でのこと(家庭環境、部屋のことなど)	5
自分のジェンダー・セクシャリティ(「自分の心の性別」「自分の性について」等)	5
ゲームのこと	4
お金のこと(「お金がない」「小遣いが足りない」等)	4
将来のこと(「将来の夢」「将来に対する不安」等)	4
スマホ、SNS(「スマホを買ってくれない」「使用の制限が多い」等)	3
家族の健康(病気、障がい)	2
時間が足りない	3
自分の障がいと周囲との関係	2
その他	12
ない(ない、なし、どれも当てはまらない)	4
判別不能	1

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

⑤悩みごと等について話を聞いてくれる人の有無および相談経験の有無（問 10）

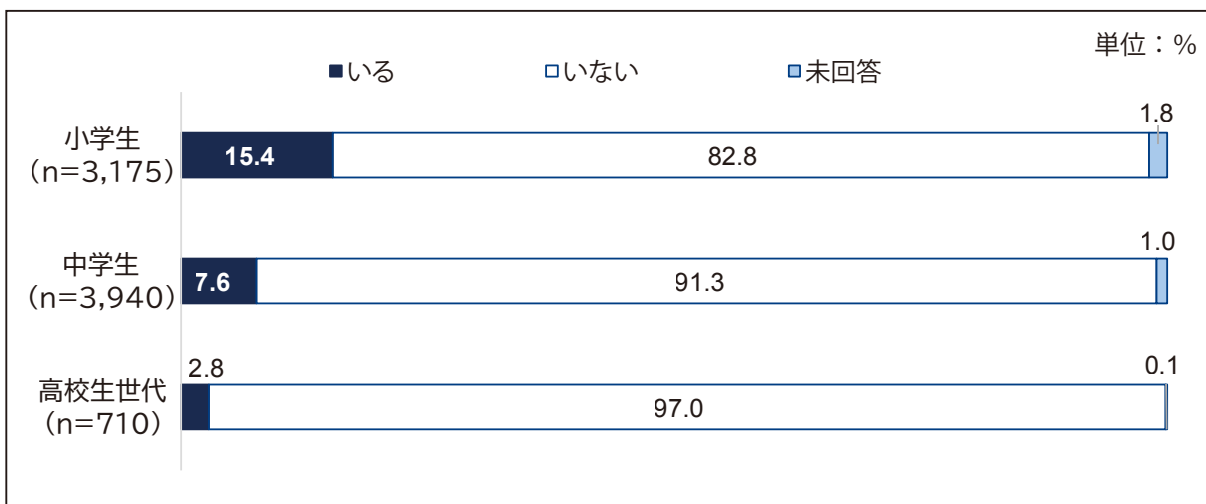
悩みごと等について話を聞いてくれる人の有無および相談経験の有無は、小学生（43.2%）・中学生（49.6%）・高校生世代（55.9%）すべてで「相談相手や話を聞いてくれる人がいる」が最も高い。続いて小学生では「相談相手や話を聞いてくれる人はいるが、相談や話が特にないので、話をしない」（18.8%）、「相談相手や話を聞いてくれる人はいるが、相談や話はしたくない」（15.1%）の順、中学生・高校生世代では「相談相手や話を聞いてくれる人はいるが、相談や話はしたくない」（中学生 19.3%、高校生世代 21.0%）、「相談相手や話を聞いてくれる人はいるが、相談や話が特にないので、話をしない」（中学生 13.6%、高校生世代 10.8%）の順となっている。



(3) 家庭・家族のことについて

①お世話をしている家族の有無（問 11）

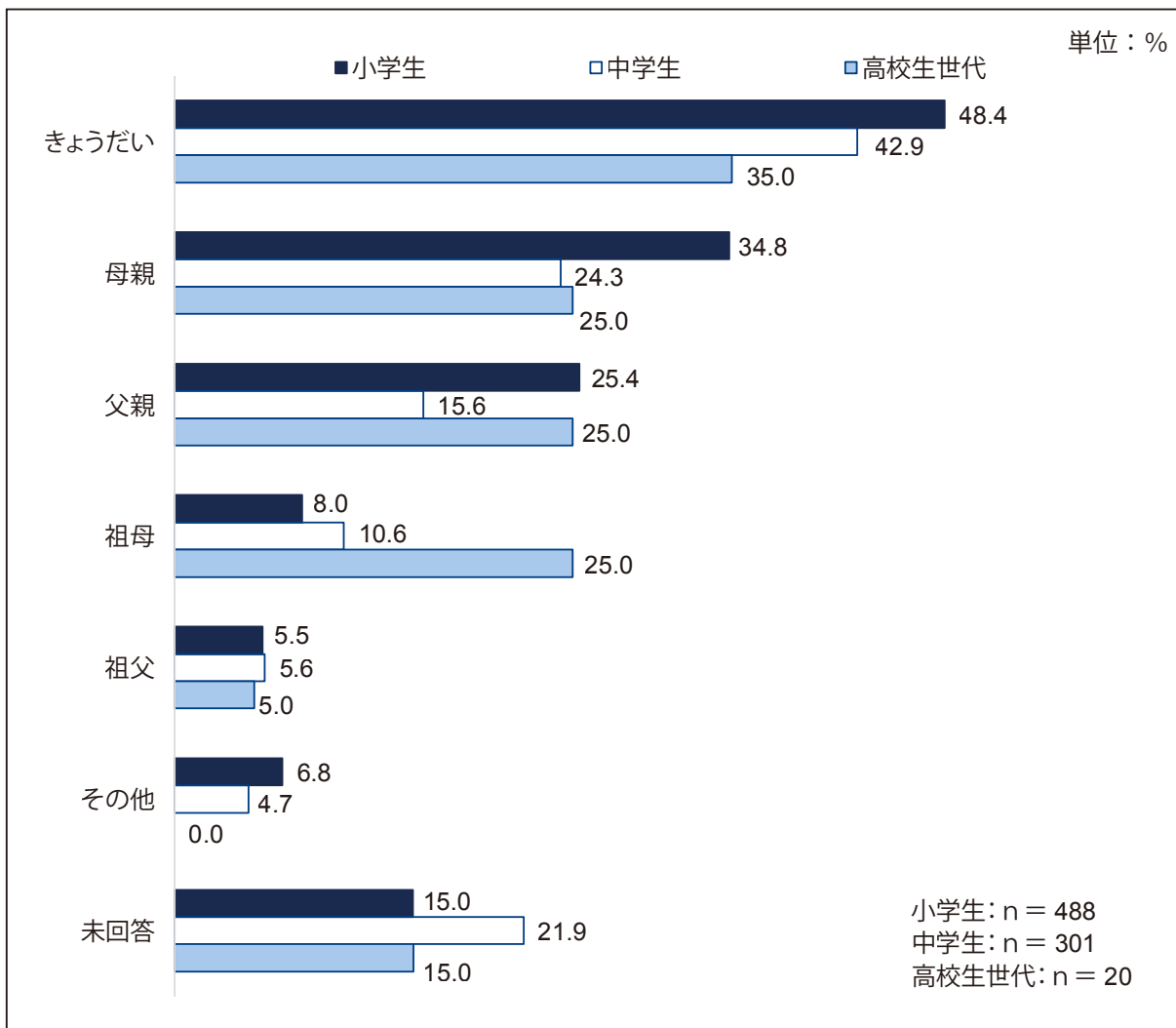
お世話をしている家族の有無は、「いる」が小学生 15.4%、中学生 7.6%、高校生世代 2.8%となっている。



② (ア) お世話を必要としている家族の続柄 (問 12)

お世話を必要としている家族の続柄は、すべての学年で「きょうだい」が最も多く回答されている(小学生 48.4%・中学生 42.9%・高校生世代 35.0%)。また「きょうだい」を回答する比率は学年が上であるほど低くなっている。

次に多く回答されたのはすべての学年で「母親」(小学生 34.8%、中学生 24.3%、高校生世代 25.0%)である。また小中学生では「父親」が三番目に高いが(小学生 25.4%、中学生 15.6%)、高校生世代では「父親」と「祖母」も「母親」と同率の 25.0%となっている。また「祖母」のみ学年が上であるほど比率が高くなっている。



② (イ) お世話を必要としている家族の続柄「その他」詳細 (自由回答) (問 12)

お世話を必要としている家族の続柄について「その他」と回答した対象者から 47 件の自由回答 (小学生 33 件、中学生 14 件) があり、その内容を検討し、以下の通りカテゴリ分類を行った。

最も件数が多かったカテゴリは「いない」(合計 24 件)、次に「ない」(5 件)であった。また類似したカテゴリとして「当てはまらない」(2 件)、「していない」(1 件)があった。この「いない」「ない」「当てはまらない」という回答については、お世話を必要としている家族の続柄(②(ア)、問 12)の中に選択できるものがなかったか、家庭内でなんらかの手伝い等をしているかもしれないが、特定の家族メンバーの世話はしていないという可能性が考えられる。一方「していない」については①(問 11)ではお世話をしている家族が「いる」と回答したが、実際には家族のお世話をしていない、またはなんらかの手伝い等をしているかもしれないが、特定の家族メンバーの世話はしていないという可能性が考えられる。

お世話の対象としての属性が回答されているものは「いとこ」「姪」などの「選択肢にない家族の続柄」(4 件)、また「自分」(4 件)や「家族以外の人」(1 件)を挙げているものがあるほか、「わからない」(1 件)があった。

またなんらかの属性以外を回答したものとしては「自分で家事を進んで行っている」等があった。

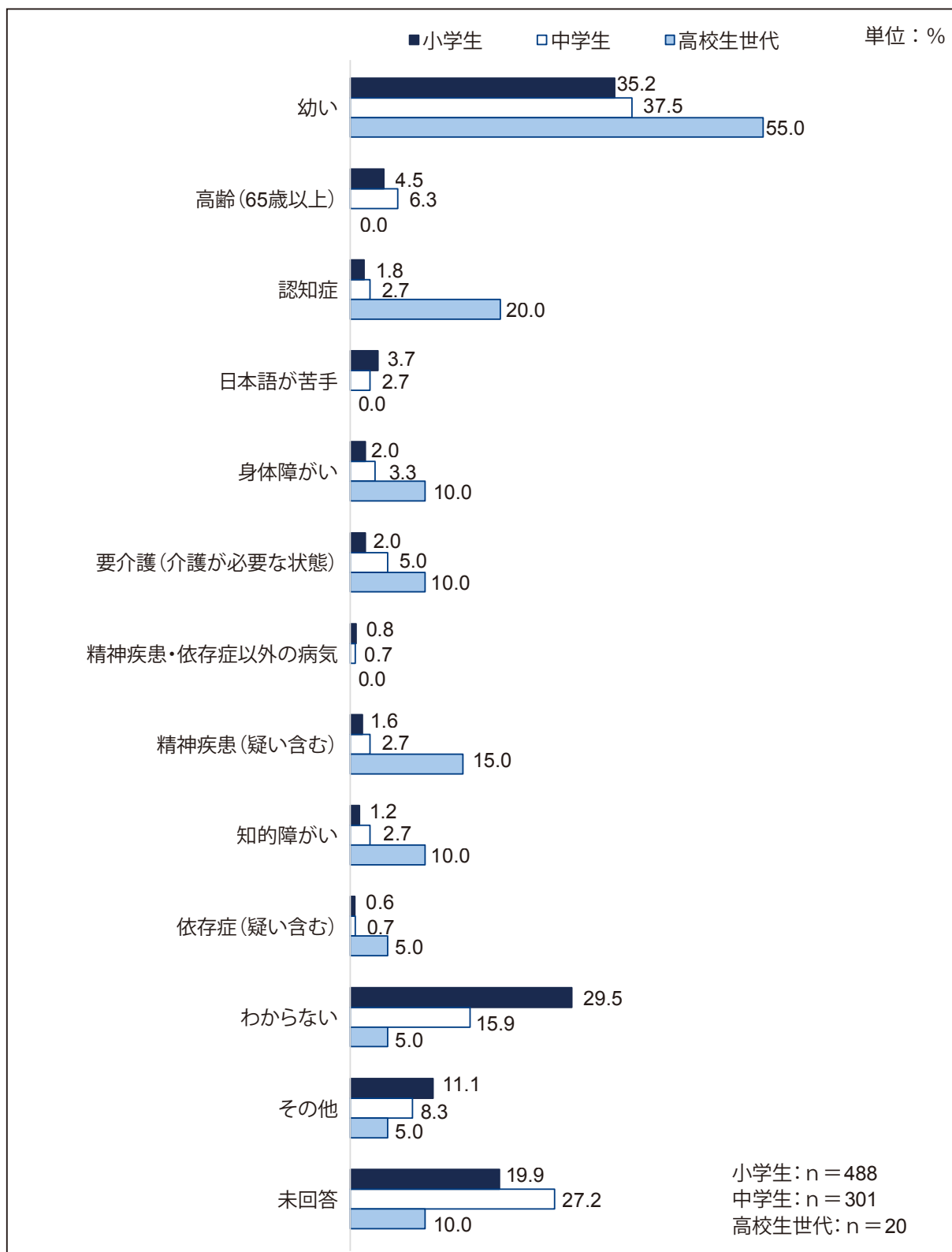
カテゴリ名	回答件数
いない	24
ない	5
選択肢にない家族の属性(「いとこ」「姪」等)	4
自分	4
属性以外のコメント	3
当てはまらない	2
していない	1
家族以外の人	1
わからない	1
判別不能	2

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

③ (ア) お世話を必要としている家族の状況 (問 13)

お世話を必要としている家族の状況は、小学生 (35.2%)・中学生 (37.5%)・高校生世代 (55.0%) すべてで「若い」が最も多い。次に小学生 (29.5%) と中学生 (15.9%) では「わからない」が多く、高校生世代では「認知症」(20.0%)、「精神疾患 (疑い含む)」(15.0%) の順に多い。また小学生と中学生では3番目に「その他」が多い。

また「認知症」「身体障がい」「要介護 (介護が必要な状態)」「精神疾患 (疑い含む)」「知的障がい」、アルコール依存症・ギャンブル依存症などの「依存症 (疑い含む)」については、学年が上であるほど比率が高くなっている。



③ (イ) お世話を必要としている家族の状況「その他」詳細 (自由回答) (問 13)

お世話を必要としている家族の状況について「その他」を選択した対象者から 80 件 (小学生 54 件、中学生 25 件、高校生世代 1 件) の自由回答が得られ、その内容を検討し、以下の通りカテゴリ分類を行った。

分類された回答件数が最も多かったカテゴリは「ない」(17 件) であるが、類似したカテゴリとして「当てはまらない」が 2 件、「していない」が 1 件あった。「ない」および「当てはまらない」という回答に関しては、“お世話を必要としている家族の状況をたずねた設問 (③ (ア)、問 13) における選択肢の中に当てはまるものがなかった”ことが考えられる。一方「していない」という回答に関しては、① (問 11) ではお世話をしている家族が「いる」と回答したが、実際には家族のお世話をしていない、または家庭内でなんらかの手伝い等をしているかもしれないが、特定の家族メンバーのお世話はしていないという可能性が考えられる。

次に回答件数が多かったカテゴリは「具体的な疾患や障がいなどの名称」(11 件) である。これに類似したカテゴリとして「病気 (具体的名称なし)」が 6 件あった。続いて、世話を必要としている家族の状況として「年齢が幼いきょうだいの状況」(7 件)、「その他世話の必要な家族の状況」(9 件) があった。

また直接お世話を必要としている家族の状況ではないが、家族のお世話が必要となる背景についての回答として「親の状況」(9 件) があった。さらにお世話の必要な相手の状況ではなく「お世話の内容」を挙げた回答が 4 件あった。またお世話の必要な相手の状況としてペットなど「動物」を挙げた回答が 3 件あった。

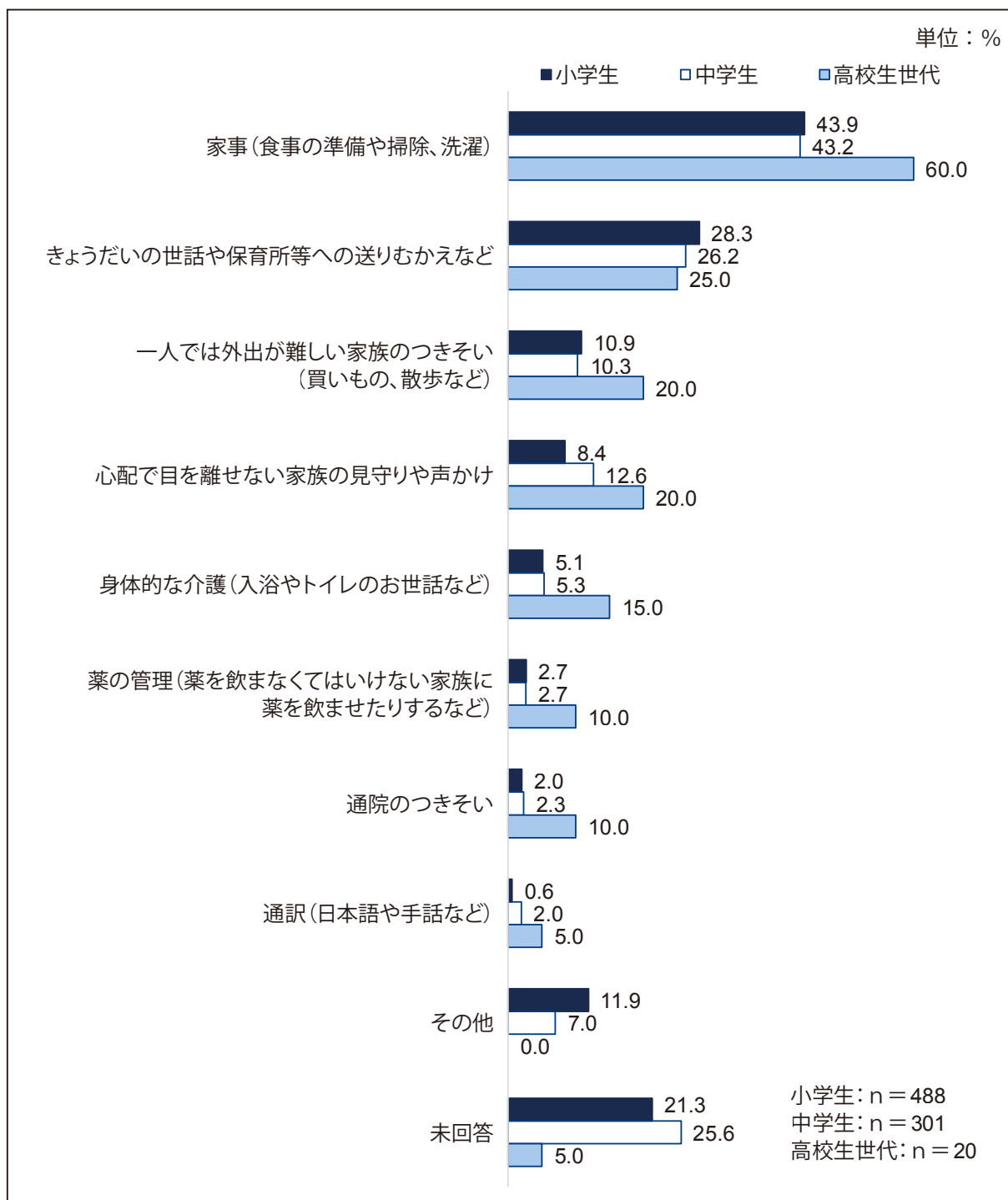
カテゴリ名	回答件数
ない (「特にない」「なし」「なにもない」等)	17
具体的な疾患、障がい等の名称	11
親の状況 (「仕事が忙しい」等)	9
その他世話の必要な相手の状況	9
いない (「いない」「誰もいない」等)	9
年齢が幼いきょうだいの状況	7
病気 (具体的名称なし)	6
お世話の内容 (「料理」「洗濯物たたみ」等の家事または「家事の手伝い」等)	4
人間以外 (「犬」等)	3
当てはまらない	2
普通 (「普通に元気」等)	2
していない	1
家族以外の人のごと	1

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

④ (ア) 行っているお世話の内容 (問 14)

行っているお世話の内容では「家事(食事の準備や掃除、洗濯)」が最も多く、小学生 43.9%・中学生 43.2%・高校生世代 60.0%となっている。次に「きょうだいの世話や保育所等への送りむかえなど」(小学生 28.3%・中学生 26.2%、高校生世代 25.0%)が多い。また小中学生では「家事」および「きょうだいの世話等」を除いた他のお世話については回答される割合が1～10%台だが、高校生世代では「一人では外出が難しい家族のつきそい(買い物、散歩など)」「心配で目を離せない家族の見守りや声かけ」が20.0%となっている。

また身体的な介護については小中学生では5%台のところ、高校生世代では15.0%となっている。高校生世代は(サンプル数が少ないためデータの利用には注意を要するが)小中学生と比較して(「その他」と「未回答」を除き)選択しているお世話の種類が多い。



④ (イ) 行っているお世話の内容「その他」詳細 (自由回答) (問 14)

家族へのお世話の内容について、「その他」を選択した対象者から 79 件 (小学生 58 件、中学生 21 件、高校生世代 0 件) の自由記述回答が得られ、以下の通りカテゴリ分類を行った。

最も回答が多かったカテゴリは「ない・当てはまらない」25 件であった。これについては④ (ア) (問 14) の選択肢中に対象者がしているお世話がなかった可能性が考えられる。また「していない・いない」が 11 件あるが、これについては① (問 11) でお世話をしている家族が「いる」と回答したものの実際には家族のお世話をしていないか、家庭内で何らかの手伝い等をしているかもしれないが、④ (ア) (問 14) の選択肢にあるようなことはしていないという可能性が考えられる。

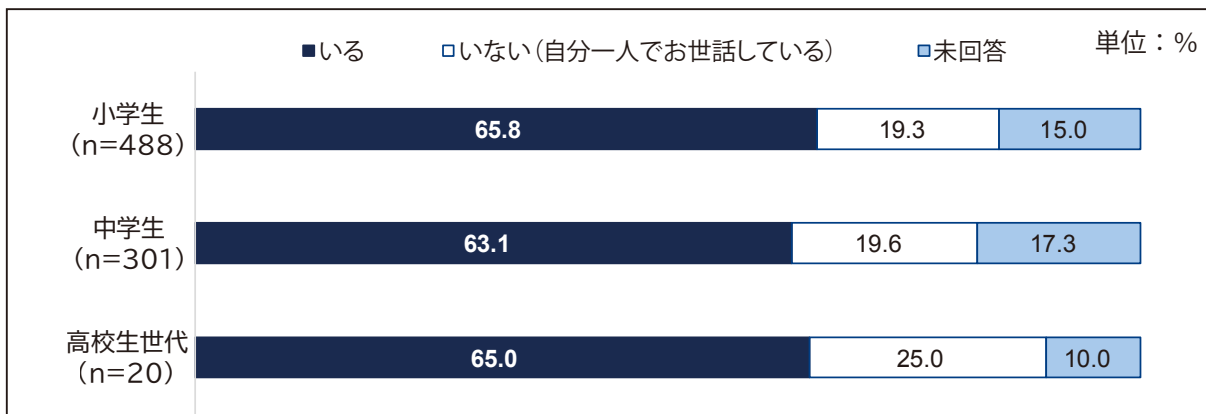
具体的なお世話の内容に関するものでは「遊び相手」(17 件) が最多であった。これには遊び相手をするほか、一緒に遊ぶことも含まれている。次いで「家事」(8 件)、「幼いきょうだいの世話」(4 件) があった。家事や幼いきょうだいの世話は④ (ア) (問 14) の選択肢にあるが、この「その他」を選択したうえでの回答では、その具体的な内容についての記述がなされていた。他に具体的なお世話の内容についての回答は「付き添い、見守り」(4 件)、「勉強を教える」(2 件)、「育児」(1 件)、「(幼いきょうだい以外の) 介助」(1 件) があった。また「ペットの世話」(3 件) があった。

カテゴリ名	回答件数
ない (「ない」「特にない」「なし」「当てはまらない」等)	25
遊び相手 (「一緒に遊んであげる」等)	17
していない (「お世話していない」「しない」「いない」等)	11
家事 (「風呂の掃除」「洗濯物たたみ」等)	8
幼いきょうだいの世話 (「風呂に入れる」「着替え」等)	4
付き添い、見守り	4
相手に何かをしてあげる (「物を取ってあげる」等)	3
ペットの世話 (「犬」「猫」「カブトムシ」等)	3
勉強 (「勉強」「勉強を教える」等)	2
育児	1
(幼いきょうだい以外の) 介助	1
わからない	1
判別不能	3

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

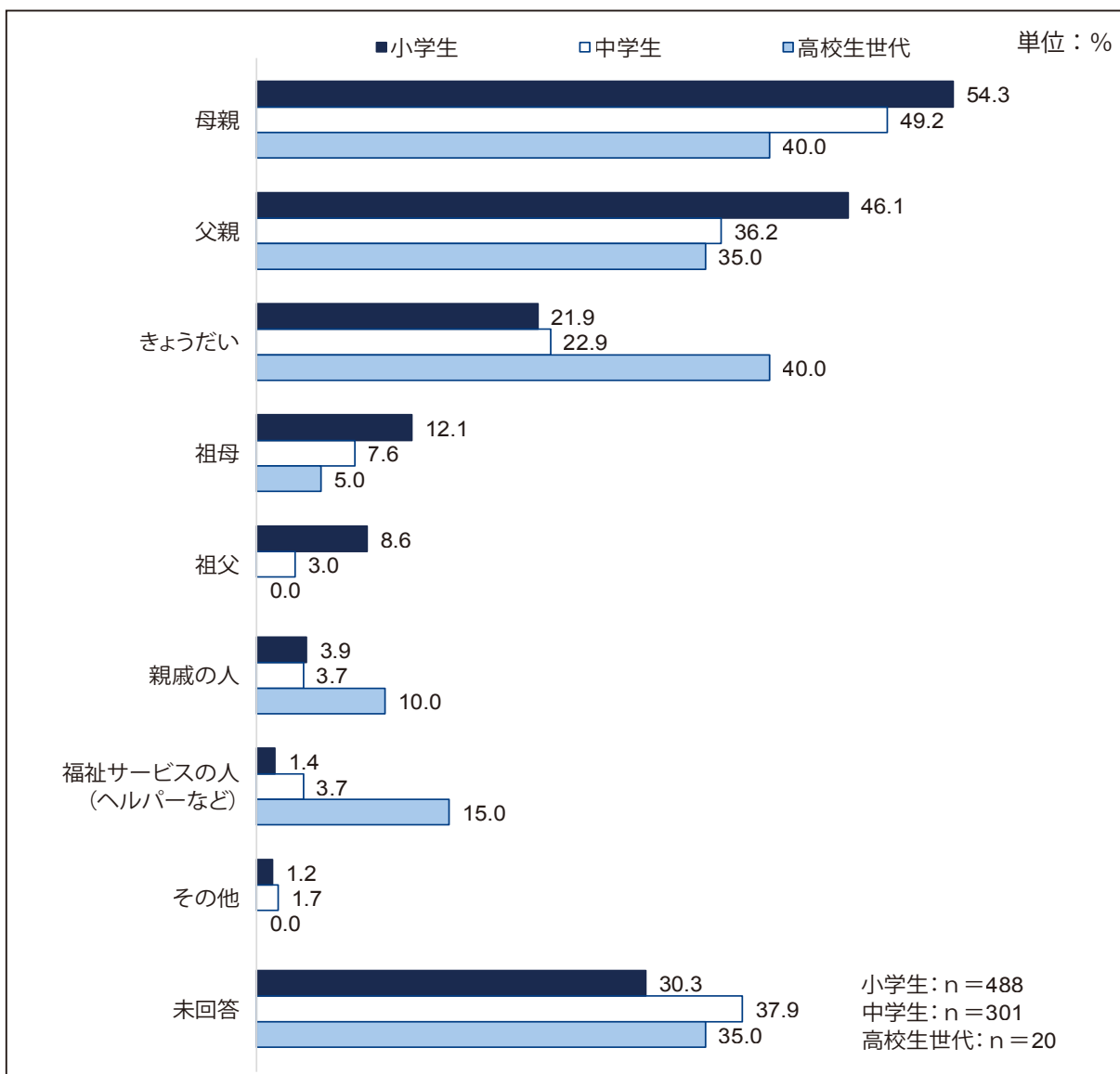
⑤本人以外に家族のお世話をしている人の有無（問 15）

本人以外に家族のお世話をしている人の有無は「いる」が小学生・中学生・高校生世代とも60%を超えているが、高校生世代は「いない」(25.0%)の比率が小中学生より5ポイント以上高くなっている。



⑥ (ア) 本人以外に家族のお世話をしている人の属性（問 16）

本人以外に家族のお世話をしている人の属性は小学生(54.3%)・中学生(49.2%)・高校生世代(40.0%)とも「母親」が最も多い。続いて小中学生では「父親」「きょうだい」の順だが、高校生世代では「きょうだい」「父親」の順となっている。



⑥ (イ) 本人以外に家族のお世話をしている人の属性「その他」詳細 (自由回答) (問 16)

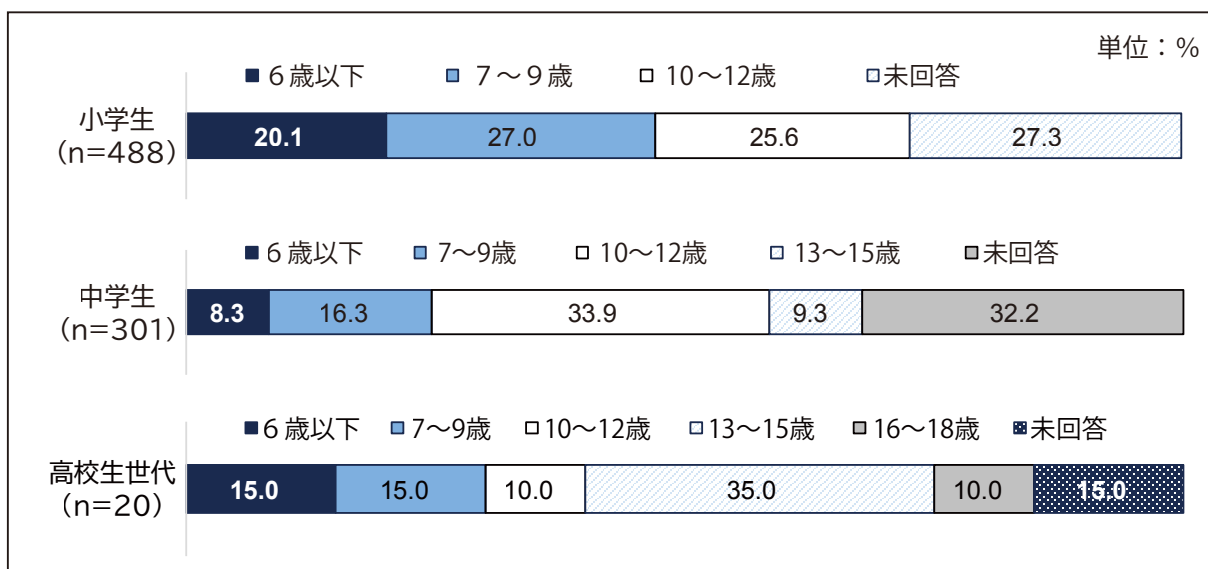
本人以外に家族のお世話をしている人の属性について「その他」を選択した対象者から自由回答 11 件 (小学生 6 件、中学生 5 件、高校生世代 0 件) が得られ、内容を検討しカテゴリ分類を行った。

最も回答が多かったカテゴリは「いない」の 4 件であるが、これについては本人以外に家族のお世話をしている人の有無 (⑤、問 15) において「いる」と回答したものの実際にはいないか、本人以外に家族のお世話をしている人の属性をたずねた設問 (⑥ (ア)、問 15) の選択肢中に該当する属性がなかった可能性が考えられる。

次に回答が多かったカテゴリとしては「犬」の 3 件、「特定の人物」の 3 件 (名前、立場などを挙げたもの) があつた。

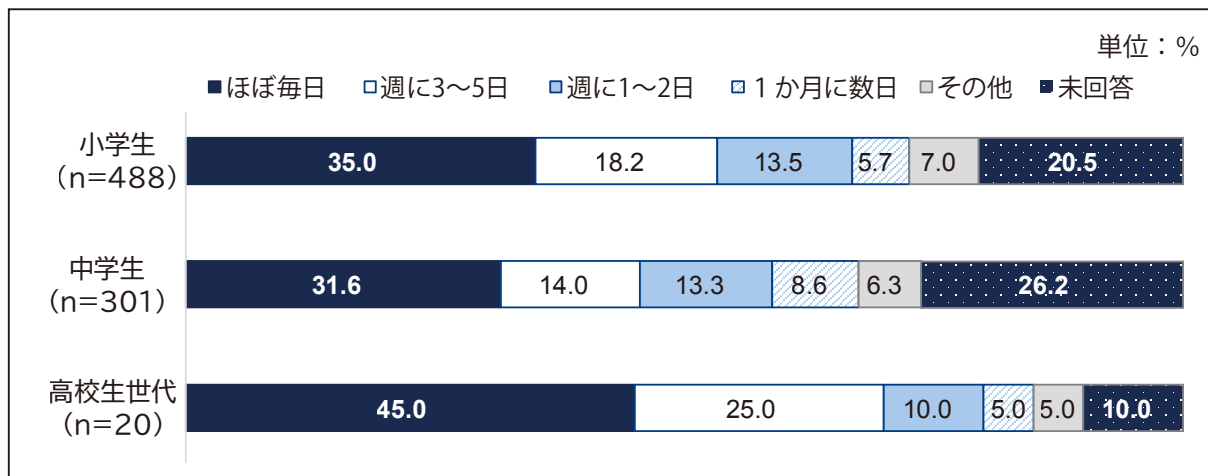
⑦お世話をはじめた年齢 (問 17)

お世話をはじめた年齢についての回答は、小学生では「7～9 歳」が最も多く、次に「10～12 歳」となっている。中学生では「10～12 歳」が最も多く、次に「7～9 歳」となっている。高校生世代では「13～15 歳」が最も多く、次に「7～9 歳」となっている。



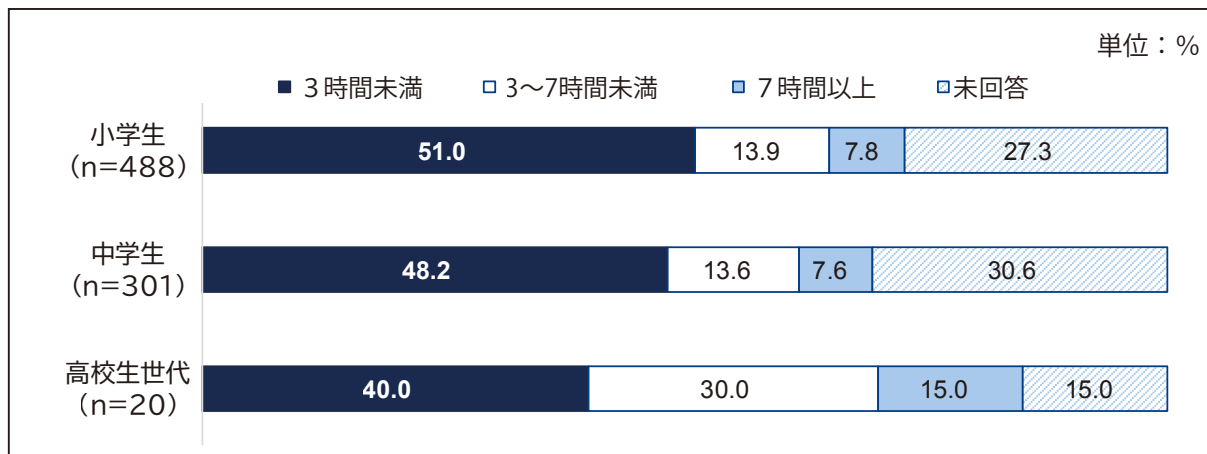
⑧お世話をしている頻度 (問 18)

お世話をしている頻度は、小学生 (35.0%)・中学生 (31.6%)・高校生世代 (45.0%) すべてで「ほぼ毎日」が最も多く、続いて「週に 3～5 日」「週に 1～2 日」の順に多い。ただし高校生世代では「週に 3～5 日」が小中学生と比べ 6～11 ポイント高い。



⑨ (ア) 一日あたりのお世話に費やす時間 (平日) (問 19)

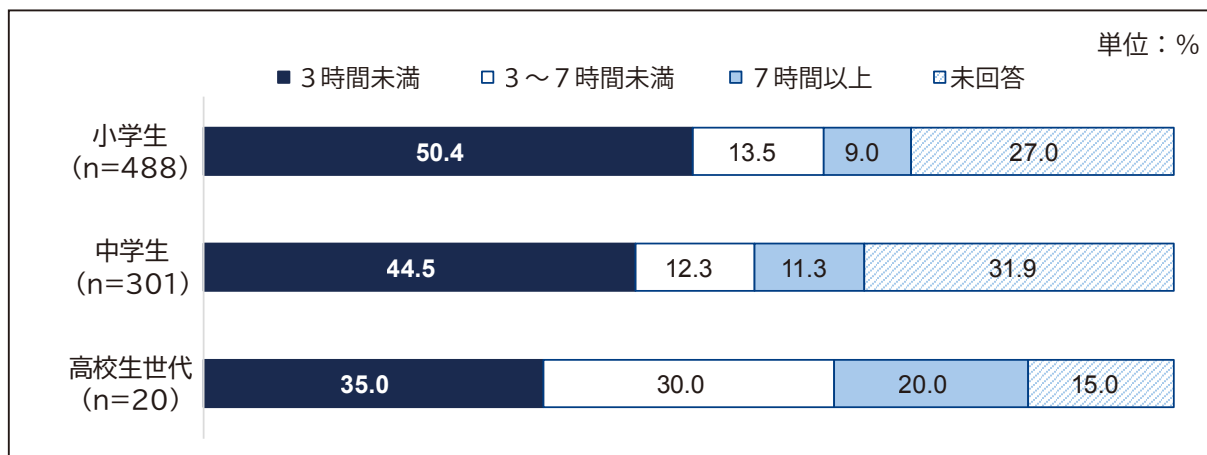
平日一日あたりのお世話に費やす時間は、小学生 (51.0%)・中学生 (48.2%)・高校生世代 (40.0%) すべてで「3 時間未満」が最も多く、次に「3～7 時間未満」となっている。高校生世代では「3～7 時間未満」が 30.0%と、小中学生と比べ 16 ポイント以上高い。また「7 時間以上」は小中学生では 8%弱だが、高校生世代では 15.0% と 7 ポイント以上高い。



⑨ (イ) 一日あたりのお世話に費やす時間 (平日以外の日) (問 20)

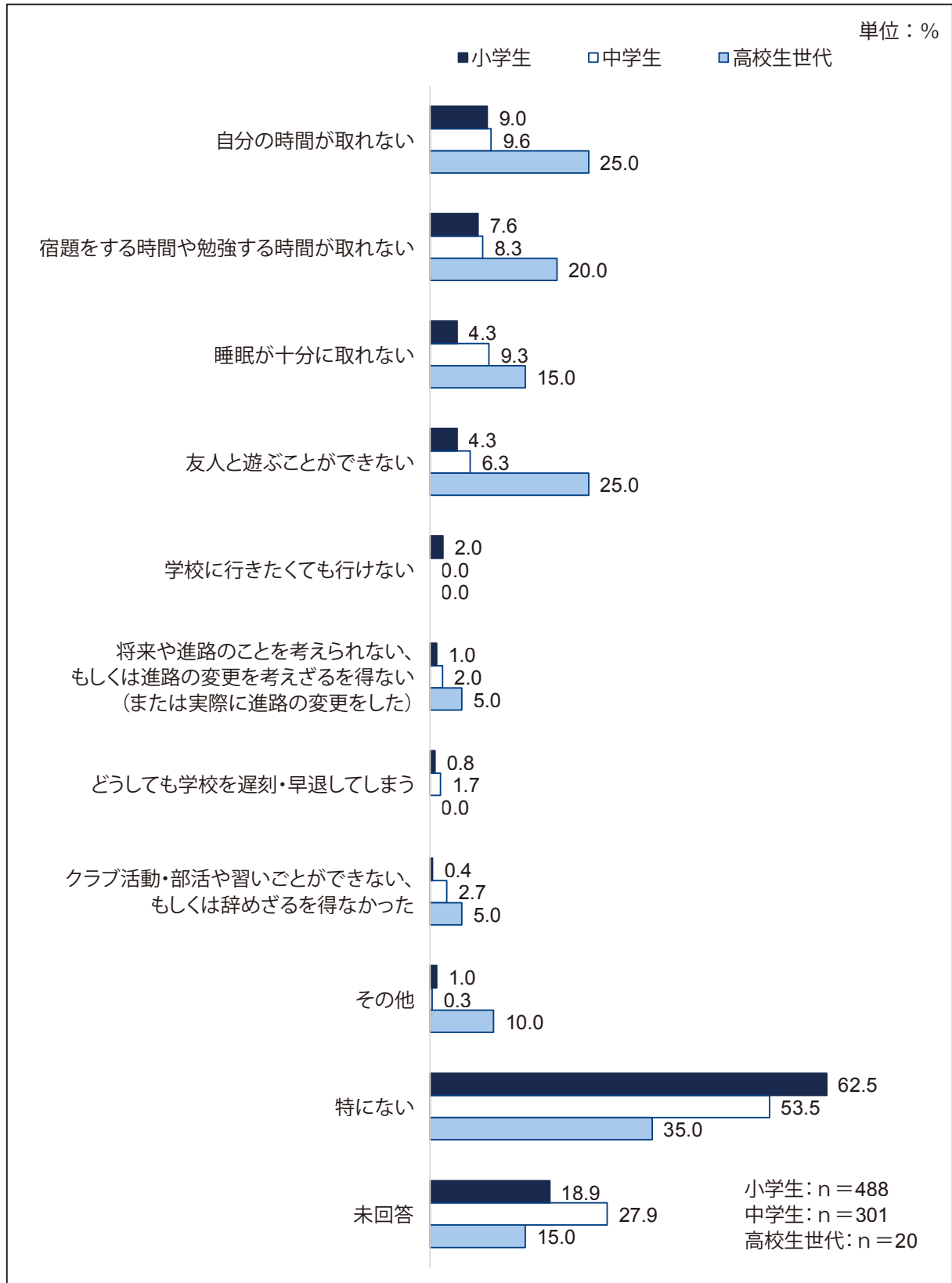
平日以外の日で一日あたりのお世話に費やす時間は、小学生 (50.4%)・中学生 (44.5%)・高校生世代 (35.0%) すべてで「3 時間未満」が最も多く、次に「3～7 時間未満」となっている。高校生世代では「3～7 時間未満」が 30.0%と、小中学生と比べ 16 ポイント以上高い。

また平日と比較して「7 時間以上」の割合が小学生・中学生・高校生世代すべてで増加している。



⑩ (ア) お世話をしているためにできていないこと (問 21)

お世話をしているためにできていないことは、小学生・中学生・高校生世代とも「特にない」が最も高い。続いて小学生では「自分の時間が取れない」(9.0%)、「宿題をする時間や勉強する時間が取れない」(7.6%)となっている。中学生では「自分の時間が取れない」(9.6%)、「睡眠が十分に取れない」(9.3%)の順となっている。高校生世代では「自分の時間が取れない」(25.0%)と「友人と遊ぶことができない」(25.0%)が同率となっている。



⑩ (イ) お世話をしているためにできていないこと「その他」詳細 (自由回答) (問 21)

お世話をしているためにできていないことで「その他」を選択した対象者から 8 件 (小学生 5 件、中学生 1 件、高校生世代 2 件) の自由回答があり、その内容を検討して以下の通りカテゴリ分類を行った。

具体的な制約を挙げたものとしては「友人など人間関係上の制約」の 2 件、「学力、進路に関する制約」の 1 件があった。またお世話と直接的な関係があるかは判別できないものの、つらく感じていることについては「その他」(2 件) に分類した。

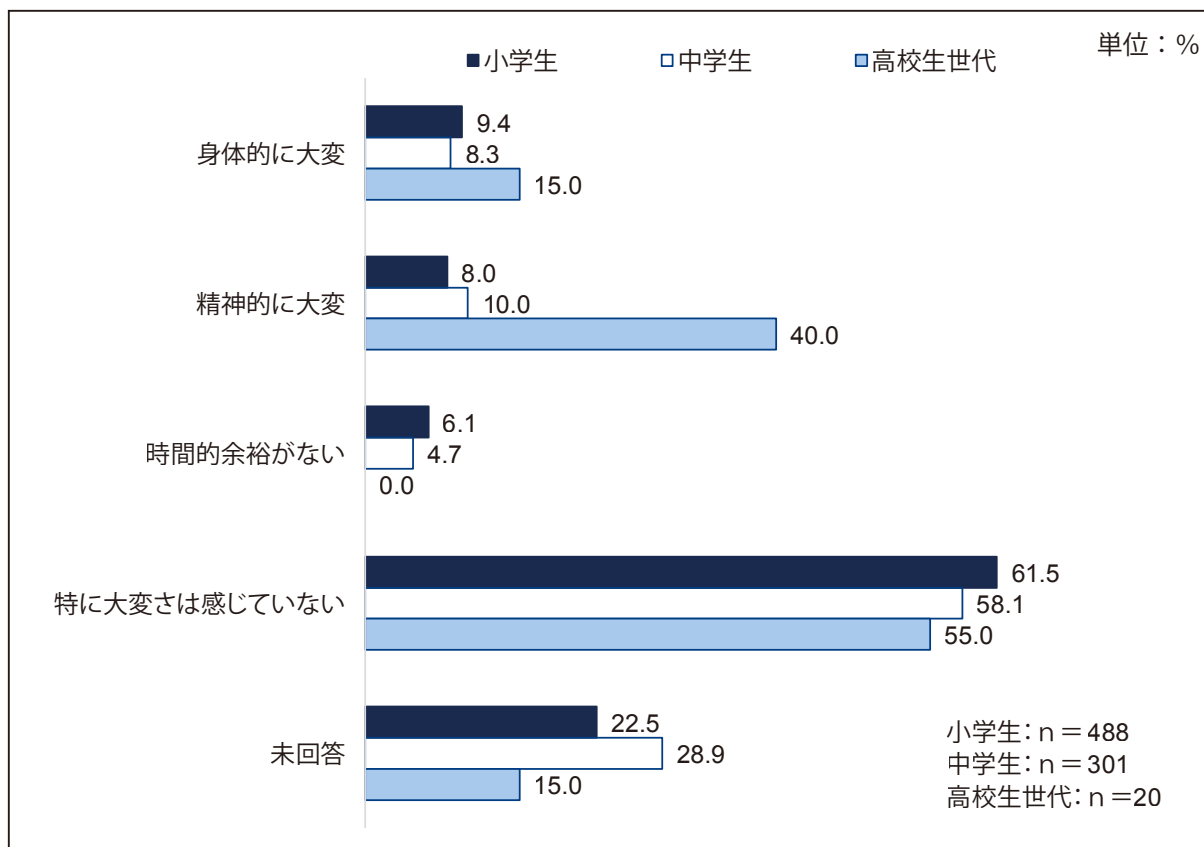
また「いない」と「していない」に分類された回答 (計 3 件) は「家族に世話の必要な人がいない」「お世話をしていない」という内容であった。

カテゴリ名	回答件数
友人など人間関係上の制約 (「友達と遊べない」等)	2
その他 (お世話と直接関係しないかもしれないが辛いと思っていること)	2
いない (「いない」「家族に世話の必要な人はいない」等)	2
学力、進路に関する制約	1
していない	1

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

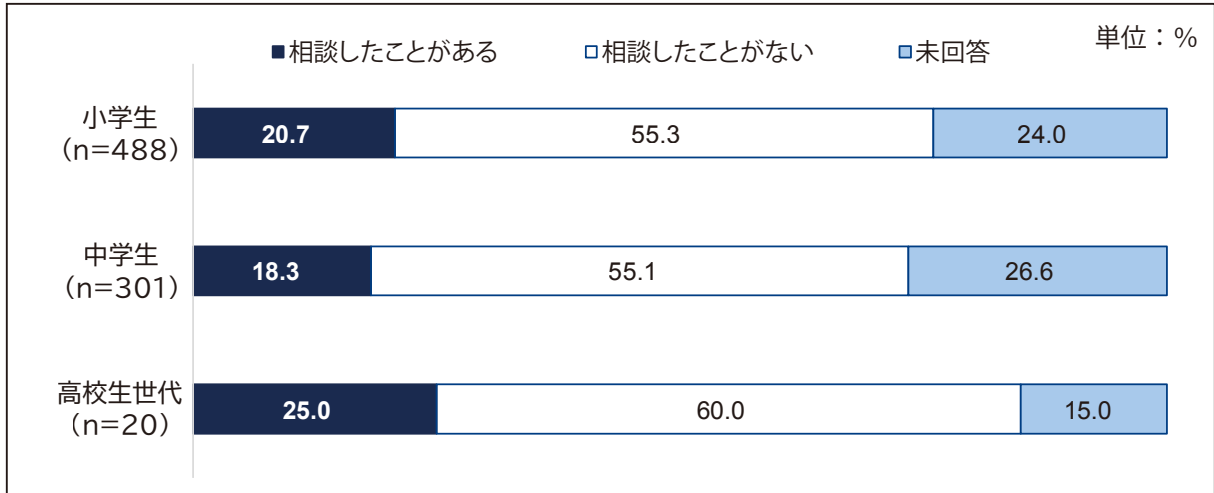
⑪ お世話をすることに感じている大変さ (問 22)

お世話をすることに感じている大変さは、小学生 (61.5%)・中学生 (58.1%)・高校生世代 (55.0%) すべてで「特に大変さは感じていない」が最も高くなっている。次に小学生では「身体的に大変」「精神的に大変」と続くが、中学生・高校生世代では「精神的に大変」「身体的に大変」の順となっている。



⑫お世話を必要としている家族のことや、お世話の悩みを相談した経験の有無（問23）

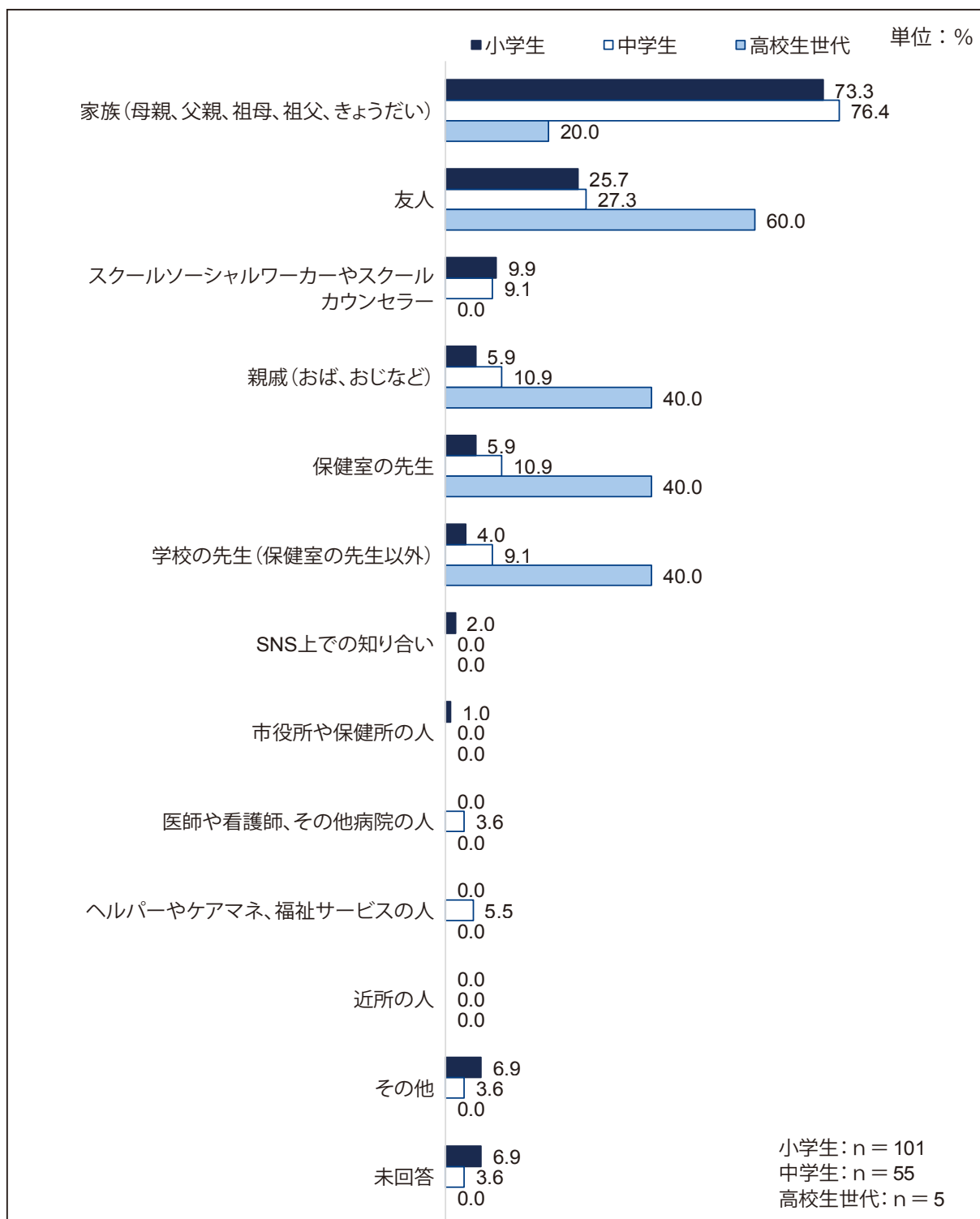
お世話を必要としている家族のことやお世話の悩みを「相談したことがない」が小学生 55.3%・中学生 55.1%・高校生世代 60.0%で、全学年で「相談したことがある」を大きく上回っている。一方「相談したことがある」は小学生 20.7%、中学生 18.3%、高校生世代 25.0%となっており、高校生世代が小中学生を4～5ポイント上回っている。



⑬ (ア) お世話を必要としている家族のことや、お世話の悩みを相談した相手 (問 24)

お世話を必要としている家族のことや、お世話の悩みを相談した相手は小中学生では「家族(母親、父親、祖母、祖父、きょうだい)」が最も多く、いずれも70%を超えており、次に「友人」である(約30%)。高校生世代では「友人」(60.0%)が最も多く、続いて「親戚(おば、おじなど)」「保健室の先生」「学校の先生」(いずれも約40%)の順となっている。また小中学生では「スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラー」を選択した回答者が一定数(約9~10%)いる。

一方で「SNS上の知り合い」は小学生で2%台(中学生、高校生世代は0%)、「市役所や保健所の人」は小学生で1%台(中学生、高校生世代は0%)、「医師や看護師、その他病院の人」は中学生で3%台(小学生、高校生世代では0%)、「ヘルパーやケアマネ、福祉サービスの人」は中学生で5%台(小学生、高校生世代では0%)、「近所の人」はいずれの世代でも0%となっている。



⑬ (イ) お世話を必要としている家族のことや、お世話の悩みを相談した相手「その他」詳細
(自由回答) (問 24)

お世話を必要としている家族のことや、お世話の悩みを相談した相手で「その他」を選択した対象者から 9 件 (小学生 7 件、中学生 2 件、高校生世代 0 件) の自由回答が得られ、その内容を検討し、以下の通りカテゴリ分類を行った。

カテゴリ「ない」(3 件) には「誰とも」といった記述が含まれており、この回答の意味合いとしては、⑫ (問 23) では相談した経験が「ある」と回答したものの実際には具体的な相談相手はいないか、誰にも相談していないという可能性が考えられる。次にカテゴリ「特定の人物」(2 件) では固有名詞や具体的な職位を挙げた回答が含まれているが、その中にはお世話についての相談ではない内容も含まれていた。

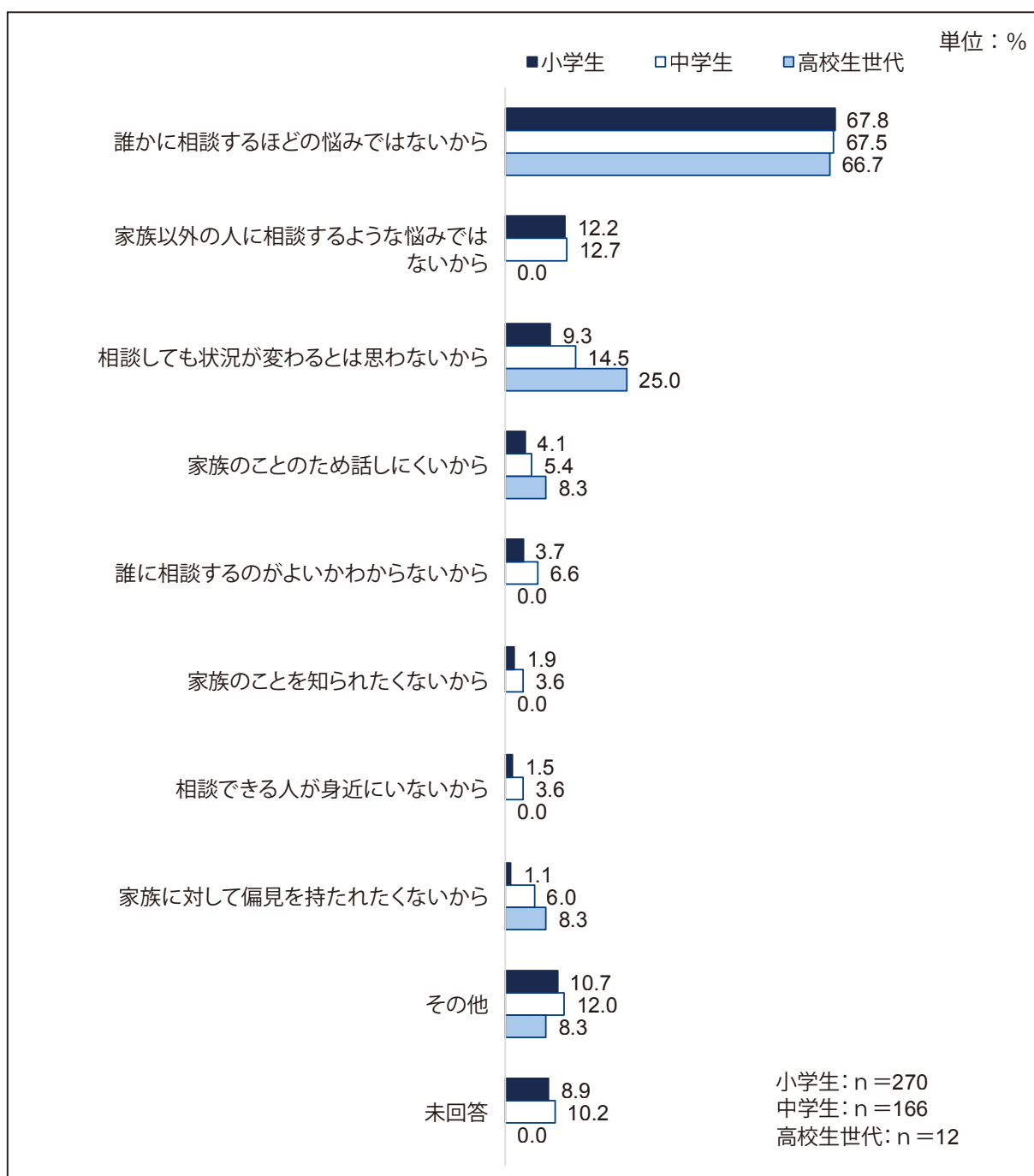
カテゴリ名	回答件数
ない(「ない」「なし」等)	3
特定の人物(「校長先生」等)	2
わからない	2
判別不能	2

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

⑭ (ア) 相談していない理由 (問 25)

⑫ (問 23) にてお世話の悩みやお世話を要する家族のことを「相談した経験がない」と回答した対象者にその理由をたずねた結果、小学生・中学生・高校生世代すべてで「誰かに相談するほどの悩みではないから」が最も多く、いずれも 60% を超えている。次点以降では学年により違いがみられ(「その他」を除き)、小学生では「家族以外の人に相談するような悩みではないから」(12.2%)、「相談しても状況が変わるとは思わないから」(9.3%) の順に多いが、中学生では順位が入れ替わり「相談しても状況が変わるとは思わないから」(14.5%)、「家族以外の人に相談するような悩みではないから」(12.7%) の順となる。また高校生世代では二番目に「相談しても状況が変わるとは思わないから」(25.0%) が多く、続いて「家族のここのため話しにくいから」と「家族に対して偏見を持たれたくないから」が 8.3% で同率となっている。

また小中学生ではそれぞれ「誰に相談するのがよいかわからないから」「家族のことを知られたくないから」「相談できる人が身近にいないから」が一定数選択されている。



⑭ (イ) 相談していない理由「その他」詳細 (自由回答) (問 25)

お世話の悩みやお世話を要する家族のことを相談していない理由として「その他」を選択した対象者から 50 件 (小学生 29 件、中学生 20 件、高校生世代 1 件) の自由回答が得られ、その内容を検討し、以下の通りカテゴリ分類を行った。

最も回答が多いカテゴリとしては「悩んでいないから」が 24 件、また類似するカテゴリでは「相談する必要がないから」の 8 件、「相談することではないから」の 1 件があった。次に回答が多かったのは「お世話が楽しいから」の 4 件であった。また「ない」(4 件)については、相談していない理由をたずねた⑭ (ア) (問 25) 内の選択肢中に該当するものがない、または特に理由がないが相談していないという可能性が考えられる。また数としては少ないが「相談できない理由がある」は 2 件あり、相談したら怒られる可能性がある、等の内容であった。

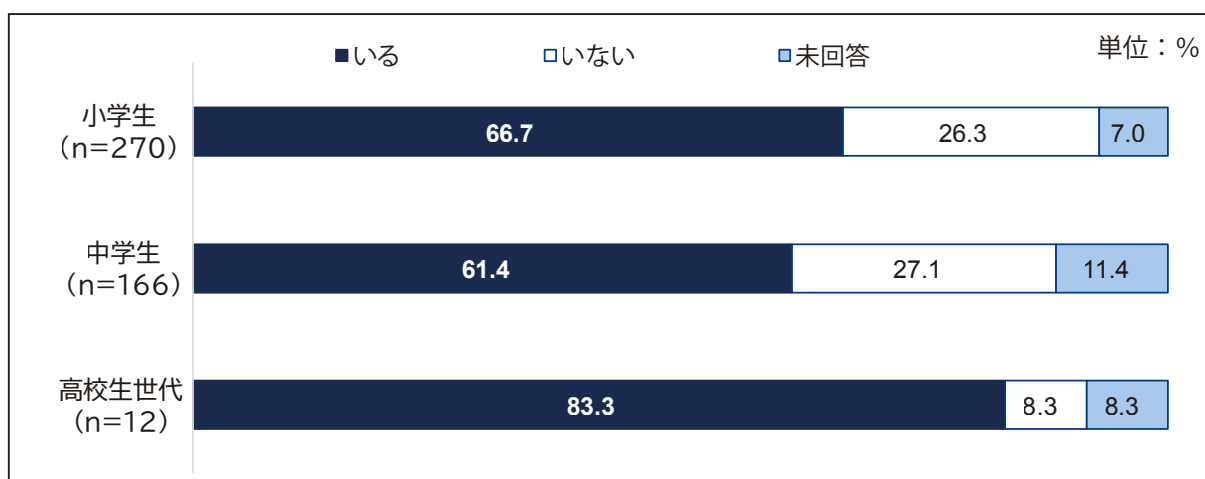
なお「お世話をしていないから」に分類された回答が 3 件あった。

カテゴリ名	回答件数
悩んでいないから (「悩みではない」「悩みがない」「相談することがない」等)	24
相談する必要がないから (「困っていない」「そんなことじゃない」「家族は元気だから」等)	8
ない (「ない」「特にない」等)	4
お世話が楽しいから	4
お世話をしていないから	3
相談できない理由があるから (「怒られるかもしれないから」等)	2
わからない (「よくわからない」等)	2
相談することではないから	1
面倒くさいから	1
その他 (お世話の対象のことを書いている)	1

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

⑮ 身近でお世話の悩みを聞いてくれる人の有無 (問 26)

⑫ (問 23) にてお世話の悩みやお世話を要する家族について「相談した経験がない」と回答した対象者に、お世話の悩みを身近で聞いてくれる人はいるかたずねたところ、小学生・中学生・高校生世代すべてで「いる」が「いない」を大きく上回った。ただし小中学生では高校生世代と比べ 20 ポイント近く「いない」が多い。

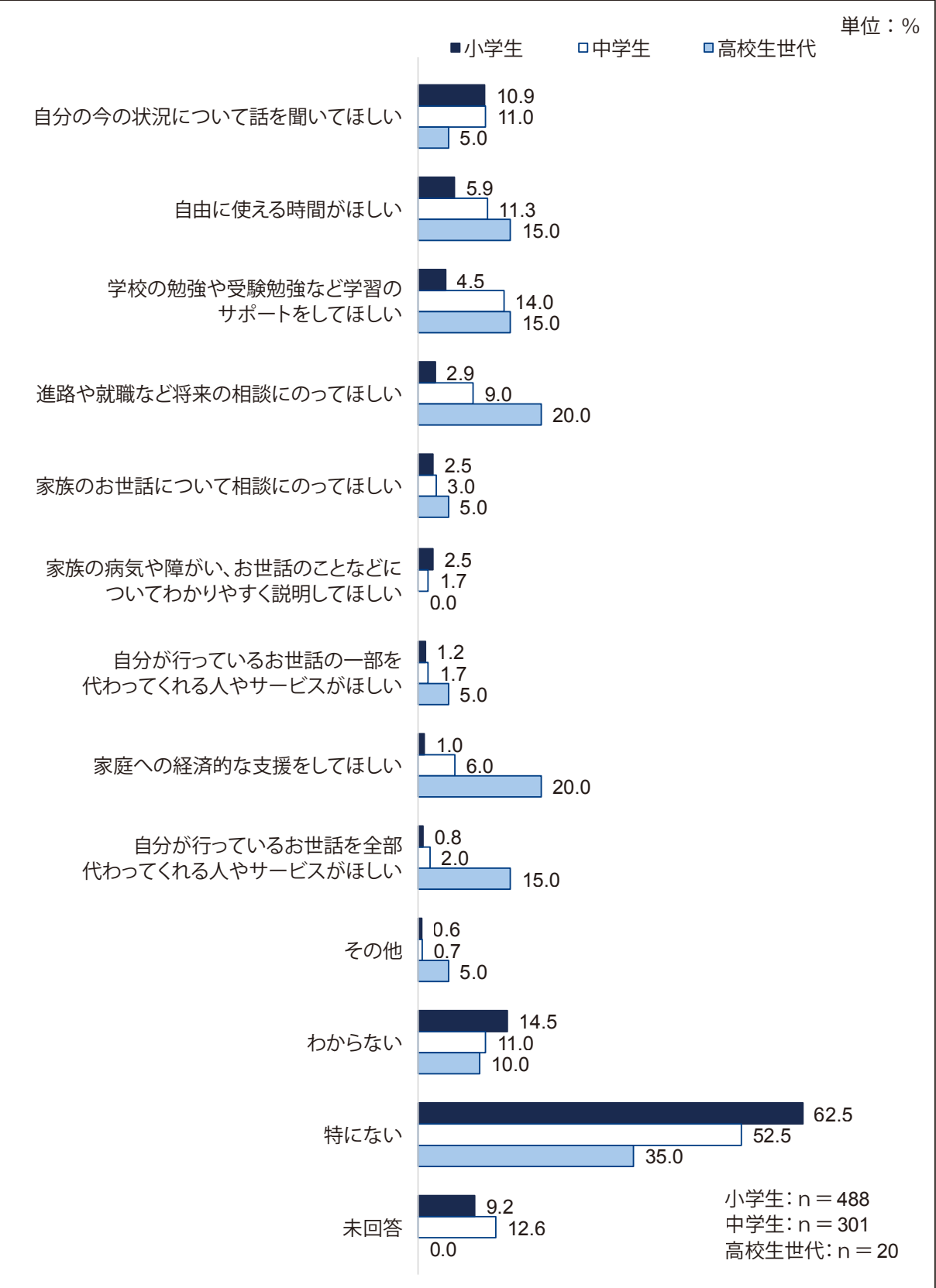


⑩ (ア) 学校やまわりの大人に助けてほしいことや必要としている支援 (問 27)

学校やまわりの大人に助けてほしいことや必要としている支援についてたずねたところ、小学生・中学生・高校生世代すべてで「特にない」が最多であるが、小学生(62.5%)、中学生(52.5%)と比べ高校生世代は35.0%と低い割合となっている。また「わからない」については小学生(14.5%)、中学生(11.0%)、高校生世代(10.0%)となっており、学年が下であるほど比率が高くなっている。

一方、具体的に助けてほしいことや必要としている支援内容を示した選択肢の回答状況からは、学年に応じ必要としている支援のニーズの違いが推測される。小学生は「自分の今の状況について話を聞いてほしい」(10.9%)、「自由に使える時間がほしい」(5.9%)、「学校の勉強や受験勉強など学習のサポートをしてほしい」(4.5%)の順に多いが、中学生は「学校の勉強や受験勉強など学習のサポートをしてほしい」(14.0%)、「自由に使える時間がほしい」(11.3%)、「自分の今の状況について話を聞いてほしい」(11.0%)の順となっている。また高校生世代では「進路や就職など将来の相談にのってほしい」「家庭への経済的な支援をしてほしい」が同率(20.0%)、次に「自由に使える時間がほしい」「学校の勉強や受験勉強など学習のサポートをしてほしい」「自分が行っているお世話を全部代わってくれる人やサービスがほしい」が同率(15.0%)となっている。

また具体的に助けてほしいことや必要としている支援について、高校生世代では「自分の今の状況について話を聞いてほしい」「家族の病気や障がい、お世話のことなどについてわかりやすく説明してほしい」の2項目を除いた全選択肢(8項目)において小学生・中学生よりも割合が高くなっている。



⑩ (イ) 学校やまわりの大人に助けてほしいことや必要としている支援「その他」詳細
(自由回答) (問 27)

学校やまわりの大人に助けてほしいことや必要としている支援について「その他」を選択した対象者から6件(小学生3件、中学生2件、高校生1件)の自由回答が得られ、その内容を検討し、以下の通りカテゴリ分類を行った。

具体的な内容としては「友人関係について」が2件、「お金がほしい」が2件であった。「ない」も2件あったが、これについては⑩(ア)(問27)の選択肢中に選択可能なものがなかったか、または選択肢にある「特にない」の代わりとして記入している可能性が考えられる。

カテゴリ名	回答件数
友人関係について	2
お金がほしい	2
ない	2

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

⑩ (ウ) 学校やまわりの大人に助けてほしいことや必要としている支援「代わってほしいお世話」の内容(自由回答)(問 27)

学校やまわりの大人に助けてほしいことや必要としている支援をたずねた⑩(ア)(問27)において「自分がしているお世話の一部を代わってほしい」(自由回答欄付きの選択肢)を選択した対象者から、92件の自由回答が得られ、その内容を検討し、以下の通りカテゴリ分類を行った。最も回答が多かったカテゴリは「ない」の27件、類似したカテゴリとして「いない」の2件があった。「ない」については⑩(ア)(問27)の選択肢中に選択可能なものがなかったか、または選択肢にある「特にない」の代わりとして記入している可能性が考えられる。また「世話をしていない」(4件)、「いない」(1件)もあった。この他「わからない」の6件を除いては具体的なお世話の内容や、特定の状況について記した回答が見られた。

具体的なお世話の内容で最も回答が多かったカテゴリは「家事」の15件であり、掃除や洗濯、料理のほか、複数の作業を組み合わせた家事について書かれている回答もあった。続いて「年下のきょうだい、乳児の世話」が8件、「遊び」「付き添い・見守り」「入浴・着替え」等の内容が見られた。

また具体的なお世話の内容ではなく、ある“特定の状況”を示した回答が見られた。回答の多かった順として「親が不在、忙しい時」(5件)、「大変な時、嫌なことがあった時」(5件)、「その他特定の状況」(4件)であった。また、具体的な内容や状況は示されていないが、カテゴリ「その他」に分類された回答の中には「やれるなら全部やってほしい」「サービスがほしい」等が見られた。

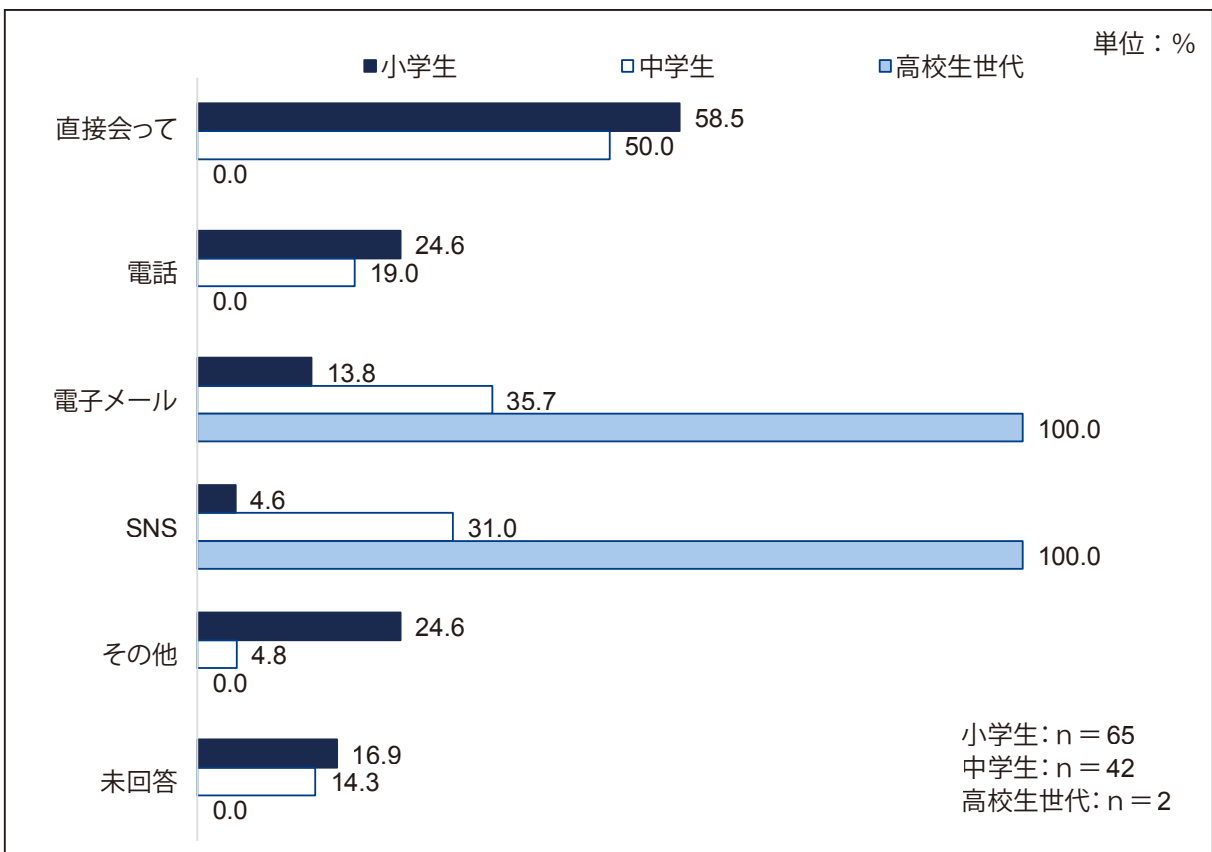
カテゴリ名	回答件数
ない(「ありません」「特にない」「なし」等)	27
家事(「家事」「そうじ」「洗濯」「お弁当を作る」等)	15
年下のきょうだい、乳児の世話	8
わからない	6
親が不在、忙しい時	5
大変な時、嫌なことがあった時	5
その他特定の状況(「宿題をしたい時」「具合が悪い時」等)	4
世話をしていない(「していない」「世話をしてない」等)	4
その他(「サービスがほしい」「やれるなら全部やってほしい」等)	4

カテゴリ名	回答件数
遊び（「一緒に遊んであげる」「遊んでくれる人」等）	3
付き添い、見守り（「つきそい」「一緒に散歩」「一緒に遊び」等）	3
入浴、着替え	2
マッサージ（「肩もみ」等）	2
その他特定のお世話の内容（「送り迎え」等）	2
いない	2
いない	1
その他（自分がしている世話の内容）	2
お世話のこと以外（「塾の大変さ」）	1
判別不能	4

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

⑰ (ア) 話や相談をしたい方法（問 28）

⑰ (ア) (問 27) で「自分の今の状況について話を聞いてほしい」「家族のお世話について相談にのってほしい」を選択した回答者にのみ、どんな方法で話や相談をしたいかをたずねた。その結果、小中学生では具体的な方法としては「直接会って」が小学生 (58.5%)・中学生 (50.0%) で最多であった。続いて小学生では「電話」(24.6%)、「電子メール」(13.8%)、「SNS」(4.6%) の順だが、中学生では「電子メール」(35.7%)、「SNS」(31.0%)、「電話」(19.0%) の順となっている。一方、高校生世代では「電子メール」と「SNS」のみが選択されている（ただしこの設問では高校生世代の回答者が2ケースのみであるため、データの利用には注意を要する）。



⑰ (イ) 話や相談をしたい方法「その他」詳細 (自由回答) (問28)

⑰ (ア) (問28) で話や相談をしたい方法として「その他」を選択した対象者からは18件 (小学生16件、中学生2件、高校生世代0件) の自由回答が得られ、その内容を検討し、以下の通りカテゴリ分類を行った。

最も多く回答があったのはカテゴリ「ない」の7件であった。また類似したカテゴリとして「相談しなくてよい」が3件あった。これらの回答については、⑰ (ア) (問27) では「自分の今の状況について話を聞いてほしい」「家族のお世話について相談にのってほしい」を選択したものの、⑰ (ア) (問28) の選択肢中にその方法がなかったか、またはやはり相談はしなくてよいと考えた等の可能性が考えられる。

一方、具体的な相談先や手段についての回答も見られた。カテゴリ「具体的な属性」の2件では友達や学校の先生、また具体的な手段としては「直接話す」「SNS (LINE)」「アンケート」が各1件ずつ挙げられていた。

カテゴリ名	回答件数
ない (「ない」「特にない」「なし」等)	7
相談しなくてよい (「何もしなくてよい」「大丈夫です」等)	3
わからない	3
具体的な属性 (「友達」「学校の先生」等)	2
直接話す (「二人きりで話す」)	1
SNS (LINE)	1
アンケート	1

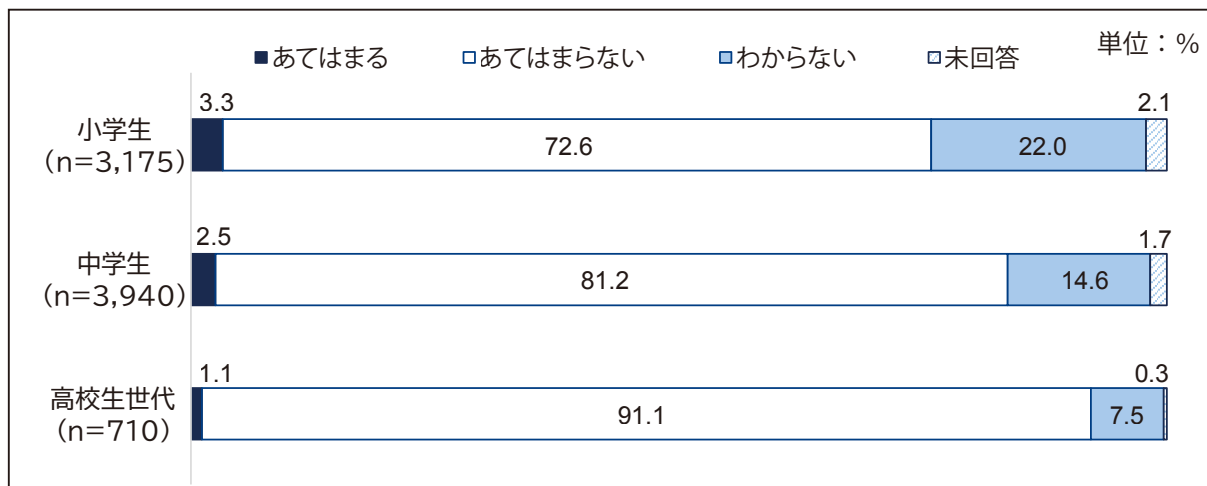
※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

(4) ヤングケアラーについて

①ヤングケアラーの自己認識 (問 29)

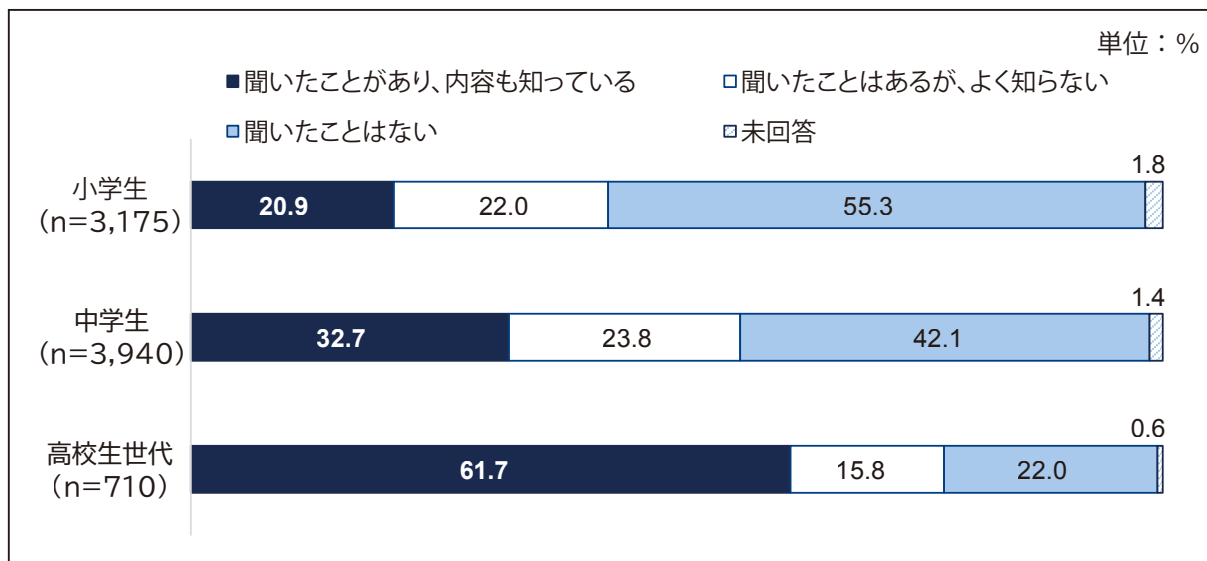
アンケートフォーム上でヤングケアラーについての説明文とイラストを提示したうえで、自分自身がヤングケアラーにあてはまるかどうかをたずねたところ、「あてはまらない」が小学生 (72.6%)・中学生 (81.2%)・高校生世代 (91.1%) すべてで最多であるが、その比率は学年が上であるほど高くなっている。また「あてはまらない」の次に回答された比率が高いのは「わからない」であるが、これは小学生 (22.0%)・中学生 (14.6%)・高校生世代 (7.5%) と学年が上であるほど低くなっている。

また自分自身がヤングケアラーに「あてはまる」と回答したのは小学生 (3.3%)・中学 (2.5%)・高校生世代 (1.1%) と学年が上であるほど比率が低くなっている。



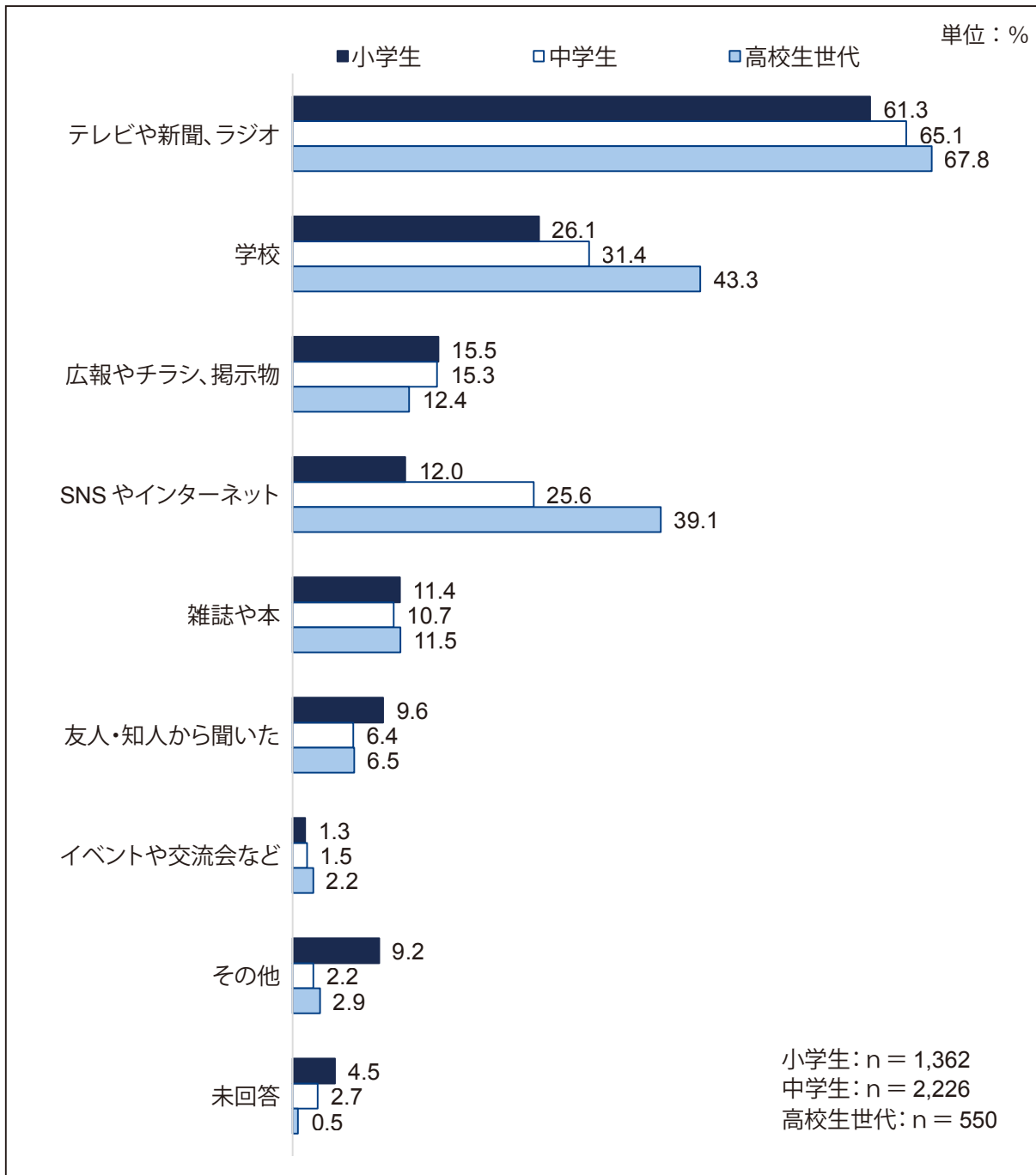
②ヤングケアラーという言葉と内容に対する認知状況 (問 30)

ヤングケアラーという言葉と内容に対する認知状況をたずねたところ、「聞いたことはない」が小学生 (55.3%)・中学生 (42.1%) では最多となっているが、高校生世代では「聞いたことがあり、内容も知っている」が最多 (61.7%) となっている。また小学生では続いて「聞いたことはあるが、よく知らない」(22.0%) 「聞いたことがあり、内容も知っている」(20.9%) の順となっているが、中学生では逆の順番となっている。学年が上であるほどヤングケアラーという言葉と内容に対し認知している児童・生徒の割合が高いことが考えられる。



③ (ア) ヤングケアラーという言葉を知ったきっかけ (認知経路) (問 31)

ヤングケアラーという言葉を知ったきっかけ (認知経路) では、小学生 (61.3%)・中学生 (65.1%)・高校生世代 (67.8%) すべてで「テレビや新聞、ラジオ」、続いて小学生 (26.1%)・中学生 (31.4%)・高校生世代 (43.3%) すべてで「学校」となっている。小学生では3番目に「広報やチラシ、掲示物」(15.5%) だが、中学生 (25.6%) と高校生世代 (39.1%) では「SNS やインターネット」である。



③ (イ) ヤングケアラーという言葉を知ったきっかけ (認知経路) 「その他」 詳細 (自由回答) (問 31)

ヤングケアラーという言葉を知ったきっかけ (認知経路) について「その他」を選択した対象者から 190 件 (小学生 125 件、中学生 49 件、高校生世代 16 件) の自由回答が得られ、その内容を検討し、以下の通りカテゴリ分類を行った。

最も分類された回答が多かったカテゴリは「家族」であり、親やきょうだいなどから直接聞いた場合もあれば、親など家族の仕事や、親が知人などと話している中に言葉が出てきたという回答も見られた。また次に多かったのが「わからない」であり、ヤングケアラーという言葉を知ったことはあるがきっかけは覚えていない、なんとなく、といった回答が見られた。また 3 番目に回答が多かったカテゴリとして「塾」があり、塾の授業や教材で勉強したといった回答が見られた。他には認知経路をたずねた③ (問 31) にあった選択肢に当てはまる回答 (「テレビ」「掲示物」「YouTube」「新聞の広告」等) がある一方、カテゴリ「書籍」では選択肢になかった「漫画」という回答が含まれている。

また、児童・生徒自身や親のヤングケアラー経験 (計 5 件) や、親の仕事や活動により福祉関係者とのかかわりがあり、それがきっかけとなっているという回答 (計 3 件) が見られた。

カテゴリ名	回答件数
家族 (「親から聞いた」「きょうだいから聞いた」他家族の仕事や知人がきっかけ)	71
わからない (「覚えていない」「知らない」「忘れた」「なし」等)	45
塾 (「塾の授業」「塾の教材」等)	23
テレビ (「CM」「ドラマ」「ニュース」等)	13
書籍 (本、漫画)	7
教科書、教材 (「社会の教科書」「中学受験の教材」等)	6
本調査の依頼文 (保護者・児童・生徒向け)	6
自分で調べた (「授業の課題として調べた」等)	4
掲示物 (「ポスター」「校内のポスター」等)	4
YouTube	3
福祉関係 (親の仕事・活動)	3
家族・友達が (現在または過去に) ヤングケアラー	3
自身が (現在または過去に) ヤングケアラー	2
文化センター	1
新聞 (広告)	1
学校の先生	1
判別不能	1

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

3. クロス集計結果

本調査では(1)家族のお世話の有無、(2)ヤングケアラーの自己認識を説明変数、健康状態や学校への出席状況(出欠、遅刻や早退)、学校生活等であてはまること等を被説明変数とし、小学生・中学生・高校生世代別にクロス集計を行った。以下、その中から5ポイント以上の差が見られた内容について主に取り上げ記述する。

※表内で5ポイント以上の差が見られた部分に網掛けをした。

(1) 家族のお世話の有無による差

①家族のお世話の有無 × 健康状態

健康状態については、高校生世代のみ「よい」「あまりよくない」において家族のお世話の有無により約15～20ポイントの差が見られる。

単位：%

	家族のお世話	n	よい	まあよい	ふつう	あまりよくない	よくない	未回答
小学生	有	488	57.4	18.2	19.7	3.7	0.8	0.2
	無	2630	56.7	20.7	18.4	3.8	0.3	0.2
中学生	有	301	48.8	21.9	20.9	6.6	1.7	0.0
	無	3598	51.5	24.4	19.2	4.2	0.7	0.1
高校生世代	有	20	35.0	25.0	20.0	20.0	0.0	0.0
	無	689	54.9	23.7	15.1	4.6	1.0	0.7

②家族のお世話の有無 × 学校への通学状況(出欠)

学校への出席状況(出欠)については、中学生では「ほとんど欠席しない」「たまに欠席する」と回答した群でお世話をしている家族の有無により5ポイント以上の差が見られた。また高校生世代では「たまに欠席する」と回答した群で約6ポイント、「よく欠席する」と回答した群で約8ポイントの差が見られた。

単位：%

	家族のお世話	n	ほとんど欠席しない	たまに欠席する	よく欠席する	未回答
小学生	有	488	71.1	19.1	9.4	0.4
	無	2630	72.8	17.3	9.5	0.4
中学生	有	301	70.1	15.3	14.3	0.3
	無	3598	77.3	10.1	12.4	0.2
高校生世代	有	20	80.0	15.0	5.0	0.0
	無	689	77.5	9.1	12.9	0.4

③家族のお世話の有無 × 学校への通学状況（遅刻や早退）

学校への出席状況（遅刻や早退の状況）では、「ほとんどしない」と回答した中学生では家族のお世話の有無により約8ポイント、また「たまにする」では約6ポイントの差が見られた。高校生世代でも「ほとんどしない」で約6ポイント、「たまにする」で約9ポイントの差が見られた。中高生とも「ほとんどしない」ではお世話する家族が「いない」ほうのポイントが高く、「たまにする」ではお世話する家族が「いる」ほうのポイントが高くなっている。

単位：%

	家族のお世話	n	ほとんど しない	たまにする	よくする	未回答
小学生	有	488	81.1	16.4	1.8	0.6
	無	2630	82.6	14.1	2.9	0.4
中学生	有	301	80.7	15.6	2.7	1.0
	無	3598	88.2	9.8	1.7	0.3
高校生 世代	有	20	80.0	20.0	0.0	0.0
	無	689	85.6	10.6	3.2	0.6

④家族のお世話の有無 × 学校生活等であてはまること

学校生活等であてはまることでは、小学生・中学生・高校生世代すべてにおいて、お世話をしている家族ありの群がなしの群を5ポイント以上上回る項目は、「宿題や課題ができていないことが多い」1つであった。また中学生と高校生世代において、同様にお世話をしている家族ありの群が5ポイント以上上回る項目は、「持ちものの忘れものが多い」「提出しなければいけない書類などの提出が遅れることが多い」の2つであった。なお以上の3項目においては、学年が上であるほどお世話をしている家族ありの群となしの群との間のポイント差が大きくなっている。

また高校生世代のみで、お世話をしている家族ありの群がなしの群を5ポイント以上上回った項目は「学校では1人ですぐすことが多い」「友人と遊んだり、おしゃべりしたりする時間が少ない」の2つであった。

そして「特になし」をみると以上の項目とは逆に、中学生と高校生世代において、お世話をしている家族なしの群がありの群を5ポイント以上上回っており、その差は中学生で9.1ポイント、高校生世代では19.9ポイントであった。小学生ではこの差は4.5ポイントであり、学年が上であるほどお世話をしている家族ありの群となしの群との間の差が大きくなっている。

単位：%

	家族のお世話	n	授業中にいねむりすることが多い	宿題や課題ができていないことが多い	持ちものの忘れものが多い	休むことが多い	クラブ活動・部活動や習いごとを提出が遅れることが多い	提出しなければいけない書類などの提出が遅れることが多い	修学旅行などの宿泊行事を欠席する	保健室ですぐすことが多い	学校では1人ですぐすことが多い	友人と遊んだり、おしゃべりしたりする時間が少ない	特になし	未回答
小学生	有	488	7.0	20.7	28.1	1.6	20.3	1.0	1.8	5.5	6.4	58.4	1.4	
	無	2630	3.6	14.1	24.1	1.7	16.0	0.5	0.8	5.7	5.0	62.9	1.7	
中学生	有	301	15.0	25.2	32.2	10.6	30.2	0.7	2.3	6.0	7.0	46.2	2.3	
	無	3598	12.8	17.1	23.5	7.4	21.4	0.5	0.5	6.2	5.7	55.3	2.4	
高校生世代	有	20	25.0	25.0	30.0	5.0	30.0	0.0	0.0	15.0	15.0	30.0	5.0	
	無	689	28.7	15.8	15.4	5.2	14.1	1.7	1.5	10.0	9.1	49.9	1.3	

⑤家族のお世話の有無 × 現在の悩みや困りごと

以下では、まず「その他」や「特になし」を除いた現在の悩みや困りごとについて、お世話をしている家族が有る群となし群との間に5ポイント以上の差がある項目を見ていく。小学生では5ポイント以上の差がある項目は見られない。しかし中学生では、「その他」と「特になし」を除いた10項目中「クラブ活動・部活動のこと」「自分と家族との関係のこと」「自分のために使える時間が少ない」の3項目でお世話をしている家族が有る群がなし群を5ポイント以上上回っている。また高校生世代では、同じ10項目中8項目において、お世話をしている家族が有る群がなし群を5ポイント以上上回っている。

そして「特になし」については、小学生・中学生・高校生世代すべてにおいて以上の項目とは逆に、お世話をしている家族なし群が有る群を5ポイント以上上回っている。また学年が上であるほどそのポイント差は大きくなっている。

単位：%

	家族のお世話	n	友人との関係のこと	学業や成績のこと	進路のこと	クラブ活動・部活動のこと	塾や習いごとのこと	学費(授業料)などをふくむ、家庭の経済的状況のこと	自分と家族との関係のこと	家族内の人間関係のこと	病気や障がいのある家族のこと	自分のために使える時間が少ない	その他	特になし	未回答
小学生	有	488	19.7	13.9	8.4	3.1	9.6	4.7	7.0	5.7	2.9	8.6	3.3	55.3	5.3
	無	2630	17.4	12.1	8.3	3.0	10.6	3.1	5.9	4.1	0.8	4.0	3.2	61.0	4.4
中学生	有	301	17.3	35.9	36.5	19.3	11.6	10.0	12.6	8.0	6.0	11.0	3.7	35.9	4.3
	無	3598	15.9	35.6	32.2	11.2	10.1	5.5	6.6	6.0	1.1	5.6	2.2	43.2	4.0
高校生世代	有	20	30.0	50.0	50.0	10.0	5.0	35.0	15.0	20.0	20.0	25.0	0.0	15.0	5.0
	無	689	16.8	43.1	47.2	11.9	3.3	10.0	7.3	7.0	1.9	5.2	3.6	30.0	2.0

⑥家族のお世話の有無 × 相談相手の有無

相談相手の有無では、小学生では「相談相手や話を聞いてくれる人がある」の項目でお世話している家族ありの群がなしの群よりも5ポイント以上高い。

また「相談相手や話を聞いてくれる人がいない」の項目では、高校生世代のみでお世話している家族ありの群がなしの群よりも5ポイント以上高くなっている。なお「相談相手や話を聞いてくれる人がある」と「相談相手や話を聞いてくれる人がいない」の2つでは、どちらもお世話している家族ありの群がなしの群よりも比率が高くなっている。

一方「相談相手や話を聞いてくれる人はいるが、相談や話が特にないので、話をしない」では逆に、小学生と高校生世代において、お世話している家族なしの群が家族ありの群よりも5ポイント以上高くなっている。

単位：%

	家族のお世話	n	相談相手や話を聞いてくれる人がある	相談相手や話を聞いてくれる人がいない	相談相手や話を聞いてくれる人はいるが、相談や話したくない	相談相手や話を聞いてくれる人はいるが、相談や話が特にないので、話をしない	未回答
小学生	有	488	49.8	4.5	14.1	12.7	18.9
	無	2630	42.2	2.9	15.3	20.1	19.5
中学生	有	301	54.2	4.7	19.6	10.0	11.6
	無	3598	49.5	3.3	19.4	13.9	13.9
高校生世代	有	20	60.0	10.0	20.0	0.0	10.0
	無	689	55.9	3.6	21.0	11.2	8.3

⑦家族のお世話の有無 × 性別

性別では、男性では小中学生でお世話している家族が「いる」が5ポイント以上「いない」を上回っているが、高校生世代では反転し「いない」の比率が高くなっている。一方女性では小学生・中学生・高校生世代すべてで「いない」が「いる」を5ポイント以上上回っており、比率の差はいずれの学年でも6ポイント台であり、学年間での大きな差は見られない。

単位：%

	家族のお世話	n	男性	女性	その他	未回答
小学生	有	488	54.5	45.1	0.2	0.2
	無	2630	47.7	51.5	0.6	0.1
中学生	有	301	54.2	44.2	1.3	0.3
	無	3598	48.2	50.3	1.2	0.3
高校生世代	有	20	40.0	60.0	0.0	0.0
	無	689	43.7	53.8	2.3	0.1

(2) ヤングケアラーの自己認識による差

①ヤングケアラーの自己認識 × 健康状態

以下では、健康状態について、ヤングケアラーの自己認識の違いにより5ポイント以上の差が生じている項目についてとりあげる。

まずヤングケアラーの自己認識があてはまる群とあてはまらない群を比較すると、健康状態が「よい」と「まあよい」について、高校生世代のみ10ポイント以上の差でヤングケアラーにあてはまる群があてはまらない群を下回っている。健康状態が「ふつう」については、中学生のみヤングケアラーにあてはまる群があてはまらない群よりも5ポイント以上下回っている。また高校生世代では中学生よりも群間の差が大きく、健康状態「ふつう」で20ポイント以上、「あまりよくない」で8ポイント以上ある。また健康状態が「あまりよくない」については、中学生・高校生世代でヤングケアラーにあてはまる群があてはまらない群よりも5ポイント以上上回っている。また中学生に比べ高校生世代ではポイント差が広がっている。

そしてヤングケアラーの自己認識があてはまらない群とわからない群を比較すると、健康状態が「よい」では小学生(11.4ポイント差)・中学生(6.9ポイント差)・高校生世代(22.1ポイント差)すべてであてはまらない群がわからない群を上回っている。また逆に健康状態が「ふつう」「あまりよくない」「よくない」では、高校生世代のみでわからない群があてはまらない群を5ポイント以上上回っている。

単位：%

	ヤングケアラー 認識	n	よい	まあよい	ふつう	あまり よくない	よくない	未回答
小学生	あてはまる	104	58.7	16.3	16.3	4.8	2.9	1.0
	あてはまらない	2304	59.3	19.5	17.4	3.4	0.2	0.2
	わからない	700	47.9	24.3	22.1	5.0	0.6	0.1
中学生	あてはまる	98	55.1	21.4	13.3	9.2	1.0	0.0
	あてはまらない	3200	52.1	24.3	18.9	4.1	0.6	0.1
	わからない	575	45.2	24.2	23.5	5.7	1.4	0.0
高校生 世代	あてはまる	8	37.5	12.5	37.5	12.5	0.0	0.0
	あてはまらない	647	56.1	23.8	14.4	4.3	0.6	0.8
	わからない	53	34.0	24.5	24.5	11.3	5.7	0.0

②ヤングケアラーの自己認識 × 現在の悩みや困りごと

現在の悩みや困りごとについては、小学生では「友人との関係」「学業や成績」「塾や習いごと」「自分と家族との関係」「家族内の人間関係」「自分のために使える時間が少ない」の6項目において、ヤングケアラーにあてはまる群があてはまらない群を5ポイント以上上回っている。

中学生では「友人との関係」「進路」「学費(授業料)などをふくむ、家庭の経済的状況」「自分と家族との関係」「家庭内の人間関係」「自分のために使える時間が少ない」の6項目において、ヤングケアラーに「あてはまる」群が「あてはまらない」群を5ポイント以上上回っている。

高校生世代では「友人との関係」「学業や成績」「進路」「学費(授業料)などをふくむ、家庭の経済的状況」「家庭内の人間関係」「病気や障がいのある家族」「自分のために使える時間が少ない」の7項目において、ヤングケアラーにあてはまる群があてはまらない群を5ポイント以上上回っている。

また、「特にない」の回答状況では小学生・中学生・高校生世代すべてでヤングケアラーにあてはまらない群があてはまる群を上回っており、小学生で14.2ポイント、中学生で7.6ポイント、高校生世代で30.1ポイントと特に高校生世代で差が大きい。

単位：%

	ヤングケアラー認識	n	友人との関係のこと	学業や成績のこと	進路のこと	クラブ活動・部活動のこと	塾や習いごとのこと	学費(授業料)などをふくむ、家庭の経済的状況のこと	自分と家族との関係のこと	家族内の人間関係のこと	病気や障がいのある家族のこと	自分のために使える時間が少ない	その他	特にない	未回答
小学生	あてはまる	104	27.9	19.2	9.6	4.8	14.4	6.7	12.5	13.5	4.8	10.6	4.8	48.1	4.8
	あてはまらない	2304	16.8	11.3	7.8	3.0	9.4	2.8	5.0	3.3	0.6	3.9	2.8	62.3	4.2
	わからない	700	20.3	15.1	9.9	3.7	13.6	4.7	8.7	7.1	2.3	7.0	4.1	55.1	4.9
中学生	あてはまる	98	23.5	34.7	41.8	16.3	15.3	12.2	12.2	14.3	5.1	15.3	2.0	35.7	5.1
	あてはまらない	3200	15.6	35.4	32.1	11.4	10.4	5.5	6.3	5.5	1.1	5.4	2.1	43.3	3.7
	わからない	575	17.6	37.6	34.1	14.1	8.0	7.0	10.0	8.7	3.0	7.5	3.8	40.3	5.0
高校生世代	あてはまる	8	37.5	50.0	62.5	0.0	0.0	50.0	0.0	37.5	25.0	50.0	0.0	0.0	0.0
	あてはまらない	647	16.8	43.9	47.0	12.5	3.6	10.4	7.3	6.6	2.0	4.9	3.7	30.1	1.7
	わからない	53	17.0	34.0	47.2	5.7	1.9	9.4	11.3	13.2	3.8	9.4	1.9	30.2	5.7

③ヤングケアラーの自己認識 × お世話をすることを感じている大変さ

お世話をすることに対して感じている大変さについて、ヤングケアラーの自己認識の違いにより5ポイント以上の差が生じている項目をとりあげる。

まずヤングケアラーにあてはまる群とあてはまらない群間をみると、「身体的に大変」については小学生・中学生・高校生世代すべてでヤングケアラーにあてはまる群があてはまらない群を10～20ポイント上回っている。「精神的に大変」については、中学生・高校生世代でヤングケアラーにあてはまる群があてはまらない群を10～50ポイント上回っている（ただし、本項目の集計については対象となる高校生世代のサンプル数が少ないため、結果の利用には注意が必要である）。また小学生においてもヤングケアラーにあてはまる群があてはまらない群を4.7ポイントとほぼ5ポイント近く上回っている。「時間的余裕がない」については、中学生のみヤングケアラーにあてはまる群があてはまらない群を8ポイント上回っている。また小学生においてもヤングケアラーにあてはまる群があてはまらない群を4.8ポイントとほぼ5ポイント近く上回っている。

次にヤングケアラーなかがわからない群とあてはまらない群の間にも差が見られるものについてとりあげる。「身体的に大変」については小学生のみ約7ポイント、わからない群があてはまらない群を上回っている。「精神的に大変」については小学生と中学生でわからない群があてはまらない群を約5～8ポイント上回っている。

単位：%

	ヤングケアラー 認識	n	身体的に 大変	精神的に 大変	時間的余裕 がない	特に大変さは 感じていない	未回答
小学生	あてはまる	57	15.8	10.5	8.8	66.7	7.0
	あてはまらない	226	5.8	5.8	4.0	62.8	26.5
	わからない	173	12.7	11.0	8.7	67.1	12.1
中学生	あてはまる	49	16.3	16.3	10.2	67.3	8.2
	あてはまらない	134	6.0	6.0	2.2	54.5	35.1
	わからない	99	9.1	14.1	5.1	65.7	22.2
高校生 世代	あてはまる	5	40.0	80.0	0.0	40.0	0.0
	あてはまらない	10	10.0	30.0	0.0	60.0	20.0
	わからない	5	0.0	20.0	0.0	60.0	20.0

④ヤングケアラーの自己認識 × お世話の有無

以下では児童・生徒のお世話をしている家族の有無について、ヤングケアラーの自己認識の違いにより5ポイント以上の差が生じている項目を主に取り上げて検討する。

まず、お世話をしている家族がいると答えた対象者のヤングケアラーの自己認識をみると、小学生・中学生・高校生世代すべてでヤングケアラーに「あてはまる」「わからない」「あてはまらない」の順に比率が高く、あてはまる群があてはまらない群を小中学生で45ポイント、高校生世代で60ポイント以上上回っている。また自身がヤングケアラーなのかわからない群もあてはまらない群を約15ポイント上回っている。

一方、お世話をしている家族がいないと答えた対象者のヤングケアラーの自己認識をみると、小学生・中学生・高校生世代すべてでヤングケアラーに「あてはまらない」「わからない」「あてはまる」の順に比率が高く、あてはまらない群があてはまる群を小中学生で約45ポイント、高校生世代で約61ポイント上回っている。またヤングケアラーにあてはまらない群を自身がヤングケアラーなのかわからない群と比較しても約8～16ポイント上回っている。

そして、小学生・中学生・高校生世代における違いをみると、お世話をしている家族がいる・いないどちらの場合においても、ヤングケアラーにあてはまる群とあてはまらない群間の差は学年が上であるほど大きくなる。逆にヤングケアラーにあてはまらない群と自身がヤングケアラーなのかわからない群との差は学年が上であるほど少なくなる。

単位：%

	ヤングケアラー認識	n	いる	いない	未回答
小学生	あてはまる	104	54.8	44.2	1.0
	あてはまらない	2304	9.8	88.9	1.3
	わからない	700	24.7	72.7	2.6
中学生	あてはまる	98	50.0	50.0	0.0
	あてはまらない	3200	4.2	95.2	0.6
	わからない	575	17.2	81.4	1.4
高校生世代	あてはまる	8	62.5	37.5	0.0
	あてはまらない	647	1.5	98.3	0.2
	わからない	53	9.4	90.6	0.0

4. 自由回答（問 32）

（1）カテゴリ分類について

「ヤングケアラーへの支援に必要だと思うこと、アンケートの感想、意見、市への要望等」について自由意見を求めたところ、全体で3,725件の回答が挙げられた（小学生1,717件、中学生1,785件、高校生世代216件、学年「その他」6件、学年「無回答」1件）。まず、それらの回答内容を検討したうえで8カテゴリに分類した（表1）。さらに表1のカテゴリNo.1「ヤングケアラーへの支援・施策に関すること」に分類された回答をその内容によりさらに8カテゴリに分類した（表2）。

その結果、自由回答全体（表1）では「ヤングケアラーへの支援」（41.0%）が最も多く、次いで「感想・意見・要望」（20.6%）、「アンケートの感想」（10.5%）となった。また「ヤングケアラーへの支援・施策に関すること」（表2）では「認知度・理解度の向上」（23.7%）が最も多く、次いで「相談に関わる内容」（14.5%）、「普及啓発」（13.1%）であった。

表1 自由回答全体の分類

自由回答n = 3,725

No.	カテゴリ名	n	%	内容（キーワード・キーセンテンス）
1	ヤングケアラーへの支援・施策に関すること	1681	41.0	詳細は表2記載
2	感想・意見・要望	845	20.6	学校や府中市に求める感想・意見・要望やアンケートを通じて感じたこと
3	アンケートの感想	429	10.5	アンケート自体の感想
4	お世話をしている子どもの声	219	5.3	お世話をしている家族がいると回答した児童・生徒の意見・要望・求める支援
5	相談・悩み・強い意見	114	2.8	子どもからの話を聞いてほしい・理解してほしい・助けてほしい・悩みなどの声
6	市や学校への設備や制度への要望	65	1.6	府中市の設備、環境、用具、制度などへの感想・意見・要望
7	特にない	695	17.0	特にない・わからない・悩んでいない・ない
8	判別不能	51	1.2	判別不能

要素n = 4,099*

※自由回答（3,725件）の中には複数カテゴリの要素が含まれるものがあるため、全カテゴリに分類された要素数の合計（要素n）は自由回答件数nよりも多くなっている。

表2 ヤングケアラーへの支援・施策に関することの種類

No.	カテゴリ名	n	%	内容(キーワード・キーセンテンス)
ア	認知度・理解度の向上	398	23.7	ヤングケアラーの概念を知ってもらうこと
イ	相談にかかわる内容	244	14.5	子どもたちの意見を伝えられる話しやすい環境づくり、相談しやすい体制や制度の充実、相談をすること
ウ	普及啓発	221	13.1	ヤングケアラーの普及啓発や認知度の拡大に向けて必要なことや方法
エ	人や制度の支援	208	12.4	学校・施設・市からのサポートや人の支援・支援制度・ボランティアの充実
オ	お金の支援	179	10.6	支援金・募金・補助金など
カ	施設・物品などの支援	136	8.1	施設の設定、施設の提供や補助、物品の支援
キ	気づき・声掛け	104	6.2	周囲の理解や寄り添い、気遣い、配慮、声掛けや見守り、子どもの意思の尊重
ク	その他	191	11.4	その他の支援

要素n= 1,681

(2) 主な回答例

児童・生徒からの自由回答部分(問32)に記入された意見等について、原則原文を掲載している(ただし回答内の固有名詞や個人的な事情等は削除している。また複数カテゴリの内容を含む回答から、各カテゴリに対応する部分のみ抜粋して掲載している回答例がある)。

① (ア) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること——認知度・理解度の向上

【小学生】

小学5年生	まずはヤングケアラーという言葉とその意味を知ってもらうことが大切だと思います。このアンケートで一人でも多くのヤングケアラーの人に支援が届くのかなと思いました。
小学5年生	家庭の中のことは、まわりの人が気づきにくいし、そもそも本人が気づいていない場合もあるから、まずは、本人が気づくために、「ヤングケアラー」という言葉をもっと広めていったらいいと思った。
小学6年生	自分がヤングケアラーだ。と言える環境が必要だと思う。
小学6年生	やっているとは思いますがこのような形だと学校へ通えない深刻なヤングケアラーの人へ届かないのでチラシなどを配ったり、掲示板にヤングケアラーの人についてのことを書いた紙を貼ったりしたほうが届くと思います。

【中学生】

中学2年生	ヤングケアラーの人はまわりの人に相談しない傾向にあると聞いたのでこういったアンケートをやることはいいと思いました。支援を広げていくためにはひとりひとりが理解を深めることが必要だと思った。
中学3年生	ヤングケアラーへの支援を広げていくためには、まず多くの人ヤングケアラーについての理解を深める必要があると思います。このアンケートを実施することによって、私を含め、今までヤングケアラーについてあまり知らなかった人が知る良いきっかけになったのではないかと思います。
中学3年生	ヤングケアラーは自覚がなくて当たり前になっている人もいると思うから、どういうことをやっているのがヤングケアラーなのかもっと詳しく知識を広めていく必要があると思う。

【高校生世代】

高校1年生	支援を広げていくためには、当事者達の思いを知らせることが必要であるから、学校やネット、新聞などでとりあげていくことが必要になると思う。
高校2年生	ヤングケアラーの存在を当事者が、否かにかかわらず高校生にも知ってもらうための機会を増やせると良いと思う
高校3年生	まずその現状を知ってもらうこと、認知が大切なのではないか。学校での講演会を始めそういった方々が身近にいることを知ってもらいそこから支援等へと発展すべきだと感じた。

① (イ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること——相談にかかわる内容

【小学生】

小学6年生	相談の機会を増やすため、学校でも2ヶ月に一回くらいで全員やれば良いと思う
-------	--------------------------------------

【中学生】

中学1年生	変わらなかったら意味がないけれど話を聞いてあげたほうが良いと思う。話を聞くだけでも少しでも気楽になれる人もいるし、状況が変わる場合もあるから。
中学3年生	ヤングケアラーとはいっても色々な種類があるため一括にするのではなくその人たち一人ひとりに合った支援をしていくことが大切だと思います。この市を変えてゆくための第一歩は一人ひとりのはなしを聞くことから。
中学3年生	ヤングケアラーは必然的に一人で行動することが多くなり、精神的にもダメージがあると思うので本人が話したいと思うときに自然に話せる場所が必要だと思った。

【高校生世代】

高校1年生	ワークショップ開催だけだとあまり参加しない高校生も多い。授業内でしっかり伝える方が本人に相談先があるということが伝わると思う。
高校3年生	もっと学校側に話しやすい環境をつくる。ヤングケアラーの子供たちは自分から悩みを話すことが難しいため、そのためには、学校で日頃から子供とのコミュニケーションを大事にしたり、悩んでいることをいつでも相談出来る環境を常に整えておくことが大切だと思う。担任の先生だけでなく養護教諭との連携や、学校全体で寄り添うことが必要だと思う。
高校3年生	カウンセラーや自治体に相談しても結局現状は変わらないと思うと、相談する気も失せてしまう人が多いと思う。相談したら、ただ同情するだけでなく確実にその子の状況を物理的に改善することを示すことで、ヤングケアラーの声がもっと届くようになり、国や自治体への信頼感も変わってくると思う。

① (ウ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること — 普及啓発

【小学生】

小学5年生	学校の教科書にヤングケアラーのことについて書いてみんなに知ってもらいたいと思います。
小学5年生	ヤングケアラーのことを知らせる授業が必要。
小学6年生	ヤングケアラーを子供だけではなくまだヤングケアラーのことを知らない人にも伝えたいと思う。
小学6年生	学校や地域でヤングケアラーのことを説明する。

【中学生】

中学1年生	総合など学校の授業で取り扱う
中学2年生	もっと学校でヤングケアラーについての学習の時間を作るといいと思いました
中学3年生	学校に実際にヤングケアラーだった方を呼んで講演をしてもらう

【高校生世代】

高校1年生	テレビや新聞、ネットなどを使って認知度を上げたり、相談出来る場所が書いてある紙を学校で配ったりポストに入れたいと思う。
高校3年生	図書館や市役所等の公共施設にヤングケアラーに関するスペースを設置してほしいです。
高校3年生	学校の授業でヤングケアラーという立場に置かれている子がいるということを知ってもらいたいこと、またどんな子がヤングケアラーに当てはまるのか詳しく知ってもらいたいような機会を設けるべきだと思う。

① (エ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること — 人や制度の支援

【小学生】

小学5年生	ヤングケアラーの人たちは、お金がない可能性もあるので、学校や病院などの費用を減らすことがいいと思う。
小学6年生	ヤングケアラーの団体を作ったり、都や県が支援するのがいいと思う。それと、ヤングケアラーの方たちの憩いの場をつくり、精神的な健康をサポートするのもいいと思う。
小学6年生	ヤングケアラーの人は友達友人と遊ぶ機会が少ないと思うので手伝いをしてくれる人が必要だと思う

【中学生】

中学1年生	ヤングケアラーを支援する団体を作ればいいと思います
中学1年生	買い物に行く手間が省けるように配達してあげる
中学2年生	補助金制度や介護・身の回りの人のお世話を代わりにやってくれる制度などの支援。
中学2年生	ヤングケアラーの人が学校を休めるような制度があったらいいと思う。
中学2年生	ヤングケアラーの人が自分がヤングケアラーだと申請すると、社会的支援などを受けられるようにする。また、その申請を子供だけでできるようにする。
中学3年生	外部から勝手に押し付けることなく本人と話して様々なことを決められる制度が良いと思う

【高校生世代】

高校1年生	当該児童がヤングケアラー状態であることを自治体が公式に証明し、助成金やヘルパーの派遣などを行えるような法整備
高校2年生	悩んでいる人の相談窓口を増やしたり、支援につながるように、大人にも情報を提供してほしい
高校3年生	政府を中心にそれぞれの自治体が教育や福祉、医療、介護あたりの法律などを良くし、ヤングケアラーに対する認知度の向上と根本的な理解と改善が必要ではないかと思う。また、ヤングケアラーになっている人が気軽に支援、相談を受けられるような場所も必要だと思う。

① (オ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること——お金の支援

【小学生】

小学5年生	月5万円の支援
小学5年生	金銭的な援助や府中市の職員の方などが定期的に訪問するなど必要だと思う。
小学6年生	・援助金　・税金の一部負担（金銭的な面の支援が必要だと思います。）
小学6年生	学費をもっと支援した方がいい

【中学生】

中学1年生	・募金活動　・学費免除　・休んでも成績に反映されない。
中学2年生	お金の支援は必要だと思います。ヤングケアラーのひとがいるならば、宿題の量や家でやることの量を減らしたら生活に余裕ができると思います。
中学2年生	子供が短期間で助けを呼べる環境が必要だと思う。高校生でお金がなくバイトをしている人もいると思うから税金を配る。

【高校生世代】

高校1年生	調査と給付金の配布、メンタルケア
高校2年生	高校の学費の支援。
高校2年生	ヘルパーなどを呼ぶための料金の援助は必要だと思う
高校3年生	訪問介護の充実、介護者への給付金
高校3年生	就学支援、ケアに対する実質的支援、金銭的援助、

① (カ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること——施設・物品などの支援

【小学生】

小学5年生	ヤングケアラーの人が集まる憩いの場があるといいと思う
小学6年生	ヤングケアラーの人たちは家族の人たちのことで精一杯だと思うから、その人達だけの居場所が必要だと思います。

【中学生】

中学1年生	子供だけが使える引き換え券みたいなのを配る
中学2年生	ヤングケアラーの心を癒せる場所を増やすことが必要
中学3年生	子供食堂を増やす

【高校生世代】

高校2年生	家庭環境によっては、自分で好きな洋服やメイク道具などを買いに行けない人もいると思う。生活に最低限必要なものが揃っていたとしても、モチベ上げたりするために好きな物を身につけられるようにできるならば…と思うことはある。
高校2年生	ヤングケアラーとして学校に思うように行けなかった人達への夜間学校を開くことでの学習支援をすることが必要だと思う。

① (キ) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること——気づき・声掛け

【小学生】

小学5年生	ヤングケアラーに気づいてあげる事が大切。みんなが気づこうとするのも大事だと思う
小学6年生	普段相談できないヤングケアラーにもとてもいいと思いました。自分からは言えない人もいるので相談できる人から(先生、カウンセラーなど)声をかけてあげるといいと思いました。
小学6年生	悩みを相談する窓口や宣伝のためにポスターを作り気軽に声をかけられるようにする。

【中学生】

中学1年生	ヤングケアラーの人が一人で抱え込むことがないように、ヤングケアラーの人もお世話されてる側の人もケアする。人が人をよく見るようになったら、解決していく。
中学1年生	ヤングケアラーの取り組みはその子自身の意志を尊重してあげると良いと思った。
中学2年生	ヤングケアラーの子は、自覚がなかったりするのでまわりの大人が気づくべきだと思う。
中学3年生	学校でヤングケアラーの人がいるのか先生たちが把握してサポートしてあげれば良いと思う

【高校生世代】

高校1年生	家庭一つ一つで状況は違うので、親などをどうにかしないと直接的な解決は出来ないと思うので、ヤングケアラーの子達のメンタルケアなどに徹底していくのがいいと思う
高校1年生	学校の授業などで話してくれることがあり、知れる機会があったのでそれは続けた方がいいと思います。ヤングケアラーは人に自分のことを話せない人もいるだろうから、同世代の私たちはあんまり詮索したりせず、一緒にいてあげることが大切だと思いました。

① (ク) ヤングケアラーへの支援・施策に関すること ― その他

【小学生】

小学5年生	このアンケートを府中市の人にもやってもらう
小学5年生	こういうアンケートなども良いですが、ほかにももっと、イベントを増やしていくことが良いと思います。
小学5年生	こういったアンケートを取るのは、とてもいいと思います。このような人向けのホームページを作ったらいいと思う。
小学5年生	ヤングケアラーの人が、休日を取れるようにするといいと思う。
小学6年生	ヤングケアラーの人がどこでどんな支援を受けられるのかを学校の手紙などで配れば良いと思う。

【中学生】

中学1年生	普段ヤングケアラーの方は、自分の時間が足りていないと思うからじぶんだけの時間も必要だと思う。
中学1年生	このアンケートのあとに友達とこの会話をする。
中学2年生	ヤングケアラーのグループ作る。
中学3年生	ヤングケアラーがヤングケアラーになっている原因を探る。
中学3年生	義務教育でも通信制、単位制をとり入れる。
中学3年生	シングルマザーに対する支援をもっとしてほしい

【高校生世代】

高校1年生	ヤングケアラーの駆け込み寺みたいなところや支援所を駅やコンビニ、スーパーなどに設置する
高校1年生	ヤングケアラーに依って学業などに影響が出るようであれば、実情が間違っていると思うので、金銭とかではなく、ケースごとに分けてそれぞれに適切な支援をすべきだとは思う。
高校2年生	府中市立の中学校生徒会役員達で行われる、リーダー研修会の議題にしてみるのはいかがでしょうか？ 有益な意見が多く集まると思います。また、生徒のヤングケアラーへの関心も高まるかと思っています。
高校2年生	ヤングケアラーが養っている障がいを持つ人たちや、高齢者の過ごしやすい環境づくり、バリアフリー化を増進していくことが支援に繋がると思う。
高校3年生	ヤングケアラーに限らず、若者が気軽に集まれる場がほしいです。
高校3年生	難しいことだとは理解してますが、、学校を休む・遅刻＝罪みたいな風潮が時々感じられるからそう感じさせないようにするのが大切だと思います！

②感想・意見・要望

【小学生】

小学5年生	いじめにあって学校に復帰した子に、悩みを吐き出して相談できるようなアプリを作っ て欲しいです。
小学6年生	学校でいつでも気楽に相談できる場所がほしいです。行きたくないなとか言いづらい 環境にならないようにしてほしいです。
小学6年生	ヤングケアラーをもっと調べてみたいと思った。
小学6年生	子供が老人や幼児のお世話をするのは、とても大変だし、子供がやるべきことでは、 ないと思うけど、老人や幼児のお世話をする人がいないと、こまってしまうから、お 世話する人が必要だが、いないから子供がやってるのは、どうなんだろうと思った。

【中学生】

中学3年生	ヤングケアラーへの支援はどのようなものか気になった。もっとヤングケアラーの理解 を深めていきたいと思った。
中学3年生	あまりヤングケアラーをみたことがないから、身近なことに思えなかった

【高校生世代】

高校3年生	お金を支給するだけでは解決しない問題に対して府中市がどのように対応していくか とても気になっています。
高校2年生	親の収入で生活保護金とか決まるならその影でケアしてる子供には届かない時もある と思います。共働きで子供に任せてたり、何がどこまでなら助けてくれるのかを周知し ないとやらされてる側は知る事も出来ない。その余裕すらないと思います。
高校2年生	ヤングケアラーについて高校の授業で初めて知ったため、中学やもしくは小学校の授 業など早い段階で知ることが出来たら良かったなと思った。

③アンケートの感想

【小学生】

小学5年生	動画を見て、このアンケートが10～15分ほどかかると言っていたのできっと難しい し、問題数が多いんだなと思ったけれど、簡単に答えられるしとても大事なことが質問 されていたので、気軽に回答することができました。
小学6年生	このアンケートはわかりやすく、あまり責められないアンケートだと僕は思いまし た。これからもぜひこのようなアンケートをやっていってください。
小学6年生	みんなのヤングケアラーへの関心が高まれば、取り組みなども増えると思う。だから、 このようなアンケートも大事だと思う。
小学6年生	私にはヤングケアラーは当てはまらないけど、このようにアンケートを取ってくだ さったおかげで、相談してもいいんだ(相談できる人がいる)と思えました。 もしなにか困ったことがあったら、学校・府中市の人に相談しようと思います。

【中学生】

中学2年生	ヤングケアラーという言葉は聞いたことがあったが、どういう意味なのか知らなかったからこのアンケートをきっかけに意味を知ることができて良かった。
中学2年生	このアンケートでヤングケアラーがいることがわかってそこをどう対策するのか明記されていないのが疑問だった
中学3年生	まず学校で聞いているのが愚かって感じします。ヤングケアラーだから学校に来れないことが多いっていう仮定をするんだったら学校じゃなくて普通に家に出向くとかすれば良くないですか？

【高校生世代】

高校1年生	ヤングケアラーの中ではスマホを持っていない人もいると思うので、スマホだけの調査だとすべてはわからないんじゃないかなと思いました。ヤングケアラーが少しでも減って自分を尊重できる市にしてほしいです。
高校2年生	アンケートが長すぎる。もう少し端的に短くするべきであると思った。
高校2年生	このアンケートは高校生の声を直接届けられていいと思う。
高校2年生	こういうアンケートをすることによって、悩みを打ち明けることに繋がるかもしれないからとてもいいアンケートだと思う。

④お世話をしている子どもの声

【小学生】

小学5年生	これから弟がもっと笑顔になるようにヤングケアラーをしていきたい
小学5年生	正直お世話とかよくわかんない
小学5年生	府中市はとてもゆたかですごく住みやすいとおもいます だけど、お悩み相談の場所がすくないとおもいます もう少し悩みを聞いてくれる場所があったらヤングケアラーもなくなるとおもいます

【中学生】

中学1年生	ヤングケアラー＝大変で辛くて支援が必要などの「少しだめなもの」というイメージがあるのが嫌だなと思う。私はいやいややっているわけでもないし、親が大変で自分になにか手伝えることはないかと思ってしていることだから可愛そうとか親がなんでやらないんだとか思ってほしくない。誰も悪くないし、この状況をどうにかしようと頑張っている人もいるから、ヤングケアラーを知ったつもりなだけでいいのは良くないと思う。
中学3年生	SNSは親に内容をよく監視されるから怒られるかも。だから相談しづらい
中学3年生	学校の先生たちに相談したくても、先生方が忙しくてとても話しかけられる状況ではないから相談できていない。けどホットライン?のようなものを使うほどではないと思っている。

【高校生世代】

高校2年生	金と時間と余裕をくれ
高校3年生	早期のうちに重度のヤングケアラーを発見するような制度があるといいと思う
高校1年生	ヤングケアラーの精神的苦痛を理解しようとする。物価を下げて欲しい。高校にも給食を導入して欲しい。

⑤相談・悩み・強い意見

【小学生】

小学5年生	他の話ですが、僕は性別で悩んでいるから、アンケートのときに性別を聞かれるのが少し嫌です。その欄を、なくしてほしいです。
小学6年生	子供の悩みを、子供みんなで話す会がほしい。大人にとって話づらいんです。話そうって思っても、勇気が出ないんです。でも、でも、同級生とかには話せるんです。だからそういう取り組みがほしいなと思いました。
小学6年生	友達関係があんまり良くなって困ってて、お母さんに相談しても自分的には解決できなくて困ってます。先生には相談しづらくどうにも解決ができない。その子は友達の事をきらってはぶいたり、急に仲良くしてきたりする。だから、学校に行きたくないって思うときがあります。
小学6年生	いま、友達が不登校気味。学校に来てほしいが、無理やりにはこさせたくない。どう接すればいいのかが悩みです。

【中学生】

中学1年生	最近ストレスを感じています。それに寄り添うことができるものがほしい。話しやすい人で紙に書くとか電話とか記録に残って見られるのが怖い。
中学2年生	学校での1人1人に対する教師の対応にためらいを感じないような環境づくりがなによりも大切だと思う。なぜなら、僕が小3のときいじめられており誰かに相談することに恐怖を感じていたためだ。
中学3年生	学校の中では、生徒や教師も悩みを抱えていると思う。学校にはスクールカウンセラーなどの相談できる場所があるが、相談をする場合は先生に一度言わないといけないので、自由に相談できるようにしてほしいです。

【高校生世代】

高校2年生	当事者の子供が助けてほしいと声を上げる事は無理です。そんな家庭の子供は、助けをもらう事に慣れていません。他人を信頼していないのです。まわりの大人が、お節介をして下さい。無理やり助けて下さい。あなたはもう何も心配しなくていい、明日から勉強に集中していいよ、と言ってあげて下さい。虐待を見て見ぬふりをしないで下さい。
高校2年生	家庭科の教科書には「困ったら一人で抱え込まずに相談してね」と書いてあったのですが、本当に対応できているのか不安です。私はヤングケアラーではありませんが、友達にいました。その子が言うには、友達に話しても大人に相談してもやっぱり自分の負担が軽くなるわけではないようです…。相談して気持ちが軽くなったとしても、やっぱり解決まで持っていけないとその子の精神や将来に良くないと思います。対応するのが大変難しい問題だとは思いますが、ヤングケアラーが環境のせいで将来を諦めるようなことが無くなって欲しいです。
高校3年生	いなくなりたいなと思ったときに、LINEの相談を利用したので踏みとどまって頑張れました。感謝しています。

⑥市や学校への設備や制度への要望

【小学生】

小学5年生	サッカーが出来る公園を、増やしてほしいです。
小学6年生	スポーツ施設をつくってほしい
小学6年生	府中市は古墳があったり歴史の長い大國魂神社があったりするから、そういう歴史のことをもっと市外に広めていくべきだと思う。
小学6年生	学校のトイレをきれいにしてほしい。

【中学生】

中学1年生	午後の学校の開放があるといいと思う
中学2年生	府中市内にもうちょっと遊べる場所を作って欲しい。
中学3年生	ル・シーニュのプラッツにあるような自習スペースを増やしてほしいなと思います。
中学3年生	中学生や高校生が飽きなく楽しく過ごせる施設がほしい
中学3年生	友達と無料で自習ができる場所だったり、中学生や高校生が遊べるような場所をつくってほしいです。

【高校生世代】

高校1年生	インターネットに接続できるフリー Wi-Fiを増やしてほしい!
高校2年生	個室で勉強ができる場所が欲しい。また、個室でなくてもいいから静かに勉強できる図書館のような場所も増えて欲しい
高校2年生	本屋を増やしてください。

5. まとめ

(1) 家族のお世話をしている児童・生徒の把握

家族のお世話をしていると回答した児童・生徒は、小学生 488 人 (15.4%)、中学生 301 人 (7.6%)、高校生世代 20 人 (2.8%) であった。全国調査 (令和 2 年度、3 年度) と比較すると小中学生では割合が高く、高校生世代では低かった。近隣の他自治体においても同様の傾向が見られている。

回答者の学年層が低いほど、家族のお世話をしている割合が高い背景に、家族の「お世話」とは「お手伝い」の範疇に入るものが多い可能性が考えられる。調査票・フォームの中で「お世話＝大人がするような家事である」等の説明を入れたが、比較的軽微なお手伝いも含めてお世話していると回答している子どもが一定数いるため、割合が高くなっていることが想定される。

上記を踏まえ、お世話の頻度や時間を考慮し分析すると、ヤングケアラーと思われる子どもは、小学 5 年生から高校生世代の児童・生徒の 5.4% (約 426 人) と推定される。そのうち、世話をしているため、やりたいことができないことが 1 つ以上あると回答した子どもは、1.7% (約 131 人) だった。

ヤングケアラーと思われる子どもの人数推計等の詳細については、第 5 章 総合考察に記載をした。

(2) 学年層ごとの家族のお世話の状況

小学生 (488 人) がお世話している相手は、「きょうだい」が 48.4%、「母親」が 34.8%、「父親」が 25.4% の順であった。また、お世話の理由は「幼い」(35.2%)、「わからない」(29.5%)、3 番目以降は「高齢」「日本語が苦手」「身体障がい」「要介護」「精神疾患」「知的障がい」と続き、多様な理由が選択されている。

お世話の内容としては、「家事 (食事の準備や掃除、洗濯)」(43.9%)、「きょうだいの世話や保育所等への送りむかえなど」(28.3%)、「一人では外出が難しい家族のつきそい」(10.9%)、「心配で目を離せない家族の見守り、声かけ」(8.4%) の順である。

きょうだいの「遊び」や「勉強を見てあげる」などの回答があり、それを「楽しい」と捉えているケースがあったが、遊びや勉強を見てあげながら、「見守り」や「つきそい」などの役割を担っていると考えられる。また、病気や障がいのあるきょうだいへの対応や、親の状況を気遣う、家事をしているというケースもあった。「身体的介護」や「薬の管理」などは少数ではあったが、小学生には困難で負担が大きい内容も含まれていた。

次に、中学生 (301 人) がお世話している相手は、「きょうだい」が 42.9%、「母親」が 24.3% であり、お世話の理由は、「幼い」(37.5%)、「わからない」(15.9%)、3 番目以降は「高齢」「要介護」「身体障がい」「日本語が苦手」「精神疾患」「知的障がい」と続く。また、お世話している家族の状況を「わからない」と回答したのは 15.9% で、小学生 (約 3 割) よりも低く、中学生になると家族の状況を把握することが可能となってくると考えられる。

お世話の内容は、「家事 (食事の準備や掃除、洗濯)」(43.2%)、「きょうだいの世話や保育所等への送りむかえなど」(26.2%)、「見守り、声かけ」(12.6%)、「一人では外出が難しい家族のつきそい」(10.3%) の順である。

この中には、小学生と同様に幼いきょうだいの世話があり、中には病気や障がいのあるきょうだいとの関わり (見守り、一緒に遊ぶ)、また親自身の病気や障がい、多忙さをフォローしてお世話等を行っていることも含まれている。

最後に、高校生世代 (20 人) がお世話している相手は、「きょうだい」が 35.0%、「母親」「父親」「祖母」が同率で 25.0% であった。また、お世話の理由は、「幼い」(55.0%)、「わからない」(15.9%)、3 番目以降は「認知症」「精神疾患」のあと「要介護」「身体障がい」「知的障がい」が同率で続く。また「依存症」も少数だが選択されている。

お世話の内容は、「家事 (食事の準備や掃除、洗濯)」が 60.0%、「きょうだいの世話や保育所等への送りむかえなど」が 25.0%、「見守り、声かけ」「一人では外出が難しい家族のつきそい」が 20.0% (同

率3位)、「身体的な介護」が15.0%、「薬の管理」「通院のつきそい」が5.0%(同率6位)であった。小中学生と異なり、「家事」の割合が高く、「きょうだいのお世話」が低い状況にあった。また介護・医療に関するお世話の種類回答比率が小中学生よりも高くなっている。

お世話をする頻度と時間は、小中学生に比べどちらも増加している。時間に関しては「3時間未満」の割合が小中学生に比べ減少する一方、「3～7時間」および「7時間以上」が大幅に増加している。

(3) 家族のお世話をすることによる影響

年齢が上がるにつれてお世話をしていることによる生活等への影響が表面化する傾向があった。小中学生は、影響や負担感を自覚している子どもの割合は低い傾向だが、一方で「自分の時間が取れない」など生活時間への制限のほか、学校へ行けない、遅刻や早退をしてしまう、進路や将来のことを考えられないと感じている子どもが少数だが存在する状況であった。

高校生世代は、影響が「特にない」は35.0%で、小中学生よりも20～25ポイント以上減少している。また、「自分の時間が取れない」「友人と遊ぶことができない」「宿題をする時間や勉強する時間が取れない」「睡眠が十分に取れない」については小中学生を大幅に上回っており、お世話をしていることによる様々な影響を自覚している割合が高くなっている。

お世話で感じる大変さについては、小中学生では約10人に1人、高校生世代では約3人に1人が実感している。特に「精神的に大変」と感じている割合は、小中学生約1割、高校生は4割であった。

(4) 相談相手の状況と支援ニーズ

お世話について「相談したことがない」という小中学生は約5割、高校生世代は約6割となっている。「相談したことがない」と回答した子どもに、お世話の悩みを身近で聞いてくれる人はいるかたずねたところ、「いる」と回答した小学生は約7割、中学生は約6割、高校生世代は約8割であった。また、自身以外に家族のお世話をしている人が「いる」と回答した対象者は小中学生・高校生世代すべてで60%を超えており、その属性は母親、父親、きょうだいが多い状況であった。

またお世話の悩みを相談しない理由について、「誰かに相談するほどの悩みではないから」とする回答が約7割あったが、「相談しても状況が変わるとは思わない」という回答も一定数あり、学年層が上がるごとに割合は高くなっている。

また、お世話をしている子どものうち、周囲の大人にしてもらいたいことが具体的にあると回答した割合は、小学生は約2割、中学生は約4割、高校生世代は約5割であった。求める支援について小学生は「自分の今の状況について話を聞いてほしい」「自由に使える時間がほしい」「学校の勉強や受験勉強など学習のサポートをしてほしい」の順に多く、中学生は「学校の勉強や受験勉強など学習のサポートをしてほしい」が最も多く、また、進路・進学相談、経済的支援についての回答が増える。高校生世代では進路・進学相談や経済的支援に加え、ケアの代替など手法的な支援を望む回答があった。

(5) ヤングケアラーの自己認識と認知度

家族のお世話をしていると認識している子どもに比べ、自身がヤングケアラーであると認識している子どもの割合は、どの学年においても低かった。また、「お世話をしている」と回答した割合とヤングケアラーにあてはまると回答した割合では、学年が低いほどその差は大きかった。

ヤングケアラーの認知度については、学年層が上がるほどヤングケアラーという言葉とその内容を認知している。認知経路についてはどの学年層においてもテレビ等のマスメディアが最多で回答されているが、それ以外にもインターネット等様々な場所や媒体が回答されている。

また認知経路で「その他」を選択した回答(自由記述)では、子ども自身の家族からヤングケアラーについて直接聞いた、教えてもらったという回答や塾の授業や教材、中学受験の教材で知ったという回答が一定数あった。

第 3 章

教員調査

目次

1. 調査概要	74
(1) 調査設計	74
(2) 回収状況	74
(3) 調査結果の見方	74
2. 調査結果	75
(1) 基本属性	75
① 性別	75
② 年齢層	75
③ 勤務校、学級・教室種別	75
④ 担任の有無	76
(2) ヤングケアラーについて	76
① ヤングケアラーという言葉とその概念への認識	76
② ヤングケアラーと思われる子どもの実態把握	77
③ ヤングケアラーと思われる子どもの把握方法	77
(3) ヤングケアラーと思われる児童・生徒への対応経験	78
① これまでかかわってきた児童・生徒の中での ヤングケアラーとみられる子どもの有無	78
② 今年度かかわっている児童・生徒の中での ヤングケアラーとみられる子どもの有無と人数	78
③ 昨年度までにかかわった児童・生徒の中での ヤングケアラーとみられる子どもの有無と人数	79
(4) ヤングケアラーと思われる児童・生徒の詳細	80
① その児童・生徒との関係性	80
② その児童・生徒とかかわっていた時期	80
③ その児童・生徒とかかわりはじめた学年	80
④ 気づいた経路	81
⑤ その児童・生徒の性別	81
⑥ その児童・生徒の家族構成	82
⑦ その児童・生徒がケアしている対象	82
⑧ その児童・生徒のほかにケアをしている人の有無	83

⑨ その児童・生徒がケアをしている相手の状態	84
⑩ その児童・生徒がしているケアの内容	85
⑪ その児童・生徒がケアをしている期間	86
⑫ その児童・生徒がケアをしている理由	87
⑬ その児童・生徒がケアをしていた具体的な状況	88
⑭ その児童・生徒を含む家庭への支援の有無	90
⑮ その児童・生徒の生活への影響	91
⑯ その児童・生徒の状況や気づきとその対応	92
(5) 教員の状況	94
① 教員がその児童・生徒と接するうえで困ったこと	94
② 教員が相談できる場所・相手	95
③ 教員と他機関の連携	96
(6) 支援体制について	97
① ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと	97
② 福祉と教育の連携についての具体的な意見	98
③ 府中市でヤングケアラーへの支援を広げていくために 必要だと思うこと	99
3. まとめ	102
(1) 学校教育現場におけるヤングケアラーへの認識と実態の 把握について	102
(2) ヤングケアラーとみられる児童・生徒への対応経験と 気づく経路について	102
(3) ヤングケアラーとみられる児童・生徒の状況と対応の実態	102
(4) ヤングケアラーとみられる児童・生徒を支援していくために 教員が望んでいること	103

1. 調査概要

(1) 調査設計

調査目的	小学校・中学校の教員を対象としたアンケート調査を実施し、学校における家事や家族の世話などを日常的に行っている子ども(ヤングケアラー)への気づきや対応の実態および課題を明らかにするとともに、支援施策等の検討を行うための基礎資料とする。
調査対象者	市立小学校22校、市立中学校11校の全教員 1,024人
調査方法	各学校を通じて教員向けの調査依頼文を配布し、教員本人が個人の端末からWebアンケートフォームにアクセスし回答。
調査期間	令和5年8月21日(月)～令和5年10月16日(月)

(2) 回収状況

教員調査の回収総数は574。うち、有効回答数は567(55.4%)。

調査対象	配布総数 ^{※1}	回収総数 ^{※2}	有効票 ^{※3}		無効票 ^{※4}
			票数	割合	
府中市教員	1,024	574	567	55.4%	7

※1 配布総数:市立小学校・市立中学校の在籍教員合計数(令和5年7月現在)

※2 回収総数:ウェブ回答の回収総数

※3 有効票:回収総数から無効票を除いたもの

※4 無効票(無効回答):学校未回答のもの

(3) 調査結果の見方

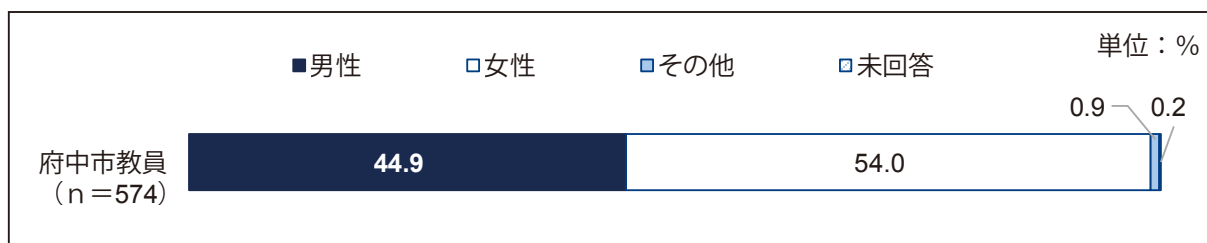
- 回答結果の割合(%)は有効サンプル数に対し各回答数の割合を小数点第2位で四捨五入しているため、単数回答(複数の選択肢から1つの選択肢を選ぶ)であっても合計が100%にならない場合がある。
- 複数回答(2つ以上の選択肢を選択できる質問)の場合、回答は選択肢ごとの有効回答数に対しそれぞれの割合を示しているため、合計が100%を超える場合がある。
- 図表内の「n=」はその設問についての集計対象件数を示している。母集団のデータの数を示す場合は「N=」と表記する。
- 集計サンプル数が少ない属性項目については1サンプルあたりの重みが大きく比率が変動しやすいため、結果の利用には注意を要する。
- 自由記述による回答の集計・分析にあたっては、個人の特定につながる情報(人名、固有名詞等)をすべて削除したうえで図表の作成および回答例の掲載を行っている。
- 「お世話」とは本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などをすることを示す。

2. 調査結果

(1) 基本属性

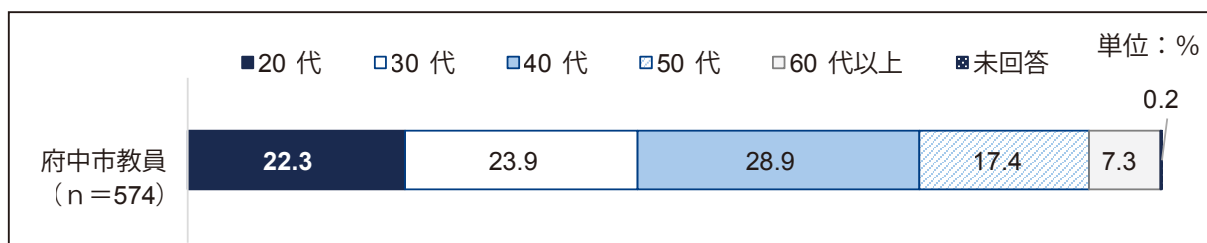
①性別（問1）

男性 258 人 (44.9%)、女性 310 人 (54.0%)、その他 5 人 (0.9%)、未回答 1 人 (0.2%) であった。



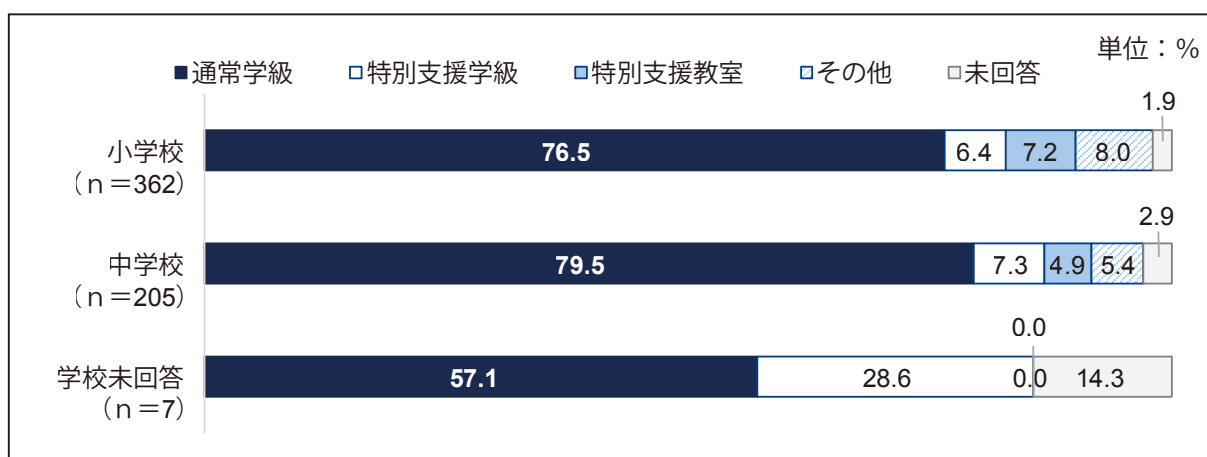
②年齢層（問2）

20代 128 人 (22.3%)、30代 137 人 (23.9%)、40代 166 人 (28.9%)、50代 100 人 (17.4%)、60代以上 42 人 (7.3%)、未回答 1 人 (0.2%) であった。



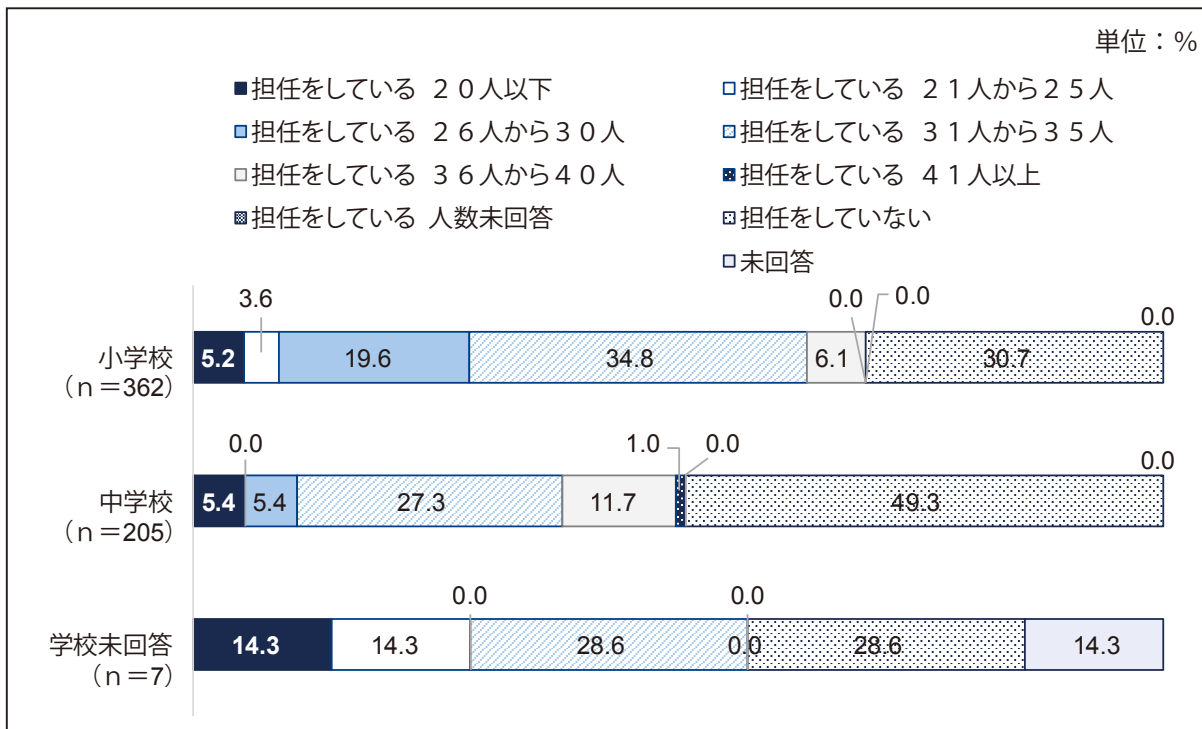
③勤務校（問3-1）、学級・教室種別（問3-2）

	勤務校	通常学級	特別支援学級	特別支援教室	未回答
小学校	362人 (63.1%)	277人 (76.5%)	23人 (6.4%)	26人 (7.2%)	7人 (1.9%)
中学校	205人 (35.7%)	163人 (79.5%)	15人 (7.3%)	10人 (4.9%)	—
学校未回答	7人 (1.2%)	4人 (57.1%)	2人 (28.6%)	—	1人 (14.3%)



④担任の有無（問4）

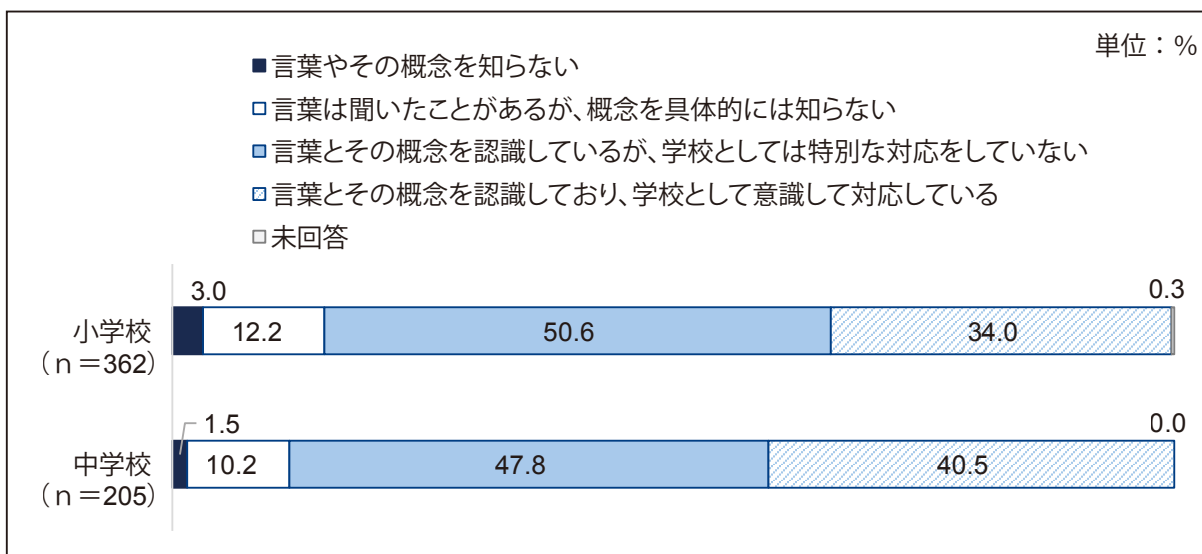
担任をしている回答者は、小学校 251 人 (69.3%)、中学校 104 人 (50.7%) であった。



(2) ヤングケアラーについて

①ヤングケアラーという言葉とその概念への認識（問5）

ヤングケアラーという言葉と概念の認識について、「言葉とその概念を認識しており、学校として対応している」は小学校で 123 人 (34.0%)、中学校で 83 人 (40.5%) であった。次いで「言葉とその概念を認識しているが、学校としては特別な対応はしていない」は小学校で 183 人 (50.6%)、中学校で 98 人 (47.8%) であり、小学校・中学校ともに、80%以上の教員がヤングケアラーという言葉とその概念を認識していた。

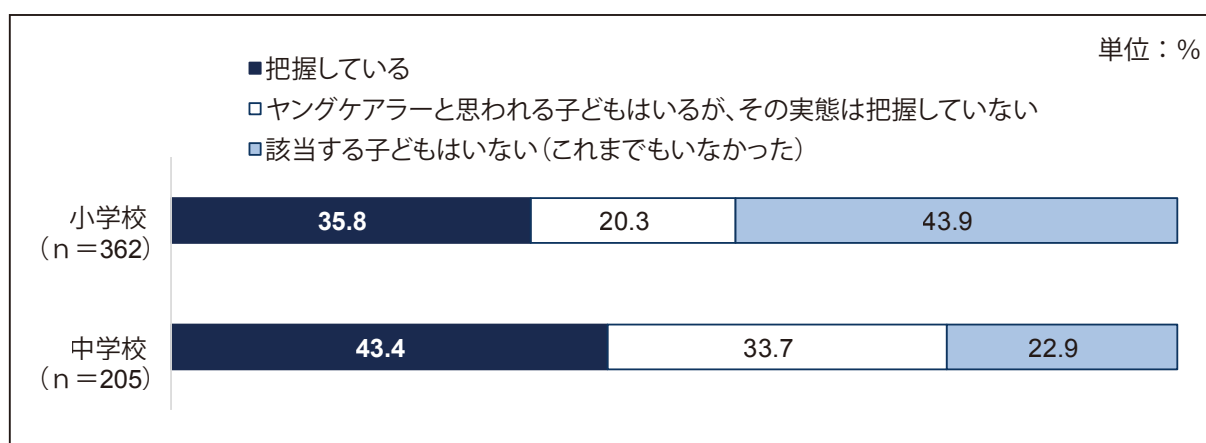


②ヤングケアラーと思われる子どもの実態把握（問6）

問5で「言葉とその概念を認識しており、学校として意識して対応している」と回答した人にも、ヤングケアラーと思われる子どもの実態把握についてたずねた。

小学校では「言葉とその概念を認識しており、学校として意識して対応している」と回答した123人のうち、「把握している」が44人（35.8%）、「ヤングケアラーと思われる子どもはいるが、その実態は把握していない」が25人（20.3%）、「該当する子どもはいない（これまでもいなかった）」が54人（43.9%）であった。

中学校では「言葉とその概念を認識しており、学校として意識して対応している」と回答した83人のうち、「把握している」が36人（43.4%）、「ヤングケアラーと思われる子どもはいるが、その実態は把握していない」が28人（33.7%）、「該当する子どもはいない（これまでもいなかった）」が19人（22.9%）であった。



③ヤングケアラーと思われる子どもの把握方法（問7）

問6で「把握している」と回答した人にも、「ヤングケアラーと思われる子どもをどのように把握していますか」として、ヤングケアラーと思われる子どもの把握の方法についてたずねた。

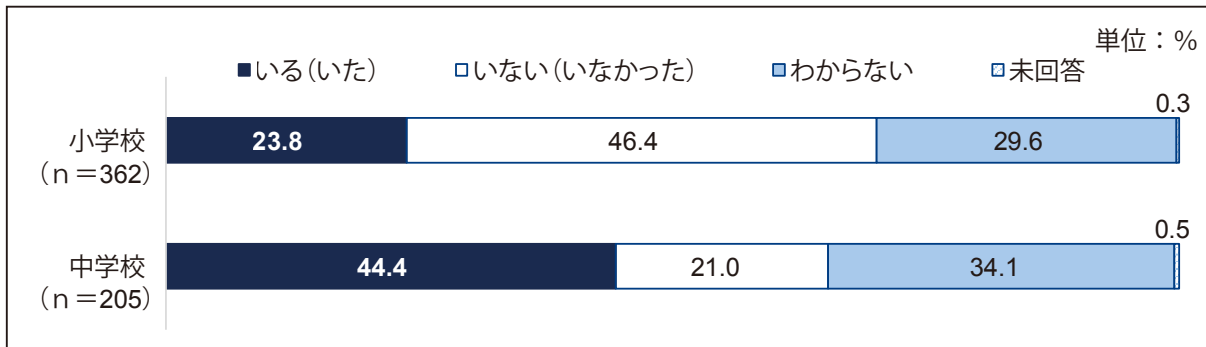
小学校では44人のうち「アセスメントシートやチェックリストなどのツールを用いている」は7人（15.9%）、「特定のツールはないが、できるだけヤングケアラーの視点を持って検討・対応している」が38人（86.4%）であった。

中学校では36人のうち「アセスメントシートやチェックリストを用いている」は6人（16.7%）、「特定のツールはないが、できるだけヤングケアラーの視点を持って検討・対応している」が29人（80.6%）であった。また自由記述として、「在籍学級と、学年としての考え方、支援の状況を共有している」「生徒本人の話から」「SSW等の外部機関との連携による実態把握」との回答がみられた。

(3) ヤングケアラーと思われる児童・生徒への対応経験

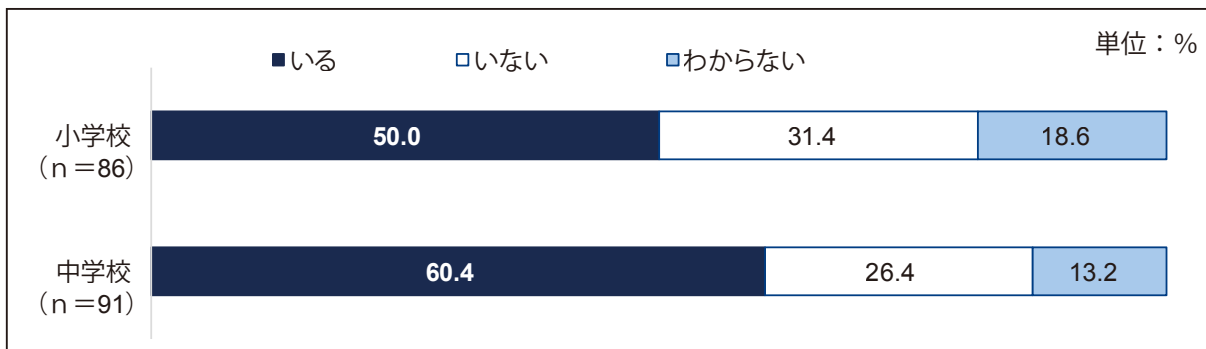
① これまでにかかわってきた児童・生徒の中でのヤングケアラーとみられる子どもの有無 (問8)

これまでにかかわっている(かかわってきた)児童・生徒の中でヤングケアラーとみられる子どもが「いた」と回答したのは小学校で86人(23.8%)、中学校で91人(44.4%)であった。

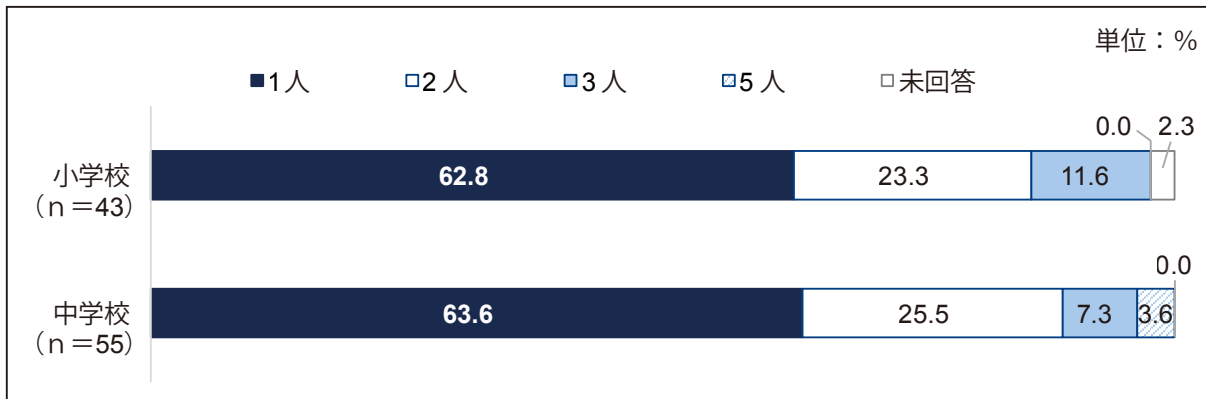


② 今年度かかわっている児童・生徒の中でのヤングケアラーとみられる子どもの有無と人数 (問8-1-①、問8-1-②)

今年度かかわっている児童・生徒の中でヤングケアラーとみられる子どもが「いる」と回答したのは小学校で43人(50.0%)、中学校で55人(60.4%)であった。

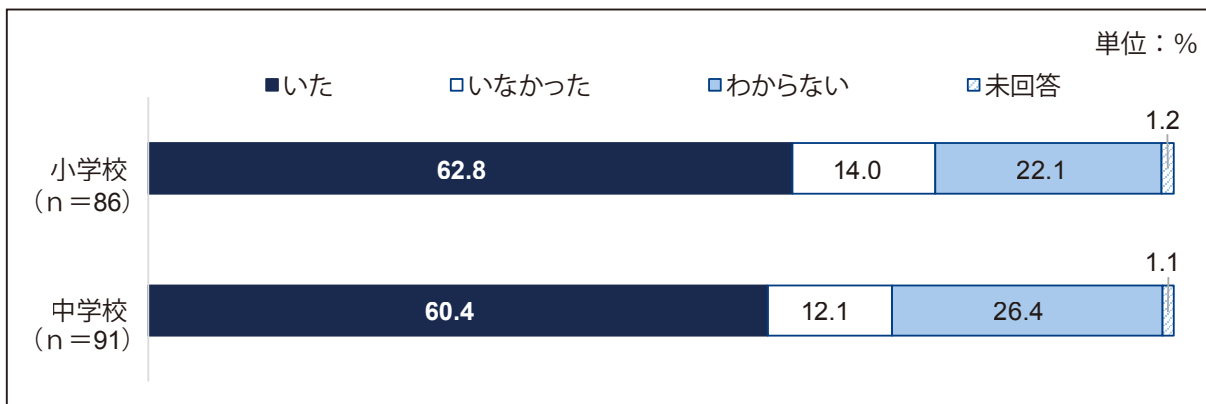


また、ヤングケアラーとみられる子どもの人数をたずねたところ、小学校・中学校ともに「1人」が最も多く、小学校で27人(62.8%)、中学校で35人(63.6%)であった。

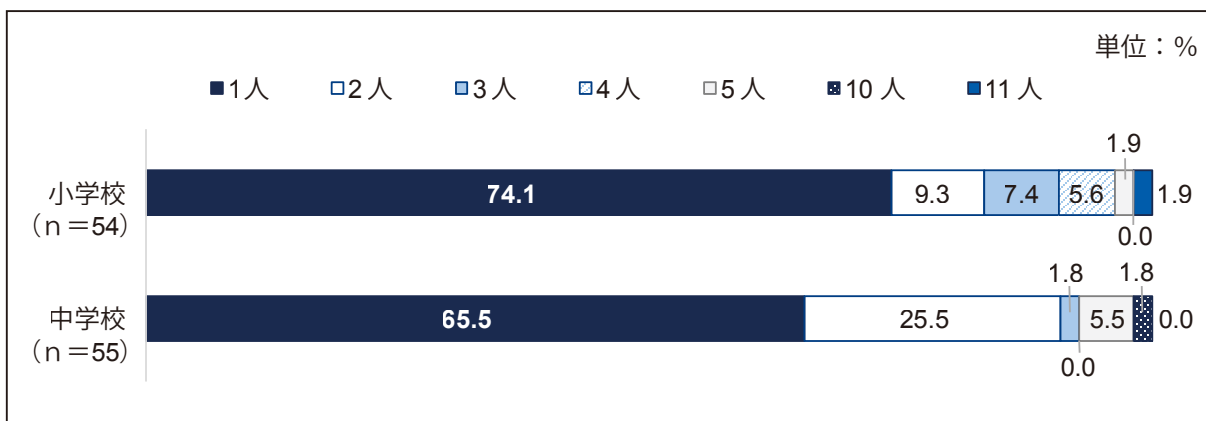


③昨年度までにかかわった児童・生徒の中でのヤングケアラーとみられる子どもの有無と人数
(問8-2-①、問8-2-②)

府中市内の学校で、昨年度までにかかわった児童・生徒の中でヤングケアラーとみられる子どもが「いる」と回答したのは小学校で54人(62.8%)、中学校では55人(60.4%)であった。



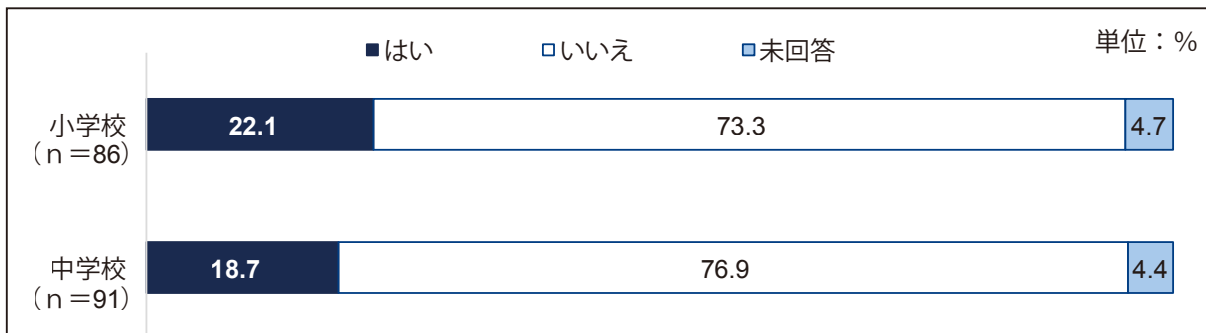
また、ヤングケアラーとみられた子どもの人数をたずねたところ、小学校・中学校ともに「1人」が最も多く、小学校で40人(74.1%)、中学校で30人(65.5%)であった。



(4) ヤングケアラーと思われる児童・生徒の詳細

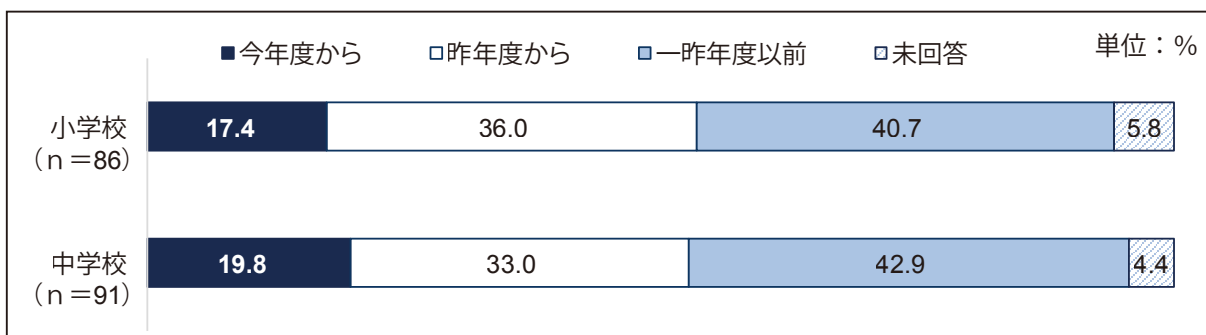
①その児童・生徒との関係性 (問9-1)

これまでにかかわってきた(かかわっている)中で最も印象に残る児童・生徒について、その児童・生徒は担任をしているクラスの児童・生徒であったかをたずねたところ、小学校では63人(73.3%)、中学校では70人(76.9%)が「いいえ」と回答し、小学校・中学校ともに70%以上が担任以外の関係性であった。



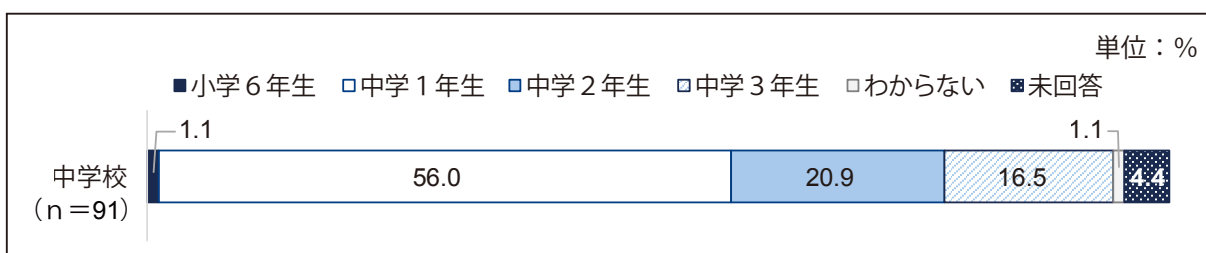
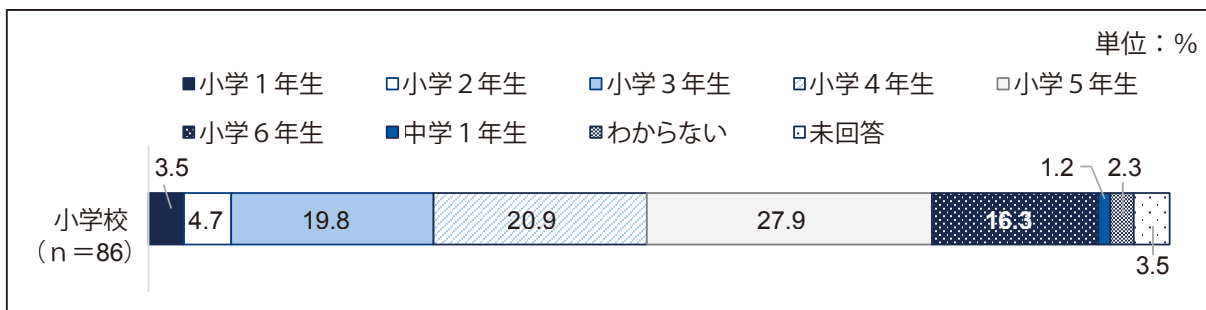
②その児童・生徒とかかわっていた時期 (問9-2)

これまでにかかわっている(かかわっていた)時期として、小学校・中学校ともに一昨年以前からのかかわりが最も多く見られ、小学校では35人(40.7%)、中学校では39人(42.9%)であった。



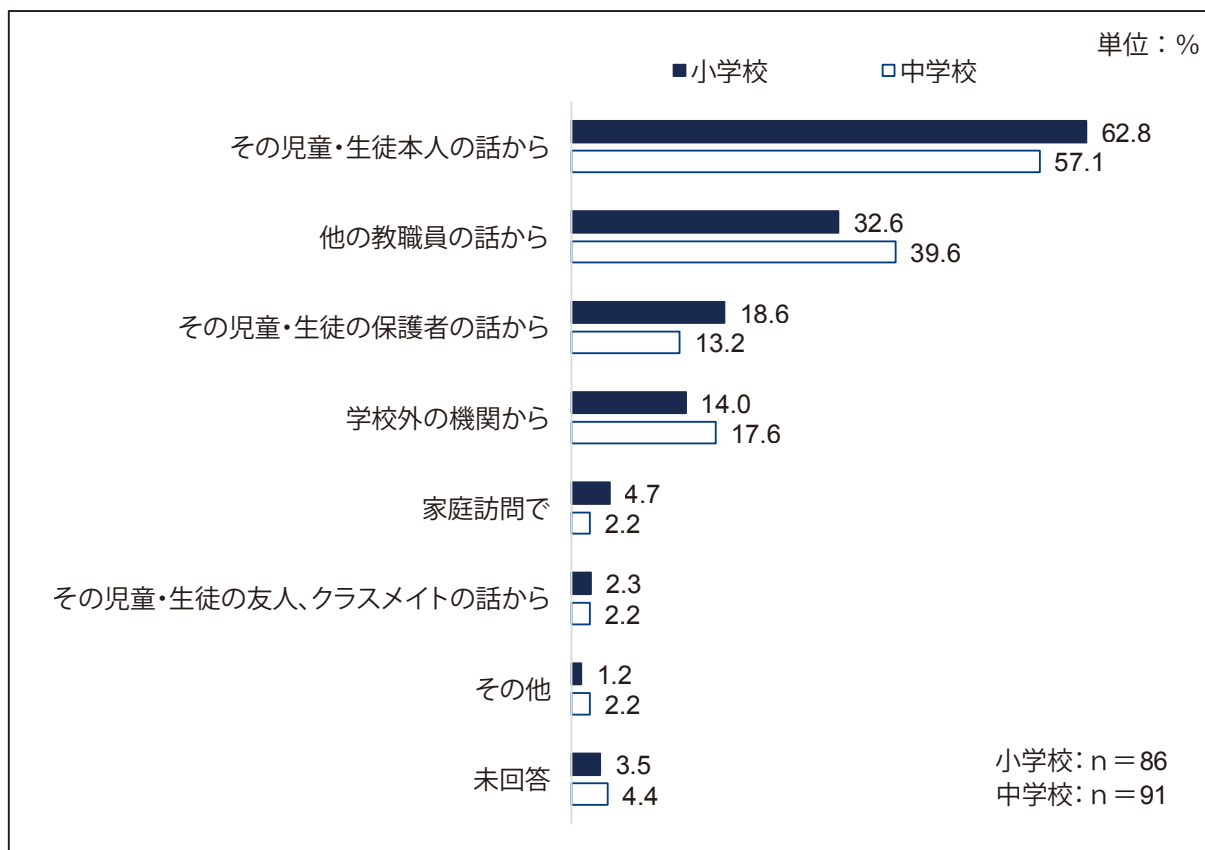
③その児童・生徒とかかわりはじめた学年 (問9-3)

その児童・生徒にかかわりはじめた時期について、最も多かった回答としては、小学校では「小学5年生」が24人(27.9%)、中学校では「中学1年生」が51人(56.0%)であった。



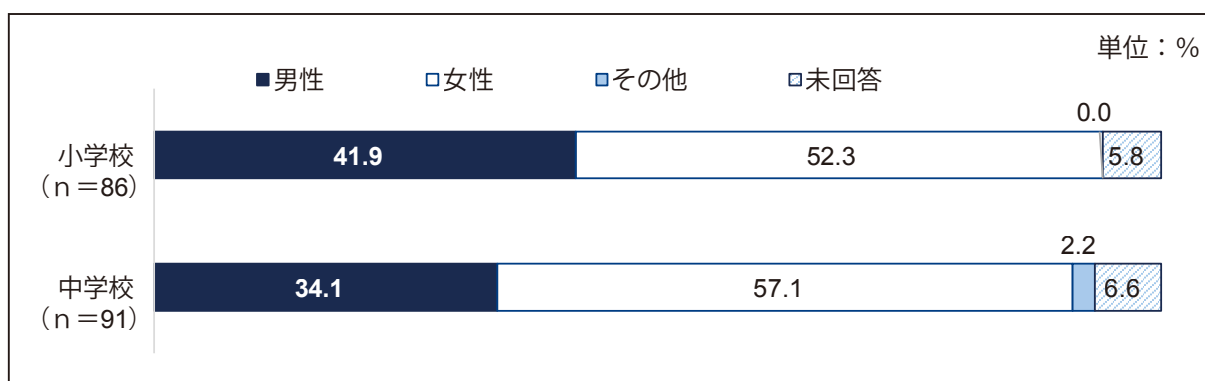
④気づいた経路（問9-4、問9-4-①、問9-4-②）

その児童・生徒がケアをしていることに気づいた経路については、小学校・中学校ともに、「その児童・生徒本人からの話から」の気づきが最も多く、小学校で54人(62.8%)、中学校で52人(57.1%)であった。次いで、「他の教職員の話から」が小学校で28人(32.6%)、中学校で36人(39.6%)であり、その詳細としては、学校での会議や引き継ぎといった公的な機会のほか、職員室内での雑談や、部活動を通して話を聞くという回答も見られた。「学校外の機関から」では、子ども家庭支援センター、児童相談所、民生児童委員との回答が見られた。



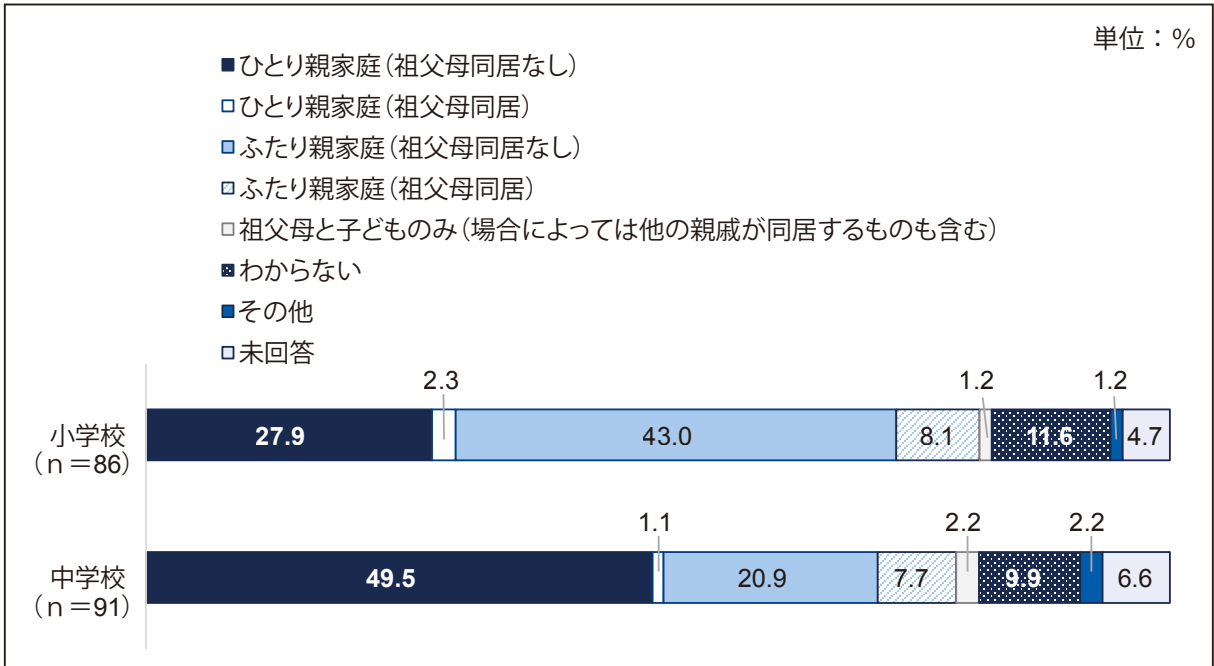
⑤その児童・生徒の性別（問9-5）

その児童・生徒の性別については、「女性」が小学校では45人(52.3%)、中学校では52人(57.1%)と、小学校・中学校ともに女性が50%以上を占めた。



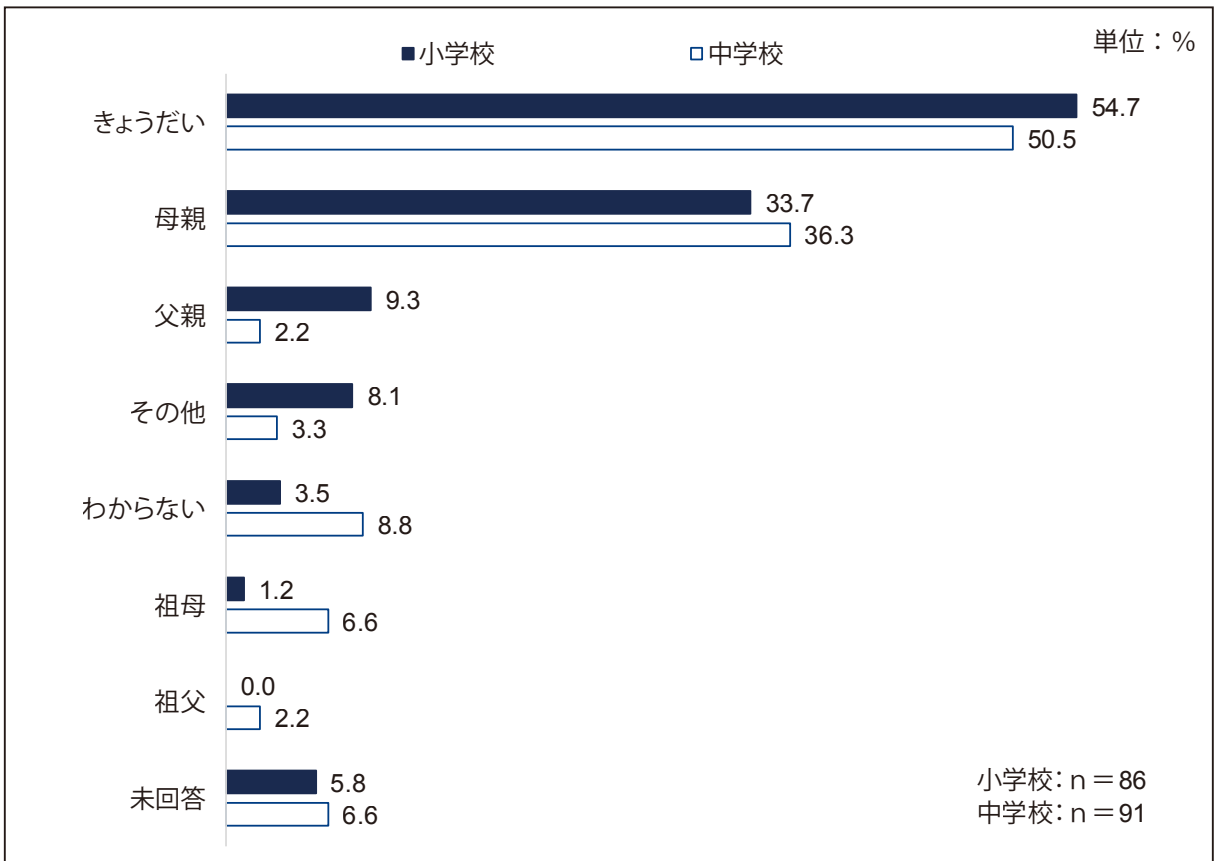
⑥その児童・生徒の家族構成（問9-6）

その児童・生徒の家族構成については、小学校では「ふたり親家庭（祖父母同居なし）」が最も多く、37人（43.0%）であった。中学校では「ひとり親家庭（祖父母同居なし）」が最も多く、45人（49.5%）であった。



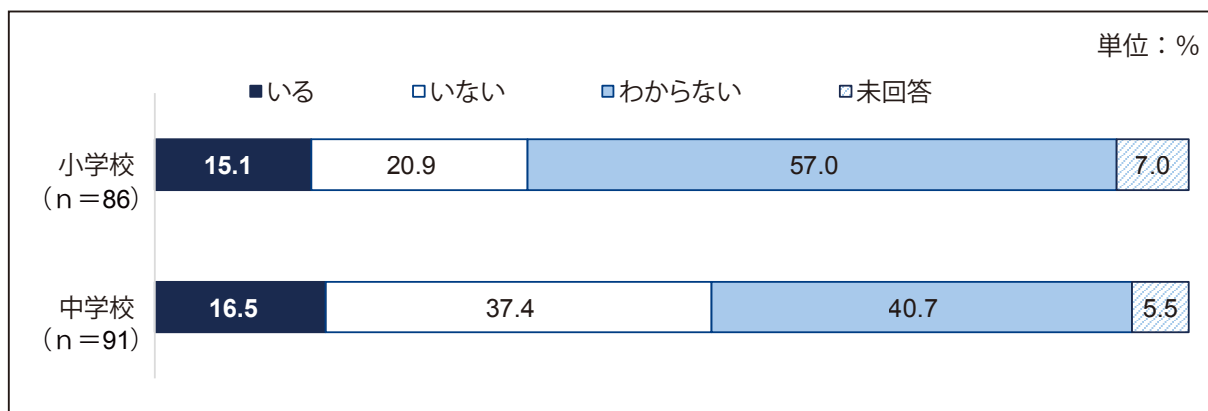
⑦その児童・生徒がケアしている対象（問9-7）

その児童・生徒がケアしている対象については、小学校・中学校ともに「きょうだい」が最も多く、小学校で47人（54.7%）、中学校で46人（50.5%）と、ともに50%以上を占めた。次いで「母親」が小学校で29人（33.7%）、中学校で33人（36.3%）であった。

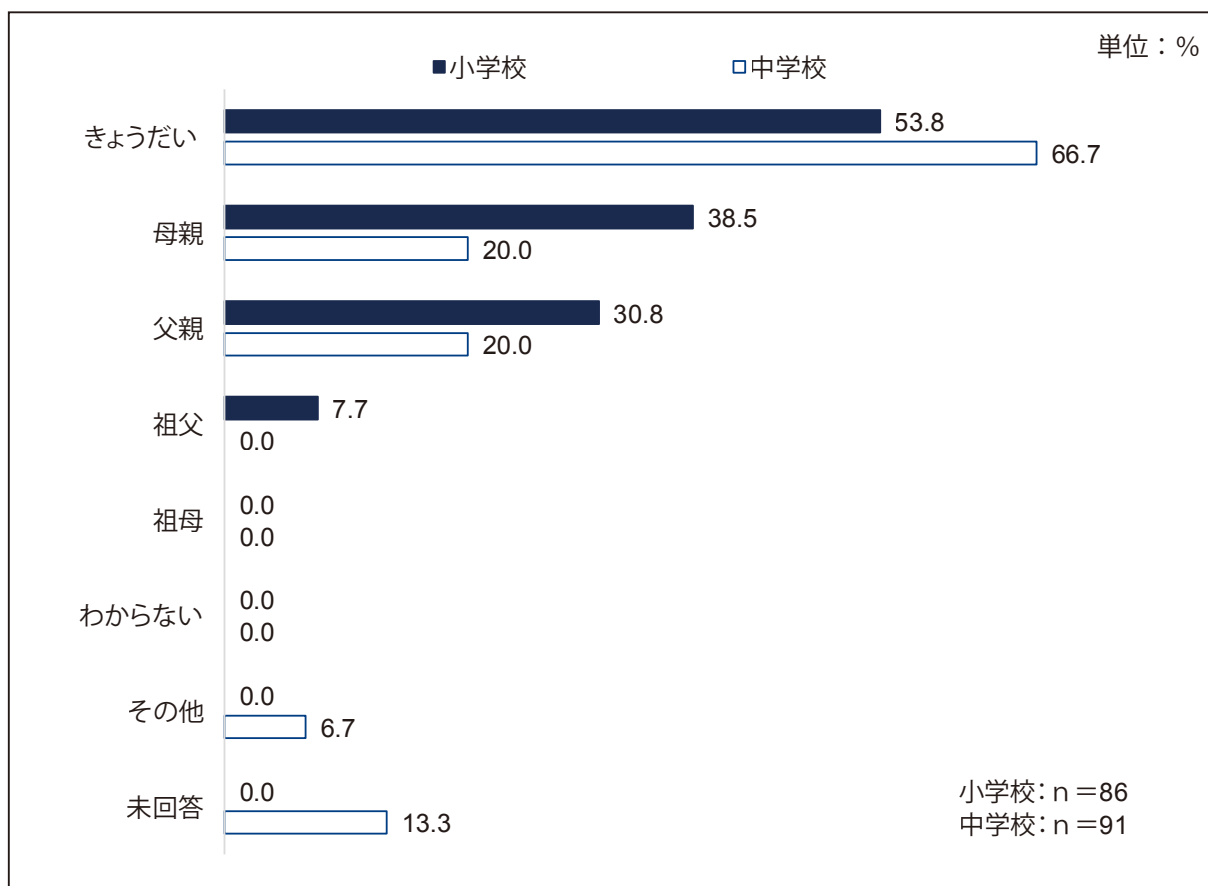


⑧その児童・生徒のほかにケアをしている人の有無（問9-8、問9-8-①）

その児童・生徒のほかにケアをしている人の有無は、小学校・中学校ともに「わからない」が最多であり、小学校で49人(57.0%)、中学校で37人(40.7%)であった。「いる」と回答したのは小学校で13人(15.1%)、中学校で15人(16.5%)であった。

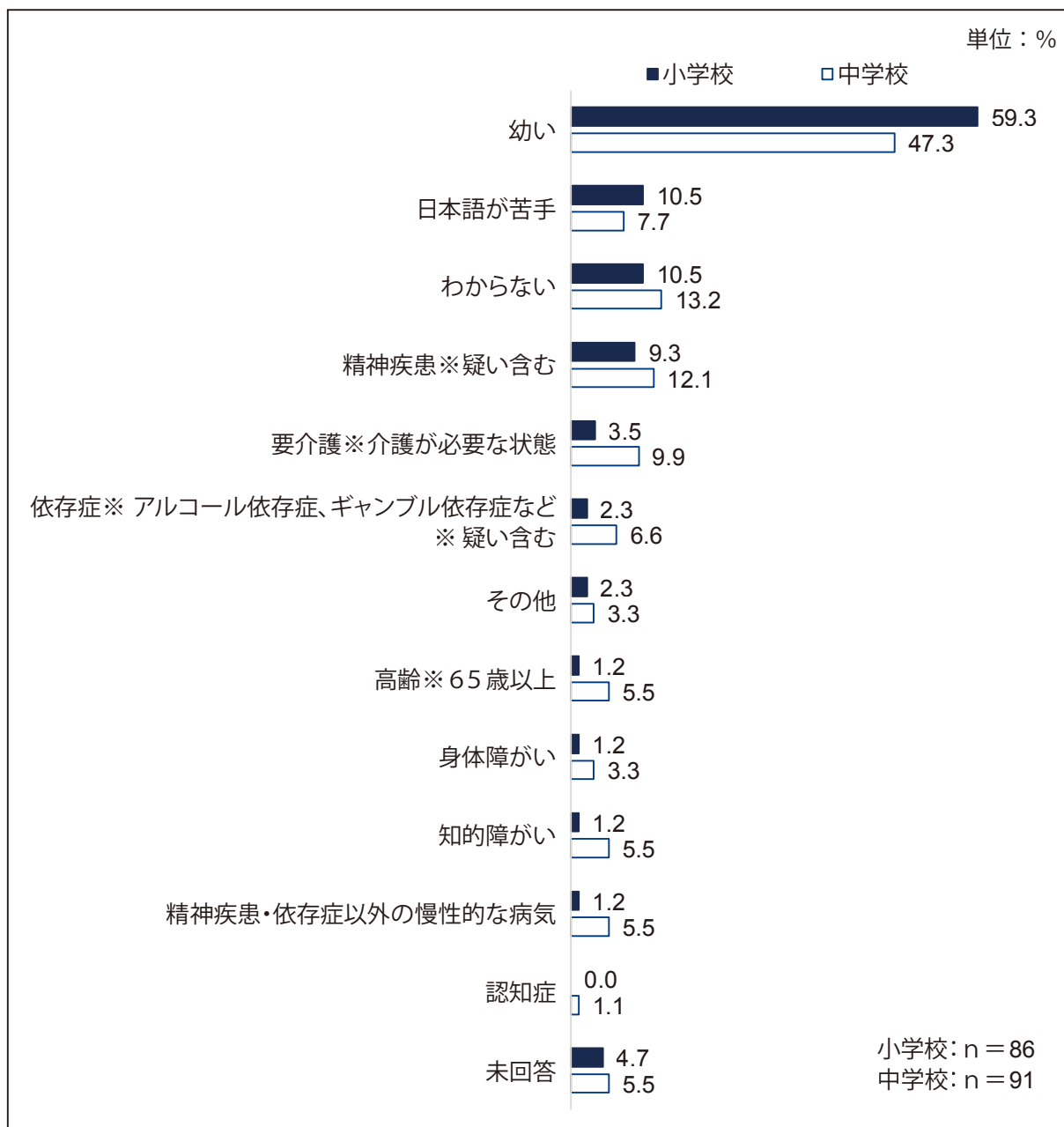


その児童・生徒のほかにケアをしている人としては「きょうだい」が小学校・中学校ともに50%以上を占めた。



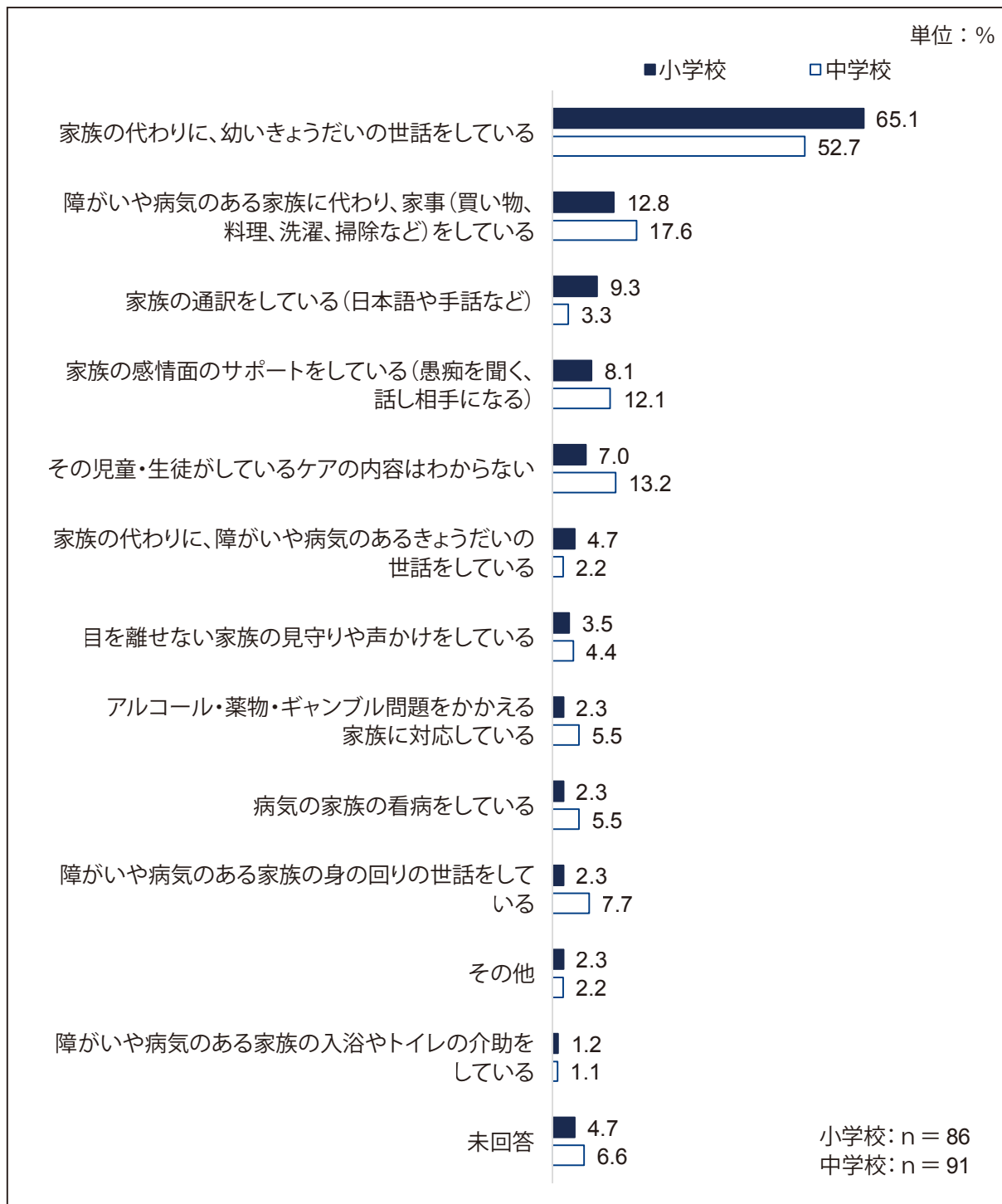
⑨その児童・生徒がケアをしている相手の状態（問9－9）

その児童・生徒がしているケアの相手は、ともに「幼い」状態が最多であり、小学校で59.3%、中学校で47.3%であった。次いで「日本語が苦手」「わからない」「精神疾患※疑い含む」が10%前後の割合で続いた。



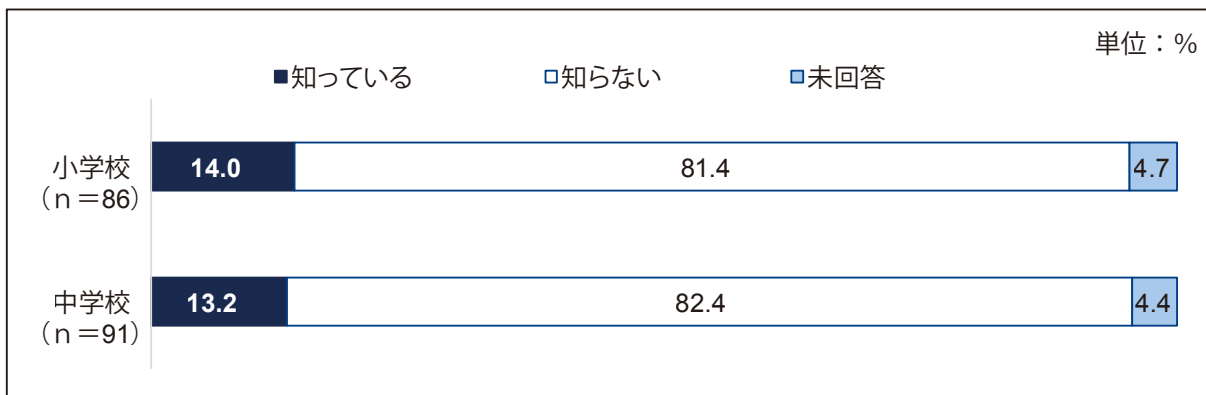
⑩その児童・生徒がしているケアの内容（問9－10）

その児童・生徒がしているケアの内容は、小学校が65.1%、中学校が52.7%と、ともに「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」が最も多かった。次いで、「障がいや病気のある家族に代わり、家事（買い物、料理、洗濯、掃除など）をしている」「家族の通訳をしている（日本語や手話など）」「家族の感情面のサポートをしている（愚痴を聞く、話し相手になる）」の順であった。

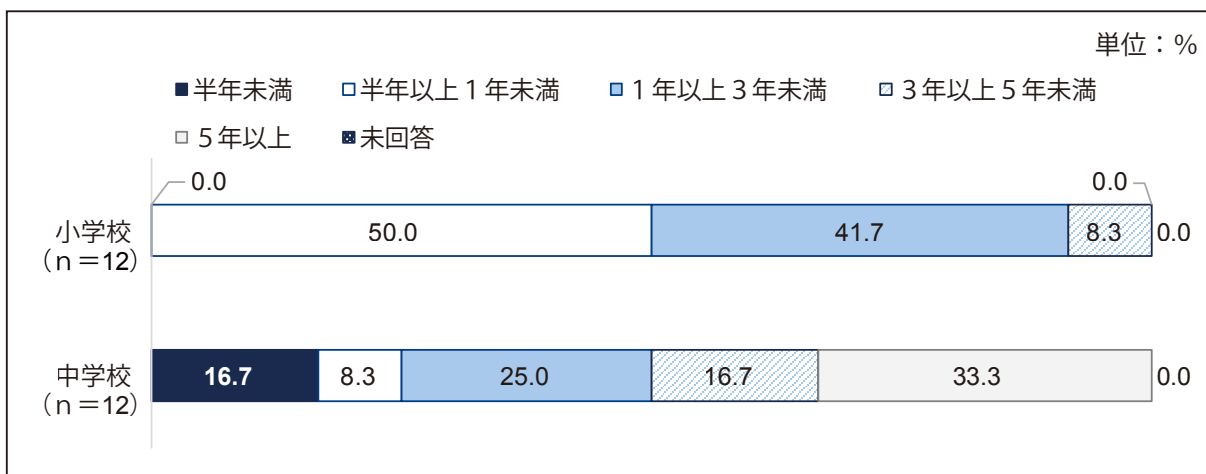


⑪その児童・生徒がケアをしている期間（問9-11、問9-11-①）

その児童・生徒が家族のケアを担っている期間について、「知っている」と回答したのは小学校で12人（14.0%）、中学校で12人（13.2%）であり、小学校・中学校ともに「知らない」との回答が80%以上を占めた。

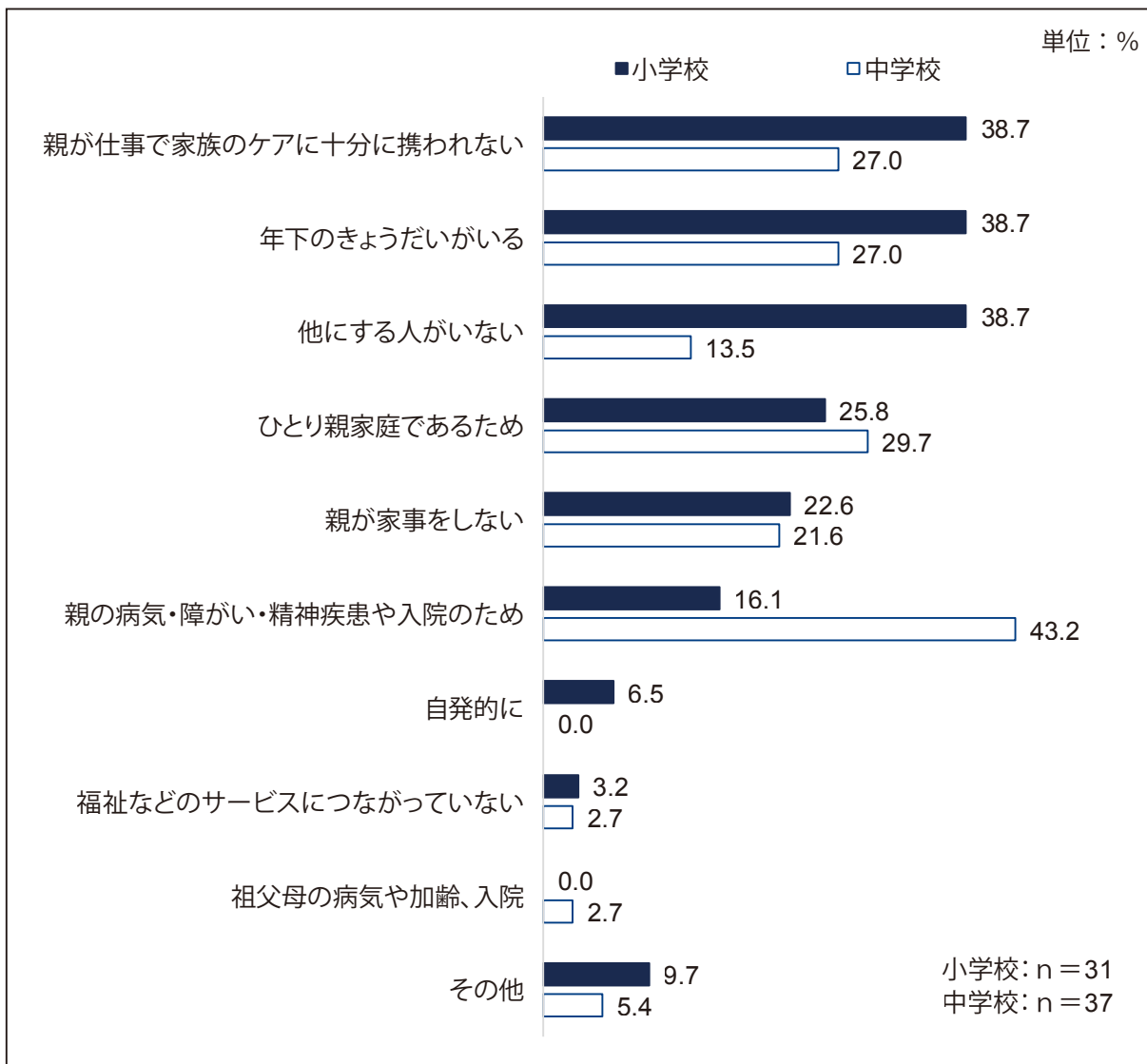
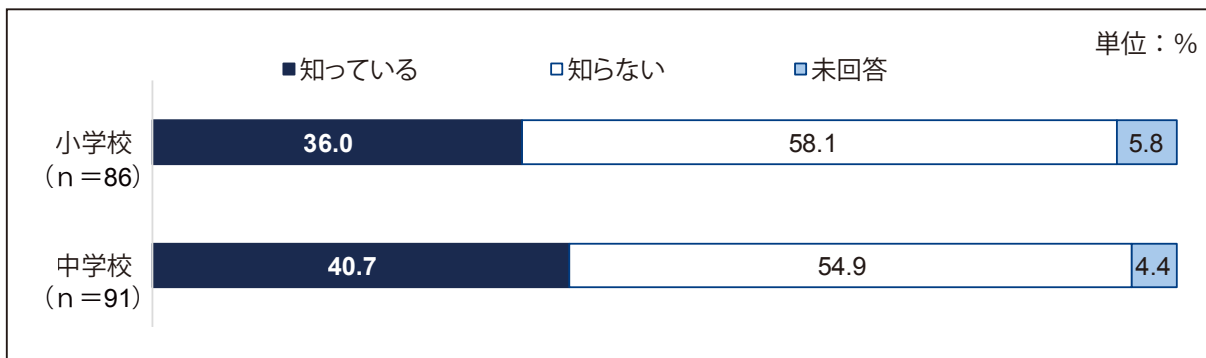


また、児童・生徒が家族のケアを担っている期間の長さについては、小学校では「半年以上1年未満」が6人（50.0%）、「1年以上3年未満」が5人（41.7%）、「3年以上5年未満」が1人（8.3%）であった。中学校では「5年以上」が4人（33.3%）、「1年以上3年未満」が3人（25.0%）、「3年以上5年未満」が2人（16.7%）であった。



⑫その児童・生徒がケアをしている理由（問9-12、問9-12-①）

その児童・生徒がケアをすることになった理由について、「知らない」が小学校で50人(58.1%)、中学校で50人(54.9%)であり、小学校・中学校ともに50%以上を占めた。「知っている」と回答したのは小学校で31人(36.0%)と中学校で37人(40.7%)であったが、その具体的な理由は、小学校では「親が仕事で家族のケアに十分に携われない」「年下のきょうだいがいる」「他にする人がいない」の3つが各12人(38.7%)と同じ割合で示された。中学校では「親の病気・障がい・精神疾患や入院のため」が16人(43.2%)と、最も多く示された。



⑬その児童・生徒がケアをしていた具体的な状況（問9－13）

その児童・生徒がケアをしていた具体的な状況について、小学校13人、中学校30人から回答が得られた。その内容としては、「家族の健康状態」「幼いきょうだいの存在」「両親の離婚や別居」「親が多忙であること」「家族が外国にルーツを持つこと」が理由となっているとの回答や、それらの理由が重複しているとみられる回答もあった。「わからない・知らない」という回答は7件あった。以下、回答の一部を抜粋して掲載する。

【家族の健康状態】

小学校	母親が家を出て行ってしまい、おばあちゃんと二人になってしまった。おばあちゃんの具合が悪い時は、身の回りのことを児童がおこなっていた。
小学校	きょうだいの学習不振と問題行動、養父との関係悪化、実母のアルコール依存による。
小学校	両親の離婚、親の病気、親のけが
中学校	母の精神疾患、両親の離婚
中学校	母だけでなく兄弟も精神疾患を抱えており、孤立している。
中学校	同居の母親のアルコール依存による
中学校	母アルコール依存症、行政に相談したのに手が入らず、父忙しく母と弟の世話をしている
中学校	母親の精神疾患のため、母親の精神状態によって家庭の生活が普通に遅れない状態になってしまうため
中学校	母親の病気の通院の手伝い

【幼いきょうだいの存在】

小学校	兄弟がたくさんいるが両親はあまり家にいなかった。
中学校	再婚で弟が生まれたため。
中学校	幼い兄弟達のお世話
中学校	父がいなく、弟の面倒もみざるをえない状況。
中学校	再婚した父が家庭に非協力的であり、母が三人の兄弟を見ることになっていて、幼い子を見るように要求している。

【両親の離婚や別居】

中学校	親があまり家にいない状況だったと思われる。
中学校	父親が別居
中学校	母親が一人で子育てができない。
中学校	父親から母親がDVを受け、離婚したとのこと

【保護者が多忙であること】

小学校	両親が働き出したから
小学校	夜間の仕事をしているため、朝、起きられず、代わりに身の回りの世話をしているなど。
中学校	他で暮らしている実姉が未就学児を保育所に預けず働きに出ていたため、該当生徒が家に行って面倒を見ていた。
中学校	両親が医療従事者で忙しい。
中学校	保護者だけでは成り立たなくなったから。

【日本以外の国にルーツを持つこと】

小学校	外国からの転入
小学校	夫婦は言語が違い、言葉が通じないため
中学校	母は日本語が苦手で、当該生徒に頼ることが多い。
中学校	母親は日本語が苦手、弟が病気
中学校	母親が外国である日本に住み始めたため

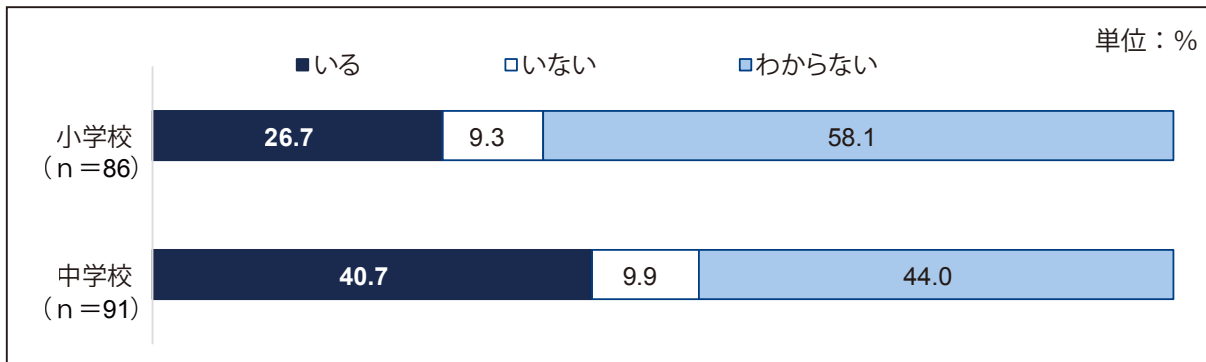
【わからない・知らない】

小学校	詳しくはわかりません。その児童のプライバシーに配慮しつつ対応を検討中。
中学校	確定した情報を持っていない。

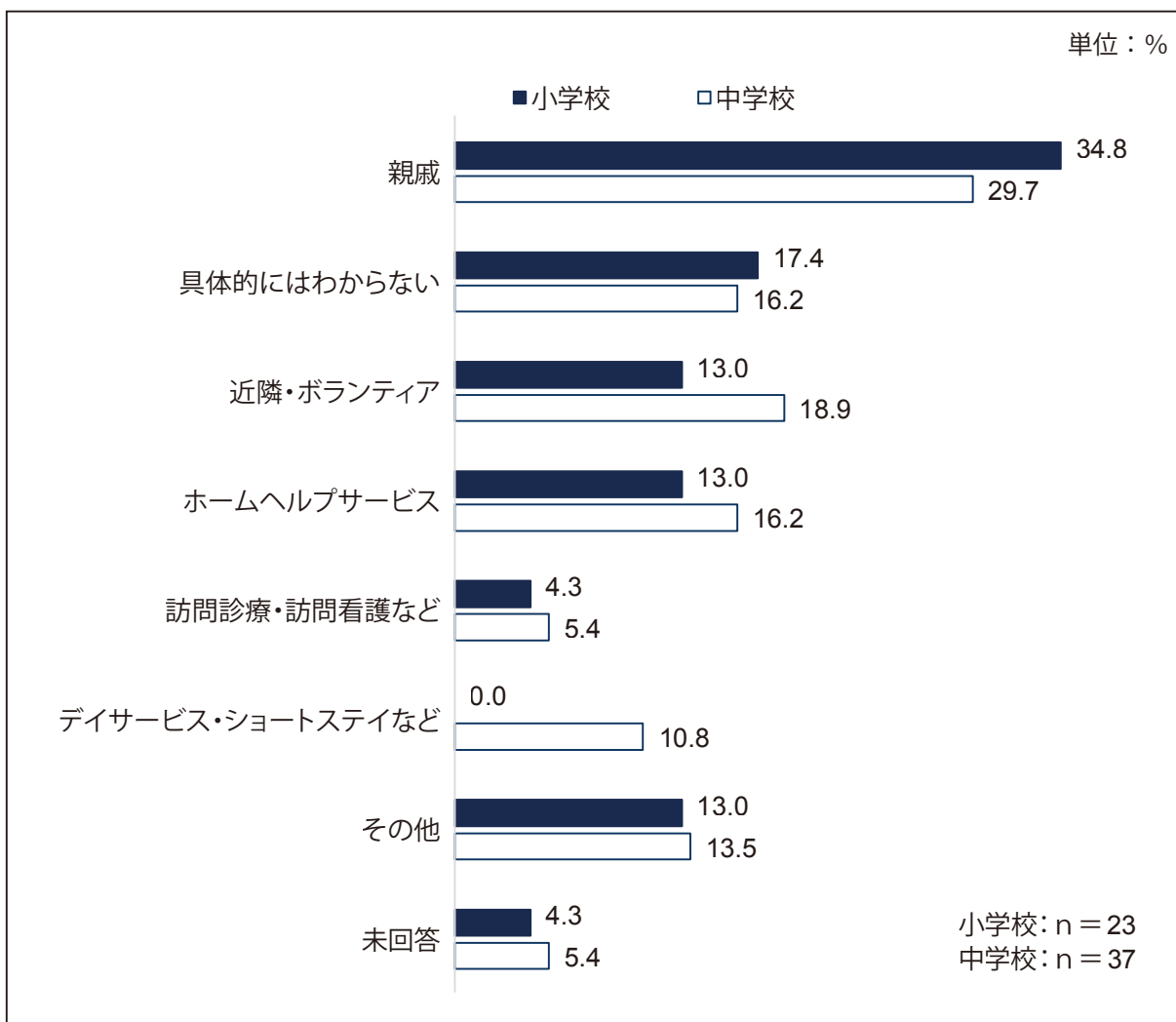
⑭その児童・生徒を含む家庭への支援の有無（問9-14、問9-14-①）

ケアを担っている（担っていた）児童・生徒を含めて、その家庭を支援している（していた）人物の有無については、「わからない」が小学校50人（58.1%）、中学校40人（44.0%）と、どちらも最多であった。

「いる」と回答したのは小学校で23人（26.7%）、中学校で37人（40.7%）であった。

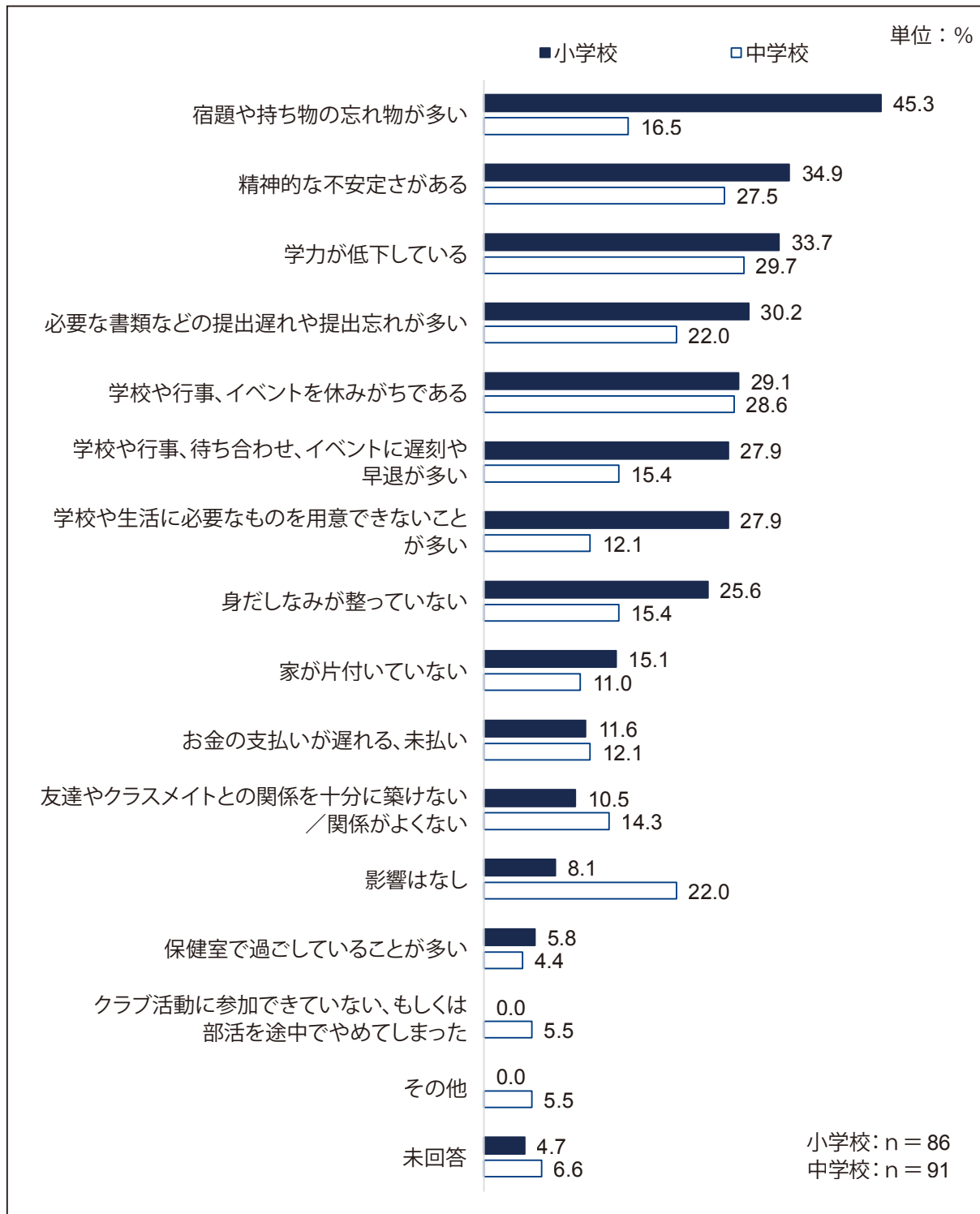


また、具体的な属性としては「親戚」が小学校8人（34.8%）、中学校11人（29.7%）とどちらも最多であった。次いで「具体的にはわからない」が小学校4人（17.4%）、中学校6人（16.2%）、「近隣・ボランティア」が小学校3人（13.0%）、中学校7人（18.9%）であった。



⑮その児童・生徒の生活への影響（問9－15）

その児童・生徒の学校生活への影響について、小学校では「宿題や持ち物の忘れ物が多い」が39人（45.3%）と最多であった。次いで「精神的な不安定さがある」「学力が低下している」「必要な書類などの提出遅れや提出忘れが多い」がすべて30%以上であった。中学校では「学力が低下している」が27人（29.7%）と最多であった。次いで「学校や行事、イベントを休みがちである」「精神的な不安定さがある」「必要な書類などの提出遅れや提出忘れが多い」「影響はなし」が20%以上であった。



⑩その児童・生徒の状況や気づきとその対応（問9－16）

ケアを担っている（担っていた）児童・生徒への具体的な対応について、小学校16人、中学校25人から回答が得られた。

その児童・生徒の状況や気づきとしては、授業中に眠ってしまう、学業に集中できない、課題の提出遅れ、学力の低下、学校を休みがちなどの「学校生活への影響」、衣類の乱れ、食事が摂れていない、睡眠不足などの「日常生活への影響」、精神的な不安定さが見られる、頭痛などの「心身の健康面」があった。そして、その状況や気づきに対する対応としては、話を聞くなど児童・生徒に話を聞く、保護者への連絡、家庭訪問や面談の機会を設けるなど保護者と話す、校内の教員、スクールソーシャルワーカー、子ども家庭支援センターとの連携を取るなどが見られた。

以下、回答の一部を抜粋して掲載する。

【学校生活への影響】

	その児童・生徒の状況・気づき	その状況にどう対応したか
小学校	欠席が多く、学力が低い。覇気がない。友達との関係が築けない。就学前教育を受けていない	sswとの連携により、月一回の家庭訪問。本人面談
中学校	不登校気味だった	担任、通級担任、スクールソーシャルワーカーによる家庭訪問や、登校した際の学習指導など。
中学校	学校を休みがちである。	担任の家庭訪問、スクールソーシャルワーカーと連携して対応、民生児童委員と連携して対応
中学校	特定の友達としか話さない、低学力、日本語教室は意欲的では無かった	個別に話しかける。家庭訪問。日本語教室の先生と相談
中学校	普段の提出物、宿題をしないまま放置してあることが気になり、話をするようになって	学年で共有、親に生徒の現状について話し、困っていることについても相談を受けた
中学校	家庭上の理由での欠席が多かった。	外部機関との連携、家庭訪問
中学校	欠席が増え、連絡がつかないこともあった。	管理職に報告し、関係機関と連携した。
中学校	徐々に欠席することが多くなってきた。	放課後に頻繁に話を聞く。
中学校	本人が養護教諭へ遅刻などの理由を話したため	関係機関につなぐように管理職と相談

【日常生活への影響】

	その児童・生徒の状況・気づき	その状況にどう対応したか
小学校	生活習慣を整えられず、朝の状況が不安定	保護者へ電話。本人への指導。
小学校	常に眠そうでテンションが高い。授業中に寝てしまう事もある。	担任に報告し家庭や通級教員とも連携。
小学校	食事がとれていないことがあった	持ち合わせのものを食べさせた。
中学校	生活全般の支援が不足している	関係機関と連携
中学校	起床しても倦怠感や頭痛があるため、なかなか時間通りに登校できない。	遅れても良いから来たら来てねと伝える。母は学校からの電話に出ないので、本人の携帯番号を聞いておき、連絡が取れるようにした。
中学校	衣類の汚れ、妹のお迎えのため部活を途中であがる、給食のおかわりの量	生活指導部へ報告、SSWとの連携

【心身の健康面】

	その児童・生徒の状況・気づき	その状況にどう対応したか
小学校	いっぱいいっぱいになっていた。	話を聞いて、児童と2人で相談して学校でやる内容は無理のない範囲に変えた。
小学校	本人はとても健気で、学校でも友達が多いほうである。見た目には明るく、精神面での影響は無いように見受けられるが、心の深いところでは自分の置かれた立場をどう感じているのか、わからない部分は多い。	一生懸命に励ますなどして、本児が落ち込まないようにしているほか、定期的に、家庭の様子を聞くなどしている。
中学校	本人の生来のものもあるとは思いますが、精神的に不安定です。	相談や愚痴などがあればすぐ言うように伝えた。また、sswの面談を勧めた
中学校	ストレスが多く、様々なことに不満を持ちがちだった。保健室への来室が増え、話を聞いてほしがっていた。	話を聞いて、困っている部分や中学生が負うことではないと感じた面については、担任から家庭に連絡を入れ、改善してもらえるように促した。
中学校	学校が終わったらすぐに帰らなければいけないので、予定から少し遅れると焦りから怒っていることもあった。	少し落ち着かせてから帰宅させた。

(5) 教員の状況

①教員がその児童・生徒と接するうえで困ったこと(問9-17)

教員がその児童・生徒と接するうえで困ったことについて、小学校17人、中学校26人から回答が得られた。その内容としては、保護者や児童・生徒本人との連絡の難しさ、本人の気持ちの把握、保護者との関係づくり、学校生活への影響等であった。困ったことが「なかった」という回答は6件あった。

以下、回答の一部を抜粋して掲載する。

【連絡が取れない】

小学校	本人と連絡がつかない時がある。
小学校	母との連携がとれない。面談を3回断られた。持ち物が揃わず、宿題もやってこない、学校の流れに乗れないために個別指導に多くの時間が割かれる
小学校	欠席連絡がないことがあり、保護者との連絡が困ることがある。
中学校	連絡が取りづらい、取れないことが多い
中学校	連絡先が母親の携帯のみで、本人と話したくても母親を経由しなければならなかったこと
中学校	登校できない。保護者ともなかなか連絡が取れない。

【児童・生徒の気持ちや状況がわからない】

小学校	本人が困り感を表さない
小学校	どこまでが負担になっているのかわからなかった
小学校	本人が本当の気持ちを言えているか(家族に対して、学校に対して)が確信がもてない。
中学校	本人は家族への気持ちが強く、学力面の困り感がなかったところ
中学校	家族のことを具体的に聞きにくい

【保護者との関係づくり】

小学校	母親の精神面が大きく影響するので、突発的に爆発することがあった。
中学校	母と日本語が通じないことが多いです。
中学校	母親との関係づくり
中学校	何を言っても親が理解しようとしらない。
中学校	その生徒に指導したことを保護者に連絡しても他の兄弟に手がかかっているようで、あまりよく話をする事ができなかった。

【学校生活への影響】

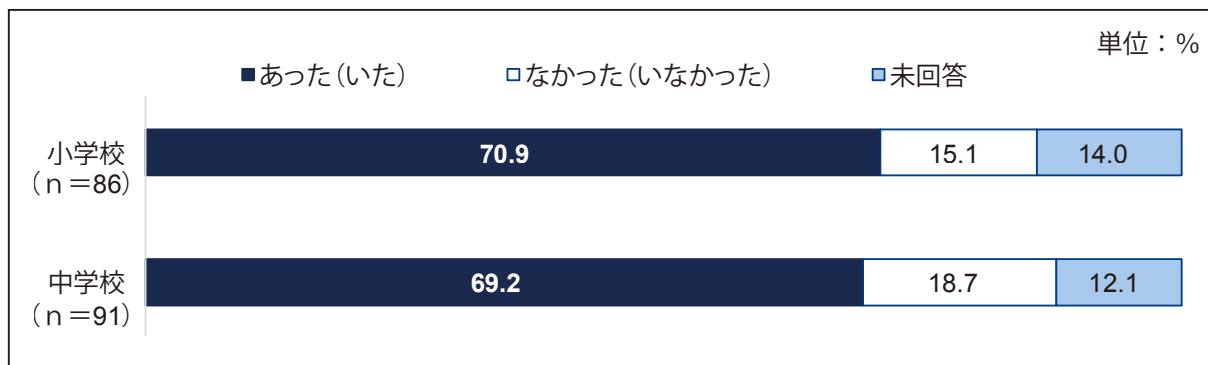
中学校	提出物等、書類
中学校	悪い生徒ではないが、自分の能力を超えた分まで頑張ろうとする。やり切ろうとはするが、期限までに終わらずに遅刻等の原因になる事もある。

【その他】

小学校	精神状態が不安定で対応に困った
小学校	万引きなどの行為があった

②教員が相談できる場所・相手（問9-18、問9-18-①）

教員が相談できる相手や場所の有無については、「あった(いた)」が小学校61人(70.9%)、中学校63人(69.2%)であった。



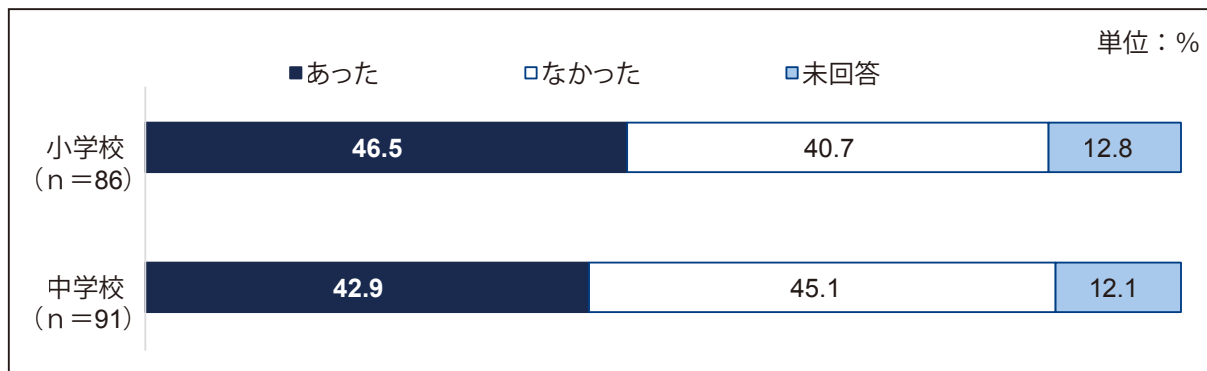
教員が相談できる相手や場所の詳細について、86件の自由回答が得られた。回答内容としては、管理職以外の教員が最も多く、次いで管理職(校長、副校長)など、学校内の関係者が最も多かった。学校外の関係機関では、子ども家庭支援センターという回答が多く得られた。以下、内訳表を掲載する。

カテゴリ名(内訳)	回答件数
管理職以外の教員(同僚14・学年教員8・担任7・学年主任1・生活指導主任1・ほか教員7)	38
管理職(管理職26・校長副校長2・校長1・管理者1)	32
子ども家庭支援センター(子ども家庭支援センター6・家庭支援センター2・みらい2・子家1・子家セン1・支援センター1)	13
スクールカウンセラー	9
学校職員(学校支援員3・学校の職員2・周りの職員1・巡回校教員1・教職員1・同僚職員1)	8
スクールソーシャルワーカー	7
民生児童委員(民生児童委員3・民生委員1・児童委員1)	5
学内会議体(学年会1・生活指導部1・生活指導部会1・校内特別支援委員会1)	4
養護教諭	3
学校	2
関係機関	1
日本語教室教員	1
警察	1
児童相談所	1
判別不可	2

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることがある。

③教員と他機関の連携（問9-19、問9-19-①）

ケアを担っている（担っていた）児童・生徒とかかわるうえで困ったとき、他機関との連携が「あった」が小学校で40人（46.5%）、中学校で39人（42.9%）であった。

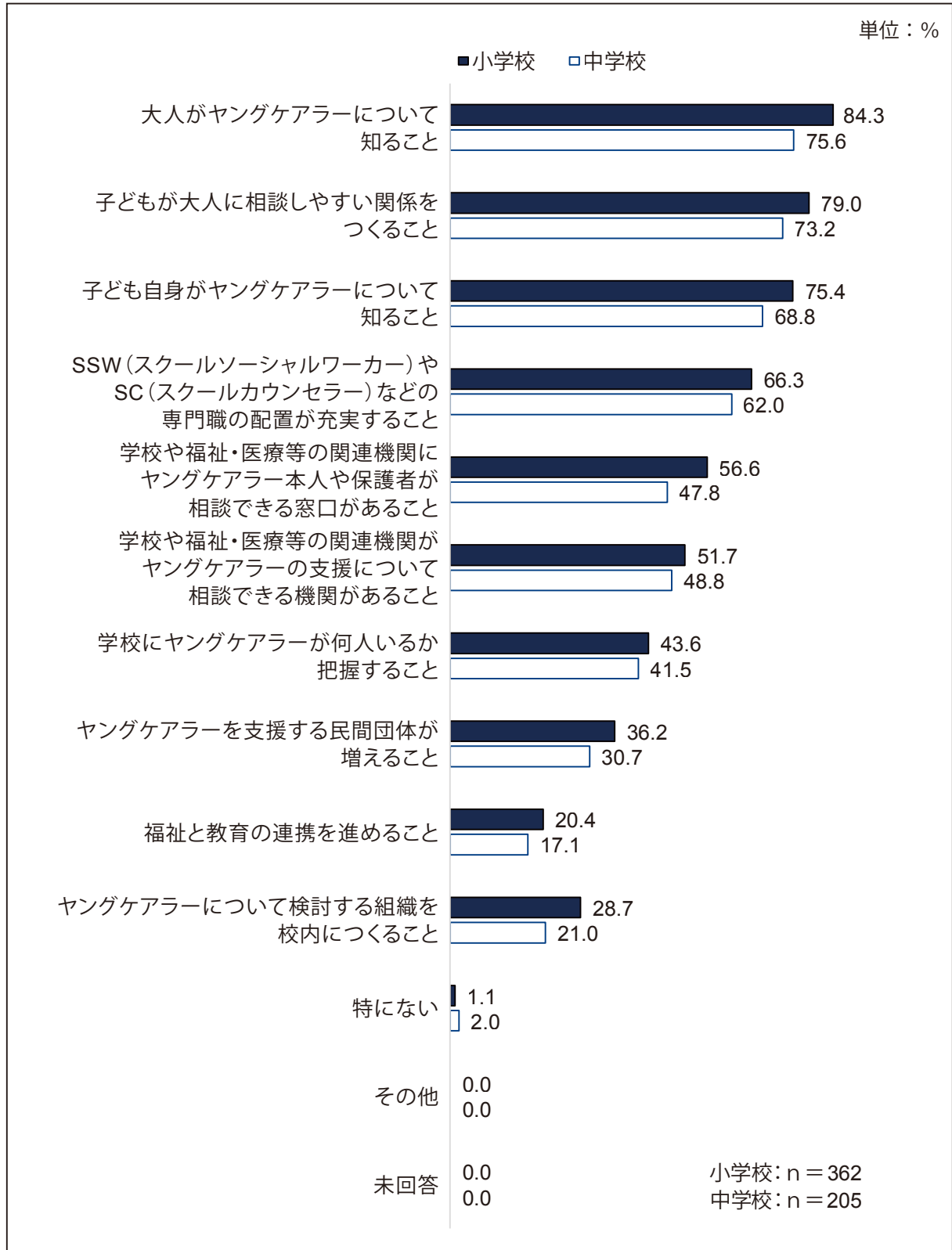


機関の詳細については、小学校31人、中学校29人から回答が得られた。その内容については、子ども家庭支援センター「みらい」「たち」が40件、スクールソーシャルワーカーが13件、児童相談所が8件、民生児童委員が2件、管理職が2件、地域住民が2件、スクールカウンセラーが1件、生活保護課が1件であった。

(6) 支援体制について

①ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと (問 10)

ヤングケアラーを支援するために必要だと思うことについて、小学校 362 人、中学校 205 人から回答が得られた。最も多かった回答は「大人がヤングケアラーについて知ること」で、小学校が 305 人 (84.3%)、中学校が 155 人 (75.6%) であった。次いで「子どもが大人に相談しやすい関係をつくること」「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」であった。



②福祉と教育の連携についての具体的な意見（問10-1）

問10において、「福祉と教育の連携を進めること」と回答した小学校の74人(20.4%)、中学校の35人(17.1%)に、その具体的な回答をたずねたところ、62件の回答が得られた。その内容をカテゴリに分類した結果、「学校とその他福祉機関との情報交換・共有・連携」が28件、「福祉と教育の連携への具体的な要望」が11件、「福祉と教育の橋渡しや余裕のある対応のための人的配置」が9件、「教員が外部に気軽に相談できる環境づくり」が7件、「福祉制度と教育制度の充実」が4件であった。

以下、カテゴリの内訳および回答を一部抜粋し掲載する。

カテゴリ	回答件数
学校のその他福祉機関との情報交換・共有・連携	28
福祉と教育の連携への具体的な要望	11
福祉と教育の橋渡しや余裕のある対応のための人的配置	9
教員が外部に気軽に相談できる環境づくり	7
福祉制度と教育制度の充実	4
分類不可	10

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることがある。

【学校とその他福祉機関との情報交換・共有・連携】

福祉で把握しているヤングケアラーがいるのなら、学校に情報を提供してほしい
児童相談所や家庭支援センターとの情報共有
連絡会が定期的に行われると良いが、そのための人的配置が必要
教師が仕事の負担を減らして、そういった児童を外部で連携できる時間があると良いと思う

【福祉と教育の連携への具体的な要望】

本人や保護者が直接相談できない状況もあるかと思います。子供の状況に気づいた人が、大丈夫なのか連絡をする民間団体などがあるとよいかと思います。
福祉側が学校で生徒や教員に対してヤングケアラーについて話をしたい。
個別のケース会議を開いていく。

【福祉と教育の橋渡しや余裕のある対応のための人的配置】

まずは、SSWが定期的に各学校に派遣されることが必須だと考える。
両者の橋渡しとなる人がいるとよい
子ども家庭支援センターや児童相談所の忙しさを解消する人的補助が必要

【教員が外部に気軽に相談できる環境づくり】

教師が気軽に相談できるシステムがあればありがたい
教員の相談窓口があり、気軽に連絡がとれ、必要な対策をとってもらえる機関が必要
府中市はSSWに相談するのも管理職を通さないと話が直接できないシステムになっていて、敷居が高い。気軽にSSWに連絡ができて、相談できる体制にしてほしい。

【福祉制度と教育制度の充実】

学校の役割と福祉の役割の明確化
問題意識をもってすぐ動けるように、教員や児童、保護者が守られるように、福祉施設や制度が充実すること。安心して進捗状況が追える制度であること。

③府中市でヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うこと（問11）

府中市でヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うことについて、176人から自由記述による回答が得られた。その回答内容を検討し、カテゴリ分類を行った。

その結果、最も多かったものは「支援体制整備と情報連携」で53件(28.8%)であった。次いで「市民へ認知の拡大・普及啓発」が37件(20.1%)であった。以下、カテゴリの内訳と回答を一部抜粋し掲載する。

要素n=184

No.	分類	要素(n)	割合(%)	キーワード
1	支援体制整備と情報連携	53	28.8	支援・組織・体制・福祉・連携・専門・団体・資金
2	市民へ認知の拡大・普及啓発	37	20.1	講演・広報・認知・自覚
3	職員の知識と理解の向上	25	13.6	知識・ガイドライン・理解・認識・研修
4	実態把握・現状調査	22	12.0	実態・把握
5	相談や対話、気配り	20	10.9	対話・相談・気配り・意識・窓口
6	アンケートの感想	10	5.4	感想
7	要望や考え	16	8.7	思想・要望
8	特になし	1	0.5	特になし

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなる可能性がある。

【支援体制整備と情報連携】

ヤングケアラーは、大人が担う役割を保護者が果たせる状況でないことが前提としてあるので、学校だけが窓口ではなく、近所の人が見ついて相談できる場所があるとよいかと思いました。ヤングケアラーの家族に対して見守りや家事、身の回りの世話、介助などの支援を受けやすい状況を作ることが必要なのでは、と感じます。

ヤングケアラーがどういうことが、本人や家族が知ることが必要。身近な地域で相談できる場所と専門スタッフの常駐がほしい

相談援助の窓口はあっても、受けられる具体的サービスや支援内容が明確にわかるような仕組みがほしい。ケアラーに限ったことでないが、何かあったらという連絡以外にも、登校状況や気になる行動や様子など、定期的な情報共有の仕組みがほしい。

【市民へ認知の拡大・普及啓発】

本人がヤングケアラーと思っていない、家の仕事をするのが当たり前とっていたり、情報を得る機会がなかったりすることがあると思う。学校で専門の人の話を聞く機会があればいいと思う。先生が話をしても、うまく伝わらない気がする。

自分ではなかなか言い出せなかったり、そもそも「自分はヤングケアラーだ」と自覚している子供は少ないと思うので、このような機会があることで認識することができると感じました。

啓発活動。家庭支援が必要な児童は多いので、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの方の配置を一層充実してほしいと思います。

【職員の知識と理解の向上】

生徒の状況を聞いた時、特に幼い弟妹の面倒を見るのがヤングケアラーに類するのかわかりません。弟妹のために学校を休むのであれば、そうだと判断できますが、幼稚園や保育園に迎えに行くために部活動を休むとかでもヤングケアラーに入るのか、自分の知識不足や認識不足を感じます。

家庭の状況を把握し具体的に支援するのは学校では難しいので、どのように関わっていけばよいのか、今後学んでいく必要があると思いました。

ヤングケアラーを見つけられるのはやはり学校が多いので教員の研修を充実させてほしい。

【実態把握・現状調査】

ヤングケアラーへの早急な支援は重要である。しかし、実態把握をする方法が大変難しいと感じる。繊細な個人情報絡むことなので、少なくとも学校などではなく、国、自治体レベルでの対応が必要であると思う。また、対応についても専門機関が必要である

難しい問題です。あまりかわり過ぎても私的な事情があり嫌がる子もいる。相談しやすい環境をつくり、現状を把握することが第一歩。

なかなか学校にいる子どもで見えていないこともあるので、しっかり把握する方法があればと思う

【相談や対話、気配り】

児童が気軽に相談できる環境を整えること。ヤングケアラーのことだけでなく、いじめの早期発見等にも繋がると思います。

ヤングケアラーに対して、すべて学校や学校内で対応するよりは、学校外に対応する窓口や機関があったほうがケアラー本人にとって、学校とケア関係を分けて考えやすい。そうした方が、学校を安心できる場所、自分が子供らしくいられる場所にできるのではないかと。

難しいことだとは思いますが、市民一人一人が、ヤングケアラー問題を、他人事と思わずに、当事者意識をもって、自分の身近な子供を見つめ、声をかけることをめざす。難しいことと思わずに、できるところから始めるなど、ハードルや窓口を低くして間口を広げること。

【要望や考え】

家庭のことには、なかなか踏み込めないし、子どもも話したがらない。困っているのではないかと、声をかけても大丈夫ですと距離をおかれてしまう。難しい問題だと思う。

府中市内におけるヤングケアラーの実態が分からないことと、家庭への踏み込みが学校にできるほど権限があるわけでもないため、改善策が困難な気がする。

教職員の業務量の削減が、こういったケースの対応にもつながると考えています

【アンケートの感想】

アンケートを実施することで、ヤングケアラーを知らない人が知るきっかけになると思った。

ヤングケアラーがいるかもしれない、という意識をもって子どもたちと関わろうと思うことができました。

3. まとめ

(1) 学校教育現場におけるヤングケアラーへの認識と実態の把握について

ヤングケアラーという言葉と概念の認識状況を尋ねた設問では「言葉とその概念を認識しているが、学校としては特別な対応をしていない」が小学校で50.6%、中学校で47.8%と最多であり、次に「言葉とその概念を認識しており、学校として意識して対応している」が小学校で34.0%、中学校で40.5%であった。小学校・中学校ともに回答者の8割以上がヤングケアラーという言葉とその概念を認識していた。

「言葉とその概念を認識しており、学校として意識して対応している」と回答した教職員のうち、ヤングケアラーと思われる子どもの実態把握に関しては、「該当する子どもはいない」が小学校で43.9%、中学校で22.9%と21ポイントの差で小学校が上回っていた。また、「実態を把握している」では小学校が35.8%、中学校が43.4%であった。「ヤングケアラーと思われる子どもはいるが実態を把握していない」では小学校が20.3%、中学校が33.7%と中学校が上回っていた。

実態把握の状況から、中学校の方が小学校よりもヤングケアラーと思われる子どもの実態を把握している割合は高かったが、その一方で、ヤングケアラーと思われる子どもはいるが実態を把握していない割合も少なくない現状であった。

(2) ヤングケアラーとみられる児童・生徒への対応経験と気づく経路について

これまでにかかわっている(かかわってきた)児童・生徒のなかでヤングケアラーとみられる子どもが「いた」と回答したのは、小学校で86人(23.8%)、中学校で91人(44.4%)であった。

そのうち担任以外である場合が小学校で73.3%、中学校で76.9%と高い割合であることがわかった。また、かかわっている(かかわっていた)時期として、小中学校ともに一昨年以前からのかかわりが約4割と多く、国がヤングケアラーの取り組み強化する以前から対応している状況であった。

児童・生徒がケアをしている状況に気づく経路は、「その児童・生徒本人の話から」が小学校で62.8%、中学校で57.1%と最も多く、次いで「他の教職員の話から」が小学校で32.6%、中学校で39.6%であった。詳細としては、学校での会議において、職員室内での雑談、部活動を通して聞くという回答もあった。

中学校でヤングケアラーと思われる子どもに気づき、その実態を把握する割合が高くなる背景としては、部活動など学級担任以外の教員との関わりが増えること、お世話による影響(学力の低下、欠席が多くなる等)が顕在化することが考えられる。

(3) ヤングケアラーとみられる児童・生徒の状況と対応の実態

ヤングケアラーとみられる児童・生徒がケアしている相手は、小学校・中学校ともに「きょうだい」が約5割と最も多く、次いで「母親」が約3割であった。また、ケアの相手の状況は、「幼い」「日本語が苦手」「精神疾患※疑いを含む」が多い傾向にあった。

ケアの内容は、「家族の代わりにきょうだいの世話をしている」が最も多く、次いで、「障がいや病気のある家族に代わり、家事(買い物、料理、洗濯、掃除など)をしている」「家族の通訳をしている(日本語や手話など)」「家族の感情面のサポートをしている(愚痴を聞く、話し相手になる)」の順で多い傾向にあった。

児童・生徒がケアすることになった理由について「知っている」と回答したのは小学校で31人(36.0%)、中学校で37人(40.7%)であったが、具体的な理由は、小学校では「親が仕事で家族のケアに十分に携われない」「年下のきょうだいがいる」「他にする人がいない」が約4割、中学校では「親の病気・障がい・精神疾患や入院のため」が約4割で、学年層によってケアをしている理由が異なっていた。

教員が把握しているヤングケアラーとみられる児童・生徒への影響としては、欠席の増加や不登校が多く挙げられた。次いで学力低下や遅刻などの学校生活、睡眠不足など生活習慣、精神的な影響の順であった。その児童・生徒への対応としては、子ども本人に話を聞く、保護者と話す、スクールソーシャルワーカーや行政などの関係機関と連携する等を行っていた。

また、これまでにかかわってきた児童・生徒のなかでヤングケアラーとみられる子どもがいたと回答した教員のうち 24.2%が対応に困っており、その内容としては、保護者や児童・生徒本人と連絡が取れない、子どもの状況や本心を把握することができない、家庭内のことに関与しづらく、介入できないために支援が進まない、という回答が複数あった。

また、教員がヤングケアラーとみられる児童・生徒に対応する際に相談できる人や場所については、小中学校ともに「あった(いた)」約7割、「なかった(いなかった)」約2割であった。教員が対応に困った際に相談できる体制が求められる。

(4) ヤングケアラーとみられる児童・生徒を支援していくために教員が望んでいること

ヤングケアラーを支援するために必要だと思うことについては、小中学校ともに「大人がヤングケアラーについて知ること」「子どもが大人に相談しやすい関係をつくること」「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」という回答が多かった。

自由記述では、学校で児童・生徒がヤングケアラーについて知る必要があること、学級担任だけの対応や把握は難しいため自治体や専門機関との連携が必要である、実際に教育現場でヤングケアラーと思われる児童・生徒と出会ったときにどのような対応をしたら良いのか、どのような支援があるのかを知りたい、という意見があった。

学校と福祉・医療等の連携を進める中で必要だと感じることについては、福祉機関との情報交換や情報共有、福祉機関と学校の橋渡しなどの人的配置、気軽に相談できる環境づくりに関する意見があった。特に、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの人数を増やしてほしいやスクールソーシャルワーカーの定期巡回など、専門職が学校現場に出向き一緒に考えるシステムがほしい、といった専門職の配置について求める意見があった。

第4章

関係機関調査

目次

1. 調査概要	108
(1) 調査設計	108
(2) 回収状況	108
(3) 調査結果の見方	109
2. 機関向け調査結果	109
(1) 基本属性	109
(2) ヤングケアラーについて	111
① ヤングケアラーの認識	111
② ヤングケアラーと思われる子どもの把握状況	111
③ ヤングケアラーと思われる子どもの把握方法	111
④ ヤングケアラーと思われる子どもの有無	111
⑤ ヤングケアラーと思われる子どもへの対応	112
⑥ ヤングケアラーを支援するために必要なこと	112
⑦ 学校と福祉・医療等の連携について	113
(3) ヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うこと	115
3. 個人向け調査結果	117
(1) 基本属性	117
(2) ヤングケアラーについて	119
① ヤングケアラーの認識	119
② ヤングケアラーと思われる子どもの把握状況	119
③ ヤングケアラーと思われる子どもの把握方法	119
(3) ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験	120
① ヤングケアラーと思われる子どもの有無	120
② ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験の有無	120
③ その子どもの学年	120
④ 気づいた経路	121
⑤ 「同職場の他の職員の話から」の気づき	121
⑥ 「学校および他の関係機関から」の気づき	122
⑦ 「その他」の気づき	122
⑧ その子どもの性別	122
⑨ その子どもの家族構成	123
⑩ その子どもがケアをしている相手	123
⑪ その子どものほかにケアをしている人の有無	123

⑫ 一緒にケアをしている人	124
⑬ その子どもがケアをしている相手の状態	124
⑭ その子どもがしているケアの内容	125
⑮ その子どもがケアをしている期間の把握	125
⑯ その子どもがケアをしている期間	126
⑰ その子どもがケアをしている理由の把握	126
⑱ その子どもがケアをしている理由	126
⑲ その子どもがケアをしている具体的な状況	127
⑳ その家庭の支援者の有無	128
㉑ その家庭を支援している人・サービス	128
㉒ その子どもへの影響	129
㉓ その子どもについて気づいたこととその対応	130
㉔ その子どもとかかわるうえで困ったこと	132
㉕ 相談できる相手や場所の有無	133
㉖ 相談できる相手や場所の状況	133
㉗ 他機関との連携の有無	133
㉘ 連携した機関の具体的な状況	133
㉙ ヤングケアラーと思われる子どもがいるか、わからない理由	134
㉚ ヤングケアラーを支援するために必要なこと	135
㉛ 学校と福祉・医療等の連携を進めること	136
(4) ヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うこと	138
4. 子ども・若者支援団体向け調査結果	140
(1) 基本属性	140
(2) ヤングケアラーについて	140
① ヤングケアラーの認識	140
② ヤングケアラーと思われる子どもの把握状況	140
③ ヤングケアラーと思われる子どもの有無	140
(3) ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験	141
(4) ヤングケアラーへの支援について	141
5. まとめ	143
(1) ヤングケアラーの認識と把握状況について	143
(2) ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験について	143
(3) 関係機関から見た家族のケアをしている子どもの状況と支援の実態	144
(4) 連携体制の状況と関係機関が望むこと	144

1. 調査概要

(1) 調査設計

目的	子どもおよび支援や介護を要する人に関係した機関および機関に所属する個人、子ども・若者支援団体を対象としたアンケート調査を実施し、家事や家族の世話などを日常的に行っている子ども(ヤングケアラー)への気づきや対応の実態、また子どもの置かれた生活状況および支援の課題を明らかにするとともに、支援施策等の検討を行うための基礎資料とする。
調査対象者	①市内の子どもおよび支援や介護を要する人に関係した機関 ②市内の子どもおよび支援や介護を要する人に関係した機関に所属する個人 ③市内の子ども・若者支援団体
調査方法	市内の関係機関および子ども・若者支援団体へ調査依頼文を直接または郵送、メールにて配布し、回答者本人が個人の端末から Web アンケートフォームにアクセスし回答するよう依頼した。関係機関を対象とした調査では、機関として回答する「機関向け調査」と個人として回答する「個人向け調査」の2つを準備した。また「機関向け調査」へは代表者1名が回答するよう依頼した。
調査期間	①関係機関調査(機関向け) 令和5年9月25日(月)～10月22日(日) ②関係機関調査(個人向け) 令和5年9月25日(月)～10月22日(日) ③子ども・若者支援団体調査 令和5年10月16日(月)～11月30日(木)

(2) 回収状況

関係機関調査(機関向け)の回収総数は179。うち、有効回答数は179(24.6%)。関係機関調査(個人向け)の回収総数は169。うち、有効回答数は169(25.0%)。子ども・若者支援団体調査の回収総数は5。うち、有効回答数は5(26.3%)。

調査対象	対象者数 ^{※1}	回収総数 ^{※2}	有効票 ^{※3}		無効票 ^{※4}
			票数	割合	
関係機関(機関)	727	179	179	24.6%	0
関係機関(個人)	677	169	169	25.0%	0
子ども・若者支援団体	19	5	5	26.3%	0

※1 対象者数:関係機関(機関)は調査対象となる関係機関数(令和5年9月現在)。関係機関(個人)は調査対象となる関係機関に所属する個人で、実際に調査依頼が可能であった数。子ども・若者支援団体は市内の子ども・若者支援団体数(令和5年9月現在)。

※2 回収総数:ウェブ回答の回収総数

※3 有効票:回収総数から無効票を除いたもの

※4 無効票(無効回答):ログインのみ、未入力で送信されたもの、およびログイン後属性全未回答のもの。

(3) 調査結果の見方

- 回答結果の割合(%)は有効サンプル数に対し各回答数の割合を小数点第2位で四捨五入しているため、単数回答(複数の選択肢から1つの選択肢を選ぶ)であっても合計が100%にならない場合がある。
- 複数回答(2つ以上の選択肢を選択できる質問)の場合、回答は選択肢ごとの有効回答数に対しそれぞれの割合を示しているため、合計が100%を超える場合がある。
- 図表内の「n=」はその設問についての集計対象件数を示している。母集団のデータの数を示す場合は「N=」と表記する。
- 集計サンプル数が少ない属性項目については1サンプルあたりの重みが大きく比率が変動しやすいため、結果の利用には注意を要する。
- 自由記述による回答の集計・分析にあたっては、個人の特定につながる情報(人名、固有名詞等)をすべて削除したうえで図表の作成および回答例の掲載を行っている。
- 「お世話」とは本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などをすることを示す。
- グラフ上の「関係機関施設」は機関としての回答である。

2. 機関向け調査結果

(1) 基本属性

①性別(問1)

回答者の性別は、女性が102人(57.0%)、男性が74人(41.3%)であった。

②年齢層(問2)

回答者の年齢層は、「50代」が36.3%と最も多く、次いで、「40代」33.0%、「60代」20.1%であった。

	20代	30代	40代	50代	60代以上	未回答	合計
人	1	17	59	65	36	1	179
%	0.6%	9.5%	33.0%	36.3%	20.1%	0.6%	100.0%

③役職(問3)

回答者の役職としては、「園長・所長・施設長」が59.2%と最も多く、次いで、「部長・所属長」が11.7%であった。

	人	%
n	179	179
園長・所長・施設長	106	59.2
副園長・副施設長	4	2.2
部長・所属長	21	11.7
次長・課長・係長・主幹・主査・主任	8	4.5
指導員	2	1.1
一般職員	15	8.4
その他	17	9.5
未回答	6	3.4

④主な職種（問4）

回答者の職種としては、「介護職員」が22.3%と最も多く、次いで「保育士」が18.4%であった。

	人	%
n	179	179
保育士	33	18.4
相談員	9	5.0
介護職員	40	22.3
事務職員	14	7.8
ケアマネジャー	21	11.7
ケースワーカー	1	0.6
民生・児童委員、主任児童委員	0	0.0
社会福祉士 (SCW、SSW、MSW)	11	6.1
医師	5	2.8
保健師	3	1.7
助産師	0	0.0
看護師	8	4.5
臨床心理士・公認心理士	1	0.6
その他	27	15.1
未回答	6	3.4

⑤施設または所属区分（問5）

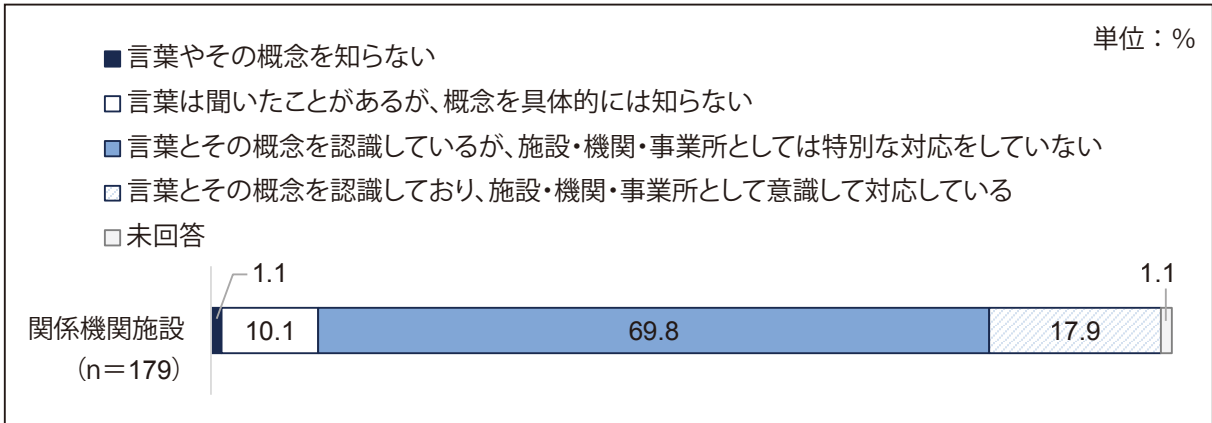
回答者の施設・所属区分としては、「保育所」が17.3%と最も多く、次いで「居宅介護支援事業所」と「介護・高齢者福祉施設」が12.8%、「障害者福祉施設」が12.3%であった。

	人	%
n	179	179
保育所	31	17.3
居宅介護支援事業所	23	12.8
介護・高齢者福祉施設	23	12.8
障害者福祉施設	22	12.3
訪問介護事業所	18	10.1
放課後等デイサービス	11	6.1
医療機関	11	6.1
訪問看護事業所	9	5.0
地域包括支援センター	8	4.5
幼稚園	5	2.8
計画相談事業所	5	2.8
児童福祉施設	3	1.7
社会福祉協議会	1	0.6
その他保育施設	1	0.6
保健所	1	0.6
その他（自由記述）	5	2.8
無回答	2	1.1

(2) ヤングケアラーについて

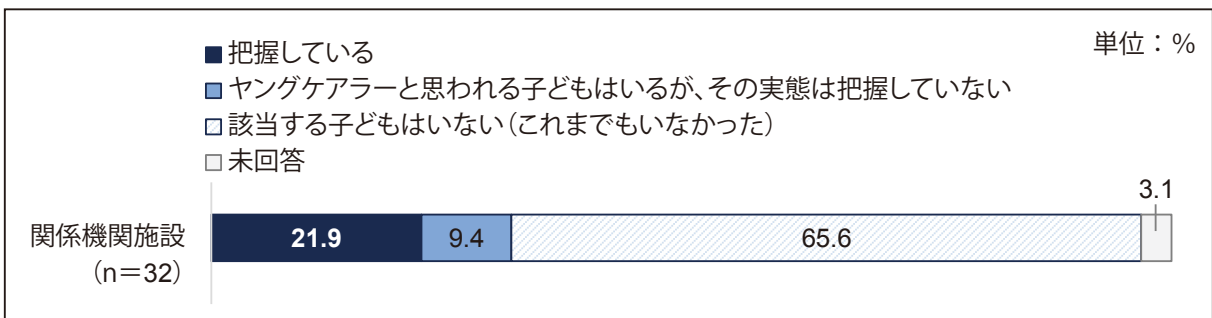
①ヤングケアラーの認識 (問6)

ヤングケアラーという言葉とその概念について、「言葉とその概念を認識しているが、施設・機関・事業所としては特別な対応をしていない」が69.8%と最も多かった。一方で、「言葉とその概念を認識しており、施設・機関・事業所として意識して対応している」が17.9%であった。「言葉は聞いたことがあるが、概念を具体的には知らない」「言葉やその概念を知らない」を合わせると11.2%であった。



②ヤングケアラーと思われる子どもの把握状況 (問7)

「意識して対応している」と回答した32人のうち21人(65.6%)が「該当する子どもはいない(これまでもいなかった)」という状況であった。

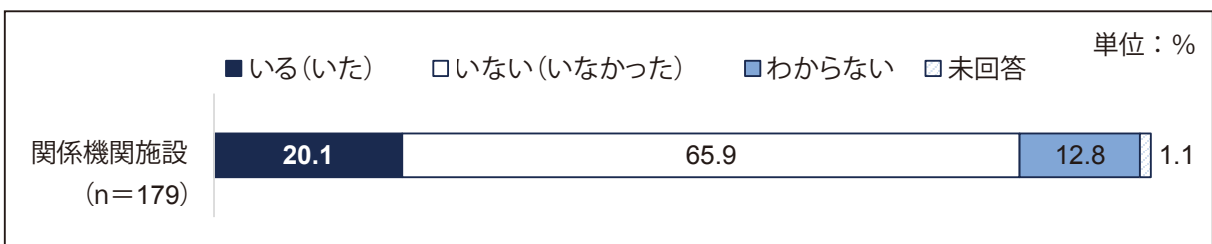


③ヤングケアラーと思われる子どもの把握方法 (問7-①)

「把握している」と回答した8人のうち、5人は「特定のツールはないが、できるだけヤングケアラーの視点を持って検討・対応している」という状況であった。

④ヤングケアラーと思われる子どもの有無 (問8)

「いない」が65.9%と最も多く、次いで「いる」が20.1%、「わからない」が12.8%であった。



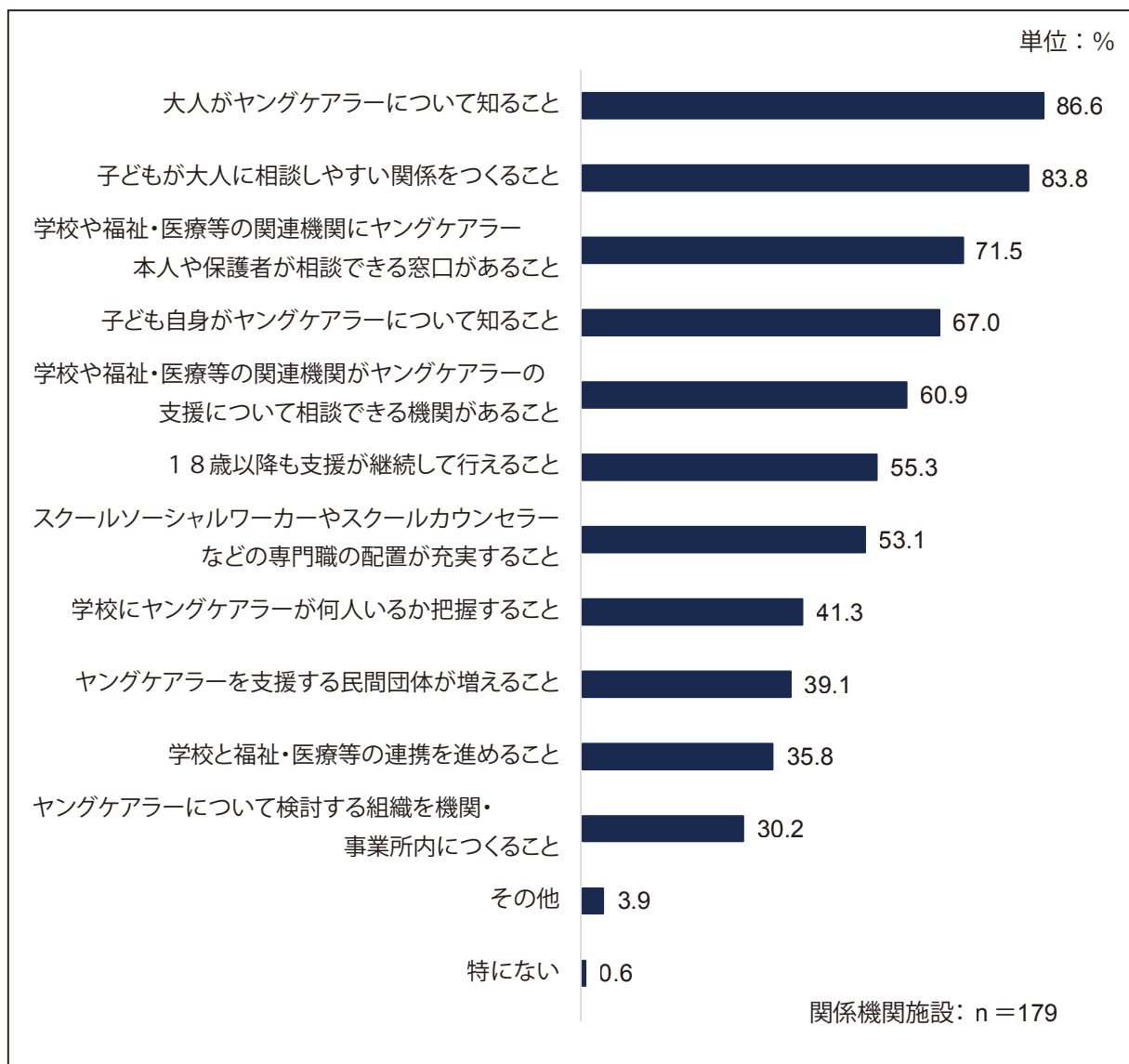
⑤ヤングケアラーと思われる子どもへの対応（問9）

「いる」と回答した36人のうち、子どもに対応した経験があるのは18人と半数であった。

問10については、調査フォームの不備により回答が得られなかった。

⑥ヤングケアラーを支援するために必要なこと（問11）

「大人がヤングケアラーについて知ること」が86.6%と最も多く、次いで「子どもが大人に相談しやすい関係をつくること」が83.8%、「学校や福祉・医療等の関連機関にヤングケアラー本人や保護者が相談できる窓口があること」が71.5%、「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」が67.0%であった。



⑦学校と福祉・医療等の連携について（問 11 - ①）

学校と福祉・医療等の連携を進めることについて、55人から自由記述による回答が得られた。その内容は、「支援体制の整備」に関する意見が半数以上であり、他に「情報共有・定期的な情報交換」「実態把握の必要性」に関する意見が得られた。以下、回答の一部を抜粋して掲載する。

【支援体制の整備】

保育所	保育所や学校等でケアが必要な家庭があった場合、中枢で情報を取りまとめる機関が情報収集や各関係機関に情報提供をして共有できる仕組みがあるといい。その仕組みが図式化されて市民に周知されるとわかりやすいのでは。
保育所	ヤングケアラーを学校でも把握し、適切な援助を受けられるように、また情報が与えられるように連携していくこと。
保育所	学校や保育園にヤングケアラーがいた場合、療育を受けている方が通っている医療機関と連携をし、ヤングケアラーに負担がいかないように送迎をし、ヤングケアラーのケアも連携して行う。
地域包括支援センター	相談できる同士でいられるよう、連絡会議など通じてお互いの業務連携をしていく。
居宅介護支援事業所	子どもの家庭状況を把握できる学校の教師が、子どもがヤングケアラーになっている事に気づきやすい。その教師が、相談や通報のできる専門機関が必要。
居宅介護支援事業所	まずは ssw 等の専門職の配置が充実し、保健所の保健師等に情報が集約されたのちに個別の相談支援の流れを関係者が共有することからと考えます。
訪問看護事業所	様子がおかしい子どもを学校だけでは対応する事に限界がある。要介護者が自宅にいる子どもの聞き取りをし、支援が必要だと学校が判断した際に、相談できるホットラインや教師向けの研修があるなど。教師も介護の分野についての知識があるわけではないので敷居をさげて対応できるような工夫が必要かと思う。
障害者福祉施設	福祉現場でヤングケアラーと疑われる利用者の子どもの確認できても、保護者である利用者の了承を得ないと介入が難しい状況があります。学校との連携が図れるとヤングケアラーの実態がつかみやすく、介入するチャンスが増えたと考えられます。多くの場合は子どもの情緒不安定や不登校、無気力などが見られますが、保護者である利用者を支援している立場からだけでは子どもへの働きかけが十分に行えません。
放課後等デイサービス	利用者の家庭環境や子どもの様子について、学校・医療となかなか連携ができておらず、それが可能となれば、総合的かつ包括的な支援がヤングケアラーに実施できると思われる
放課後等デイサービス	学校若しくは医療がヤングケアラーを把握した時点で市、福祉と繋がってほしい。助け合いの範囲を超えて介護を子供が担い、少しでも負担に感じている事があつたら身近な大人が話を聞いて、制度を利用して生活の負担軽減を図ってほしい。
放課後等デイサービス	特に学校では、ヤングケアラーであり得そうな子どもを日常的に発見しやすいのではないかと思う。そこから、福祉や医療へと連携し対応出来たらとおもいます。
保健所	学校生活に支障をきたしたり、不登校となったりした子供に対して、「登校」や「学校生活の安全」に着目した働きかけだけでなく、当人が将来にわたって健康で安全な生活が営めるように、保健福祉・医療等といいタイミングでつながれること。

【情報共有・定期的な情報交換】

保育所	虐待と同様に対象児童がいる場合は関係施設があつまりケース会議を開いて組織的に支援を行う
保育所	情報共有の機会が継続的にあることと情報共有の認識を統一すること
居宅介護支援事業所	学校のソーシャルワーカーが要介護者である親の担当者会議に出る等。
居宅介護支援事業所	学校と福祉、介護業者とのカンファレンスの場を作る必要がある。
介護・高齢者福祉施設	それぞれが相談しやすい様に顔の見える関係作りをする(何か月かに1度の定例会議などの実施)。双方が実態の把握と情報の共有に努める。
介護・高齢者福祉施設	スクールカウンセラーと地域包括支援センターが情報共有することで、ヤングケアラーが本来負担しなくてもよい部分を介護福祉サービスで担うことが出来ると感じる。
地域包括支援センター	圏域ごとでの定期的な情報交換の場が設置できないか。
地域包括支援センター	世帯全体への支援として多機関が参加するケア会議の開催
社会福祉協議会	学校が把握している、何らかの支援を要する児童(家庭)の情報共有の場。
計画相談事業所	地域包括支援センターのケアマネ、相談支援専門員が学校との連携を行う時にハードルが高いので、家族の状況など学校から情報提供をしてほしい。
放課後等デイサービス	個人情報保護もあり、各家庭の情報が見えにくくなってきたため。
障害者福祉施設	学校と行政、医療機関、包括、社協等が情報交換、共有し必要な社会資源調整をする
医療機関	福祉・医療関係の方が来校し、チームティーチングする事。
訪問介護事業所	学校や医療での支援、自宅での支援者ができることは明らかに違うため、連携や共有することで役割や関わり方が見えてくるかと思っています。
市介護・高齢者相談部門	個別の事案を通じたケース会議、ヤングケアラーをテーマにした地域会議(市全体、中学区域ごと等)

【実態把握の必要性】

訪問介護事業所	ヤングケアラーや介護が必要な家族・子供の自宅での様子はわかっているが学校などでの生活は本人から聞く以外の情報収集策がない。学校、医療の役割、家庭での支援者の役割は同じではないため、共有・把握が必要。
福祉用具貸与事業所	自分からいえない、気づけないので、声をかけるだけでなく、きちんと話しをして引き出す
保育所	ヤングケアラー児の通っている施設が、その環境を一番把握できると思うので連携が必要である施設をしっかりと把握して連携が取れると良いと思う。
障害者福祉施設	実態が把握できていないため答えられない。ただ、学校で把握できる部分は限られているため教員の増員、福祉現場で働く人間の増員を行わないことには今以上の業務をこなしていくことが不可能に近い。

(3) ヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うこと (問 12)

府中市でヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うことについて、75人から自由記述による回答が得られた。その内容を検討し、以下のようにカテゴリ分類を行った。

最も多かったものとしては、「支援体制整備と情報連携」が37件(40.7%)であった。次いで「市民への認知の拡大・普及啓発」が17件(18.7%)、「相談や対話・気配り」が11件(12.1%)であった。

以下、回答を一部抜粋し記載する。

要素n=91

No.	分類	要素(n)	割合(%)	キーワード
1	支援体制整備と情報連携	37	40.7	支援・組織・体制・福祉・連携・専門・団体・資金
2	市民へ認知の拡大・普及啓発	17	18.7	講演・広報・認知・自覚
3	相談や対話、気配り	11	12.1	対話・相談・気配り・意識・窓口
4	職員の知識と理解の向上	9	9.9	実態・把握
5	要望や考え	8	8.8	思想・要望
6	実態把握・現状調査	6	6.6	知識・ガイドライン・理解・認識・研修
7	特になし	3	3.3	特になし

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

【支援体制整備と情報連携】

小学校と中学校にスクールソーシャルワーカーを配置して、子ども達が相談しやすい場所を設置することが必要だと感じる。または、担任の先生がそういう問題にいち早く気が付き、専門機関に繋げてゆける仕組みを作ることが急務だと思う。

家庭状況について子どもや家族本人から発信しにくい心情があると思うと、周囲の人間も深掘りしていいのか悩む部分がある。自分しかいない、家族のためと頑張っていることは悪いことではない、でもその負担を軽くすることができると思わせられるような支援ができると良い。

発見したあとや、ヤングケアラーと思われる子どもがいた場合に誰がどのような支援を行うのか、支援マニュアルなどを整備して連携を図る。

連携する機関が多ければ多いほど情報共有ケース会議が迅速におこなわれないケースがある。(日程調整に時間がかかってしまう)

ヤングケアラーの定義から外れていても、新規・継続で相談や支援が受けられる体制づくりが必要だと思います。

【市民へ認知の拡大・普及啓発】

大人が現状の把握と親子双方の自覚に力を入れるとよいと思います。当事者ほど現実を自覚した
がらないと思うので。

ヤングケアラーという言葉をもっと広める必要がある。子供自身にも知ってほしいが親世代、祖母
世代に理解して自分がさせてしまっていることを自覚してもらうことも必要と考えます。

まず、啓発活動が重要だと考えます。なお、背景には貧困が潜んでいる可能性も高く、市役所全体
で情報をキャッチし共有できるシステム作りの構築が求められると思います。

ヤングケアラーという言葉の認知が低く、周知されていない。学校や福祉だけではなく、もっと幅
広く周知できると良いと思う。

【相談や対話、気配り】

まわりの大人が気付いてあげられる環境を整える。相談窓口が一般的に知られるように色々な媒
体で告知する。

支援が必要な子供の特定が困難なことも課題として挙がっていることを耳に致します。専門の窓
口を設けるなど。相談しやすい機関があることが必要ではないかと思います。

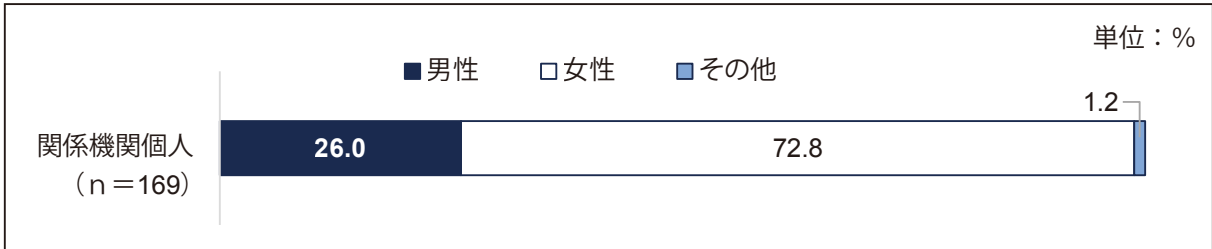
親や身内の介護をしなければいけない、自分の代わりはいないと思い込んでしまっている。他の方
法がわからないなどから部活動を諦めている子供達がいる。医療介護が連携して話しやすい場を
つけることが大切。悩みを打ち明ける環境が少ない。

3. 個人向け調査結果

(1) 基本属性

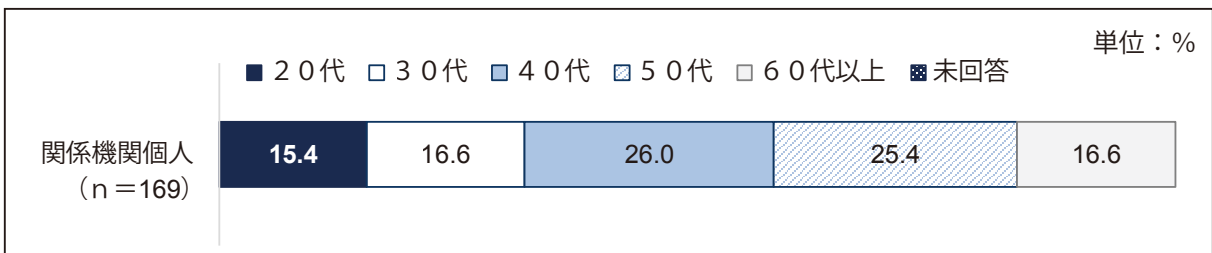
①性別（問1）

回答者の性別は、女性が123人(72.8%)、男性が44人(26.0%)であった。



②年齢層（問2）

回答者の年齢層としては、「40代」が26.0%と最も多く、次いで「50代」が25.4%、「30代」「60代以上」が16.6%であった。



③役職（問3）

回答者の役職としては、「一般職員」が59.2%と最も多く、次いで「次長・課長・係長・主幹・主査・主任」が14.8%であった。

	人	%
n	169	169
園長・所長・施設長	6	3.6
副園長・副施設長	0	0.0
部長・所属長	1	0.6
次長・課長・係長・主幹・主査・主任	25	14.8
指導員	0	0.0
一般職員	100	59.2
その他	16	9.5
未回答	21	12.4

④職種（問4）

回答者の職種としては、「社会福祉士（SCW、SSW、MSW）」が17.2%と最も多く、次いで「保健師」「民生・児童委員、主任児童委員」が16.0%であった。

	人	%
n	169	169
保育士	4	2.4
相談員	21	12.4
介護職員	4	2.4
事務職員	8	4.7
ケアマネジャー	6	3.6
ケースワーカー	16	9.5
民生・児童委員、主任児童委員	27	16.0
社会福祉士（SCW、SSW、MSW）	29	17.2
医師	0	0.0
保健師	27	16.0
助産師	0	0.0
看護師	6	3.6
臨床心理士・公認心理士	5	3.0
その他	13	7.7
未回答	3	1.8

⑤施設または所属区分（問5）

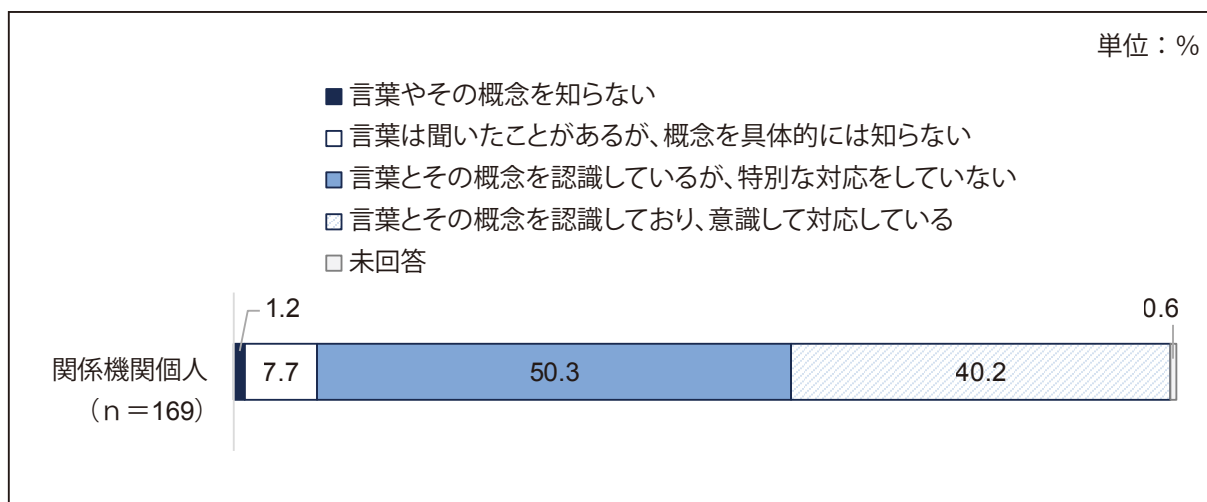
回答者の施設または所属区分としては、「地域包括支援センター」が19.5%と最も多く、次いで「民生児童委員協議会」が16.6%、「社会福祉協議会」が16.0%であった。

	人	%
n	169	169
保育所	3	1.8
民生児童委員協議会	28	16.6
社会福祉協議会	27	16.0
地域包括支援センター	33	19.5
保健所	3	1.8
市 母子保健部門	15	8.9
市 介護・高齢者相談部門	4	2.4
市 障害者相談部門	10	5.9
市 生活保護（生活困窮）等の担当部局	23	13.6
市 教育部門	6	3.6
その他（自由記述）	11	6.5
無回答	6	3.6

(2) ヤングケアラーについて

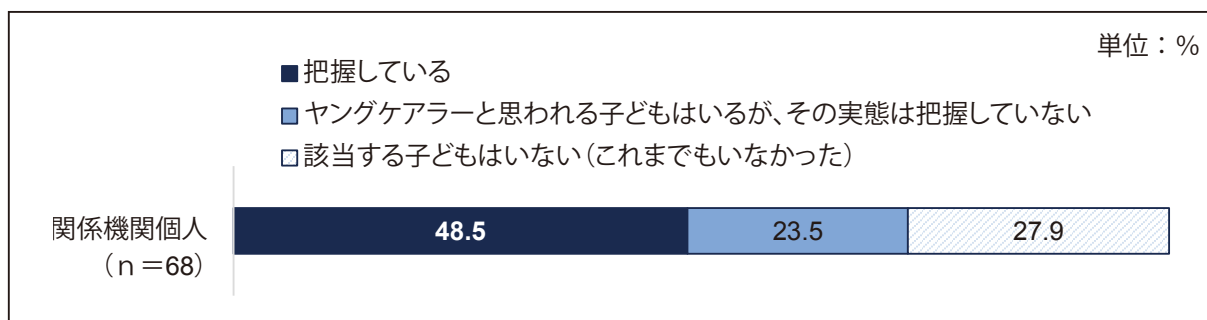
①ヤングケアラーの認識 (問6)

ヤングケアラーという言葉とその概念については、「言葉とその概念を認識しているが、特別な対応をしていない」が50.3%と最も多く、次いで「言葉とその概念を認識しており、意識して対応している」が40.2%であった。「言葉は聞いたことがあるが、概念を具体的には知らない」「言葉やその概念を知らない」を合わせると8.9%であった。



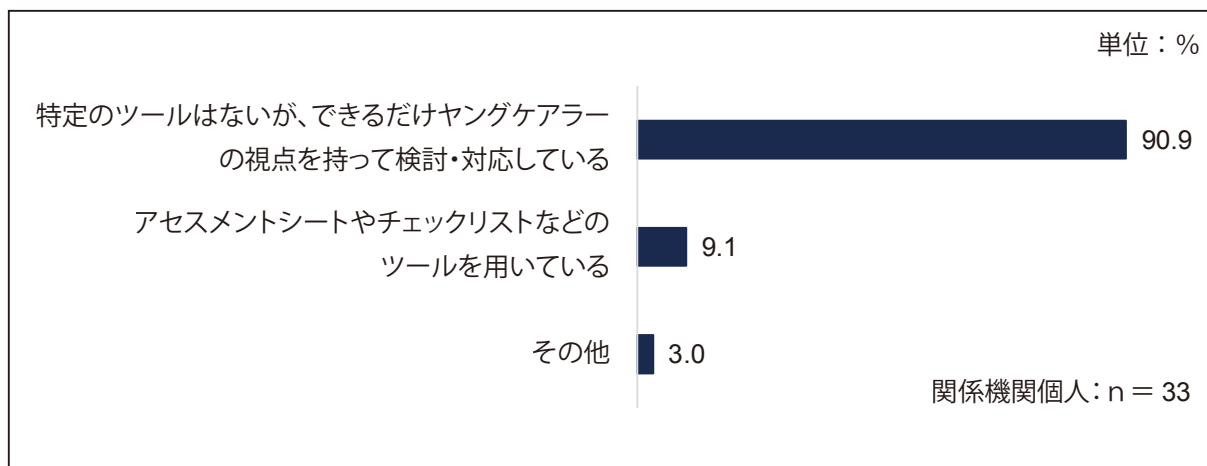
②ヤングケアラーと思われる子どもの把握状況 (問7)

「意識して対応している」と回答した68人のうち33人(48.5%)が「把握している」状況であった。



③ヤングケアラーと思われる子どもの把握方法 (問7-①)

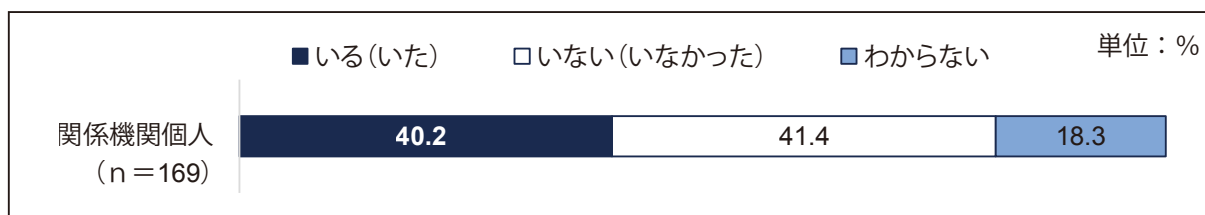
「把握している」と回答した33人のうち、30人(90.9%)は「特定のツールはないが、できるだけヤングケアラーの視点を持って検討・対応している」という状況であった。



(3) ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験

①ヤングケアラーと思われる子どもの有無（問8）

「いない(いなかった)」が41.4%と最も多く、次いで「いる(いた)」が40.2%、「わからない」が18.3%であった。



②ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験の有無（問9）

「いる(いた)」と回答した68人のうち、子どもに対応した経験のある人は43人(63.2%)であった。

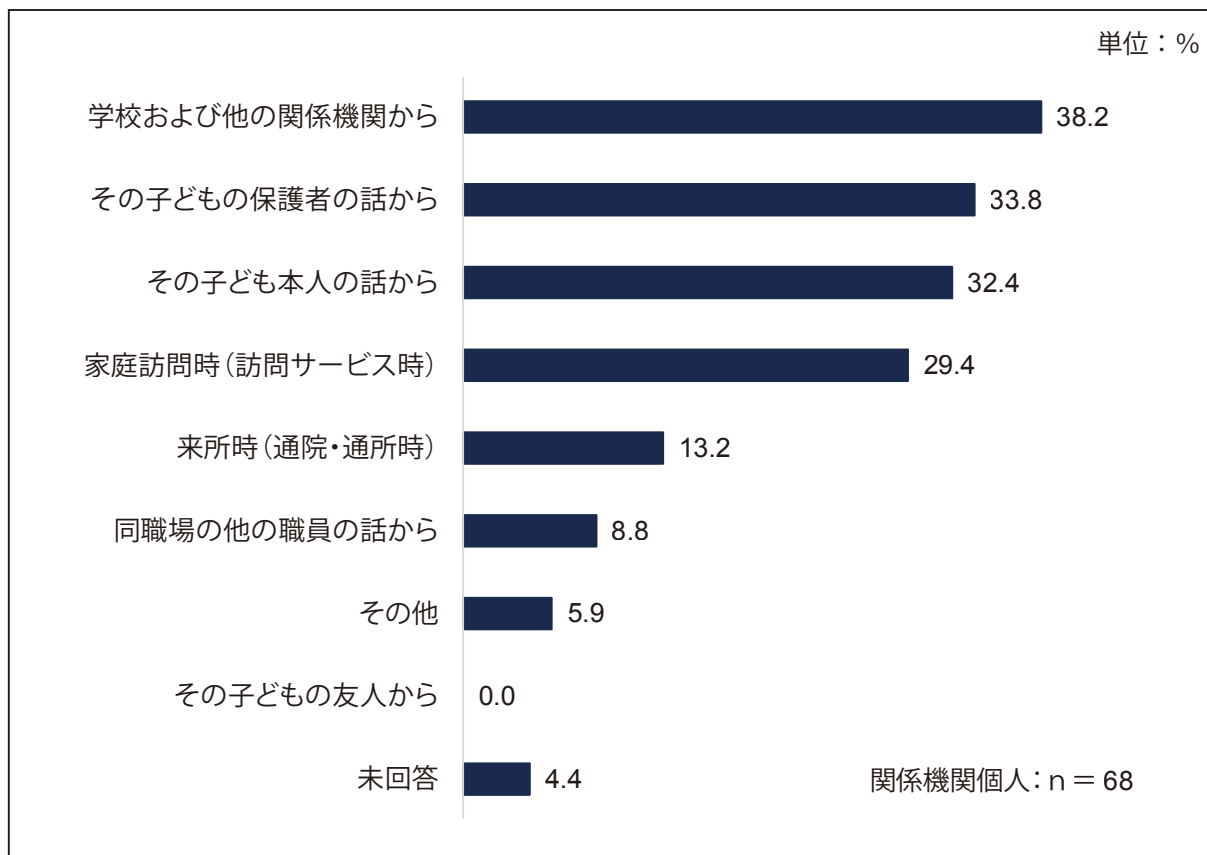


③その子どもの学年（問10-1）

	人	%
n	68	68
小学1年生	1	1.5
小学2年生	2	2.9
小学3年生	4	5.9
小学4年生	1	1.5
小学5年生	2	2.9
小学6年生	4	5.9
中学1年生	4	5.9
中学2年生	13	19.1
中学3年生	9	13.2
高校1年生	9	13.2
高校2年生	1	1.5
高校3年生	5	7.4
わからない	5	7.4
その他	5	7.4
未回答	3	4.4

④気づいた経路（問10-2）

「学校および他の関係機関から」が38.2%と最も多く、次いで「その子どもの保護者の話から」が33.8%、「その子ども本人の話から」が32.4%、「家庭訪問時（訪問サービス時）」が29.4%であった。



⑤「同職場の他の職員の話から」の気づき（問10-3-①）

保健師の家庭訪問時に母の通訳をしていた。
障害のある兄弟の世話をしており、その対応のため学校を休んだことがあるなど話していたことなど報告を受けた。
担当職員からの対応相談
母が精神疾患であり…

⑥「学校および他の関係機関から」の気づき（問10-3-②）

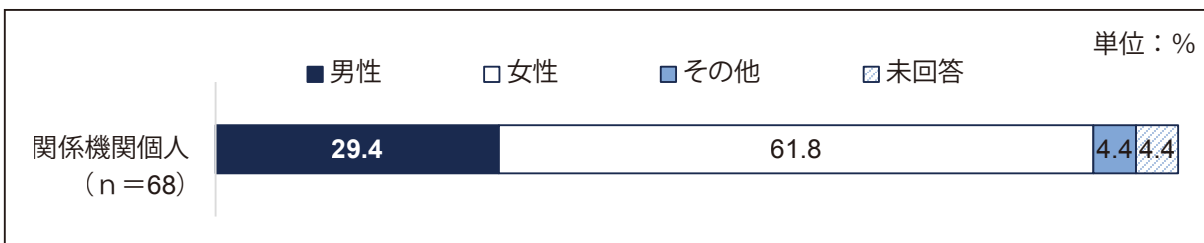
担任の先生が家庭訪問した時の様子から
初めは他地区で社協より学資資金を借りていたが、ごみ屋敷となり家主から更新は出来ないと言われ私の地区に転居して来た。
学校から弟がいて保育園に行っていないと聞いていたので、家で児が面倒を見ているのだと感じた。
面談時に母の通訳をしていた。
学校から児の持ち物が揃わないと連絡があった。
母が精神疾患で児が母の身の回りのことや家事を担っていた。
知的・精神障害を持つ母の受診ができないことから、子どもが付き添って母の病院に行っていた。
多忙な親に代わり兄弟の対応をしているようだが、本人がそれについて疑問に思っていたり、嫌な感情があるのかわからないとのことだった。
障害のある母に代わって、毎日ではないが、炊事をしている。
小学3年生の子が1年生の弟の宿題や提出物を管理し、食事を作っていました。情報はCCを開いた際に学童の職員、学校の担任より受けました。
高齢者の虐待ケース対応で訪問。介護の状況を確認する中で、同居の中学生の孫が入浴介助をすることがあると聞き取った。要介護者の意向（介護サービスの拒否）、娘さんの精神状況、経済的理由等から「孫娘さんが手伝う」状況が発生していた。

⑦「その他」の気づき（問10-3-③）

近隣住民
民生委員より情報が入った。
不登校の支援から状況がわかった
SSWからの支援協力依頼

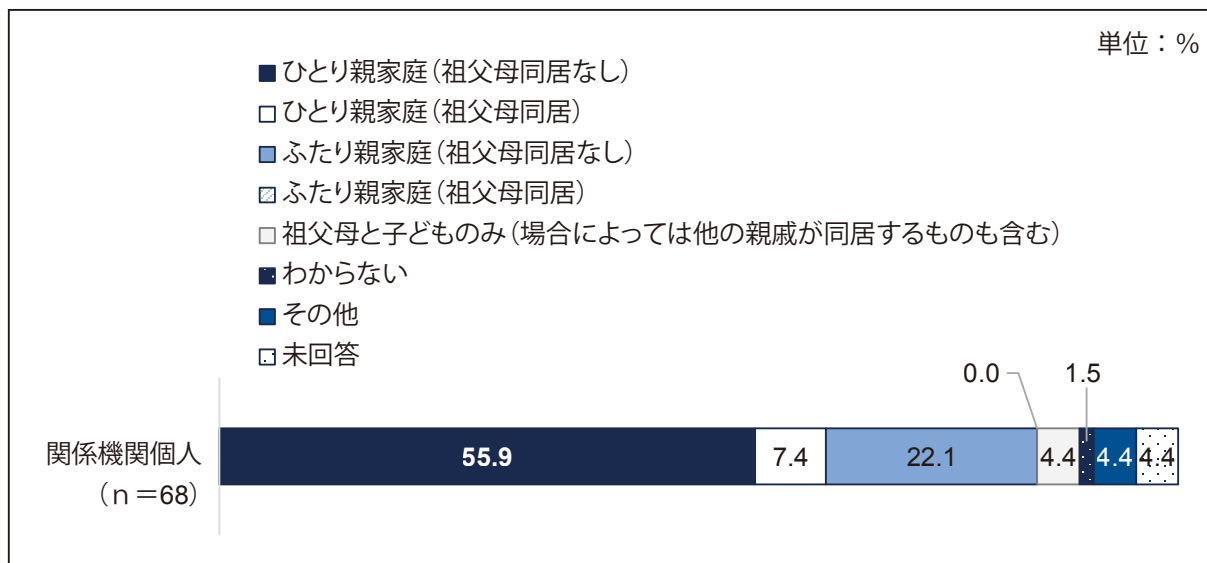
⑧その子どもの性別（問10-4）

子どもの性別は、「女性」が61.8%、「男性」が29.4%であった。



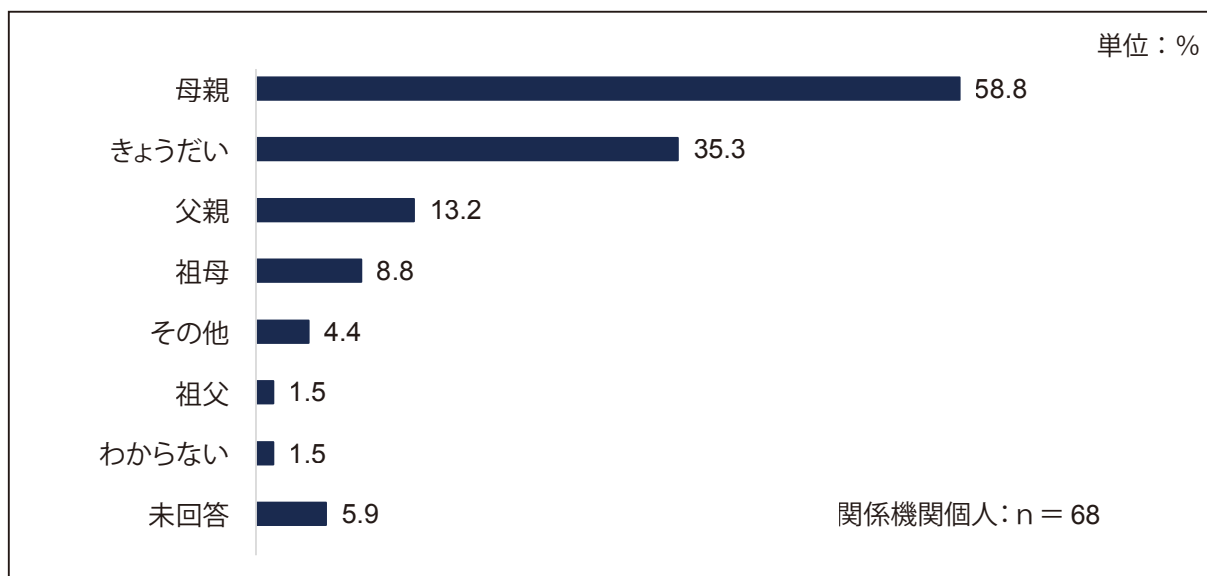
⑨その子どもの家族構成（問10-5）

家族構成は、「ひとり親家庭（祖父母同居なし）」が55.9%と最も多く、次いで「ふたり親家庭（祖父母同居なし）」が22.1%であった。



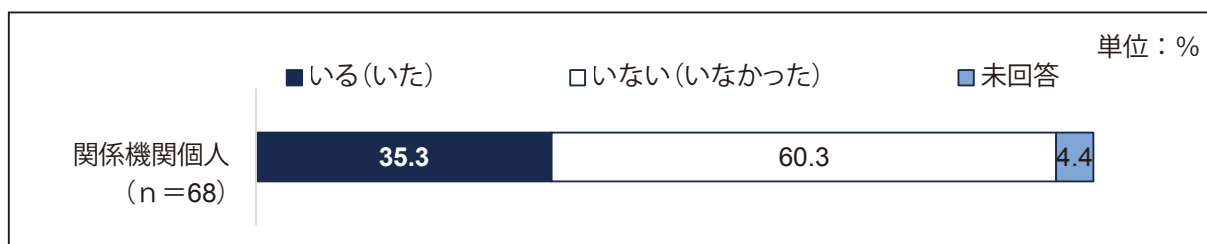
⑩その子どもがケアをしている相手（問10-6）

ケアの相手としては「母親」が58.8%と最も多く、次いで「きょうだい」が35.3%、「父親」が13.2%であった。



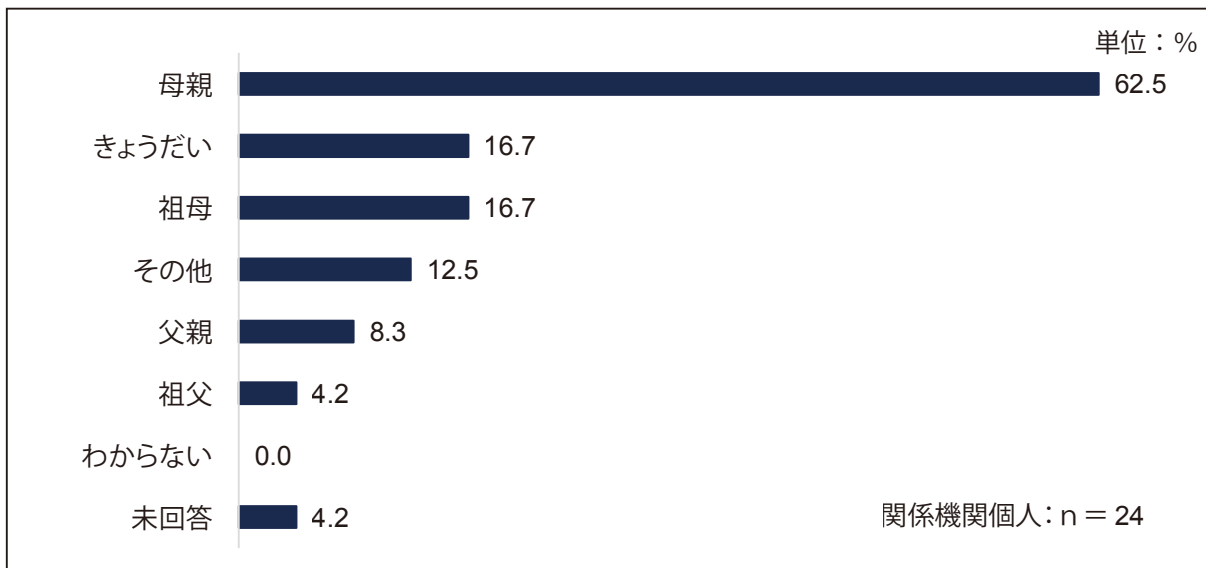
⑪その子どものほかにケアをしている人の有無（問10-7）

その子どものほかに、家族の中でケアをしている人が「いる(いた)」のは24人(35.3%)であり、31人(60.3%)の子どもは、一人でケアを担っている状況であった。



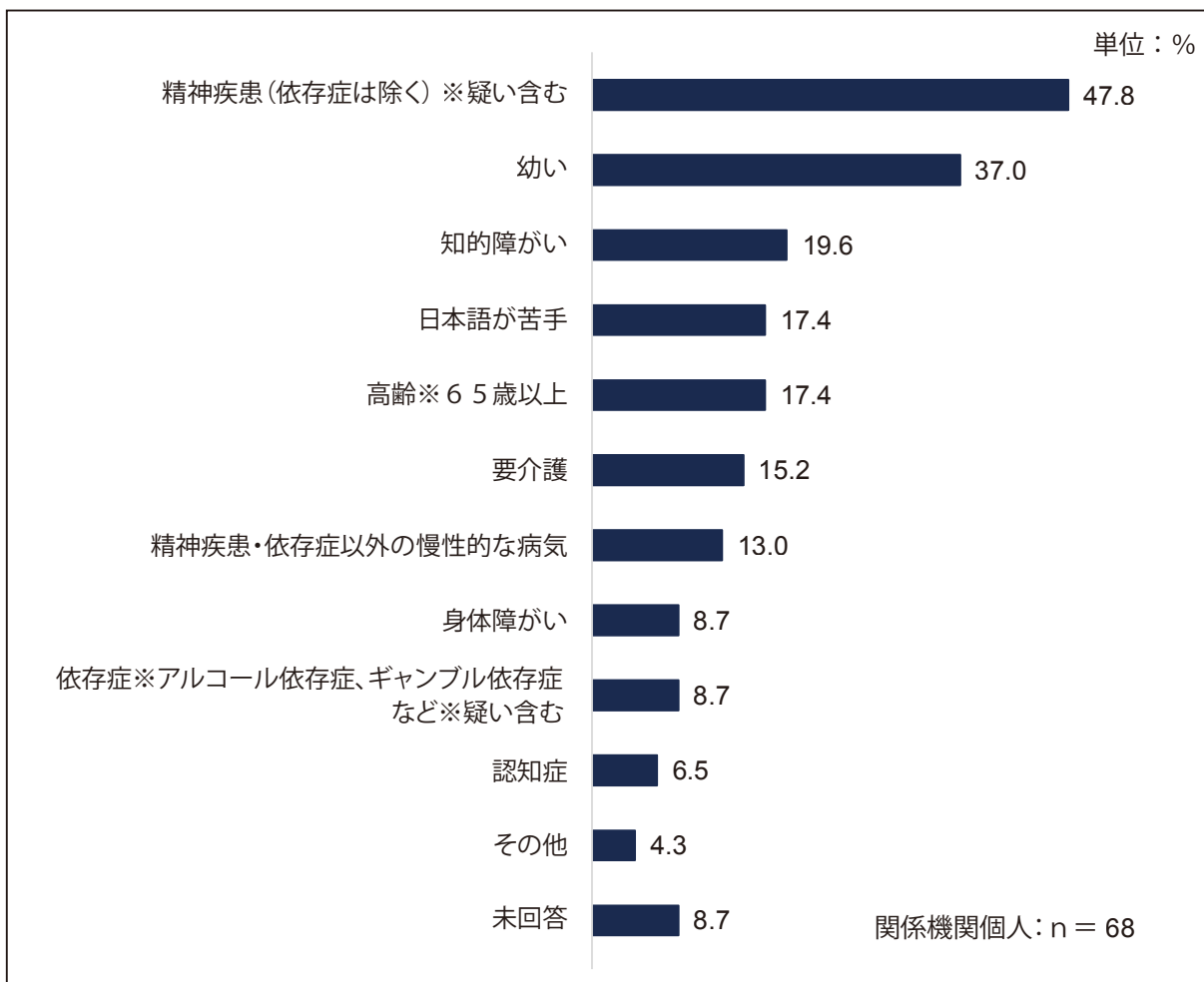
⑫一緒にケアをしている人 (問 10 - 7 - ①)

その子どものほかにケアをしているのは、「母親」が62.5%と最も多く、次いで「きょうだい」「祖母」が16.7%であった。



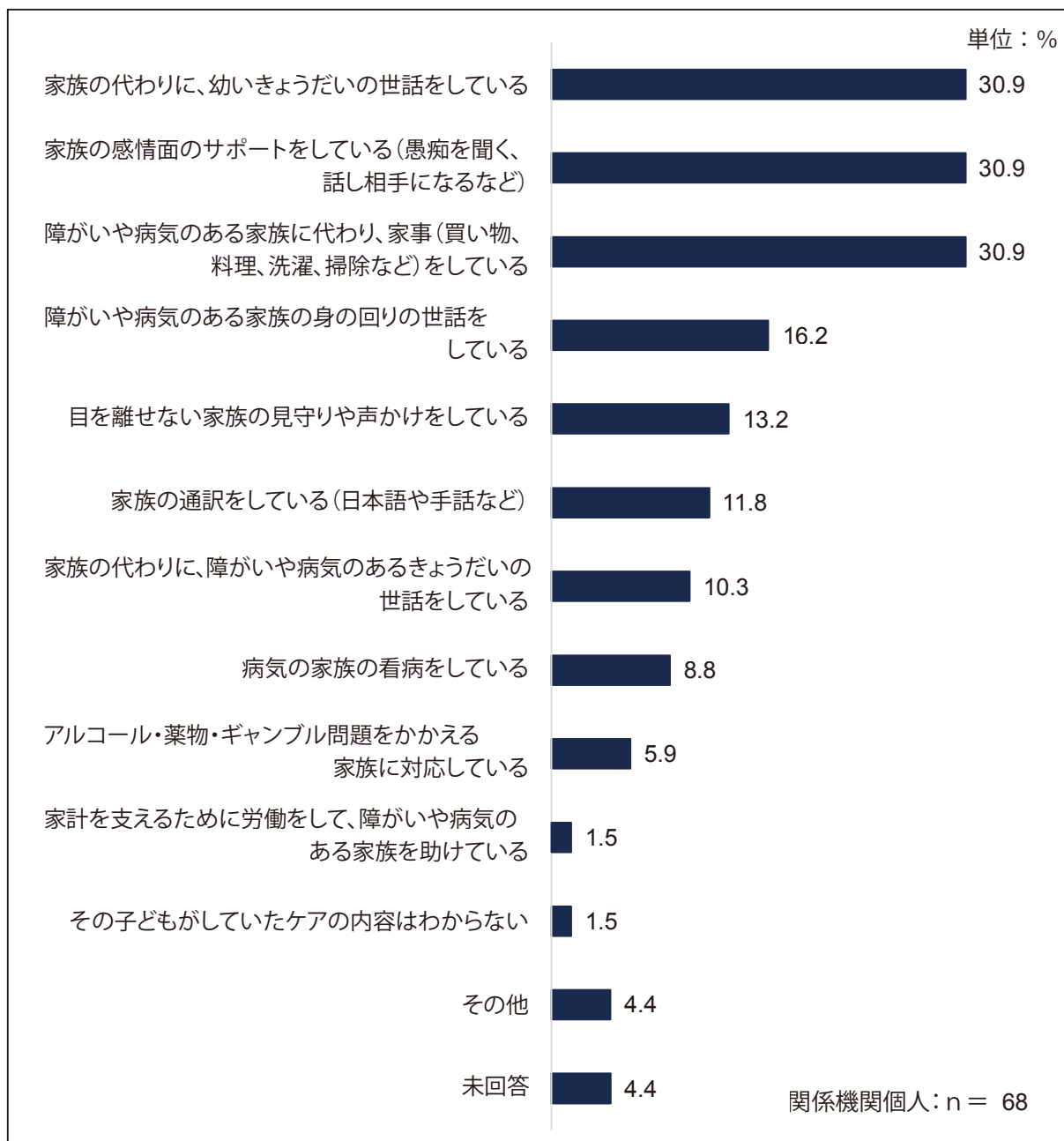
⑬その子どもがケアをしている相手の状態 (問 10 - 8)

ケアをしている相手の状態としては、「精神疾患(依存症は除く)※疑い含む」が47.8%と最も多く、次いで「若い」が37.0%、「知的障がい」が19.6%、「日本語が苦手」が17.4%、「高齢※65歳以上」が17.4%であった。



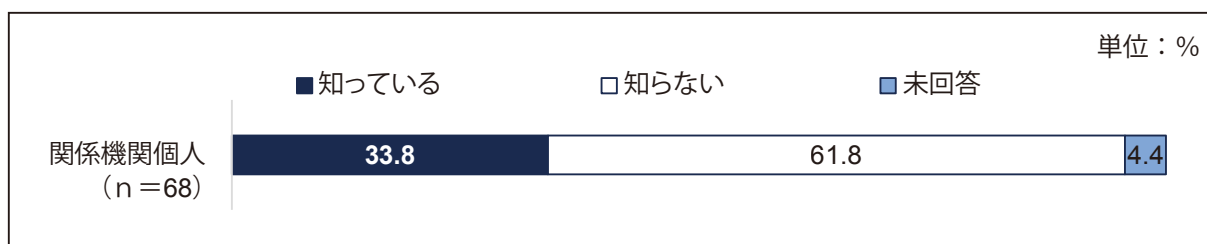
⑭その子どもがしているケアの内容（問 10 - 9）

ケアの内容としては、「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」「家族の感情面のサポートをしている（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」「障がいや病気のある家族に代わり、家事（買い物、料理、洗濯、掃除など）をしている」が同率の 30.9%と最も多く、次いで「障がいや病気のある家族の身の回りの世話をしている」が 16.2%であった。



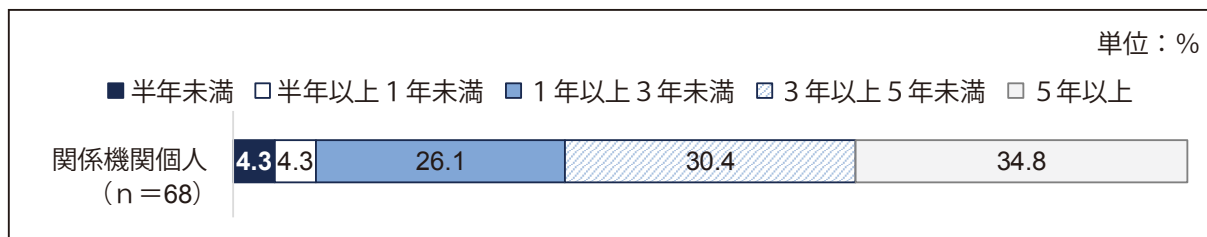
⑮その子どもがケアをしている期間の把握（問 10 - 10）

ケアをしている期間については、「知らない」が 61.8%、「知っている」が 33.8%であった。



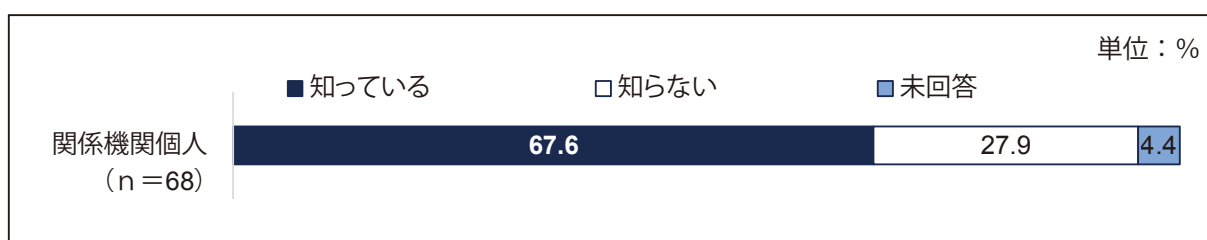
⑩その子どもがケアをしている期間 (問 10 - 10 - ①)

ケアをしている期間としては、「5年以上」が8人と最も多く、次いで「3年以上5年未満」が7人であった。



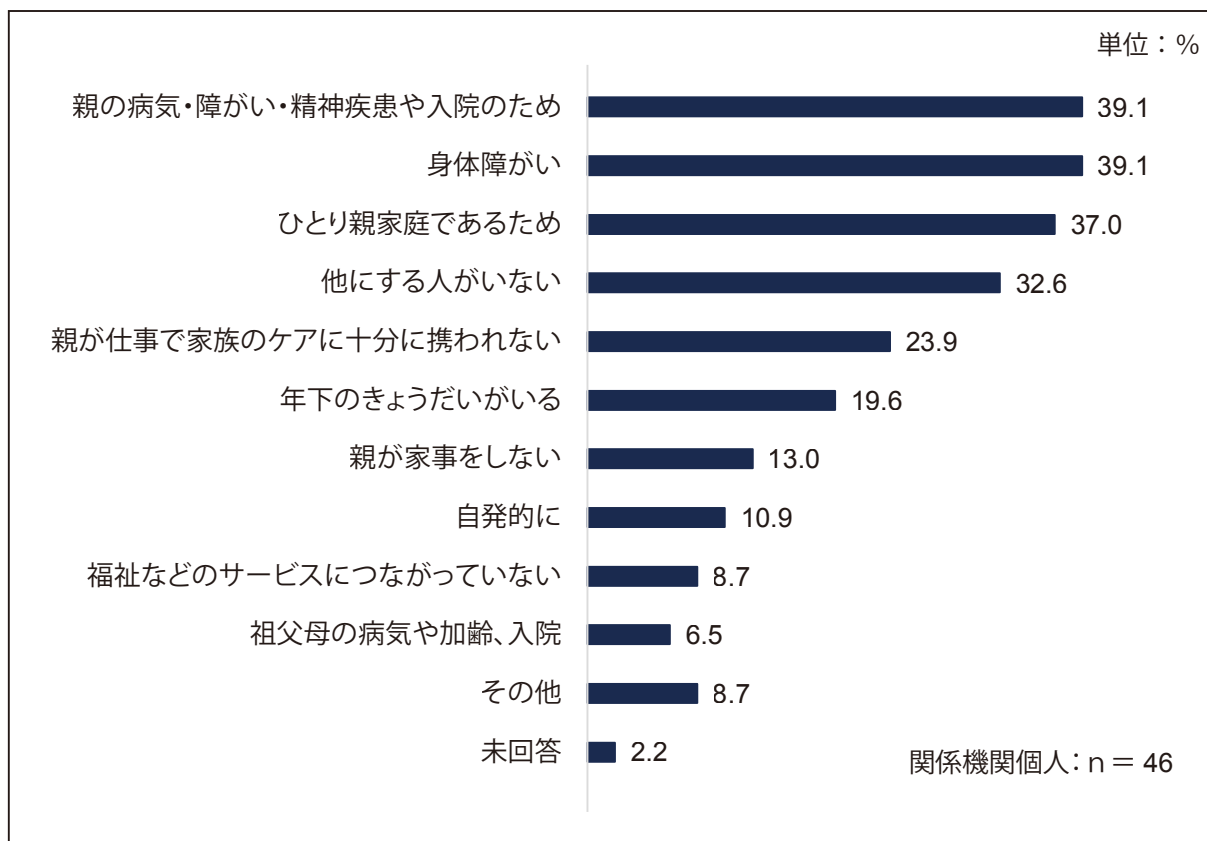
⑪その子どもがケアをしている理由の把握 (問 10 - 11)

ケアをすることになった理由を、46人(67.6%)が「知っている」状況であった。



⑫その子どもがケアをしている理由 (問 10 - 11 - ①)

ケアをすることになった理由は、「親の病気・障がい・精神疾患や入院のため」と「身体障がい」が39.1%と最も多く、次いで「ひとり親家庭であるため」が37.0%、「他にする人がいない」が32.6%であった。



⑩その子どもがケアをしている具体的な状況（問10－12）

28人から自由記述による回答が得られた。その内容は、「病気や障害のある家族がいるため」「親が不在のため」「外国にルーツがあり言語が不自由なため」「ひとり親家庭のため」であった。以下、回答の一部を抜粋して掲載する。

【病気や障害のある家族がいるため】

祖母の施設入所やコロナ期間に突入したため、家族のみで支えあう状況になる。
母が妊娠、出産。祖父母が要介護になり、母では、対応出来なくなった。受診時、医師の話を一緒に聞く。母不在時の見守り。
父が若年性認知症
母がコロナ禍で仕事なくなり、持病があることから、感染の不安も高まりアルコールが増えた。母親が物にあたり、テーブルのものを散らかしたまま寝てしまうため、父親と児が片付ける。父が関係機関と連絡をとることを拒否する。子どもの高校受験は成功し、部活に打ち込んでいる。父母と離れることはまだ希望していないが、何の感情もないと話す。
病状に波があるので、食事が作れない時があり、自分で家事をやる
精神疾患を抱えるきょうだいの対応に疲れて母も精神疾患になってしまった。
母の病状が悪化し、ADLが低下したため。
夫の死から母親が立ち直れず精神疾患を発病。外反母趾から歩けなくなり引きこもり状況に。
両親は他界し、叔父や叔母、祖母と同居していたが、叔父叔母は仕事をしており、不登校の本人が日中の介護をしていた。
末期がんの母の在宅での看取り
父がアルコール問題。母が父のケア、仕事、家事、育児と対応しなくてはならない。ステップファミリーで実母と義父との間の幼い妹と弟の世話をすることを期待されていた。
母の精神症状、身体状況の悪化

【親が不在（仕事・死別等による）のため】

父親が亡くなったと前任委員から聞いている。
実母は仕事のため、娘に祖母の介護を任せている状態だったと思う
両親が失踪した
母親の仕事で早番の際は、保育園の開所時間より早く出勤しないといけないため、姉が登校前に妹を保育園に送っていた。

【外国にルーツがあり、言語が不自由なため】

父、母が外国人で日本語を習得していない。
母親が外国人なので日本語が苦手。
両親が日本語が不自由なため
日本語が不得手な親が通訳兼幼い子供の世話をお願いしている

【ひとり親家庭のため】

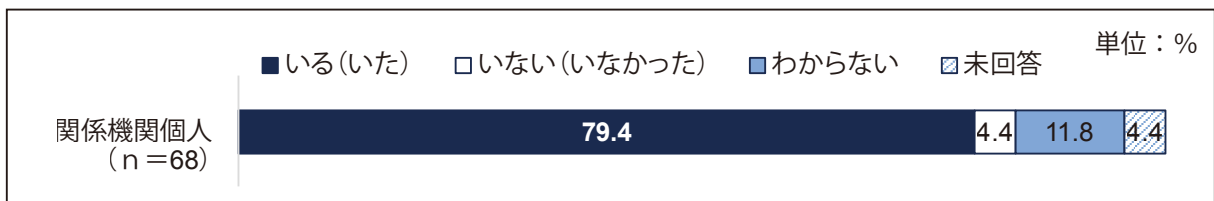
母子家庭で母はフルタイムで就労。兄は中学不登校。弟は保育園の行き渋り強く、母が送っていけないため、兄と二人で日中過ごす。弟が3歳当時、家庭訪問をすると「ママ、ママ」と泣き叫ぶ弟の声が聞こえており、日中一緒に過ごすのは大変だろうと感じていた。
ひとり親家庭、知的障害のある弟がデイサービスから帰り親が夜遅くに帰宅するまで、弟の相手をする。
ひとり親家庭で、保育所の閉所時間までに保護者がお迎えできないため、姉が毎日お迎えに来ていた。
母子家庭で母は仕事のため兄弟2人で障害の兄のお世話をせざるを得ない状況があった。

【その他】

当時はヤングケアラーという認識がなかったので、経緯や支障等までは確認しなかった。
母が相手のわからない妊娠をして、中絶手術を行うこととなり、子供の居場所がなくなった。

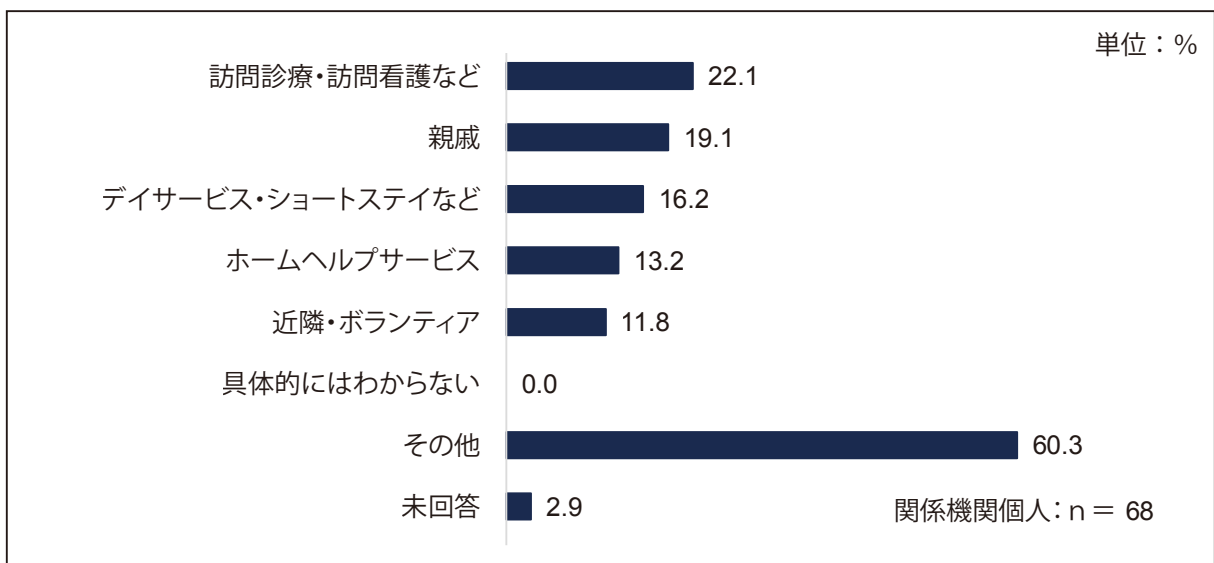
⑩その家庭の支援者の有無（問10-13）

その子どもを含めて、その家庭を支援している（していた）人は「いた」が79.4%、「わからない」が11.8%、「いない」が4.4%であった。



⑪その家庭を支援している人・サービス（問10-13-①）

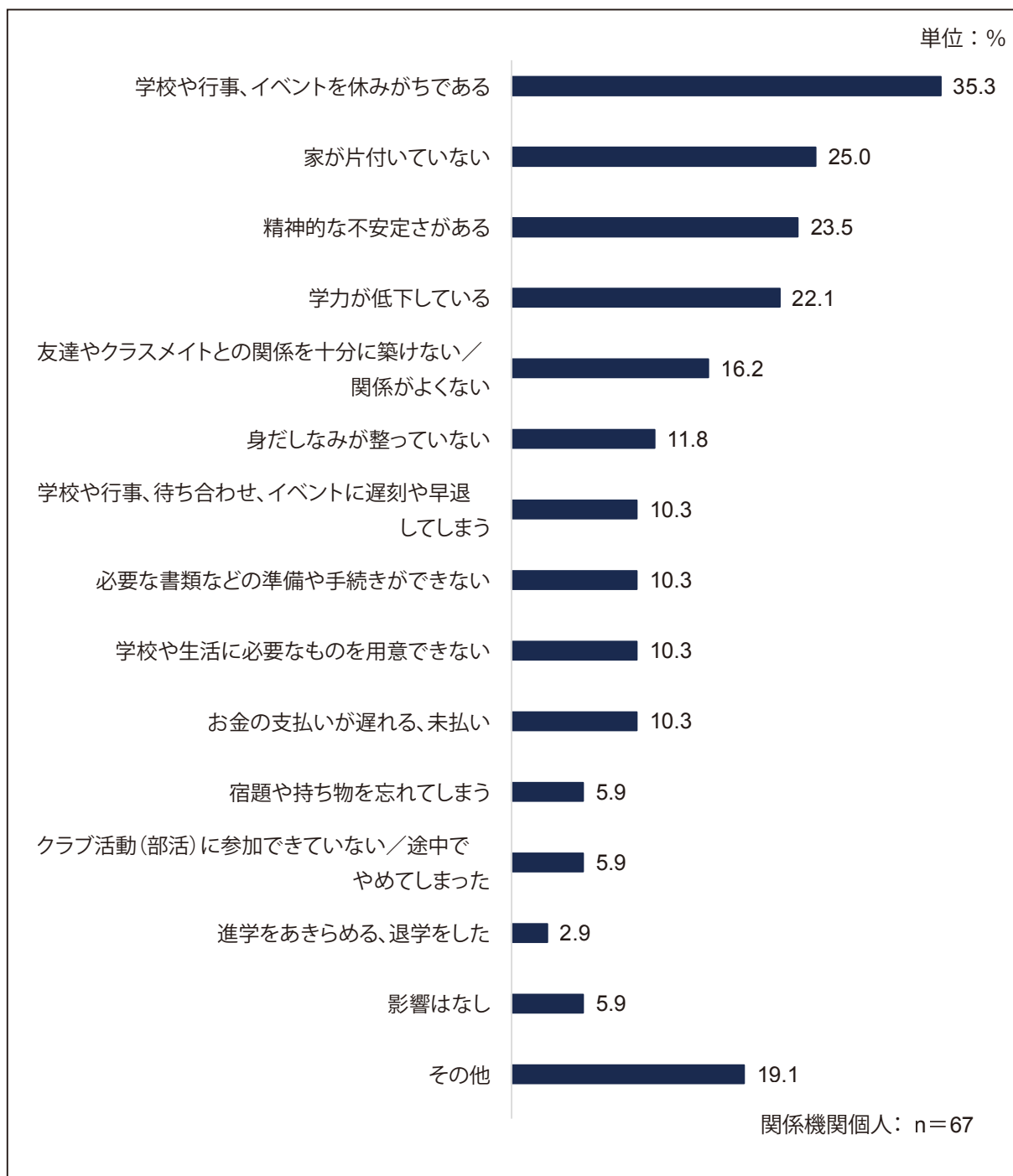
その子どものほかにその家庭を支援している（していた）人・サービスは、「訪問診療・訪問介護など」が22.1%と最も多く、次いで「親戚」が19.1%であった。



その他 41 件 (60.3%) の内容としては、「子育て世代包括支援センターみらい」・「子ども家庭支援センターたち」が 11 件、行政 (生活保護ケースワーカー・障害者福祉含む) が 8 件、スクールソーシャルワーカーが 5 件であった。ほかに、保健所、保育園、社会福祉協議会、ケアマネジャー、計画相談支援員、民生委員、学童があった。

②その子どもへの影響（問10－14）

その子どもの生活や学業・進路選択に出ている（出ていた）影響としては、「学校や行事、イベントを休みがちである」が35.3%と最も多く、次いで「家が片付いていない」が25.0%、「精神的な不安定さがある」が23.5%、「学力が低下している」が22.1%であった。



その他13件の意見としては、「具体的にわからない」が複数あるほか、「自分の気持ちを話すことが極めて難しい」「自分の意見をあまり言わない。人に合わせる事がとても上手」「その家庭は母親が色々調整し学校や習い事など本人が希望することはやらせてあげていた」「ガスが通じていなかったのでお風呂に入れず臭いが気になった。洋服も洗っていなかった」があった。

②その子どもについて気づいたこととその対応（問10-15、問10-15-①）

ヤングケアラーと思われる子どもへの対応について、27人から自由記述による回答が得られた。その内容は、親が不在のため介護の負担がある、日本語が話せない、当たり前になっている、家の清潔が保てないなど「家庭状況や日常生活での気づき」、介護で学校に行けない、不登校、中退など「学校生活への影響」、家族を守るといった強い意思、しっかりしている、家族に協力的、諦め、自分の気持ちの表出の難しさといった「子どもの様子や意思」、精神的な不安定さといった「心身の健康面」があった。

そして、その状況に対して、本人との対話、家庭訪問、ケース会議で検討、関係機関につなぐ、心理士、ケアマネージャー、子ども家庭支援センターとの連携、学習のサポートを取って対応するなどがあった。以下、回答の一部を抜粋して掲載する。

【家庭状況や日常生活での気づき】

属性	その子どもの状況・気づき	その状況にどう対応したか
地域包括支援センター	お小遣いを対象者からもらえるので喜んで対応していた様子	負担がないか本人に会話の中で確認した
民生児童委員協議会	日本語がきちんと話せない	日本語教師の派遣
社会福祉協議会	母親をケアすることが当たり前のように感じていると感じた。	関係づくりのため、訪問するようにした。
地域包括支援センター	親がいらないため介護負担があり、祖母と互いに支援し合っている	子ども家庭支援センターと児童相談所につないだ
市生活保護（生活困窮）等の担当部局	親が子どものトラブルに対し、適切に対応できていない	関係者で協力して対応
市母子保健部門	保育園から帰ってからの世話をすることを期待されていた。	外からの実働的な支援を母は求めないため、見守るしかなかった。父の暴力から逃げるよう勧めていた。
社会福祉協議会	ゴミ屋敷で清潔が保てていない	関係機関と協力して転宅、母の入院、進学

【学校生活への影響】

属性	その子どもの状況・気づき	その状況にどう対応したか
地域包括支援センター	漢字がうまく書けないのをみて、介護をして余り学校に行けてないのか？と思った。	祖母のケアマネと情報共有をした程度で、他機関への報告はしなかった。
市 母子保健部門	元々不登校で通信制高校に進んだが、登校日を増やしたくても、介護で増やせない状況だった。	他部署と連携し、祖母を入院させた。
市 教育部門	本人の不登校と摂食障害	母子心理相談
市 教育部門	母子家庭で母は就労しなければならず、児自身の不登校に加えて弟も不登校になっており、平日の日中は姉弟でカプセル状態。	週1回訪問して、児の話を聞きながら高校進学に向けての準備を児と一緒に進めていった。
社会福祉協議会	髪の毛は脂ぎっていて臭いも気になる。飲食店でアルバイトをしていたが長続きしない。専門学校も中退してしまった。	ケースカンファレンスを開いて各担当でお風呂の入り方からゴミ屋敷の片づけ、母親の通院を行った。

【子どもの様子や意思】

属性	その子どもの状況・気づき	その状況にどう対応したか
社会福祉協議会	ケアラーであると感じたが、別居の関係者からの金銭的な支援や助言で、習い事に行くことができていた。とてもしっかりしたお子さんで連絡調整が上手にできていた。それはとてもいい環境にあると感じた。	見守り事業での支援
民生児童委員協議会	母親と妹を守るといった強い意思を感じた。	学資資金を借りているので、訪問はしやすかった。既に社協が入っているので、困った時は連絡するようにと電話番号を伝えておいた。
子育て世代包括支援センター	コミュニケーションが苦手で自分の気持ちの表出ができず苦しそうである	心理士との遊びを通して話す時間を作った
子ども家庭支援センター	家族に協力した上で、学業も習い事も頑張っていた。年齢以上に背負っているものは大きくなってしまっていると思う。	母との関わりの中で、彼女が頑張っていること、できないこともあるかもしれないことを伝えるようにしていた。
市 母子保健部門	とてもしっかりしており、頼られることを否定的に思っている様子は感じられなかった。	本来は父母が行うことであることを父に伝えた。
市 母子保健部門	諦めていることが多い	こちらでできる家事や学習のサポート

【心身の健康面】

属性	その子どもの状況・気づき	その状況にどう対応したか
地域包括支援センター	死にたい等の訴えがあり精神的な不安定さがみられた。	本人と面談し話をきいた。
市 母子保健部門	感情的になり、泣き出す…がみられた	ケースカンファレンスを開き、母の入院を早めた。

⑭その子どもとかかわるうえで困ったこと（問10－16）

ヤングケアラーと思われる子どもとかかわるうえで困ったことについて、29人から自由記述による回答が得られた。その内容は、その子の気持ちがわからない、警戒心、会えない、判断がつきにくいなど「子どもとの関係、状況把握」が11人、親とコミュニケーションが取りづらい、関係が築けないなどの「親との関係づくり」が8人、その他の意見が4人、困ったことはないという意見が5人であった。以下、回答の一部を抜粋して掲載する。

【子どもとの関係、状況把握】

属性	内容
社会福祉協議会	1対1で話す機会がとれない。とりにくい。
社会福祉協議会	困っていることについて、少しずつ話すので、状況が一度につかめない。また、困っている程度が読み取りづらい。
社会福祉協議会	自覚しているのかしていないのか、判断がつきにくい
地域包括支援センター	どうしたらよいかわからない様子だった
地域包括支援センター	子どもは母と離れたがらないので、分離する必要があっても、説得は容易では無かった
市 教育部門	大人への警戒心の高さ（過去に児童相談所一時保護された経験もあり、本音を話すと家族が引き離されるという思いがあった）
市 教育部門	生活リズムが乱れてしまい、昼夜逆転が続くと会えなくなってしまう。
子育て世代包括支援センター	気持ちの表出が苦手なのでその子の気持ちがわからないこと
市 生活保護（生活困窮）等の担当部局	子ども自身が継続的支援を望んでいない

【親との関係づくり】

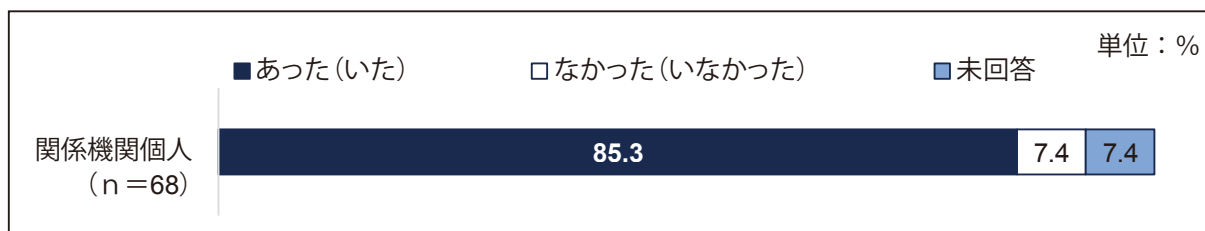
属性	内容
無回答	母が人とのコミュニケーションが苦手で、支援に繋がらなかった。
市 児童福祉部門	母が支援に拒否的だったため、状況改善のための動きがとりづらかった。
市 母子保健部門	父親に理解を得ることが難しかった
市 障害者相談部門	コミュニケーションをとる機会が少ない

【その他】

属性	内容
子ども家庭支援センター	ひとり親という状況で、母親も精一杯やっていた。
市 母子保健部門	祖母を大切に思っている子であったため、祖母の入院によって精神的に不安定になった時期があった。

②⑤相談できる相手や場所の有無（問 10 - 17）

相談できる相手や場所が「あった（いた）」が85.3%であった。



②⑥相談できる相手や場所の状況（問 10 - 17 - ①）

44人から以下のような回答が得られた。最も多いのは「職場内（上司・同僚）」で、次いで、「子ども家庭支援センターたち・みらい・子育て応援課」であった。複数の機関を回答している人もいた。

単位：件

職場内（上司、同僚）	26
子ども家庭支援センターたち・みらい・子育て応援課	15
社会福祉協議会	3
教育センター・SSW	2
学校	2
児童相談所	2
府中市多文化共生センターDIVE	1
ケース会議	1

②⑦他機関との連携の有無（問 10 - 18）

他の機関との連携が「あった（いた）」が82.4%と多かった。



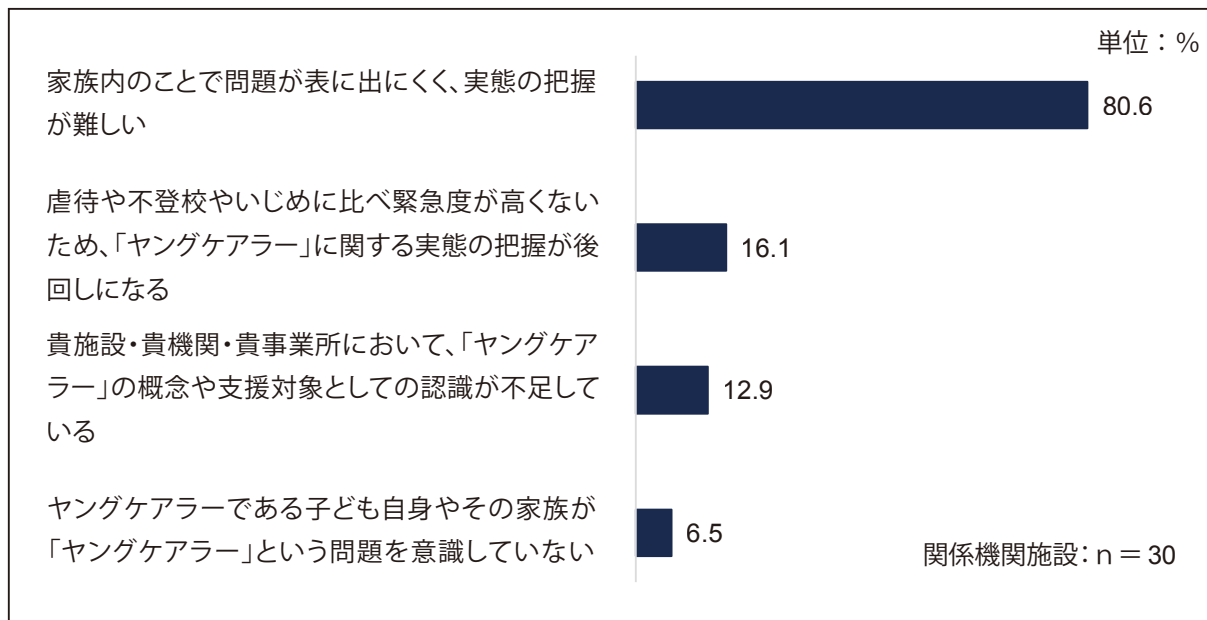
②⑧連携した機関の具体的な状況（問 10 - 18 - ①）

44人から自由記述による回答が得られた。代表的な連携状況としては、「子育て世代包括支援センターの職員と連絡を取り、訪問した際の発言の共有や、保護者との調整事項などの確認など、連絡を密にとった」「みらいの相談員や生保の子供支援員、高校のSSWと連携。訪問の様子を共有したり、家庭の状況について共有した」「ケースカンファレンスなどを通じて学校関係者、訪問看護ステーション、医療機関との調整」であった。

また、連携先としては、「子育て世代包括支援センターみらい」、「子ども家庭支援センターたち」、学校、スクールソーシャルワーカー、訪問看護事業所が多い傾向にあった。

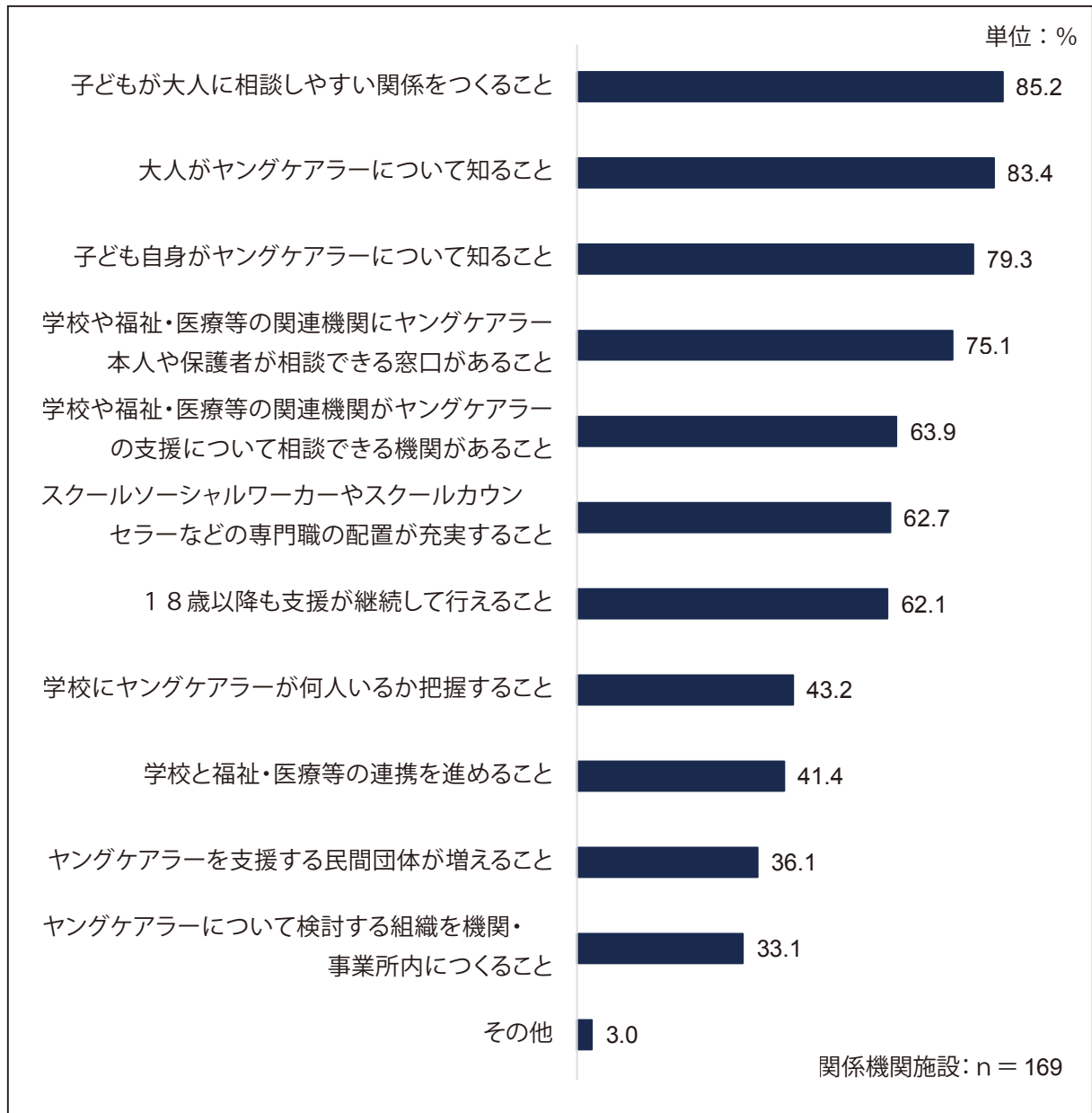
⑳ ヤングケアラーと思われる子どもがいるか、わからない理由（問11）

ヤングケアラーと思われる（可能性含めて）子どもがいるか「わからない」理由として、「家族内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しい」が80.6%と最も多く、次いで「虐待や不登校やいじめに比べ緊急度が高くないため、『ヤングケアラー』に関する実態の把握が後回しになる」が16.1%であった。



③0 ヤングケアラーを支援するために必要なこと（問 12）

「子どもが大人に相談しやすい関係をつくること」が85.2%と最も多く、次いで「大人がヤングケアラーについて知ること」が83.4%、「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」が79.3%、「学校や福祉・医療等の関連機関にヤングケアラー本人や保護者が相談できる窓口があること」が75.1%であった。



③学校と福祉・医療等の連携を進めること（問12-①）

学校と福祉・医療等の連携を進めることについて、45人から自由記述による回答が得られた。その内容は、「支援体制の整備の必要性」「情報共有・定期的な情報交換」に関する意見であった。以下、回答の一部を抜粋して掲載する。

【支援体制の整備の必要性】

社会福祉協議会	子どもが相談できる場所、時間は主として学校、さりげない会話の中から引き出せるといい。学校側が受け止めてプランを調整できるのか、できないのであればその情報が共有され、連携することで支援プランや方向性が確認できる。
社会福祉協議会	同じ視点でヤングケアラーとして捉えられるよう、共有のアセスメントシートを使用する。顔の見える関係づくりがまず必要ではないか。それぞれがどのような役割を担えるのか知る必要がある。
社会福祉協議会	基本的に全ての教育機関に必要ではないかと思います
社会福祉協議会	各機関でヤングケアラーと思われるケースを把握した場合、関わる機関に連絡を入れ、情報を共有し、支援策を考える動きが取れるような体制づくり。
社会福祉協議会	学校や地域などによる対象の発見と福祉職（地域福祉コーディネーターなど）の相談支援、ケアを受けている本人の医療的な支援の連携
地域包括支援センター	学校に専門職がない場合であっても検討や対応が必要な場合に情報の共有や対応ができるよう連携体制を整えておく
地域包括支援センター	各機関に所属している職員がヤングケアラーの相談をどこへしたらよいか明確になっておらず、どう連携できるかもはっきりしていないと思われるため、まずその周知やつながりの構築が必要だと思う。
地域包括支援センター	虐待ケースの場合、医療機関から警察に通報するシステムと同様に受診に子供が同行していたり、家族状況が分かった時点で医療機関から学校や福祉事業者等に連絡ができるシステムがあるとよい。
地域包括支援センター	SSW、SCとの協力体制を構築できたらいいです。
市生活保護（生活困窮）等の担当部局	継続的支援が様々な機関において行われるような体制づくり
子ども家庭支援センター	ヤングケアラーの世帯が適切なサービスが利用できていない場合それらにつなげてほしい。
市教育部門	①障害福祉課や生活福祉課、高齢者福祉課、医療機関など大人の支援機関側に「こども（家族）支援員」を配置する。親についての情報（病気や生活状況）を子供側の支援者が得ることが非常に難しく、家庭状況が見えてこないことが多い。要対協の個別ケース会議であっても、親の主治医に理解されず進まないケースもある。大人側の支援機関に子どものケア・権利の視点を持った専門家が必要。 ②兄弟の世話をしているケースは、兄弟の世話をしてくれる支援員が必要。子どもがSOSを出したときに簡易な手続きで利用できるサポートはないか。

【情報共有・定期的な情報交換】

民生児童委員協議会	連携強化情報共有の義務化等
民生児童委員協議会	定期的な情報交換の場をもうける
市 教育部門	学校で把握している（可能性のある）ヤングケアラーの情報を各関係機関と共有し、教育現場だけではなく、各専門機関の視点から児童や家庭を見ることで、危機介入や対応ができるとうい。一人、一つの機関が抱え込まないような連携が取れるとうい。
社会福祉協議会	学校内で把握している支援を要する家庭について、情報交換を行う場。
社会福祉協議会	学校と福祉事業所がヤングケアラーの子の情報共有できる場が必要。医療においてもヤングケアラーであるとわかったうえで医師が診断するのでは、メンタル面や身体的な負担に気づきやすくなるのではないかと思う。
地域包括支援センター	一般の小中高校全般と、福祉関係者がやり取りできることが望ましい。障害、高齢、学校など意見交換の機会を設ける等。
地域包括支援センター	必要時ケース会議を開き、その家庭の現状と課題を共通認識し、支援してけるととういと思います。
市 障害者相談部門	子どもと関わりの深い学校は一番情報を把握しやすく、子どもにとっても信頼できる相談窓口になり得るケースが多いと思います。学校が把握しているヤングケアラーの情報を学校内だけに留めず、要対協のように行政の福祉機関や、支援団体、医療機関と定期的な情報交換・共有の機会が必要だとういと思います。個々のケースで連携して支援するノウハウがそれぞれの分野でまだまだ少ないと感じます。定期的な情報交換・共有の機会を作ることで連携を取りやすい環境が生まれるとういと思います。

【その他の意見】

地域包括支援センター	学校が各機関に連絡・連携をする必要がある
地域包括支援センター	世帯全体へ多機関からの支援（ケア会議の開催等により連携して継続的に支援していく）家族構成等が変わったとしても、関わり易い機関・関わってほしいと求められる機関が支援を継続していくこと
地域包括支援センター	どのような場面においても個人情報保護の名のもとに、連携しにくさがある。
子育て世代包括支援センター	糊代のあるような関係で連携できるととうい
社会福祉協議会	医療での支援状況や、公的支援の利用状況、利用できるかなどを支援者が知り、役割分担や、相互に協力できることをスムーズに確認できるとよい。また、医療的視点からのケアが必要な当事者への働きかけ方法など、確認できるとスムーズだとうい。
社会福祉協議会	母の病状や子どもの特性など、その家庭の「今」を知るために日常的な連携が必要。
市 母子保健部門	当市はかなり連携しているので助かる

(4) ヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うこと (問 13)

府中市でヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うことについて、75人から自由記述による回答が得られた。その内容を検討し、以下のようにカテゴリ分類を行った。

最も多かった内容としては、「支援体制整備と情報連携」と「市民への認知の拡大・普及啓発」が同数の28件(32.2%)であった。次いで、「相談や対話・気配り」が11件(12.6%)、「実態把握・現状調査」が8件(9.2%)と続く。以下、回答を一部抜粋し記載する。

要素 n = 91

No.	分類	要素(n)	割合(%)	キーワード
1	支援体制整備と情報連携	28	32.2	支援・組織・体制・福祉・連携・専門・団体・資金
2	市民へ認知の拡大・普及啓発	28	32.2	講演・広報・認知・自覚
3	相談や対話、気配り	11	12.6	対話・相談・気配り・意識・窓口
4	実態把握・現状調査	8	9.2	実態・把握
5	要望や考え	7	8.0	思想・要望
6	職員の知識と理解の向上	4	4.6	知識・ガイドライン・理解・認識・研修
7	特になし	1	1.1	特になし

※複数カテゴリに分類される自由回答があるため、各カテゴリの件数を加算した数値は自由回答の件数より多くなることもある。

【支援体制整備と情報連携】

支援を必要としている子が、埋もれている現状があるのではないかと感じた。学校など、気づきを持っている団体との連携をはかり、つながっていけると良いと思う。
子どもが子どもらしく過ごせるために、ヤングケアラーを把握した際には迅速に支援を考え、導入していけるようにしたい。
高齢者と接していると8050はもとより、孫世代も含む多世代問題を感じることは多いです。年齢分野にとらわれず広く串刺し型の支援体制が取れる必要性を感じております。
学校でヤングケアラーについて認識をひろげ、介護支援事業者が包括などに連絡し、学校に情報共有して行き、支援を提供していく。
実態を可視化するため、地域住民が近所や身の回りで気になるお子さんがいたら、どこかの機関に相談してもらうような流れを確立させること。

【市民への認知の拡大・普及啓発】

ヤングケアラーの概念がまだ周知されていないこと、隠れたヤングケアラーが発見されにくい現状だと思われ、まずそこからの取り組みが必要だと思う。

家族ではなんともできない状況から、ヤングケアラーが生じていくように思うので、周りの大人がヤングケアラーについて知ることが大切かと思います。一方で、子どもが家族を手伝ったりすることが変に美化されても困りますが、「悪いこと」「恥ずかしいこと」と思われることも違うのかなとも思うので、正しく伝えていくのはとても難しいことだなと感じます。

市自体が意識し、ヤングケアラーに敏感になり、それぞれの機関の意識を高め、支援の手がどこからでも出せるようにならないといけない。横のつながりを作っていくのは市の役目であると思う。

ヤングケアラーについての普及啓発と子どもが相談できる体制の確立。

【相談や対話、気配り】

子ども自身がヤングケアラーであるかどうか理解しないと周りからは見えづらい。子どもに接している時間が長いのは学校なので、学校で子どもの変化を見つけ出してもらおうと助かると思います。

ケアを行う子供自身が望むかたちで支援が進む体制づくりが必要で、まずはしっかり話を聞く相談できる場所が増えるとよいと考えます。

【実態調査・現状把握】

ヤングケアラーの人数や実態を把握できていないと思う。一番近い存在の学校と行政が連携を取って把握する事や、子供から聞き取りできる信頼関係を持つ事から始め、支援の方法も具体化していかなければならないと思う。

ヤングケアラーが何処に存在しているかを密に探し出し、必要なサービスを提供できれば、子供たちの不安も負担も確実に減ると思う。

4. 子ども・若者支援団体向け調査結果

(1) 基本属性

①回答者について

回答者数は5人であり、性別は女性が4人、男性が1人であった。また、年齢層は、「60代以上」が3人、「30代」が2人であった。役職としては、「代表」が3人、「理事」1人、「一般スタッフ、メンバー」1人であった。

回答者の主な職種や分野は、「民生・児童委員、主任児童委員」が2人、「医療・看護・リハビリテーションの職種・専門職」が1人、「福祉・保育・介護の職種・専門職」が1人、「団体職員」が1人であった。

②回答者が所属する団体について

団体の支援活動内容としては、「食の支援(子ども食堂・フードパントリー・宅食)」が4人、「子育て支援(保育、家事援助含む)」が1人であった。

	活動の主な対象者(年齢)と内容(開催頻度)	主な対象者
A	お子様とその保護者を対象に月1回開催	子ども・若者とその親・保護者
B	こども食堂(月に1回) 未就学児、小学校低学年 フードパントリー(週に1回)、 学習支援(月に2回) 中学生、高校生	子ども・若者とその親・保護者
C	小学生から中学生、6才から15才	子ども・若者 本人
D	地域の幼児、小中学生、その親、高齢者	子ども・若者とその親・保護者
E	対象者：未就園児のお子さまとその保護者 内 容：①子育てひろば(平日週5日5時間)、②理学療法士の運動相談や運動発達講座(月3回)、③外部で開催する出張ひろば(週1回)、④出張イベント(年数回)、⑤レンタルスペース・おもちゃレンタルの提供	子ども・若者とその親・保護者

(2) ヤングケアラーについて

①ヤングケアラーの認識

ヤングケアラーという言葉とその概念について、「言葉とその概念を認識しており、意識して対応している」が3人で、「言葉とその概念を認識しているが、特別な対応をしていない」が2人であった。

②ヤングケアラーと思われる子どもの把握状況

意識して対応をしている3人のうち、2人が「特定のツールはないが、できるだけヤングケアラーの視点を持って検討・対応している」かつ「特定のツールはないが、できるだけヤングケアラーの視点を持って検討・対応している」状況であった。また、1人は、「該当する子どもはいない(これまでもない)」と回答している。

③ヤングケアラーと思われる子どもの有無

5人のうち、ヤングケアラーと思われる子どもが「いる(いた)」と回答したのは1人で、「いない(いなかった)」1人、「わからない」3人であった。

(3) ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験

回答があった1名について記載する。

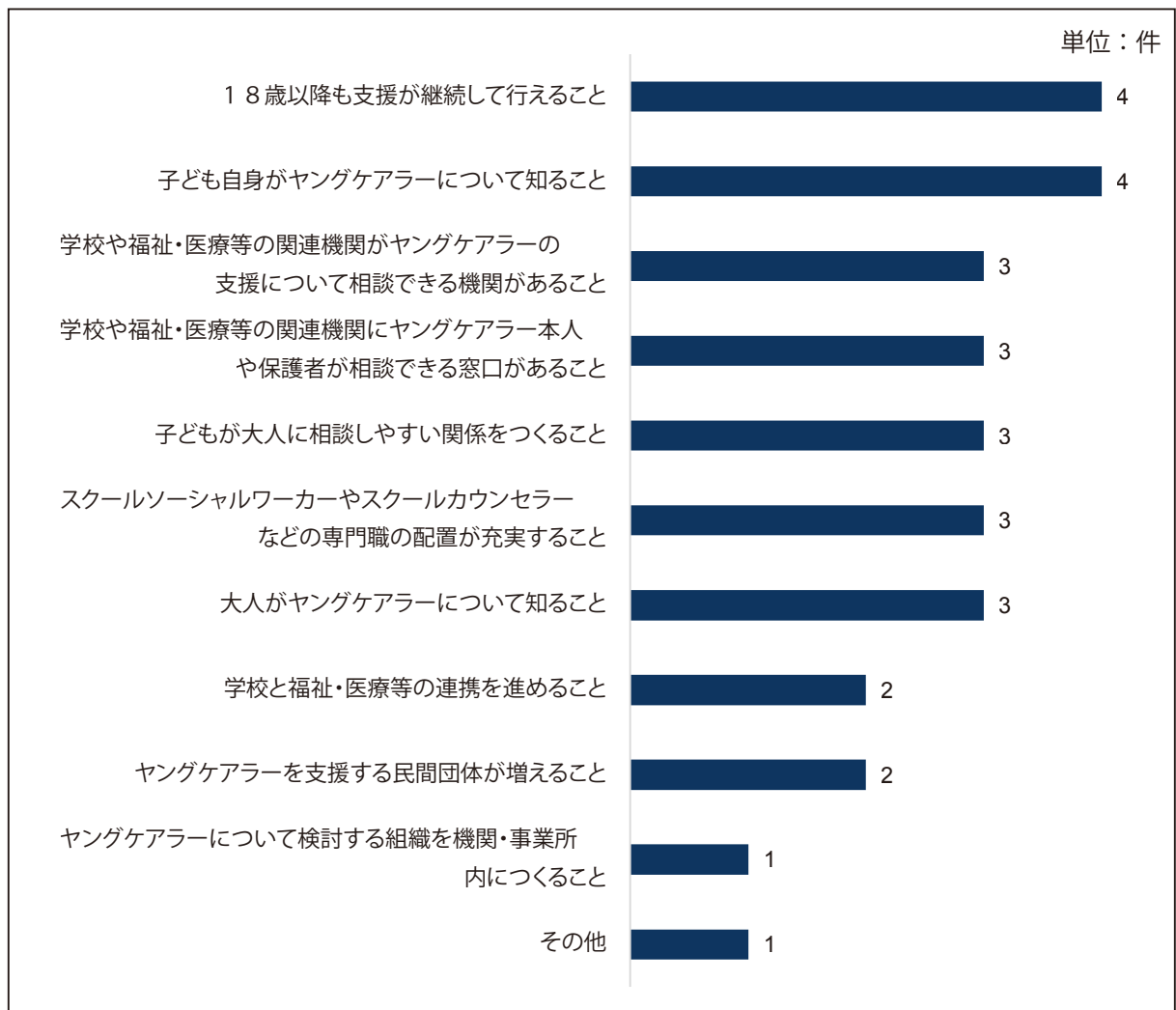
学年・性別	小学6年生・女性
把握したきっかけ	その子ども本人の話から、その子どもの保護者の話から、家庭訪問時
家族構成	ひとり親家庭(祖父母同居なし)
ケアの相手	きょうだい
ケアの内容	障がいや病気のある家族に代わり、家事(買い物、料理、洗濯、掃除など)をしている、家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている
ケアの相手の状態	幼い
ケアの期間	1年以上3年未満
ケアをすることになった理由	年下のきょうだいがいる、親が家事をしない、母が外国人で文化の違いから
ケアの状況	赤ちゃんが生まれ、母が買い物に行けなかったり、弟に病気があり、家族全員のお世話が必要になった
一緒にケアをしている人や支援機関	近隣・ボランティア、訪問診療・訪問看護など、民生委員、こども家庭支援センター
ケアをすることによる影響	学校や行事、イベントを休みがちである、精神的な不安定さがある、学力が低下している、必要な書類などの準備や手続きができない、友達やクラスメイトとの関係を十分に築けない/関係がよくない、お金の支払いが遅れる、未払い
その子どもについて気づいたこと	毎日登校できないため、日本語の学習が滞ってしまった
その状況にどのように対応したか	関係機関と学校のケース会議を開いてもらった
その子どもと関わるうえで困ったこと	意志の疎通がはかれない
相談できる相手や機関	学校の先生、こども家庭支援センターの相談員
連携した機関の具体的な状況	社会福祉協議会の地域コーディネーター、スクールソーシャルワーカー

(4) ヤングケアラー支援について

①ヤングケアラーと思われる子どもがいるか、わからない理由

「わからない」と回答した3人は、全員「家族内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しい」と回答しており、さらに1人は、「貴団体において、『ヤングケアラー』の概念や支援対象としての認識が不足している」、「ヤングケアラーである子ども自身やその家族が「ヤングケアラー」という問題を意識していない」と回答している。

②ヤングケアラーを支援するために必要なこと



③学校と福祉・医療等の連携を進めること

制度の縦割りをなくして子ども若者支援という窓口を作ってほしい
定期的な情報共有

④ヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うこと

ヤングケアラーだけを抽出して支援するのではなく、家族をシステムとしてとらえて支援していく必要があると思う。
早期発見、早期対処、息の長い支援
ヤングケアラーは目に見えにくいことや本人の頑張りゆえに本人も周りも気づきにくく、気がついたら生活に支障が出るまでになっていた、ということが多いのではないかと感じております。世の中全般にヤングケアラーとは何かを伝えることが必要なのではないかと。多くの方に知られることで、皆で支援していく社会になっていけるよう、私どもも意識して参りたいと思います。
シングルマザーの家庭では、親が病気を持った場合、子どもは外に助けを出すことが難しく、ただストレスから学校で問題行動を起こす場合がある様に感じます。先生が、その行動だけを批判するのではなく、家庭の状況をよく見て理解し、支援して欲しいと思います。

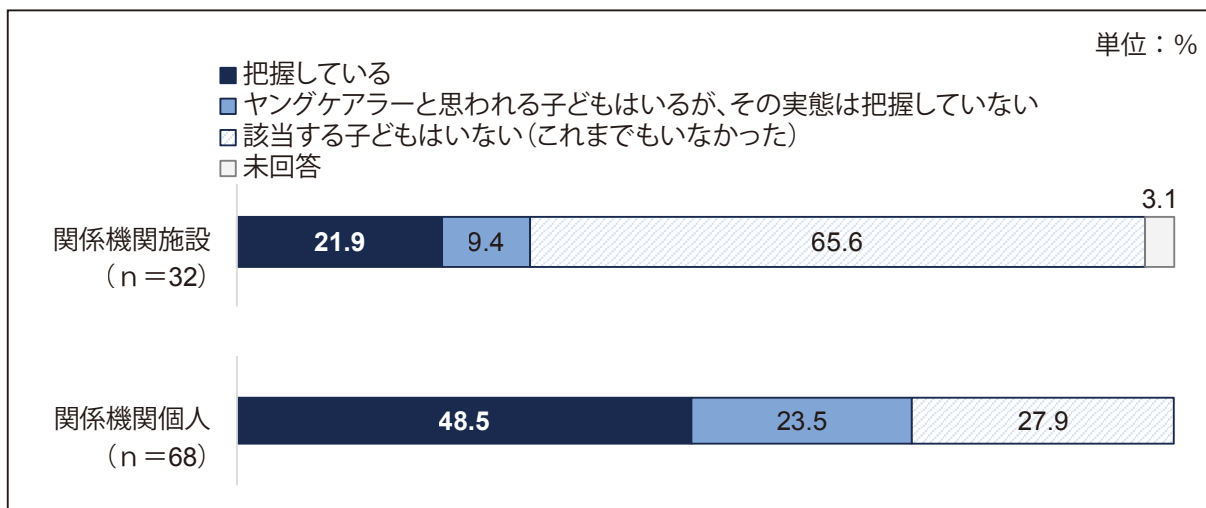
5. まとめ

(1) ヤングケアラーの認識と把握状況について

ヤングケアラーという言葉とその概念、およびヤングケアラーとみられる子どもへの対応について尋ねたところ、「言葉とその概念を認識しているが、特別な対応をしていない」と回答した機関は69.8%、個人は50.3%と19.5ポイントの差があった。また、「言葉とその概念を認識しており、意識して対応している」機関は17.9%、個人は40.2%と22.3ポイントの差がみられた。

さらに、ヤングケアラーとみられる子どもに「意識して対応している」と回答があったうち、その子どもの実態を「把握している」のは機関で21.9%、個人で48.5%であった。その一方でヤングケアラーに「該当する子どもはいない(いなかった)」と回答した割合は、機関では65.6%、個人では27.9%と37ポイントの差があった。

以上のように、関係機関としての回答と、関係機関に所属する各個人からの回答ではヤングケアラーの認識や実態把握の状況に大きな違いがあり、個人の方がより実態を把握しやすい状況にあった。今後は機関全体としてヤングケアラーの存在を意識し、その実態を把握すること、そして、組織横断的な対応や他機関とのスムーズな連携をするために、ヤングケアラーへの認識を高める必要がある。



(2) ヤングケアラーと思われる子どもへの対応経験について

個人向けの調査において、実際にヤングケアラーと思われる子どもがいる(いた)かどうか確認すると、回答者169人のうち68人(40.2%)が「いる(いた)」と回答しており、さらにその68人のうち43人(63.2%)がヤングケアラーと思われる子どもへ対応した経験があった。

ヤングケアラーと思われる子どもに気づいた経路としては「学校および他の関係機関から」が38.2%と最も多く、次いで「その子どもの保護者の話から」が33.8%、「その子ども本人の話から」が32.4%、「家庭訪問時(訪問サービス時)」が29.4%であった。

ケアの相手は「母親」が58.8%と最も多く、次いで「きょうだい」が35.3%、「父親」が13.2%であった。また、ケアの相手の状態としては「精神疾患(依存症は除く)※疑い含む」が47.8%と最も多く、次いで「幼い」が37.0%、「知的障がい」が19.6%、「日本語が苦手」が17.4%、「高齢※65歳以上」が17.4%であった。

ケアの内容は、「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」「家族の感情面のサポートをしている(愚痴を聞く、話し相手になるなど)」「障がいや病気のある家族に代わり、家事(買い物、料理、洗濯、掃除など)をしている」の3つが同率30.9%で最も多く、次いで「障がいや病気のある家族の身の回りの世話をしている」が16.2%であった。

ヤングケアラーと思われる子どもに対応するうえで困った経験のある人は、43人中26人(約6割)であった。その具体的な内容としては、子どもとのコミュニケーションや実態把握が難しいこと、親の協力が得られにくい、親との関係が築けないこと、金銭的な課題、精神疾患等による生活課題、多機関との継続した状況共有が挙げられており、またそれらの課題が複合化していた。

(3) 関係機関から見た家族のケアをしている子どもの状況と支援の実態

個人向け調査において、家族のケアをしている子どもの状況としては、「親をケアすることが当たり前になっている」「コミュニケーションが苦手」「本人の不登校と摂食障害」「専門学校を中退してしまった」「(きょうだい)が保育園から帰ってからの世話をすることを期待されていた」という自由回答から、ケアによる生活への影響、特に、学業や心身の健康面への影響がみられた。

子どもの生活上の課題への対応策として、主に以下の3つが行われていた。1つ目は面談・訪問を実施し、子どもと会話を行い、子どもとの関係づくりや子ども本人の気持ちを聴くこと、2つ目は見守り事業、日本語教師の派遣、母子心理相談、訪問看護、医療、外国人支援団体などにつなぐといった具体的なサービスの提案・提供、3つ目は子どもとその家族を支援するための関係機関との情報共有や会議等の実施であった。

(4) 連携体制の状況と関係機関が望むこと

個人向け調査において、ヤングケアラーと思われる子どもに対応する際に、相談できる相手や場所が「あった(いた)」が85.3%、他の機関との連携が「あった(いた)」が82.4%であった。

具体的な相談相手としては「職場内(上司・同僚)」が最も多く、次いで「子ども家庭支援センターたち」「子育て世代包括支援センターみらい」「子育て応援課」であった。複数の機関を回答している人もおり、相談できる環境があることがわかった。

また、他機関の連携先としては、「子育て世代包括支援センターみらい」「子ども家庭支援センターたち」、学校、スクールソーシャルワーカー、訪問看護事業所が多い傾向にあった。

ヤングケアラーを支援するために必要だと思うことは、「子どもが大人に相談しやすい関係をつくること」が85.2%、「大人がヤングケアラーについて知ること」が83.4%、「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」が79.3%、「学校や福祉・医療等の関連機関にヤングケアラー本人や保護者が相談できる窓口があること」が75.1%であった。

さらに、学校と福祉・医療等の連携を進める中で必要だと感じることについては、学校と福祉・医療機関等とのつなぎを含めた支援体制の整備、情報共有・定期的な情報交換についての意見が多くあった。また、「各機関に所属している職員がヤングケアラーの相談をどこへしたらよいか明確になっていない」「共有のアセスメントシートを使用する、また、顔の見える関係づくりがまず必要」という自由回答があった。

分野の異なる機関同士で子どものみならず、その家族も含め対応や支援を行う際には、支援している機関および支援者が共通認識を持ち、支援を行うための定期的な情報共有の場やそれを継続する調整機能を担う機関の存在が望まれている。

第 5 章

総合考察

本章では、児童生徒調査、教員調査、関係機関調査の結果と考察を踏まえて、総合的な考察を述べていく。

1. ヤングケアラーと思われる子どもの人数の推定

本調査の結果から、府中市のヤングケアラーと思われる子どもの人数の推定を行った。

方法としては、国が示しているヤングケアラーの定義を参考に、下記の3つの条件設定により分析を行った。なお、下記の条件設定はあくまで調査結果に基づく推定であり、これにより支援の対象を限定するものではない。

条件1 世話をしている家族がいる。

条件2 家族の世話を週に「3日以上」行っている。又は、「2日以下」だが1日あたり3時間以上行っている。

条件3 世話をしているためにやりたいけどできないことがある（1つ以上に該当）。

結果としては、条件1と2から、「ヤングケアラーと思われる子ども」は、小学5年生～高校3年生の児童生徒全体の5.4%（約426人）であった。そして、条件1～3のすべてにあてはまる家族の世話により「何らかの影響が出ていて、支援が急がれる子ども」は1.7%（約131人）と推定された。

ヤングケアラー定義 (厚労省ホームページ)	児童生徒 全体 (小学5年生～高校3年生) ＜調査結果を用いた条件設定＞	100.0 % (7,825 人)
本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを	世話をしている家族が「いる」不定期のもの、比較的軽微なお手伝いの範疇のもの等を含む	世話をしている家族が「いる」子ども 10.3 % (約809 人)
日常的に行っている子どものことで	家族の世話を ・「週3日以上」行っている、または、 ・「週2日以下」だが1日あたり3時間以上行っている	ヤングケアラーと思われる子ども 5.4 % (約426 人)
責任や負担の重さにより、学業や友人関係などに影響が出てしまうことがある	世話をしているためにやりたいけどできないことがある(1つ以上に該当)	うち、 何らかの影響が出ていて、支援が急がれる子ども 1.7 % (約131 人)

※ 1 推定数算出においては端数処理等を行っているため、児童生徒全体の人数に割合(%)を乗じた数値とは一致しない

※ 2 今回の調査対象は小学5年生～高校3年生であったため、上記の推定数も小学5年生～高校3年生の児童生徒に関する推定数となっている

2. ヤングケアラーの理解と気づきの重要性

本調査の結果から、学年が低い子どもの場合、自分自身が担っているお世話の内容や家庭内における役割、お世話による生活への影響や負担感についての自覚が持ちにくいことがわかった。また、児童・生徒が回答した「お世話」の内容は、比較的軽微なものから子ども本人の生活への影響があるもの、身体的・精神的に苦痛を感じるものまで幅広くあった。

このことから、周囲の大人が実際の家庭や学校生活において、子どもがしているお世話の内容、また、ケアによって生じている影響や負担の状況に気づくこと、そして、本人に対して丁寧な聞き取りをして状況を把握することが必要となる。支援が必要なヤングケアラーを把握した場合は、自覚が持ちにくい特性を踏まえて、子どもの家族への思いを尊重しながら、本人の気持ちやニーズを聴き取り、その子どもの気持ちに沿った支援を行っていくなどの配慮が必要になる。

児童・生徒調査の自由回答の中には、「学校の授業で学ぶ」「ヤングケアラーについて学習の時間を作る」などの意見があったが、そのような周知啓発により、子どもが学校等でヤングケアラーについての知識を得られ、ケアをしていない人も意識を持てるようになることや、友人関係の中でヤングケアラーに気づくことも期待できる。

また、教員や関係機関の支援者においても、ヤングケアラーの概念を知らない、または、言葉は知っているが概念を具体的に知らないという人が約1割いることから、ヤングケアラーへの理解を深め、子どもの変化に気づく感度を高めていくことが求められる。また、気づいたあとの対応についても、本人が何に困っているのか、悩んでいるのかを聴くこと、さらには家族全体への支援の視点をもって対応することが大切になる。

今後、府中市ではさらなる周知啓発を行い、ヤングケアラーに対する理解を深めることが求められる。

3. 状況に即した生活支援の必要性

子どもの学年によって担っているお世話の質や量、また、生活課題や支援ニーズが異なるため、個別の状況に即した支援方法や支援内容が必要である。また、児童・生徒調査の自由回答には、「学校で相談しやすい環境をつくる」「相談したいと思ったときに自然に話せる場所が必要」という意見があり、子ども自身が、家族のケアで悩み、苦痛を感じたときに、身近に安心して話ができる人や場所があること、そして、気軽に話ができる人とつながりが持てる環境づくりを進めていく必要がある。

学校や関係機関においては、ケアをしている児童・生徒の存在に気づき、それぞれの立場から個別の対応がなされていることが明らかになったが、子どもがケアをしている理由を「知っている」と回答した人の割合は、教員は小学校36.0%、中学校40.7%、関係機関の支援者は67.6%と差があった。関係機関は、ケアを必要としている家族に関わり、サービス提供や家庭訪問などを行っていることから、家庭状況を把握しやすいと考えられる。教員は、児童・生徒の様子を見て、異変に気づくことができるが、児童・生徒本人が話をしない限り、家庭の状況を把握することは難しいため、児童・生徒にとって安心できる環境の中で、本人の話を聴き、気持ちに寄り添う対応が求められる。

家族のお世話による生活への具体的な影響としては、児童・生徒からは、主に自分の時間(勉強や睡眠、友人と遊ぶ時間)がないこと、また教員や関係機関からは、学力低下、宿題の提出や持ち物を忘れる、精神的な不安定さ、欠席傾向、睡眠不足が認識されていた。また、そういった影響に対して、教員や関係機関の対応としては、児童・生徒の話を聴く、関係機関との会議での検討、連携、サービスの提供(日本語教師の派遣、見守り事業)等が挙げられた。

教員や関係機関の支援者が連携して支援を進めていくために望んでいることは、ヤングケアラーの状況にある子どもに気づいた後の実態把握、学校、行政および関係機関との支援体制（情報共有・定期的な情報交換・連携）の構築であった。

具体的な生活支援の提供については、家族全体への支援の視点を踏まえ、公的な社会資源と民間によるサポートについて情報を整理し、発信していくことが必要になると考える。さらに、子どもが自身の状況や気持ちを見つめ、有益な支援を受けられることを理解し、主体的に選択や決定ができる機会が必要である。

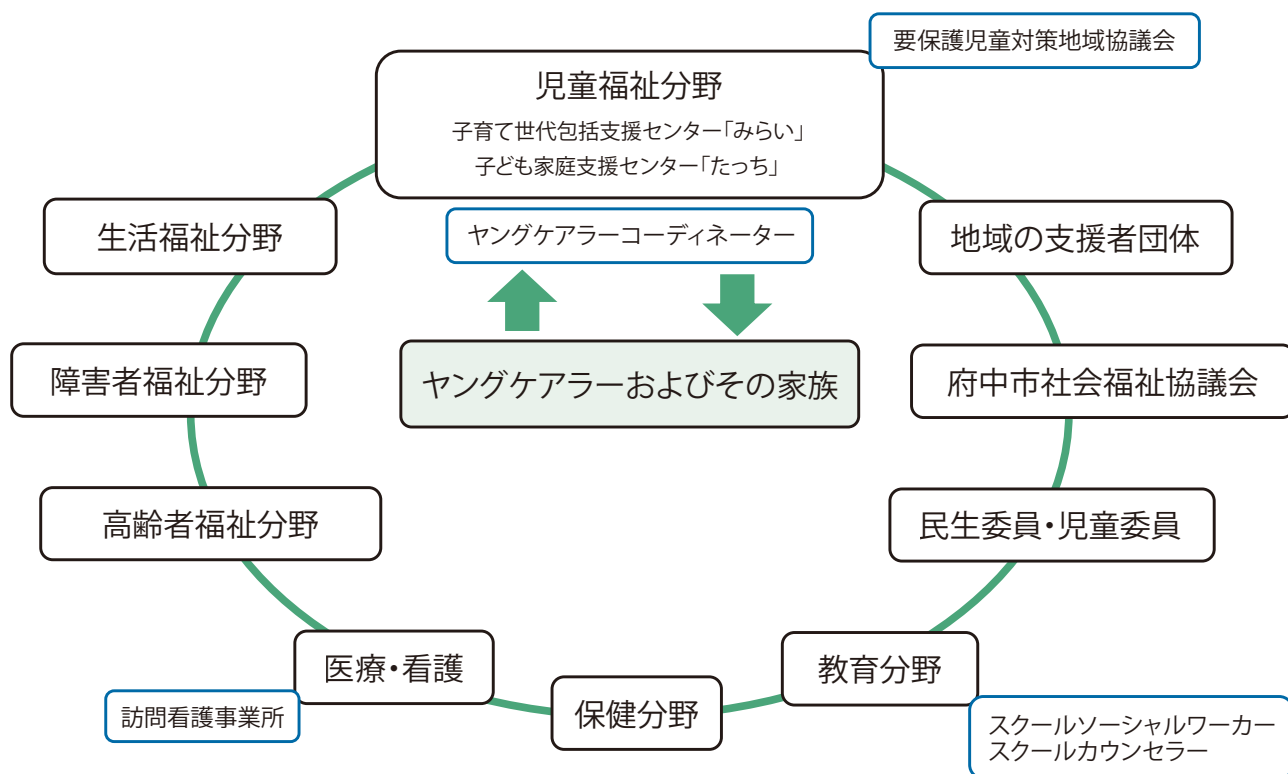
4. 支援体制基盤の強化について

教員調査や関係機関調査では、関係機関との会議において検討、連携を行っている現状が明らかになった。

また、多機関の連携先としては、子育て世代包括支援センター「みらい」、子ども家庭支援センター「たち」が最も多く挙げられた。さらに教員では、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、民生児童委員などの関係機関が多く、関係機関個人では、学校、スクールソーシャルワーカー、訪問看護事業所が多い傾向にあった。

調査結果より「みらい」「たち」が連携の中核を担い、多様な分野の機関とのつながりがあることがわかった（下記の図参照）。この図では児童福祉分野との関係性が強調されているが、実際は各分野でヤングケアラーおよびその家族とのつながりが多数存在していると考えられる。

本調査における回答率は教員 56.1%、関係機関個人 25.0%であるため実態をすべて網羅した考察を述べることは難しいが、本調査から示唆された多様な分野や機関とのつながりを手掛かりに、ヤングケアラーとその家族の支援体制をより強化し、醸成していくことが必要になると考える。



また、子どもや家庭の状況に応じて、多様な分野の団体・機関との橋渡しを行うことや、情報共有、進行管理が必要となる。府中市では、令和5年6月1日から子育て包括支援センター「みらい」と一般社団法人ケアラーワークスに相談窓口を設置し、ヤングケアラーコーディネーターをそれぞれ配置している。今後、ヤングケアラーコーディネーターが調整機能等を果たし、円滑な支援が提供できることが望ましい。

家族のケアをする子どもの家庭は、複雑かつ複合的な生活課題を持っていることも考えられる。そのような家庭を支援する際には、支援者間の視点の違いによる課題やジレンマが生じることもあるため、研修の機会などを通じて、学校や福祉行政、関係機関の対応力の向上と共通理解を深め、より一層、ヤングケアラーとその家族を支えるための包括的な支援体制基盤の強化を図っていくことが求められる。

参考資料

本調査における参考資料は全て下記の府中市ウェブサイトにて閲覧、ダウンロードが可能です。

府中市ウェブサイト『ヤングケアラー実態調査を行います』(府中市子ども家庭部子ども家庭支援課作成)

https://www.city.fuchu.tokyo.jp/kosodate/shussan/sodan/youngcarer_research.html

上記ウェブサイトへは以下の二次元コードから直接アクセスできます。



参考資料一覧

児童・生徒調査 (日常の生活実態に関するアンケート調査)

- ① 日常の生活実態に関するアンケート調査依頼文 (保護者宛) (PDF : 457KB)
- ② 日常の生活実態に関するアンケート調査依頼文 (児童・生徒宛) (PDF : 502KB)
- ③ 日常の生活実態に関するアンケート調査依頼文 (高校生世代宛) (PDF : 426KB)
- ④ アンケート見本 (児童・生徒調査 小・中学生)【ふりがな有り】(PDF : 512KB)
- ⑤ アンケート見本 (児童・生徒調査 小・中学生)【ふりがな無し】(PDF : 657KB)
- ⑥ アンケート見本 (児童・生徒調査 高校生世代)【ふりがな有り】(PDF : 630KB)
- ⑦ アンケート見本 (児童・生徒調査 高校生世代)【ふりがな無し】(PDF : 711KB)

教員調査 (府中市ヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査 教員向け)

- ① 府中市ヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査依頼文 (教員向け) (PDF : 507KB)
- ② アンケート見本 (教員向け) (PDF : 412KB)

関係機関調査 (府中市ヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査 関係機関向け)

- ① 府中市ヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査依頼文 (関係機関 - 機関向け) (PDF : 530KB)
- ② 府中市ヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査依頼文 (関係機関 - 個人向け) (PDF : 529KB)
- ③ アンケート見本 (関係機関 - 機関向け) (PDF : 368KB)
- ④ アンケート見本 (関係機関 - 個人向け) (PDF : 452KB)

関係機関調査 (府中市ヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査 子ども・若者支援団体向け)

- ① 府中市ヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査依頼文 (子ども・若者支援団体向け) (PDF : 510KB)
- ② アンケート見本 (子ども・若者支援団体向け) (PDF : 866KB)

府中市ヤングケアラー実態調査報告書

発行日 令和6(2024)年3月

発行 一般社団法人ケアラーワークス

編著者 一般社団法人ケアラーワークス

〒183-0022

東京都府中市宮西町4丁目13番地4番 とりときハウス302

TEL 042-309-5130

府中市子ども家庭部子ども家庭支援課

子育て世代包括支援センター「みらい」

〒183-0023

東京都府中市宮町1丁目41番地 フォーリス3階

TEL 042-319-0072

編集協力 notes(野手香織)

デザイン 株式会社アダプティブデザイン

この調査報告書は日本財団の助成(ヤングケアラーと家族を支援する自治体モデル(東京都府中市))により作成されました。

